

昭和54年度

京都市埋蔵文化財調査概要

昭和54年度

京都市埋蔵文化財調査概要

財団法人

京都市埋蔵文化財研究所

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

昭和54年度

京都市埋蔵文化財調査概要

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市は平安京の建都に始まり千二百年余の永い歴史を有する古都であり、市域内には平安京跡とその周辺部には数多くの遺跡が点在している。都市機能の整備と近代化のための再開発などに伴い、文化景観や遺跡が壊される機会が多くなった。その対策として遺跡保護の法的措置が講じられるようになった。

京都市では、昭和47年に京都市遺跡地図・台帳が作成され、周知されている埋蔵文化財包蔵地内で工事などをするときには、事前の届出の義務が法令で定められている。この頃から遺跡保護のための行政指導や発掘調査を市が直接担当するようになったが、それまでは京都府や大学他の任意の調査団体などが遺跡の発掘調査に関わり大きな成果を挙げてきた。

その後、遺跡発掘の事例が増加し、遺跡の保護と調査体制を整備充実するために、関係する調査団体と京都市が協力し、昭和51年11月1日に財団法人京都市埋蔵文化財研究所が設立された。

遺跡の発掘調査事業を中心にして、その成果をまとめた報告書を刊行し、あわせて講演や、京都市考古資料館などで展示の機会を提供して、遺跡への理解と関心を深めるための普及事業も積極的に実施するなど、市民をはじめ大方の埋蔵文化財保護への支援と理解を高めることを目的としている。

本書は、研究所が実施した昭和54年度の発掘調査、試掘・立会調査の各概要について報告するものである。

本来、この「京都市埋蔵文化財調査概要」は、研究所年報として各年度の1年間の発掘調査概要、試掘・立会調査概要その他について紹介し、研究所の諸事業の全貌の概略を周知することを目的とするものである。

年報については、昭和58年3月に昭和56年度の「京都市埋蔵文化財調査概要」が刊行されたのが最初である。昭和51年度から55年度の調査概要については、30年余の時間が経過するなかで、あらためて編集を進めてきたが、今ここに、昭和54年度の調査事業概要報告書として本書を上梓することになった。ご参考になれば幸いである。

平成24年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が昭和54年度に実施した、発掘調査（第1章）、試掘・立会調査（第2章）の年次報告である。
- 2 本書中に示した方位は、大半が磁北であるが、一部天測を行った真北のものや座標北のものもある。
- 3 一部座標表記があり、これは日本測地系（改正前）平面直角座標系による。ただし、単位（m）を省略した。
- 4 本書中の地図は、京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）を参考にし、作成した。
- 5 長岡京の条坊呼称は、調査時には既往の呼称（旧呼称）を使用していたが、長岡京連絡協議会の取り決めにより、新呼称を用いた。
- 6 遺構表示のうち、表示記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
- 7 調査位置図の方位は、北を上配置し、縮尺は付記した。
- 8 文化庁国庫補助事業による発掘調査は、『平安京跡発掘調査概要』1979年度、『鳥羽離宮跡』1979年度、『中臣遺跡』1979年度、『白河南殿跡』1979年度、『伏見城跡』1979年度、『北野廃寺跡』1979年度、『醍醐古墳群』昭和54年度に報告している。区画整理による調査は『鳥羽離宮跡』昭和54年度、河川改修による調査は『中臣遺跡』昭和54年度山科川中小河川改修事業に伴う発掘調査の概要 1979年度に報告している。また、一部の調査は『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』などに報告している。既報告のものは書名を文末に記した。
- 9 各報告は上村和直が編集・執筆した。また、それ以外に本書作成には調査業務職員および資料業務職員があたった。

目 次

第1章 発掘調査

I 昭和54年度の発掘調査概要 …… 1

II 平安宮・京跡

1 平安宮内裏跡 ……	3
2 平安宮朝堂院跡 1 ……	5
3 平安宮朝堂院跡 2 ……	7
4 平安宮豊楽院跡 ……	9
5 平安宮大蔵省跡 1 ……	11
6 平安宮大蔵省跡 2 ……	13
7 平安宮茶園跡 ……	14
8 平安宮凶書寮跡 ……	16
9 平安宮内蔵寮跡 ……	17
10 平安宮造酒司跡 ……	19
11 平安宮中和院跡 ……	21
12 平安宮御井跡 ……	23
13 平安宮中務省跡 1 ……	25
14 平安宮中務省跡 2 ……	27
15 平安宮太政官跡 ……	29
16 平安宮大炊寮跡 ……	31
17 平安京左京北辺三坊四町 ……	33
18 平安京左京三条三坊五町 ……	36
19 平安京左京三条二～四坊 ……	38
20 平安京左京三条四坊十町 ……	42
21 平安京左京四条三坊七町 ……	46
22 平安京左京四条三坊十五町 ……	49
23 平安京左京六条一坊三・ 十一・十四町 ……	51
24 平安京左京六条一坊六町 ……	53
25 平安京左京六条二坊五町・ 猪熊殿跡・本國寺跡 ……	55
26 平安京左京七条三坊十五町 ……	67

27 平安京左京八条三坊二町 ……	69
28 平安京左京九条三坊五町 ……	71
29 平安京左京九条三坊十六町 ……	73
30 平安京右京北辺三坊二町 ……	77
31 平安京右京北辺四坊五町・ 史跡妙心寺境内 1 ……	79
32 平安京右京北辺四坊六町・ 史跡妙心寺境内 2 ……	81
33 平安京右京北辺四坊六町・ 史跡妙心寺境内 3 ……	83
34 平安京右京二条三坊二町 ……	85
35 平安京右京三条三坊十町 ……	88
36 平安京右京四条四坊六町 ……	91
37 平安京右京九条一坊十二町・ 西寺跡 ……	93

III 白河街区跡

38 尊勝寺跡 ……	94
39 白河南殿跡 ……	96

IV 鳥羽離宮跡

40 鳥羽離宮跡49次調査 ……	98
41 鳥羽離宮跡50次調査 ……	100
42 鳥羽離宮跡51次調査 ……	102
43 鳥羽離宮跡52次調査 ……	104
44 鳥羽離宮跡53次調査 ……	105
45 鳥羽離宮跡54-A次調査 ……	109
46 鳥羽離宮跡54-B次調査 ……	111
47 鳥羽離宮跡55次調査 ……	113
48 鳥羽離宮跡56次調査 ……	115
49 鳥羽離宮跡61次調査 ……	116
50 鳥羽離宮跡64-1次調査 ……	118

V 中臣遺跡

51	中臣遺跡15-2次調査	120
52	中臣遺跡20次調査	121
53	中臣遺跡21次調査	123
54	中臣遺跡22次調査	126
55	中臣遺跡23次調査	127
56	中臣遺跡24次調査	130
57	中臣遺跡25次調査	131
58	中臣遺跡26次調査	132
59	中臣遺跡27次調査	133
60	中臣遺跡28次調査	135
61	中臣遺跡29次調査	137
62	中臣遺跡30次調査	138
63	中臣遺跡31次調査	139
64	中臣遺跡32次調査	140
65	中臣遺跡33次調査	142

VII その他の遺跡

67	岩倉忠在地遺跡	146
68	栗栖野瓦窯跡	148
69	室町殿跡	151
70	北野廃寺1	153
71	北野廃寺2	157
72	常盤東ノ町古墳群	174
73	広隆寺旧境内	175
74	法性寺跡	177
75	大塚遺跡	178
76	中久世遺跡	181
77	大藪遺跡	185
78	大原野南春日町窯跡	187
79	醍醐古墳群	188
80	伏見城跡1	191
81	伏見城跡2	193

VI 長岡京跡

66	長岡京左京六条三坊	143
----	-----------	-----

第2章 試掘・立会調査

I	昭和54年度の試掘・立会調査概要	195
---	------------------	-----

図 版 目 次

図版1	平安宮茶園跡	1	2区全景（北から）
		2	3区全景（北から）
図版2	平安京左京北辺三坊四町	1	第1面全景（東から）
		2	第3面全景（東から）
		3	SD67全景（北東から）
図版3	平安京左京三条三坊五町	1	A区暗渠（東から）
		2	B区全景（東から）
		3	C区全景（北から）
図版4	平安京左京三条二～四坊	1	5G第2面全景（東から）
		2	7G SD 2（北から）
		3	8G第4面全景（西から）

		4	12G第2面全景（西から）
図版5	平安京左京三条四坊十町	1	第1面全景（東から）
		2	第2面全景（東から）
		3	第3面全景（東から）
		4	第4面全景（東から）
図版6	平安京左京六条一坊三・ 十一・十四町	1	1区全景（西から）
		2	2区全景（東から）
		3	5区全景（東から）
		4	5区朱雀大路東側溝（北から）
図版7	平安京左京六条一坊六町	1	第3面全景（西から）
		2	SD8（北西から）
図版8	平安京左京六条二坊五町・ 猪熊殿跡・本國寺跡	1	1トレンチSD4（北から）
		2	6トレンチSD4（東から）
		3	6トレンチSD19（東から）
図版9	〃	1	4トレンチ第2面全景（北から）
		2	4トレンチSD166下層（北から）
図版10	〃	1	4トレンチ第3面全景（北から）
		2	4トレンチSE653（東から）
図版11	〃	1	5トレンチ第2面全景（北から）
		2	5トレンチ第3面全景（北から）
図版12	〃	1	5トレンチSX5130（南東から）
		2	5トレンチSD309（南から）
		3	5トレンチSK165（北東から）
図版13	平安京左京八条三坊二町	1	第2面全景（西から）
		2	八条坊門小路北側溝（西から）
図版14	平安京右京北辺三坊二町	1	B区第2面全景（北から）
		2	C～F区全景（南から）
図版15	平安京右京北辺四坊六町・ 史跡妙心寺境内3	1	1区全景（北から）
		2	2区全景（北西から）
図版16	平安京右京二条三坊二町	1	第1面全景（北東から）
		2	第2面全景（北西から）
図版17	平安京右京四条四坊六町	1	調査区全景（北から）
		2	弥生土器出土状況
図版18	中臣遺跡23次調査	1	A区第2面全景（南から）
		2	B・C区全景（南から）

図版19	中臣遺跡27次調査	1	1区全景（東から）
		2	2区全景（北から）
図版20	長岡京左京六条三坊	1	第1面全景（東から）
		2	第2面全景（西から）
図版21	室町殿跡	1	第1面全景（北から）
		2	第2面全景（北から）
図版22	北野廃寺1	1	1区第1面全景（東から）
		2	1区第2面全景（東から）
図版23	〃	1	2区第1面全景（北から）
		2	2区第2面全景（北東から）
図版24	北野廃寺2	1	第1・2面西半部全景（北西から）
		2	第1・2面東半部全景（北西から）
図版25	〃	1	第3面西半部全景（東から）
		2	第3面建物（西から）
図版26	〃	1	第4面。期全景（西から）
		2	第4面。期窯群全景（南東から）
図版27	〃	1	窯群およびSD24瓦出土状況（西から）
		2	1号窯第1床面（西から）
		3	1号窯第2床面（西から）
図版28	〃	1	1号窯第3床面（西から）
		2	3号窯第1床面（西から）
		3	3号窯第2床面（西から）
図版29	〃	1	3号窯第3床面（西から）
		2	3号窯第4床面（西から）
		3	3号窯第5床面（西から）
		4	7号窯（北西から）
図版30	〃	1	4号窯第1床面（南から）
		2	4号窯第2床面（南から）
		3	4号窯第3床面（南西から）
図版31	〃	1	5号窯（南から）
		2	5号窯下層瓦整地状況（南から）
図版32	〃	1	6号窯（南東から）
		2	6号窯焚口閉塞状況（南東から）
図版33	〃	1	6号窯焚口部・燃烧室（南東から）
		2	6号窯（西から）

図版34	北野廃寺 2	1	6号窯下層整地状況（南東から）
		2	炭窯（北東から）
図版35	〃	1	SX34（南東から）
		2	SX34細部（西から）
図版36	〃	1	SD37（東から）
		2	2号住居（北東から）
図版37	〃	1	第4面Ⅰ期 SD30（南東から）
		2	第4面Ⅰ期 4号住居（東から）
図版38	広隆寺旧境内	1	第2面全景（南東から）
		2	竪穴住居SB1～4（南から）
図版39	中久世遺跡	1	3トレンチ2期全景（北東から）
		2	3トレンチSE3（東から）
図版40	醍醐古墳群	1	醍醐耳塚全景（東から）
		2	醍醐9号墳全景（南西から）

挿 図 目 次

図1	平安宮内裏跡	調査位置図	3
図2	〃	調査区配置図	3
図3	〃	北壁断面図	3
図4	〃	遺構平面図	4
図5	〃	SD1	4
図6	平安宮朝堂院跡1	調査位置図	5
図7	〃	調査区配置図	5
図8	〃	断面図	5
図9	〃	遺構平面図	6
図10	〃	調査区全景	6
図11	平安宮朝堂院跡2	調査位置図	7
図12	〃	調査区配置図	7
図13	〃	セクション断面図	7
図14	〃	遺構平面図	8
図15	〃	調査区全景	8
図16	平安宮豊楽院跡	調査位置図	9

図17	平安宮豊楽院跡	調査区配置図	9
図18	〃	2トレンチ東壁断面図	9
図19	〃	遺構平面図	10
図20	平安宮大蔵省跡 1	調査位置図	11
図21	〃	東壁断面図	11
図22	〃	遺構平面図	12
図23	〃	調査区全景	12
図24	平安宮大蔵省跡 2	調査位置図	13
図25	〃	調査区配置図	13
図26	〃	調査区全景	13
図27	平安宮茶園跡	調査位置図	14
図28	〃	調査区配置図	14
図29	〃	1区東壁断面図	14
図30	〃	1区遺構平面図	15
図31	平安宮図書寮跡	調査位置図	16
図32	〃	調査区および遺構配置図	16
図33	平安宮内蔵寮跡	調査位置図	17
図34	〃	調査区配置図	17
図35	〃	東壁断面図	17
図36	〃	遺構平面図	18
図37	〃	調査区全景	18
図38	平安宮造酒司跡	調査位置図	19
図39	〃	調査区配置図	19
図40	〃	2区東壁断面図	19
図41	〃	遺構平面図	20
図42	平安宮中和院跡	調査位置図	21
図43	〃	調査区配置図	21
図44	〃	遺構平面図	21
図45	〃	調査区全景	22
図46	平安宮御井跡	調査位置図	23
図47	〃	調査区配置図	23
図48	〃	2区東壁断面図	23
図49	〃	遺構平面図	24
図50	平安宮中務省跡 1	調査位置図	25
図51	〃	調査区配置図	25

図52	平安宮中務省跡 1	東壁断面図	25
図53	〃	遺構平面図	26
図54	平安宮中務省跡 2	調査位置図	27
図55	〃	調査区配置図	27
図56	〃	東壁断面図	27
図57	〃	遺構平面図	28
図58	〃	墨書土器	28
図59	平安宮太政官跡	調査位置図	29
図60	〃	調査区配置図	29
図61	〃	西壁断面図	29
図62	〃	遺構平面図	30
図63	〃	SD 5	30
図64	平安宮大炊寮跡	調査位置図	31
図65	〃	調査区配置図	31
図66	〃	西壁断面図	31
図67	〃	遺構平面図	32
図68	平安京左京北辺三坊四町	調査位置図	33
図69	〃	調査区配置図	33
図70	〃	断面図	33
図71	〃	遺構平面図	34
図72	平安京左京三条三坊五町	調査位置図	36
図73	〃	北壁断面図	36
図74	〃	遺構平面図	37
図75	平安京左京三条二～四坊	調査位置図東半	38
図76	〃	調査位置図西半	38
図77	〃	8 G基本層序	38
図78	〃	6 G遺構平面図	39
図79	〃	7 G遺構平面図	39
図80	〃	8 G遺構平面図	40
図81	〃	12G遺構平面図	41
図82	〃	13G遺構平面図	41
図83	平安京左京三条四坊十町	調査位置図	42
図84	〃	調査区配置図	42
図85	〃	南壁断面図	42
図86	〃	第1・2面遺構平面図	43

図87	平安京左京三条四坊十町	第3～5面遺構平面図	44
図88	平安京左京四条三坊七町	調査位置図	46
図89	〃	調査区配置図	46
図90	〃	1区南壁断面図	46
図91	〃	遺構平面図	47
図92	〃	1区全景	48
図93	平安京左京四条三坊十五町	調査位置図	49
図94	〃	東壁断面図	49
図95	〃	遺構平面図	50
図96	平安京左京六条一坊三・	調査位置図	51
図97	十一・十四町	2区断面図	51
図98	〃	1区遺構平面図	51
図99	〃	2区・5区遺構平面図	52
図100	平安京左京六条一坊六町	調査位置図	53
図101	〃	調査区配置図	53
図102	〃	西壁断面図	53
図103	〃	第1・2面遺構平面図	54
図104	〃	第3面遺構平面図	54
図105	〃	遺物実測図	54
図106	平安京左京六条二坊五町・	調査位置図	55
図107	猪熊殿跡・本國寺跡	調査区配置図	55
図108	〃	西壁断面図	55
図109	〃	1トレンチ遺構平面図	56
図110	〃	4トレンチSD166東西セクション南壁断面図	56
図111	〃	4トレンチ第1面遺構平面図	56
図112	〃	4トレンチ第2・3面遺構平面図	57
図113	〃	5トレンチ第1面遺構平面図	58
図114	〃	5トレンチ第2・3面遺構平面図	59
図115	〃	6トレンチ遺構平面図	60
図116	〃	SD19出土土器実測図1	61
図117	〃	SD19出土土器実測図2	62
図118	〃	SD166下層出土土器実測図	63
図119	〃	SD218出土土器実測図	64
図120	〃	遺物実測図	65
図121	平安京左京七条三坊十五町	調査位置図	67

図122	平安京左京七条三坊十五町	調査区配置図	67
図123	〃	南壁断面図	67
図124	〃	遺構平面図	68
図125	平安京左京八条三坊二町	調査位置図	69
図126	〃	調査区配置図	69
図127	〃	北壁断面図	69
図128	〃	遺構平面図	70
図129	平安京左京九条三坊五町	調査位置図	71
図130	〃	調査区配置図	71
図131	〃	中央セクション北壁断面図	71
図132	〃	第2面遺構平面図	72
図133	〃	第2面調査区全景	72
図134	平安京左京九条三坊十六町	調査位置図	73
図135	〃	調査区配置図	73
図136	〃	基本層序断面図	73
図137	〃	1 トレンチ遺構平面図	74
図138	〃	2 トレンチ遺構平面図	74
図139	〃	3 トレンチ遺構平面図	75
図140	〃	4 トレンチ遺構平面図	75
図141	〃	5 トレンチ遺構平面図	75
図142	〃	6 トレンチ遺構平面図	76
図143	平安京右京北辺三坊二町	調査位置図	77
図144	〃	調査区配置図	77
図145	〃	D区西壁断面図	77
図146	〃	B・C・D区遺構平面図	78
図147	平安京右京北辺四坊五町・	調査位置図	79
図148	史跡妙心寺境内1	東壁断面図	79
図149	〃	遺構平面図	79
図150	平安京右京北辺四坊六町・	調査位置図	81
図151	史跡妙心寺境内2	調査区配置図	81
図152	〃	遺構平面図	81
図153	平安京右京北辺四坊六町・	調査位置図	83
図154	史跡妙心寺境内3	調査区配置図	83
図155	〃	遺構平面図	84
図156	平安京右京二条三坊二町	調査位置図	85

図157	平安京右京二条三坊二町	調査区配置図	85
図158	〃	断面図	85
図159	〃	遺構平面図	86
図160	〃	出土遺物	87
図161	平安京右京三条三坊十町	調査位置図	88
図162	〃	調査区配置図	88
図163	〃	断面図	88
図164	〃	1区遺構平面図	89
図165	〃	2区遺構平面図	90
図166	平安京右京四条四坊六町	調査位置図	91
図167	〃	調査区配置図	91
図168	〃	断面図	91
図169	〃	遺構平面図	92
図170	平安京右京九条一坊十二町・	調査位置図	93
図171	西寺跡	断面図	93
図172	〃	遺構平面図	93
図173	尊勝寺跡	調査位置図	94
図174	〃	調査区配置図	94
図175	〃	B区南壁断面図	94
図176	〃	B区遺構平面図	95
図177	〃	B区SX 1	95
図178	〃	B区SX 1 出土遺物実測図	95
図179	白河南殿跡	調査位置図	96
図180	〃	調査区配置図	96
図181	〃	南壁断面図	96
図182	〃	遺構平面図	97
図183	鳥羽離宮跡49次調査	調査位置図	98
図184	〃	調査区配置図	98
図185	〃	東壁断面図	98
図186	〃	遺構平面図	99
図187	鳥羽離宮跡50次調査	調査位置図	100
図188	〃	調査区配置図	100
図189	〃	東壁断面図	100
図190	〃	遺構平面図	101
図191	鳥羽離宮跡51次調査	調査位置図	102

図192	鳥羽離宮跡51次調査	調査区配置図	102
図193	〃	東壁断面図	102
図194	〃	遺構平面図	103
図195	鳥羽離宮跡52次調査	調査位置図	104
図196	〃	調査区配置図	104
図197	〃	北壁断面図	104
図198	鳥羽離宮跡53次調査	調査位置図	105
図199	〃	調査区配置図	105
図200	〃	東西中央セクション断面図	105
図201	〃	第1面遺構平面図	106
図202	〃	第2面遺構平面図	107
図203	〃	調査区全景	108
図204	鳥羽離宮跡54-A次調査	調査位置図	109
図205	〃	東壁断面図	109
図206	〃	遺構平面図	109
図207	〃	第2面全景	110
図208	鳥羽離宮跡54-B次調査	調査位置図	111
図209	〃	調査区配置図	111
図210	〃	断面図	111
図211	〃	遺構平面図	112
図212	〃	第2面全景	112
図213	鳥羽離宮跡55次調査	調査位置図	113
図214	〃	調査区配置図	113
図215	〃	1トレンチ・56次調査区西壁断面図	113
図216	〃	1トレンチ東部・56次調査区遺構平面図	114
図217	鳥羽離宮跡56次調査	調査位置図	115
図218	〃	調査区配置図	115
図219	鳥羽離宮跡61次調査	調査位置図	116
図220	〃	調査区配置図	116
図221	〃	北トレンチ北壁断面図	116
図222	〃	北トレンチ遺構平面図	116
図223	〃	西トレンチ東壁断面図	117
図224	〃	西トレンチ遺構平面図	117
図225	鳥羽離宮跡64-1次調査	調査位置図	118
図226	〃	調査区配置図	118

図227	鳥羽離宮跡64-1次調査	東壁断面図	118
図228	〃	遺構平面図	119
図229	中臣遺跡15-2次調査	調査位置図	120
図230	〃	調査区配置図	120
図231	〃	北壁断面図	120
図232	中臣遺跡20次調査	調査位置図	121
図233	〃	調査区配置図	121
図234	〃	北壁断面図	121
図235	〃	遺構平面図	122
図236	〃	調査区全景	122
図237	中臣遺跡21次調査	調査位置図	123
図238	〃	調査区配置図	123
図239	〃	北壁断面図	123
図240	〃	遺構平面図	124
図241	〃	12号住居	125
図242	中臣遺跡22次調査	調査位置図	126
図243	〃	調査区配置図	126
図244	〃	北壁断面図	126
図245	中臣遺跡23次調査	調査位置図	127
図246	〃	A区北壁断面図	127
図247	〃	A区遺構平面図	128
図248	〃	B・C区遺構平面図	129
図249	中臣遺跡24次調査	調査位置図	130
図250	〃	調査区配置図	130
図251	〃	断面図	130
図252	中臣遺跡25次調査	調査位置図	131
図253	〃	調査区配置図	131
図254	〃	北壁断面図	131
図255	中臣遺跡26次調査	調査位置図	132
図256	〃	調査区配置図	132
図257	〃	西壁断面図	132
図258	中臣遺跡27次調査	調査位置図	133
図259	〃	調査区配置図	133
図260	〃	1区西壁断面図	133
図261	〃	遺構平面図	134

図262	中臣遺跡28次調査	調査位置図	135
図263	〃	調査区配置図	135
図264	〃	北壁断面図	135
図265	〃	遺構平面図	136
図266	〃	14号住居	136
図267	中臣遺跡29次調査	調査位置図	137
図268	〃	調査区配置図	137
図269	〃	遺構実測図	137
図270	中臣遺跡30次調査	調査位置図	138
図271	〃	調査区配置図	138
図272	〃	南壁断面図	138
図273	中臣遺跡31次調査	調査位置図	139
図274	〃	調査区配置図	139
図275	〃	1トレンチ遺構平面図	139
図276	〃	1トレンチ南壁断面図	139
図277	中臣遺跡32次調査	調査位置図	140
図278	〃	調査区配置図	140
図279	〃	断面図	141
図280	〃	遺構平面図	141
図281	中臣遺跡33次調査	調査位置図	142
図282	〃	調査区配置図	142
図283	〃	北壁断面図	142
図284	〃	調査区全景	142
図285	長岡京左京六条三坊	調査位置図	143
図286	〃	調査区配置図	143
図287	〃	北壁断面図	143
図288	〃	遺構平面図	144
図289	岩倉忠在地遺跡	調査位置図	146
図290	〃	調査区配置図	146
図291	〃	北壁断面図	146
図292	〃	遺構平面図	147
図293	〃	北トレンチ全景	147
図294	栗栖野瓦窯跡	調査位置図	148
図295	〃	地形測量図	149
図296	〃	磁気探査図	150

図297 栗栖野瓦窯跡	焼土層分布図	150
図298 室町殿跡	調査位置図	151
図299 〃	調査区配置図	151
図300 〃	北壁断面図	151
図301 〃	遺構平面図	152
図302 北野廃寺 1	調査位置図	153
図303 〃	調査区配置図	153
図304 〃	東壁断面図	153
図305 〃	第1面遺構平面図	154
図306 〃	第2面遺構平面図	155
図307 〃	建物個別図	156
図308 北野廃寺 2	調査位置図	157
図309 〃	調査区配置図	157
図310 〃	断面図	157
図311 〃	遺構変遷図	158
図312 〃	窯配置図	159
図313 〃	1号窯実測図	159
図314 〃	3号窯実測図	160
図315 〃	4号窯実測図	160
図316 〃	5号窯実測図	161
図317 〃	6号窯実測図	162
図318 〃	7号窯実測図	163
図319 〃	炭窯実測図	163
図320 〃	SX34実測図	163
図321 〃	塑像仏実測図	164
図322 〃	瓦拓影・実測図 1	167
図323 〃	瓦拓影・実測図 2	168
図324 〃	瓦拓影・実測図 3	169
図325 〃	瓦拓影・実測図 4	170
図326 〃	瓦拓影・実測図 5	171
図327 常盤東ノ町古墳群	調査位置図	174
図328 〃	遺構平面図	174
図329 広隆寺旧境内	調査位置図	175
図330 〃	調査区配置図	175
図331 〃	西壁断面図	175

図332 広隆寺旧境内	第2面遺構平面図	176
図333 法性寺跡	調査位置図	177
図334 〃	調査区配置図	177
図335 〃	北壁断面図	177
図336 大塚遺跡	調査位置図	178
図337 〃	調査区配置図	178
図338 〃	北壁断面図	178
図339 〃	遺構平面図	179
図340 〃	調査区東部全景	180
図341 中久世遺跡	調査位置図	181
図342 〃	調査区配置図	181
図343 〃	北壁断面図	181
図344 〃	3トレンチ第1期遺構平面図	182
図345 〃	3トレンチ第2-1期遺構平面図	183
図346 〃	3トレンチSE3実測図	183
図347 〃	3トレンチ第2-2期遺構平面図	184
図348 大藪遺跡	調査位置図	185
図349 〃	北壁断面図	185
図350 〃	調査区全景	185
図351 〃	遺構平面図	186
図352 大原野南春日町窯跡	調査位置図	187
図353 醍醐古墳群	調査位置図	188
図354 〃	耳塚古墳測量図	188
図355 〃	2号墳石室実測図	189
図356 〃	2号墳測量図	190
図357 〃	3・9号墳測量図	190
図358 伏見城跡1	調査位置図	191
図359 〃	調査区配置図	191
図360 〃	西壁断面図	191
図361 〃	遺構平面図	192
図362 伏見城跡2	調査位置図	193
図363 〃	調査区配置図	193
図364 〃	断面図	193
図365 〃	遺構平面図	194
図366 〃	調査区全景	194

図367 昭和54年度試掘・立会調査位置図	198
-----------------------------	-----

表 目 次

表1 昭和54年度発掘調査一覧表	199
表2 昭和54年度試掘・立会調査一覧表	204

第1章 発掘調査

I 昭和54年度の発掘調査概要

昭和54年度に実施した発掘調査件数は81件である。その内訳は平安宮16件、平安京21件、白河街区2件、鳥羽離宮11件、中臣遺跡15件、長岡京1件、その他の遺跡15件である。

平安宮跡 平安宮の調査では、内裏回廊（1）で西築地内東雨落暗渠を確認し、築地・暗渠の構造が明らかとなった。朝堂院（2）では、応天門南西部で集石遺構を検出したが、性格は不明である。造酒司（10）では、南西隅部で南築地外溝・西築地内溝を検出し、平安時代後期まで存続していたことがわかった。中務省北西部では、上層で基壇を持つ礎石建物、下層で掘立柱建物（13）、北築地内溝、礎石建物（14）を検出し、官衙内の建物配置の一端が明らかとなった。また、調査では「内舎人」の墨書土器が出土し、当該地が文献史料にみられる内舎人であることが実証された。太政官（15）では官衙内の区画溝と考えられる東西溝を検出した。

平安京跡 平安京左京の調査では、北辺三坊四町（17）で桃山時代の大規模な南北溝を検出し、金箔瓦などが大量に出土した。三条三坊五町（18）では室町小路西側溝、六条一坊三町（23）では六条坊門小路南側溝・朱雀大路東側溝、七条三坊十五町（26）では七条坊門小路路面・北側溝、八条三坊二町（27）では八条坊門小路北側溝を検出し、平安京条坊復元の定点となった。また、三条二～四坊（19）では堀川通から木屋町通まで調査を行い、左京の東西方向の堆積状況が明らかになった。主な遺構には、東洞院大路路面・東側溝、西洞院大路路面・東側溝、三条坊門小路北側溝、三坊十一町・十四町で室町時代から桃山時代の大規模な南北濠、三坊十一町で桃山時代から近世の基壇をもつ建物、溝、四坊十四町で中世の集石遺構、甕据え付け土壌などを検出した。三条四坊十町（20）では、古墳時代から江戸時代の遺物・遺構を多数検出し、当地域の変遷が知られた。また、平安時代から鎌倉時代の三条坊門小路北側溝、下層で古墳時代の流路を検出し土師器が多数出土した。六条二坊五町・本國寺（25）では大規模な調査を実施し、平安時代から江戸時代の遺構・遺物を大量に検出し、当地域の変遷が明らかとなった。平安時代では、楊梅小路南側溝、建物跡などを検出。鎌倉時代から室町時代には、井戸、土壙、柱穴などが急増する。室町時代末の本國寺期には大規模な濠が頻繁に造り替えられ、濠は境内を複雑に区画したと推定できる。その後、天文法華の乱で本國寺は焼亡し、濠などが埋められた後に建物・施設が造られる。江戸時代には、遺構・遺物がやや減少するが、大規模な礎石建物や土蔵、舟入、土壙などが造られる。また、側溝、濠などから、各時期の編年の基準資料となる土器類が出土した。九条三坊十六町（29）でも大規模な調査を実施したが、上面が削平を受け遺構の残存状況は悪く、平安時代から鎌倉時代の井戸、鎌倉時代の柵・建物を検出したにすぎない。

右京の調査では、北辺三坊二町（30）で中世の東西柵列・東西溝、平安時代の湿地・井戸・落込み・溝を検出。さらに下層で弥生時代の溝を検出した。北辺四坊五町（31）および北辺四坊六

町・史跡妙心寺境内（32・33）では、江戸時代遺構の攪乱が多く、（32）で平安時代前期の土御門大路北側溝、中期の土壇・柱穴などを検出したにとどまった。二条三坊二町（34）では平安時代から中世の遺構を検出、溝や包含層から褐釉水注、黄釉壺、双魚紋緑釉椀、褐釉壺、三彩陶器壺、風字硯、絞胎陶枕などが出土し注目される。三条三坊十町（35）では中央部で大規模な調査を実施し、平安時代前期から中期の建物・柵・溝を多数検出したと共に土壇墓も検出し、宅地内の配置や変遷が明らかとなった。

白河街区跡 白河街区の調査は、尊勝寺・白河南殿地区で2箇所実施したが、中世の墓（38）、土壇（39）などを検出しただけで、顕著な遺構は認められなかった。

鳥羽離宮跡 鳥羽殿の調査は、11箇所実施し、いずれも東殿地区である。白河上皇陵北側の55・56次調査（47・48）で平安時代後期の景石・州浜を施した園池を検出し、東殿の西側では園池がかなり複雑に入り込んでいたことが明らかとなった。当地域は後世の遺構が多く、中世以前の遺構は少ない。主な遺構には、49次調査（40）で平安時代後期から鎌倉時代の東西溝・井戸、51次調査（42）で室町時代の南北溝・柱穴・土壇、54-A次調査（45）で平安時代後期の土壇・溝・井戸、鎌倉時代以降のL字溝、54-B次調査（46）で平安時代後期の土壇・溝、鎌倉時代以降のL字溝・南北溝・土壇・井戸など、61次調査（49）で平安時代後期の低湿地、64-1次調査（50）で鎌倉時代以降の井戸・溝・土壇などを検出した。

中臣遺跡 中臣遺跡の調査は、15箇所実施し、遺跡東部の20次調査（52）で竪穴住居10棟、土壇、溝、22次調査（54）で弥生時代の竪穴住居、古墳時代の竪穴住居、平安時代の掘立柱建物など、23次調査（55）で縄文時代の甕棺、弥生時代の甕棺・方形周溝墓・竪穴住居、古墳時代の竪穴住居10棟、古墳時代から平安時代の掘立柱建物などを検出した。遺跡中央部の32次調査（64）で弥生時代の土壇、古墳時代の竪穴住居、奈良時代の掘立柱建物などを検出した。

その他の遺跡 その他の遺跡の調査では、室町殿で初の調査（69）を行った。中世の遺構を検出したが室町殿に関連する遺構は確認できなかった。北野廃寺では寺城南西部で2箇所の調査を実施し、6次調査（70）では平安時代・中世の掘立柱建物、7次調査（71）では古墳時代の竪穴住居、飛鳥時代から奈良時代の窯跡群7基・瓦集積場・炭窯・溝・竪穴住居、平安時代の掘立柱建物、中世の井戸・柵列・掘立柱建物などを検出した。瓦も大量に出土し、寺域内の瓦屋のあり方・変遷が明らかとなり注目される。広隆寺旧境内の調査（73）では、創建とほぼ同時期の竪穴住居を検出した。大塚遺跡（75）では、古墳時代の竪穴住居・掘立柱建物を検出し、集落の変遷がわかった。また、竪穴住居から轆の羽口、埴塼、スラグ、焼土などが出土し、鉄生産の可能性が指摘できる。中久世遺跡（76）では弥生時代から古墳時代の流路を検出した他、弥生時代の方形周溝墓を確認した。上層では平安時代初期の掘立柱建物群・井戸、鎌倉時代の建物・井戸・溝などを検出し、長岡京廃絶後の周辺集落の状況を考える遺構といえる。醍醐古墳群（80）では古墳時代後期の古墳群の確認調査を実施し、13基中最大の耳塚他3基の発掘調査を行った。伏見城では2箇所の調査を実施し、（81）では攪乱が多く遺構の遺存状況は悪いが、下層東西溝は伏見城の南側の濠である可能性が高い。

II 平安宮・京跡

1 平安宮内裏跡

経過 今回の発掘調査は、住宅建設工事に伴うもので、当地域は推定平安宮内裏内郭回廊南西部にあたるため、調査を実施した。

調査地内に、南北3m、東西8.5mの長方形の調査区を設定し、適時拡張した。機械で盛土層および攪乱を掘削した。その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.7m)、第2層暗褐色砂泥層(基壇構築土:0.3m)、第3層暗褐色粘質土層(基壇構築土:0.1m)、第4層黄灰色粘質土層(地山)である。調査区全域が、防空壕のため地表下約2mまで攪乱を受け、調査区北側の幅0.5mと南壁にのみ遺構が残存していた。遺構は第2層上面(第1面)と第3層上面(第2面)で検出した。第2層上面で検出した遺構には南北溝、整地層、第3層上面で検出した遺構には柱穴がある。

第1面では、調査区中央北側と南壁で南北溝SD1を検出した。SD1は幅0.7m、深さ0.3mで南北調査区外に続く。側壁は厚さ0.1m、幅0.9m、高さ0.45mの凝灰岩板石を北側で2列並べる。底部は径0.1~0.3mの河原石の平坦面を上にして敷く。埋土は黄灰色土で土器、瓦片を含む。溝両側

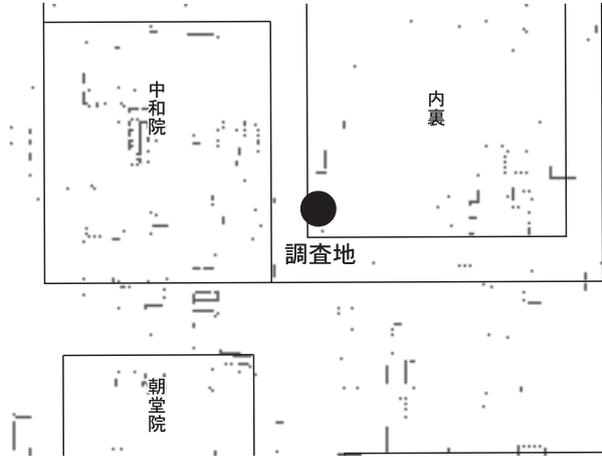


図1 調査位置図(1:5,000)

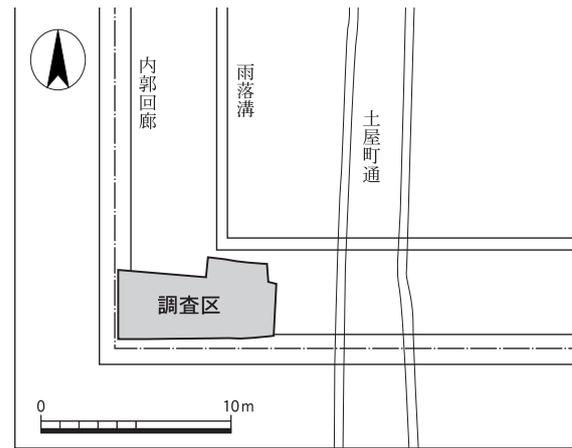


図2 調査区配置図(1:400)

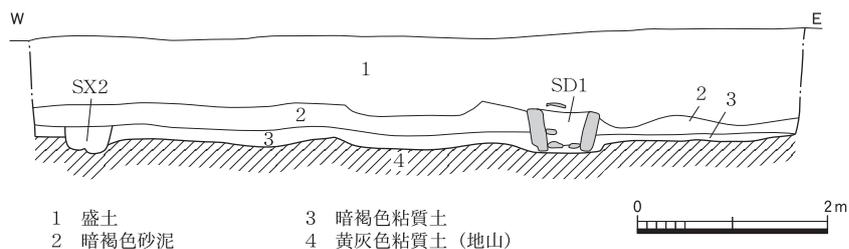


図3 北壁断面図(1:80)

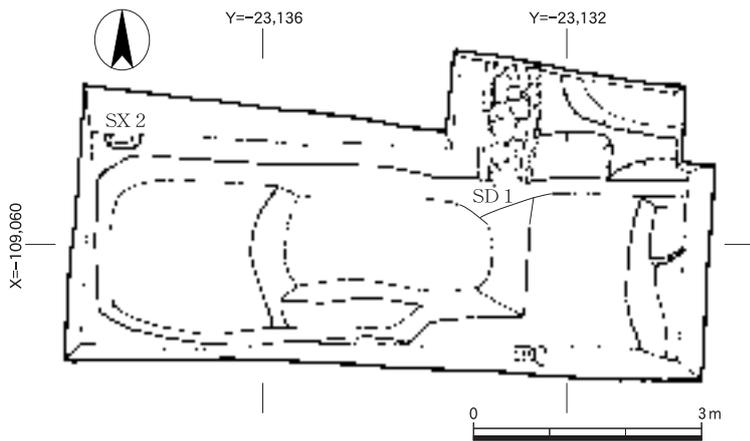


図4 遺構平面図（1：100）

の第2層・第3層は基壇構築土と考えられ、SD1の西側ではその上に黄灰色土が若干残存し、これも基壇土と推定できる

第2面では、調査区北西部で柱穴SX2を検出した。一辺0.45m、深さ0.3mである。位置はSD1中心まで5.5mである。いずれの遺構も平安時代に属する。

遺物 遺物は整理箱に10箱出土した。遺物には、土師器、須恵器、陶器、軒平瓦、丸瓦、平瓦、凝灰岩石材がある。時期は平安時代から中世である。

SD1からはまとまった遺物が出土し、平安時代後期に属する。

第2・3層から若干土器類が出土し、平安時代後期に属するが、SD1よりやや古い様相がある。

小結 今回の調査では、大半が攪乱を受けていたが、基壇と側溝が残存していた。これらの遺構は、周辺の調査成果から、内郭回廊とその東側の雨落の延長で回廊を潜らせる暗渠に相当すると推定できる。ただ出土遺物から平安時代後期の修復後のものであることがわかった。

『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告



図5 SD1（南東から）

2 平安宮朝堂院跡 1

経過 今回の発掘調査は、マンションの建設工事に伴うもので、当地は推定平安宮朝堂院応天門の南西部にあたるため、調査を実施した。

まず試掘調査を行い、攪乱を受けていない場所に、南北10.5m、東西15mの調査区を設定した。盛土層・耕土などは重機で掘削し、その後遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.8~1.2m)、第2層暗灰色泥土層(耕土層:0.1~0.5m)、第3層暗灰色砂泥層(0.1m)、第4層暗灰色泥砂層(江戸時代中期包含層:0.05m)、第5層褐色砂泥層(0.05m)、第6層褐色砂礫層(地山)である。遺構は、第6層上面で検出した。検出した遺構は、小溝群、土壇、落込みなどがある。

調査区全域で東西、南北両方向の小溝群を検出した。耕作に関係した溝と考えられる。時期は江戸時代以降に属する。

調査区の北東部と北西部で土壇群を集中して検出した。形状は不定形で、規模は一辺1~2mで、深さは0.2~0.6mと一定していない。土壇の半数は、拳大の石と瓦を均一に詰めたものである。埋土中からは瓦以外では陶器片がわずかに出土した。時期は不明である。

遺物 遺物は整理箱で22箱出土した。内容は、土師器、須恵器、陶器、瓦などがある。

時期は平安時代から江戸時代で、平安時代の瓦類が大半を占め、他の時期の遺物は少ない。

小結 今回の調査では、応天門に関係する明確な遺構は確認できなかった。ただ多数検出した集石遺構は、応天門に関係した施設の可能性があるとも言い切れない。

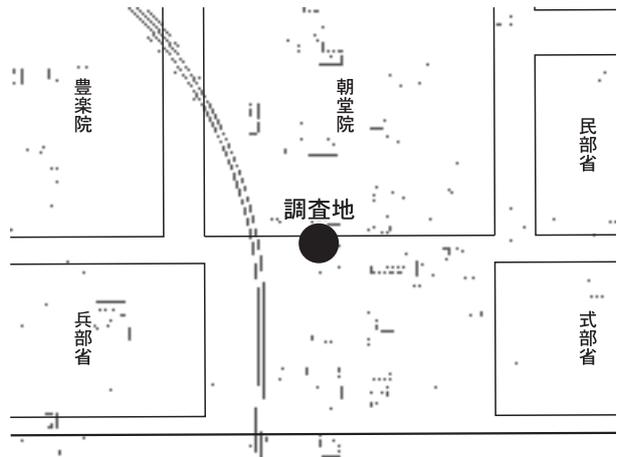


図6 調査位置図(1:5,000)

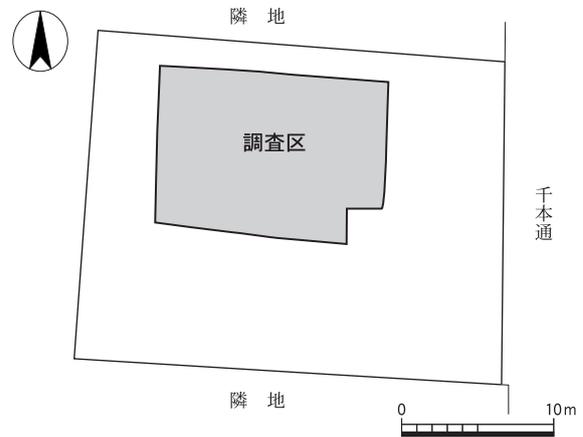


図7 調査区配置図(1:500)

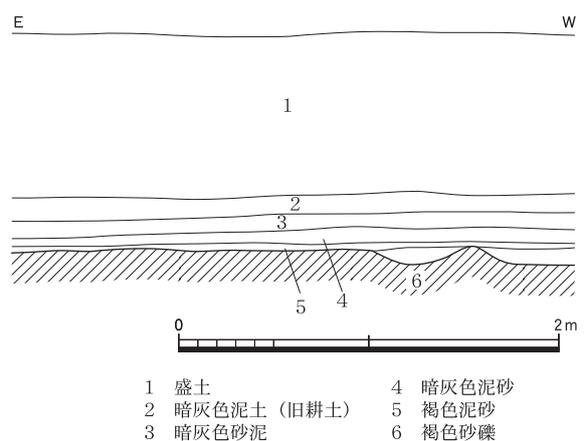


図8 断面図(1:40)

周辺の調査地との関係から、当調査地は江戸時代頃に削平を受けたことが想定できる。

『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 1995年報告

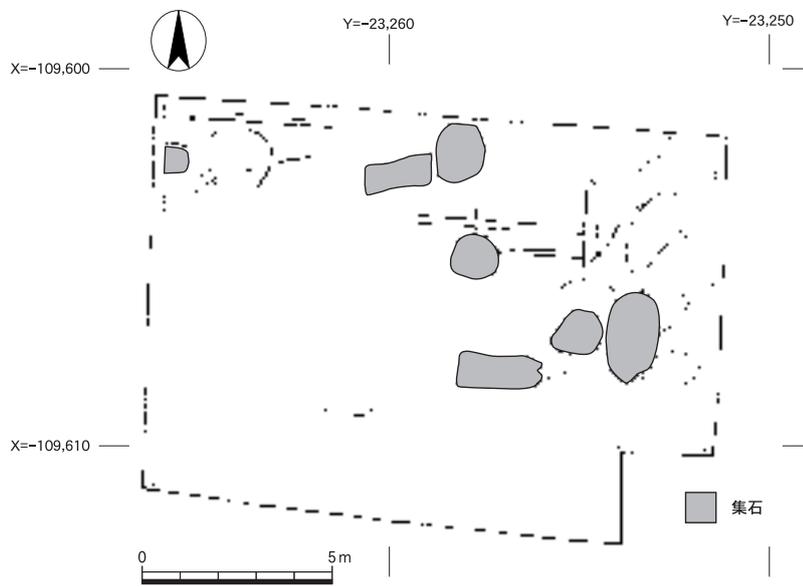


図9 遺構平面図 (1 : 200)



図10 調査区全景 (東から)

3 平安宮朝堂院跡 2

経過 今回の発掘調査は、京都市児童福祉センターの敷地内に、防火水槽が設置されることになり、その工事に伴うものである。当地は平安宮朝堂院東面回廊跡、承光堂東側にあたるため、調査を実施した。

調査地内に、南北4m、東西5.8mの調査区を設定した。盛土層・耕土などを重機で掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、現代盛土層(0.75m)、第1層濃灰色泥砂層(近世包含層:0.25m)、第2層茶褐色砂泥層(0.3m)、第3層淡茶褐色砂泥層(平安時代包含層:0.1~0.2m)、第4層黄褐色砂泥層(地山)である。遺構は、第2層上面で検出した。検出した遺構は、江戸時代の溝、土壇などがある。また、平安時代の包含層を確認した。

調査区中央で斜め方向の溝を検出した。北東から南西へ流れる。検出面では幅約1m、深さ約0.5mである。調査区南西部で土壇(土取穴)を検出した。平面規模は調査区外に続いたため不明であるが、深さは約0.8mである。いずれも江戸時代に属する。

遺物 遺物は整理箱で1箱出土した。遺物には、陶器、磁器、瓦などがある。大半が土壇から出土し、時期は瓦が平安時代、他は江戸時代に属する。

小結 今回の調査では、承光堂に関する遺構は確認できなかった。しかし、平安時代に属する瓦類などの遺物は少量ながら出土しており、周辺に遺構の存在が推定できる。

『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 1995年報告

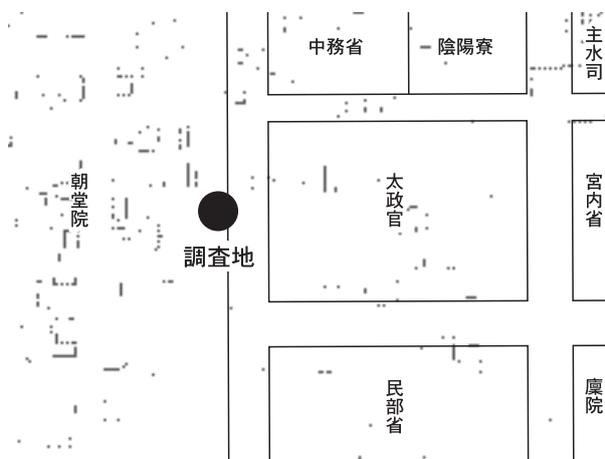


図11 調査位置図 (1:5,000)

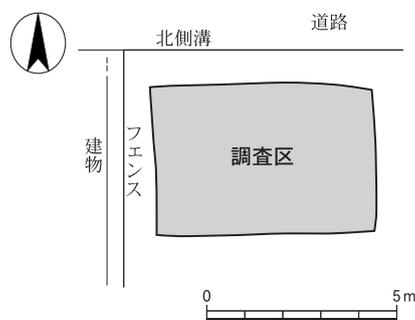


図12 調査区配置図 (1:200)

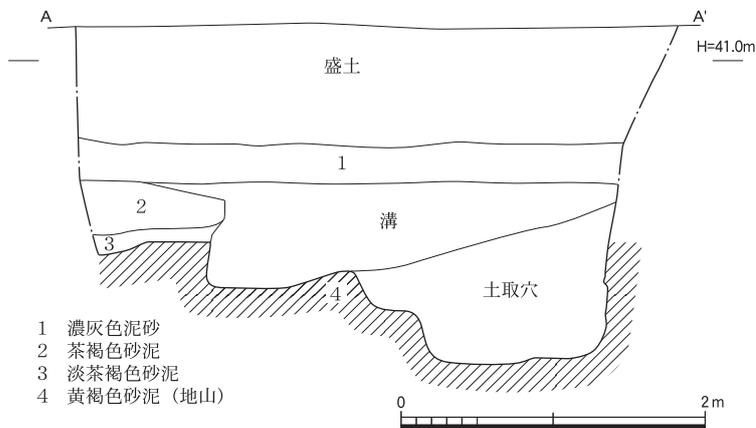


図13 セクション断面図 (1:50)

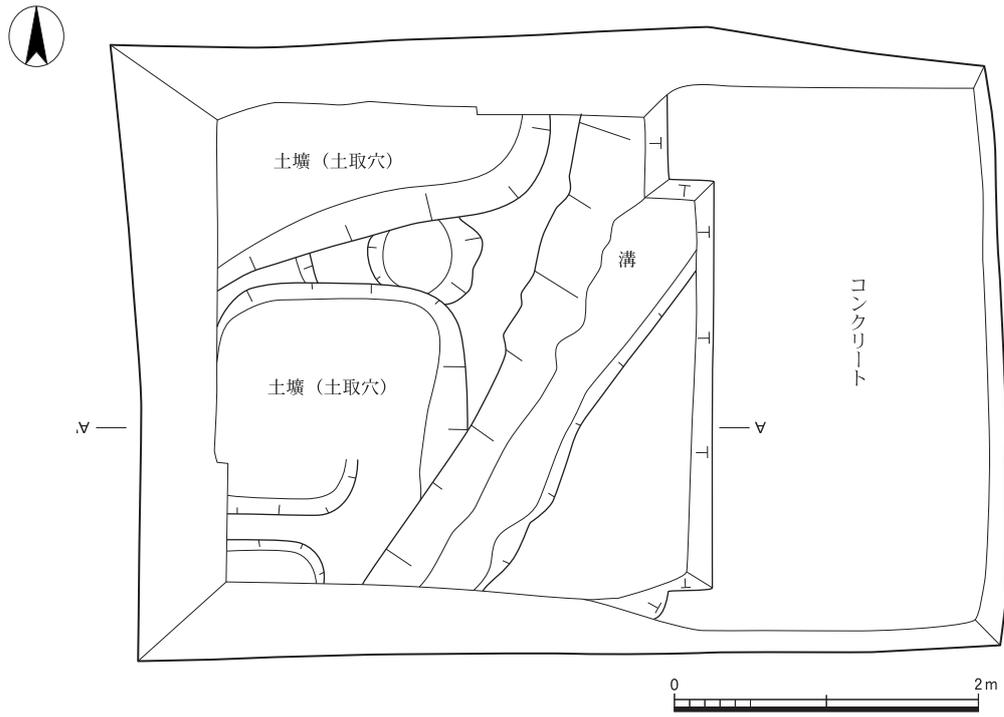


図14 遺構平面図 (1 : 50)



図15 調査区全景 (東から)

4 平安宮豊楽院跡

経過 今回の発掘調査は、住宅建設工事に伴うもので、当地は推定平安宮豊楽院東側にあたるため、調査を実施した。

調査地東側に1トレンチ（南北2m×東西2.5m）、調査地中央に2トレンチ（南北9m×東西3m）、西側に3トレンチ（南北3m×東西4m）、3トレンチ北側で既存建物の基礎除去後に4トレンチ（約1m四方）の4箇所に調査区を設定した。盛土層などを重機で掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に一部断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（0.25m）、第2層暗茶褐色土（包含層：0.3m）、第3層淡茶褐色泥砂（包含層：0.15m）、第4層茶褐色砂泥（包含層）であるが、建物掘削深度が0.5mまでとなっているため、それ以下の土層は不明である。

遺構は、第4層上面で検出した。遺構には土壇、柱穴、整地層などがある。

調査区全域で、土壇を多数検出した。形状・規模は様々である。柱穴は中央部で集中して検出したが建物としてまとまらなかった。遺構の時期は、近世に属する。

土壇の壁面で平安時代の整地層を検出した。土層中には凝灰岩の破片を含む。

遺物 遺物は整理箱で11箱出土した。遺物には、土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦などがある。大半は江戸時代以降のものであるが、平安時代前期から中期の軒瓦、丸瓦、平瓦、土師器、須恵器が整地層から出土した。

小結 今回の調査では、工事の制約上、近世以前の遺構の検出はできなかったが、第3層の整地層から平安時代の土器・瓦類や凝灰岩片が検出され、当地域で豊楽院に関連する遺構が認めら

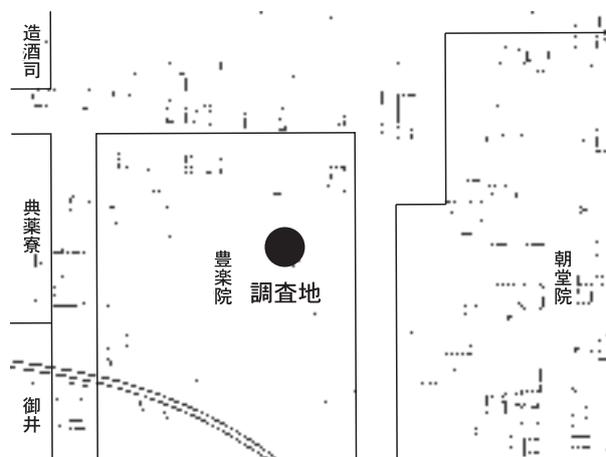


図16 調査位置図（1：5,000）

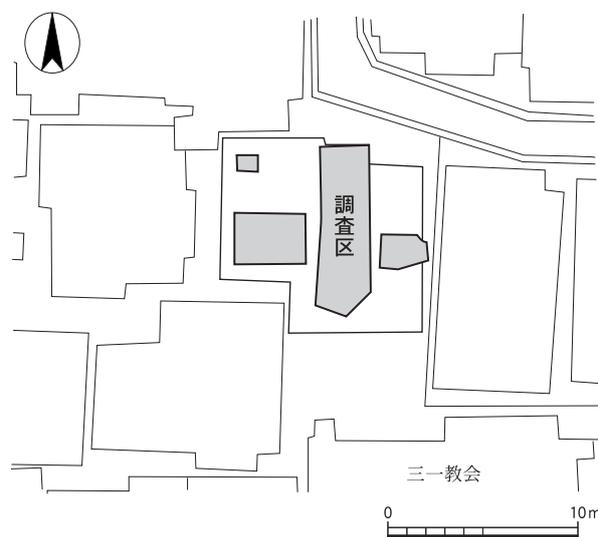


図17 調査区配置図（1：400）

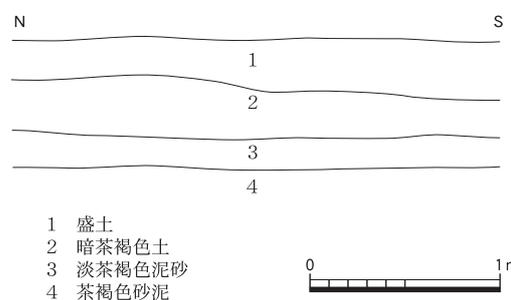


図18 2トレンチ東壁断面図（1：40）

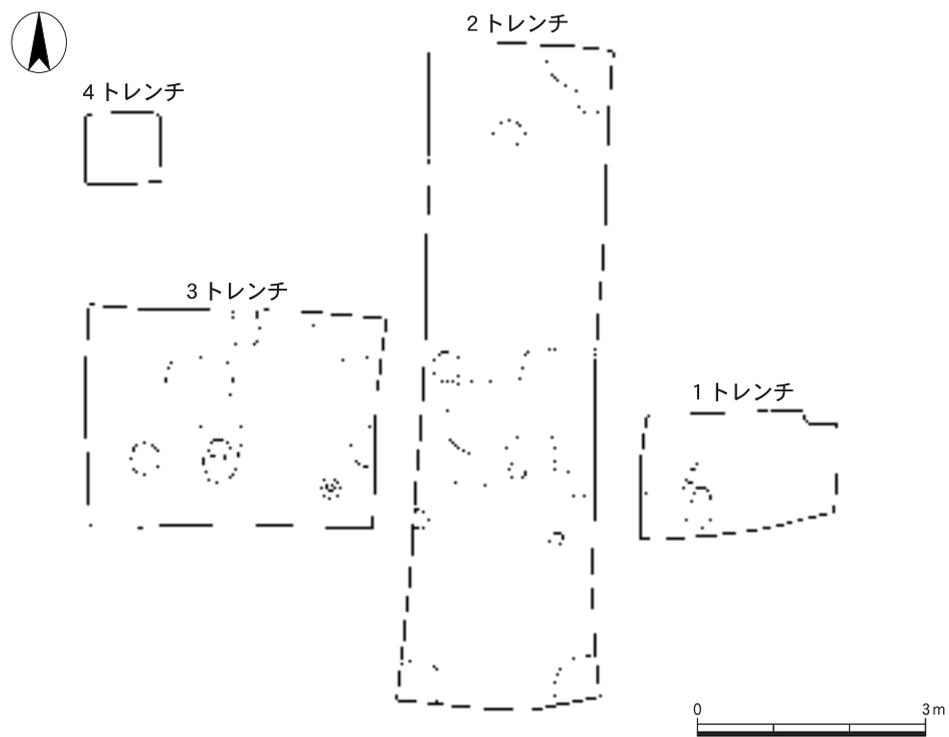


図19 遺構平面図（1：100）

れる可能性がある。

また、以前調査が行われた聖三一教会との境界には約1mの段差があり、本調査地点の方が高い。この段差が新しい時期の積み土造成か、豊楽院に伴う建物基壇跡かの確認はできなかった。

『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 1995年報告

5 平安宮大蔵省跡 1

経過 今回の発掘調査は、ビル建設工事に伴うもので、当地域は推定平安宮大蔵省南辺中央にあたるため、調査を実施した。

調査地内に、南北約7m、東西10mの長方形の調査区を設定し、適時拡張した。重機で盛土層などを掘削した。その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

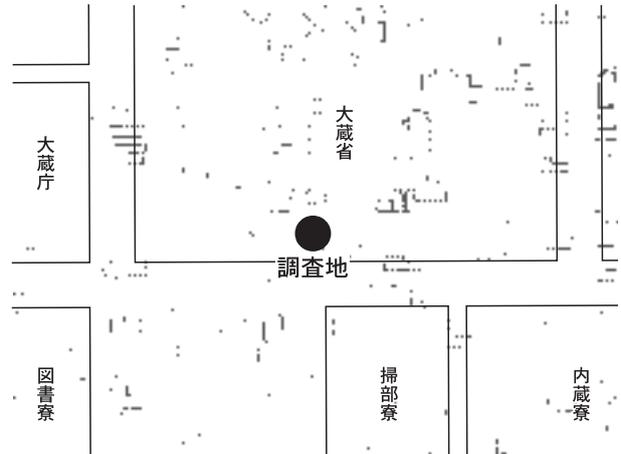


図20 調査位置図 (1 : 5,000)

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層 (1.8m)、第2層黒褐色泥土層 (旧表土: 0.6m)、第3層黄褐色泥砂・礫層の互層 (地山) である。遺構は第3層上面で検出した。遺構には土壙、溝、柱穴があり、その下層で池状遺構を検出した。

土壙は調査区全域で検出した。形状は不定形で、SK 1 は2.5m × 1.5m、深さ0.8mである。他の土壙は、調査区外に続くため規模は確認できない。南西部で東西溝SD 1 を検出した。幅1.2m、深さ0.4m、長さ6m以上で東に続く。柱穴は散在し、建物としてまとまらない。

調査区北東部を除き、南西側に池状遺構が広がり、調査区外に続く。深さは1.8mである。埋土は暗灰色泥土と暗灰色混礫泥砂層の互層である。池状の遺構は黄褐色泥砂層を肩にして、南へ急激に落ち込む。ほぼ垂直に切り取られと思われる部分もあるため、人為的なものと考えられるが、検出部分がわずかであるため、断定はできなかった。

遺構の時期は、いずれも江戸時代に属する。

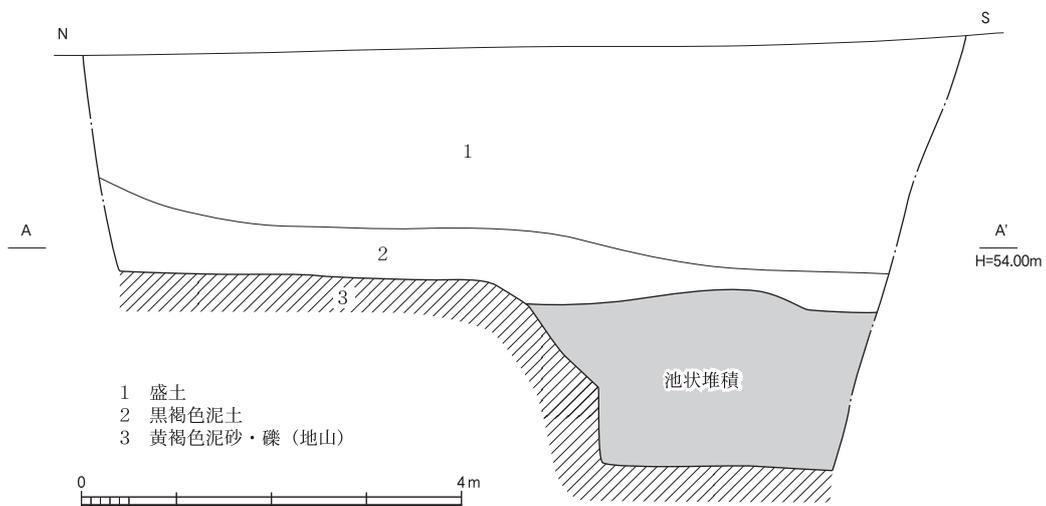


図21 東壁断面図 (1 : 80)

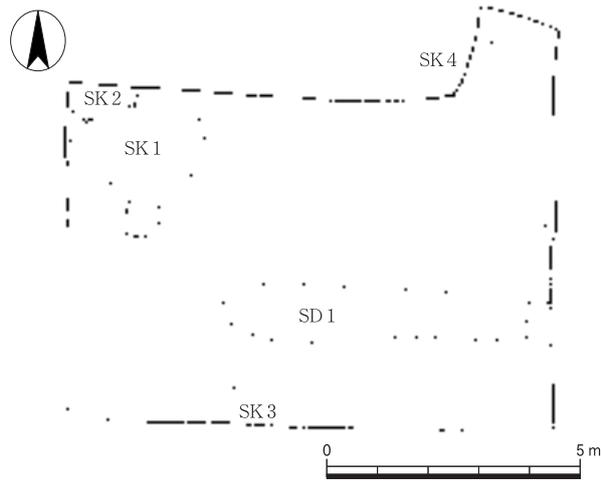


図22 遺構平面図（1：150）

遺物 遺物には、土師器、陶器、磁器、棧瓦がある。時期は江戸時代である。

小結 今回の調査では、大半が江戸時代の遺構を検出しただけで、平安時代の遺構は全く確認できなかった。ただ、当地域の平安時代遺構の基盤層となる黄褐色砂泥が若干残存し、周辺での遺構の存在が推定できる。

『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告



図23 調査区全景（東から）

6 平安宮大蔵省跡 2

経過 今回の発掘調査は、ビル建設工事に伴うもので、当地は推定平安宮大蔵省長殿南西部にあたるため、調査を実施した。

調査では、南側に南北3m×東西6m、北側に一辺3mの2箇所の調査区を設定した。2箇所共に重機で、現地表下約3mまで盛土層を掘削したが、全て現代盛土層であった。そのため、断面写真撮影などを行い、調査を終了した。

遺構・遺物 2箇所の調査区共に、遺構は検出できなかった。遺物も出土していない。

小結 今回の調査地の南側に段差があり、南側が下がっており、調査地周辺が最近厚く土を積んで整地されたことが明らかとなった。

『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告
第13冊 1995年報告

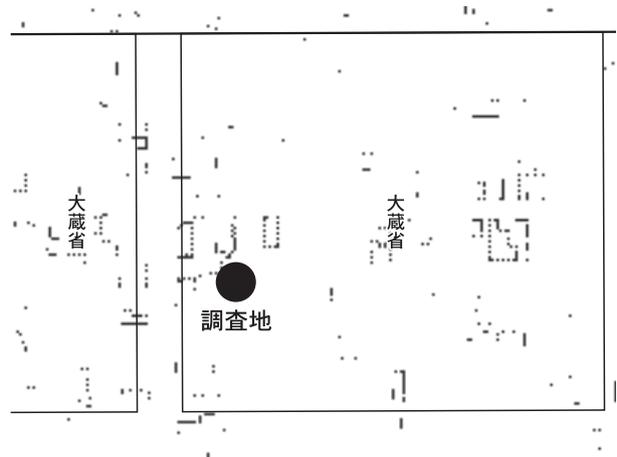


図24 調査位置図 (1 : 5,000)

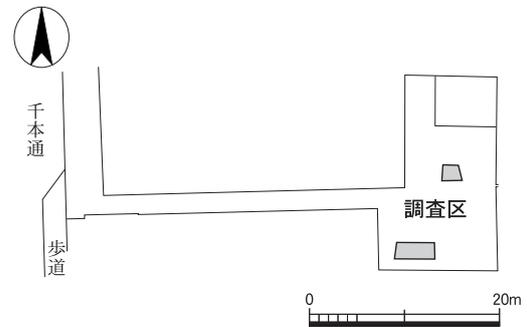


図25 調査区配置図 (1 : 800)



図26 調査区全景 (西から)

7 平安宮茶園跡（図版1）

経過 今回の発掘調査は、イヌイ星の子ハイツ建設工事に伴うもので、当地は推定平安宮茶園西部にあたるため、調査を実施した。

調査では、南側に1区（南北8m×東西4m）、中央に2区（南北18m×東西4.5m）、東側に3区（南北12m×東西9.5m）の3箇所の調査区を設定した。盛土層などを重機で掘削し、その後遺構調査を実施した結果、遺構が残存した1区・3区は平面実測と写真撮影を実施した。1区は最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 1区の基本層序は、第1層現代盛土・整地層（0.6m）、第2層砂礫・黄色土の整地層（道路整地層：0.25m）、第3層褐色土層（地山）である。遺構は、第2層・第3層上面で検出した。検出した遺構には、道路面および西側溝などがある。

1区東側では、南北道路を数面にわたって検出した。各路面はかなり堅く締まる。路面の西側で南北側溝を検出した。掘形は幅1mで、両側に一辺0.2~0.5mの自然石の平坦面を内側に向け据える。これらの遺構の下層は地山で、平安時代の遺構・遺物は検出できなかった。

2区は、調査区全体が江戸時代の火災処理物廃棄土層である。底部は現地表下約3.6mまでに達するものもある。平安時代の遺構・遺物は検出できなかった。

3区は、現地表下約1.5mまで現代盛土層で、調査区南西部で褐色土の地山を検出し、他は全て塵芥処理土

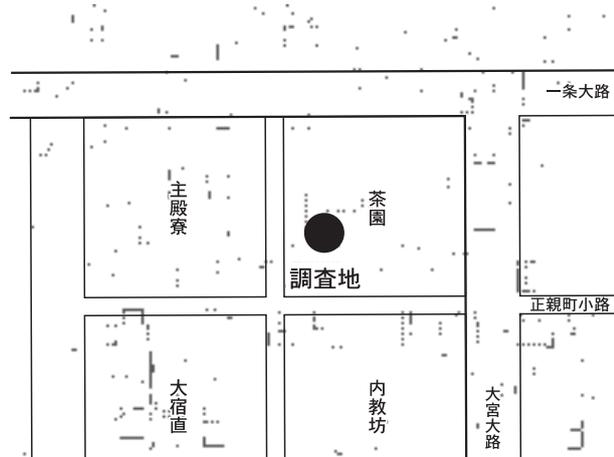


図27 調査位置図（1：5,000）

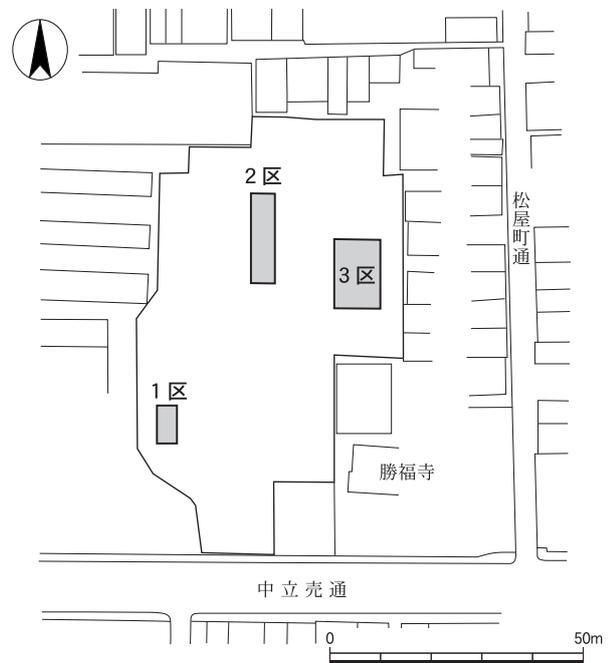


図28 調査区配置図（1：1,500）

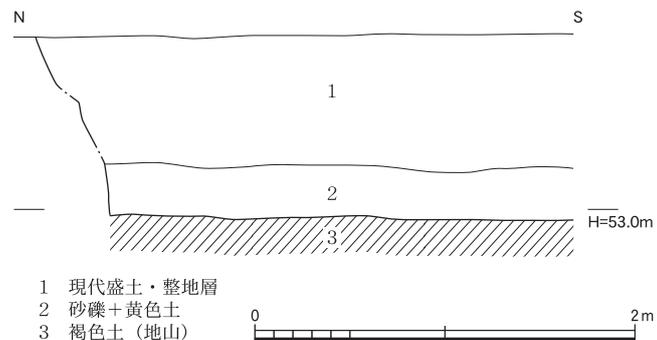


図29 1区東壁断面図（1：40）

壙である。平安時代の遺構・遺物は検出できなかった。
遺構の時期は、いずれも江戸時代後期に属する

遺物 遺物整理箱で16箱出土した。遺物には、土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器、瓦類、石製品などがある。土器類が大半を占め、他の遺物は少ない。時期は中世から江戸時代のもので、江戸時代のもものが主体である。土器類は、2区・3区の土壌からまとまって出土した。

小結 今回の調査では、全調査区で江戸時代後期以降の遺構を検出し、桃山時代以前の遺構は全く検出できなかった。1区で検出した南北道路および側溝は日暮通の北延長上に該当し、現在はなくなっているが、かつては道路が延びていたことが明らかとなった。また、2区の火災処理物廃棄土壙は聚楽第の濠を利用した可能性があることが指摘できる。

『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 1995年
報告

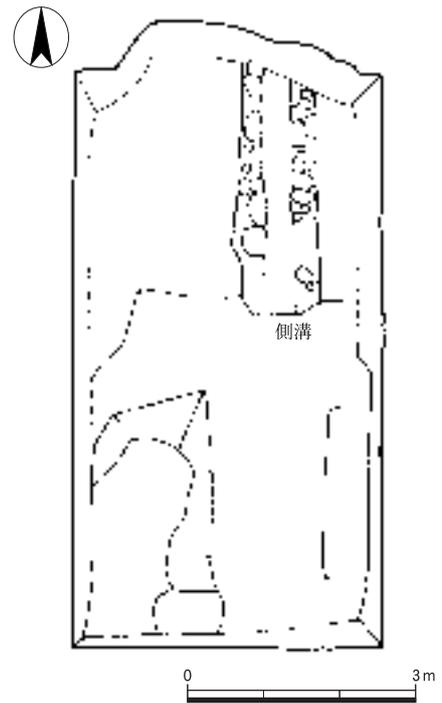


図30 1区遺構平面図（1：100）

8 平安宮図書寮跡

経過 今回の発掘調査は、事務所建設工事に伴うもので、当地は推定平安宮図書寮北辺中央部にあたるため、調査を実施した。

調査地内に、南北4m×東西23mの調査区を設定した。盛土層などを重機で掘削し、その後遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い調査を終了した。

遺構 基本層序は、第1層現代盛土層(1.3~1.5m)、第2層黒色土層(平安時代包含層)、第3層灰色礫層(地山)である。遺構は、第3層上面で検出した。検出した遺構には、土壙、溝、土取穴などがある。

調査区全域で土壙を検出した。土壙の形状は不定形で、規模は様々である。遺構の時期は、近代・現代に属する

調査区西側で南北溝、全域で土取穴を検出した。土取穴は形状は不定形で、規模は様々である。遺構の時期は、江戸時代に属する

調査区東側で、土壙を2箇所検出した。SK5は南北約1m、東西0.8m以上、深さ0.5mで、埋土は黒褐色土である。SK10は東西約2.5m、深さ0.5mで、南に続く。遺構の時期は、平安時代前期に属する。

遺物 出土遺物には、土師器、須恵器、陶器、磁器、石製品、瓦などがある。SK5・10からは、平安時代前期の土師器、須恵器、基石、瓦などが出土した。その他江戸時代に属する遺構から陶器、磁器などが出土した。

小結 今回の調査では、平安時代前期の遺構・遺物を少数ながら検出した。これまで周辺では当該期の遺構・遺物は検出されておらず、周辺に残存している可能性を示唆する。

『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 1995年報告

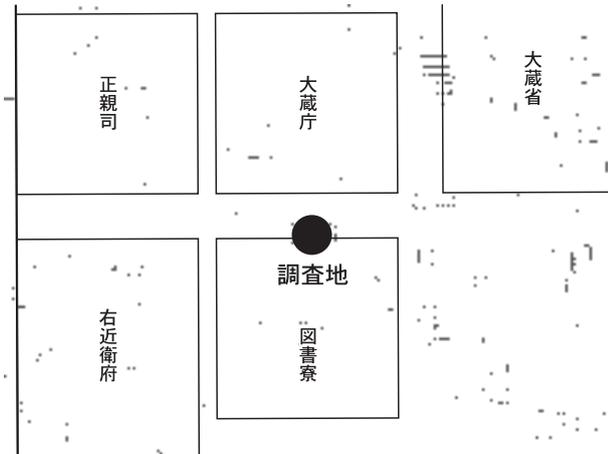


図31 調査位置図 (1:5,000)

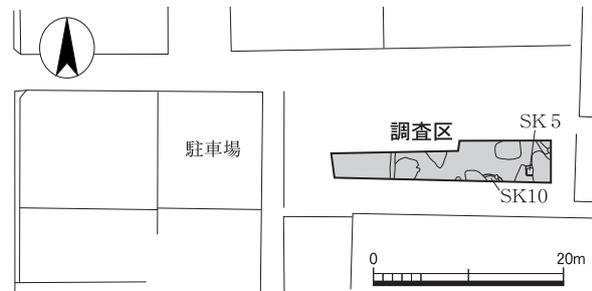


図32 調査区および遺構配置図 (1:800)

9 平安宮内蔵寮跡

経過 今回の発掘調査は、事務所建設工事に伴うもので、当地は推定平安宮内蔵寮南西部にあたるため、調査を実施した。

調査地内に、南北10m×東西5mの調査区を設定した。盛土層などを重機で掘削し、その後遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 基本層序は、第1層現代盛土層(0.7m)、第2層黄灰色粘土層(0.15m)、第3層黄色砂礫層(地山)である。遺構は、第3層上面で検出した。検出した遺構には、土墻、土取穴などがある。

調査区北西部で土墻を検出した。土墻は南北約1.1m、東西0.7m、深さ0.5mである。東部中央で土取穴を検出した。形状は不定形で、規模も様々で重複した状態であった。埋土は暗黒色砂泥層で、江戸時代の遺物と共に平安時代前期の土器・瓦類が出土したが、遺構の時期は、江戸時代に属する。

遺物 出土遺物には、土師器、須恵器、陶器、磁器、軒平瓦、丸瓦、平瓦などがある。大半は土取穴から出土し、時期は平安時代前期から江戸時代である。平安時代前期の遺物には軒平瓦、土器類などがある。

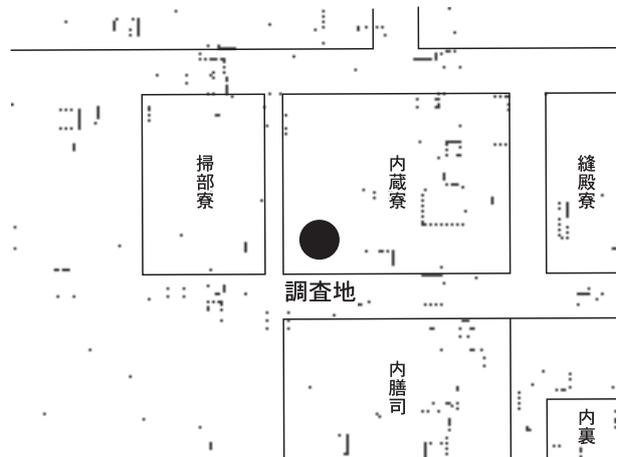


図33 調査位置図 (1:5,000)



図34 調査区配置図 (1:500)

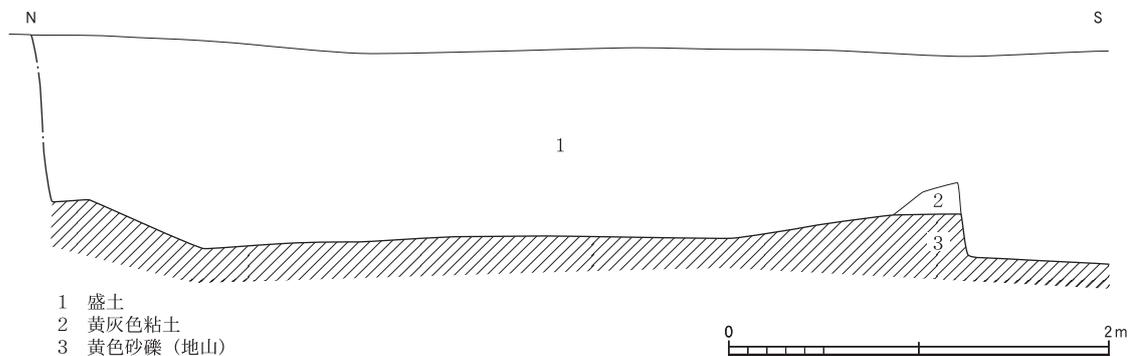


図35 東壁断面図 (1:40)

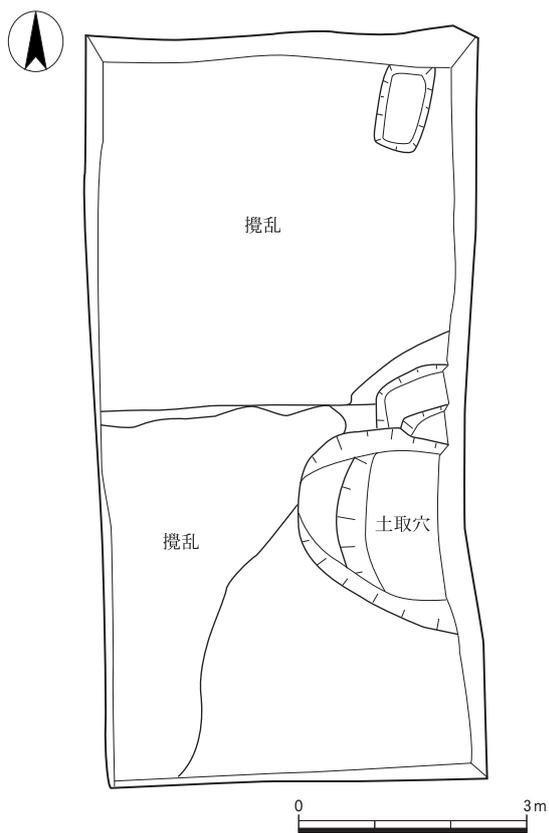


図36 遺構平面図（1：100）

小結 今回の調査では、桃山時代以前の遺構は全く確認できなかった。ただ、平安時代前期の遺物が少量ながら出土し、周辺に当該期の遺構が残存している可能性がある。

『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 1995年報告



図37 調査区全景（南西から）

10 平安宮造酒司跡

経過 今回の発掘調査は、計量検査所建設工事に伴うもので、当地は推定平安宮造酒司南西隅部にあたるため、調査を実施した。推定造酒司内の6次調査である。

調査地内に、1区（南北10m×東西5m）、2区（南北6.5m×東西4m）の2箇所の調査区を設定した。盛土層などを重機で掘削し、その後遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 基本層序は、第1層近現代盛土層（0.7～1.3m）、第2層黄褐色泥砂層（近世耕土層：0.2～0.4m）、第3層淡黄褐色砂泥層（地山）である。遺構は、第3層上面で検出した。検出した遺構には、溝、柱穴などがある。

1区では、中央部が攪乱を受けるが、北西部で南北溝SD4を検出した。SD4は断面U字形、幅約2.4m、深さ約

0.5mで底面平坦である。埋土は暗茶褐色砂泥で、平安時代前期の土器類が出土した。SD4は5次調査区から延伸する。溝西肩は西限築地心推定線から東へ3.0～3.5mである。SD4の東側では、柱穴を数個検出したのみである。遺構の時期は、いずれも平安時代に属する。

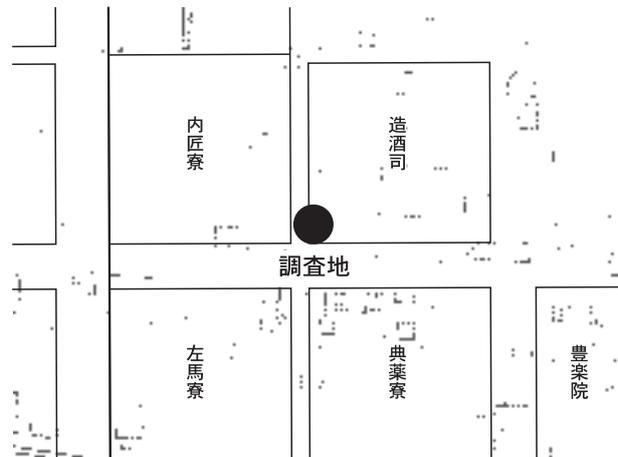


図38 調査位置図（1：5,000）

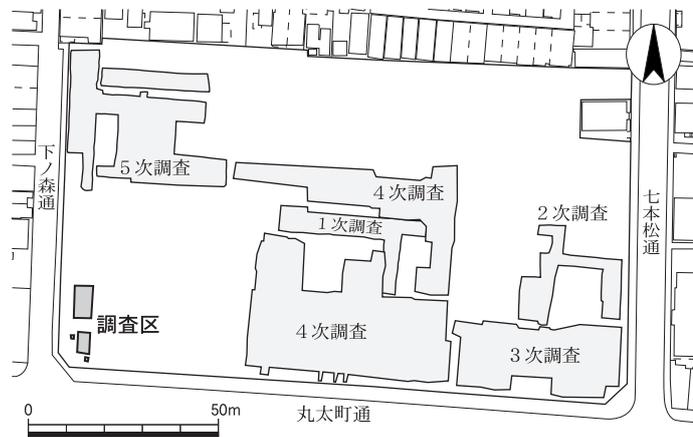


図39 調査区配置図（1：2,000）

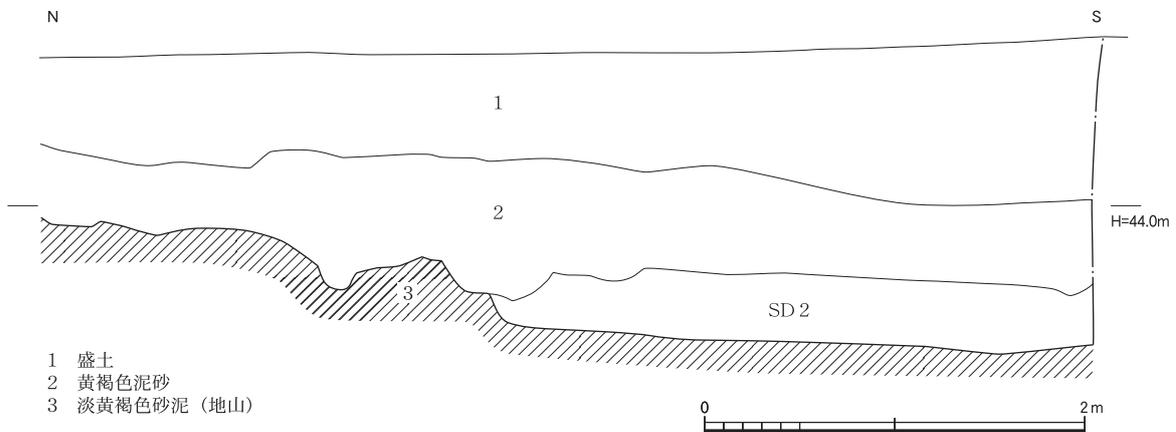


図40 2区東壁断面図（1：40）

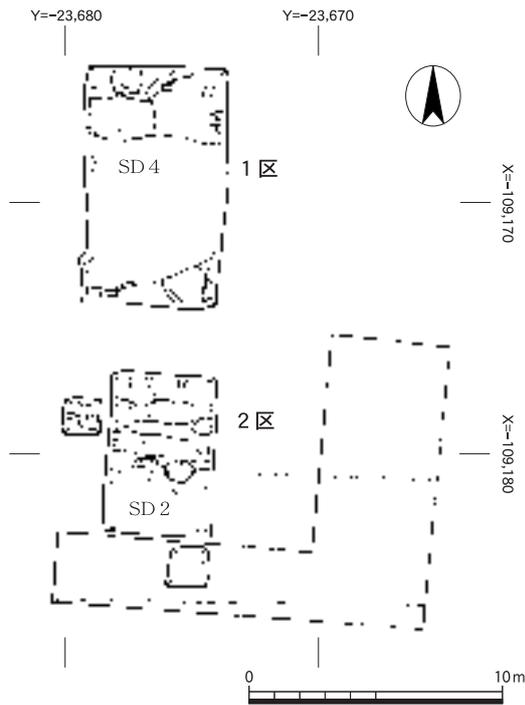


図41 遺構平面図 (1 : 300)

調査で、南北溝SD 4は西限築地内溝、東西溝SD 2は南限築地外溝と推定できる。両溝共に平安時代前期には埋まり始めるが、外溝は平安時代後期まで使用されていたことが明らかとなった。その後、整地を行い道路として使用されたものと考えられる。

『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 1995年報告

2区では、全域で東西方向の小溝を数条検出した。時期は室町時代に属する。調査区南部で東西溝SD 2の北肩を検出した。SD 2は断面U字形、幅5 m以上、深さ最深0.8mで、底面は平坦である。埋土は下層が暗褐色砂泥、上層が淡黄褐色砂泥で、上面に砂礫が多く堅く締まる。下層からは平安時代前期の土器・瓦類、上層からは平安時代前期から後期の土器・瓦類が出土した。SD 2は3・4次調査区から延伸する。溝北肩は南限築地心推定線から南へ2.7～4 mである。

遺物 出土遺物には、土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦などがある。大半は溝から出土し、時期は平安時代前期から後期である。

小結 今回の調査は、推定造酒司南西隅部の

11 平安宮中和院跡

経過 今回の発掘調査は、ビル建設工事に伴うもので、当地域は推定平安宮中和院南辺中央部にあたるため、調査を実施した。

調査地内に、南北6m、東西11mの長方形の調査区を設定し、適時拡張した。重機で盛土層などを掘削した。その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.3~0.4m)、第2層暗灰褐色泥砂層(近世包含層:約0.2m)、第3層茶褐色泥砂層(無遺物層:約0.1m)、第4層淡黄灰色泥土層(地山)である。検出遺構には井戸、土壙(土取穴)、柱穴があり、土壙は第3層上面で、柱穴は第4層上面で検出した。

土壙は調査区西半で検出した。埋土は暗茶灰色泥砂で、平安時代前期から江戸時代の遺物が出土した。時期は近世に属する。

柱穴は調査区東半で検出した。方形で一辺約0.6mである。散在し、建物としてはまともらなかった。時期は、平安時代に属すると推定できる。

遺物 出土遺物には、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦類、凝灰岩片などがある。大半が瓦類で、土壙から出土した。瓦類には、平安時代前期の緑釉軒平瓦・鴟尾、中期・後期の軒瓦などがある。

小結 今回の調査では、大半が江戸時代の土壙であるが、埋土中から多数の平安時代の瓦類が出土した。当調査

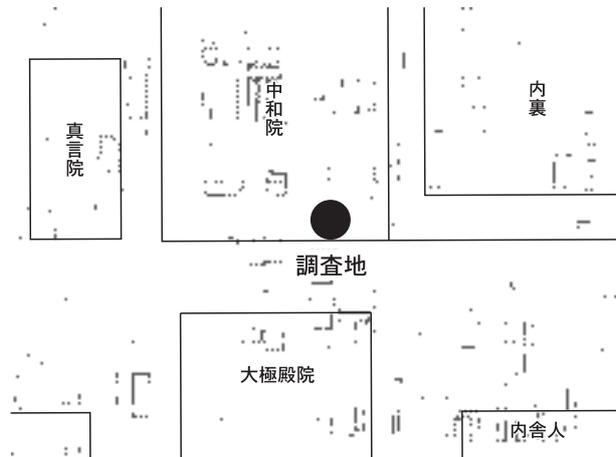


図42 調査位置図 (1 : 5,000)



図43 調査区配置図 (1 : 500)

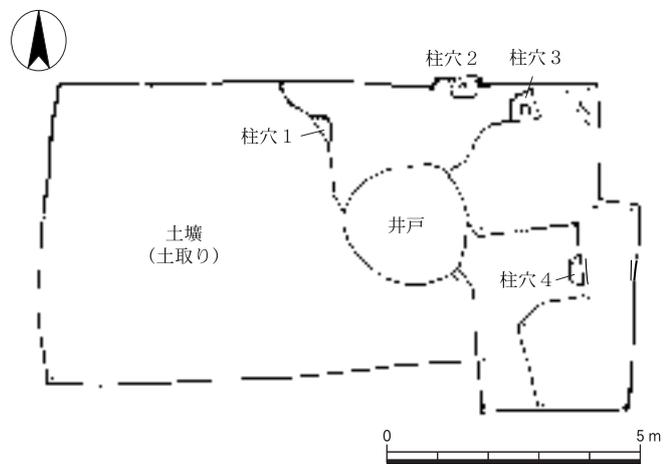


図44 遺構平面図 (1 : 150)

区南側の1974年度の調査でも緑釉瓦、凝灰岩が多量に出土しており、これらの瓦類が中和院で使用されたと推定できる。

『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告



図45 調査区全景（東から）

12 平安宮御井跡

経過 今回の発掘調査は、朱雀第六小学校校舎建設工事に伴うものである。当地は推定平安宮御井南半部（中務厨）および大炊御門大路の宮内延長路にあたることから、調査を実施した。

調査地内に、1区（南北22m×東西10m）、2区（南北10m×東西10m）の2箇所の調査区を設定した。盛土層などを重機で掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 基本層序は、現代盛土層が0.9～1.1mで、暗茶灰色泥土層が0.1～0.2m、それ以下に黄褐色粘質土・青灰色粘質・砂質土層などの湿地状堆積となる。湿地状堆積上面に瓦を含む茶褐色砂泥・茶灰色砂泥・暗黒灰色泥土層などが堆積する。検出した遺構には、溝、土取穴、井戸、瓦敷遺構などがある。

1区では、南部で南北溝、井戸、北側で土取穴を検出した。遺構の時期は、いずれも近世に属する。

2区では、全域で瓦敷遺構を検出し、東・西・南の調査区外に広がる。この遺構は、湿地状遺構の上面に細かく砕いた瓦片を約0.1mの厚さで敷き詰める。土層は、茶褐色砂泥層が0.1m、茶灰色砂泥層が0.15mである。その下層は湿地状堆積となる。茶褐色砂泥層・茶灰色砂泥層からは平安時代後期から鎌倉時代の土師器が少量、瓦が大量に出土した。

遺物 出土遺物は、165箱出土した。土師器、陶器、磁器、瓦などがある。大半は土取穴、瓦敷遺構から出土した瓦である。他に、

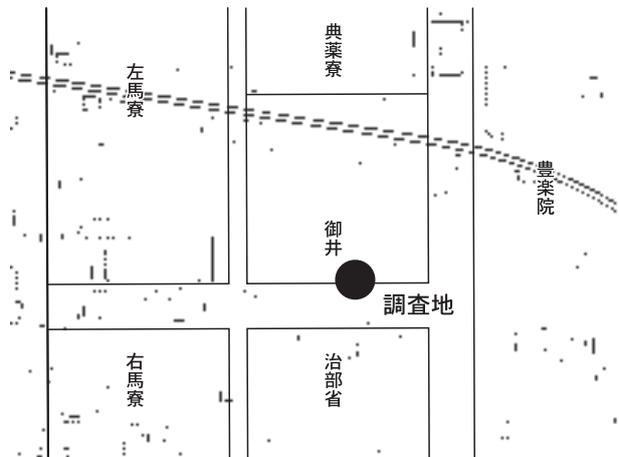


図46 調査位置図（1：5,000）

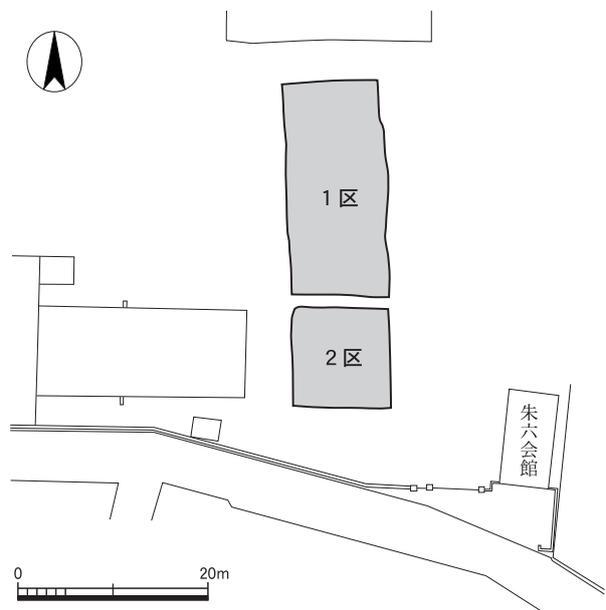
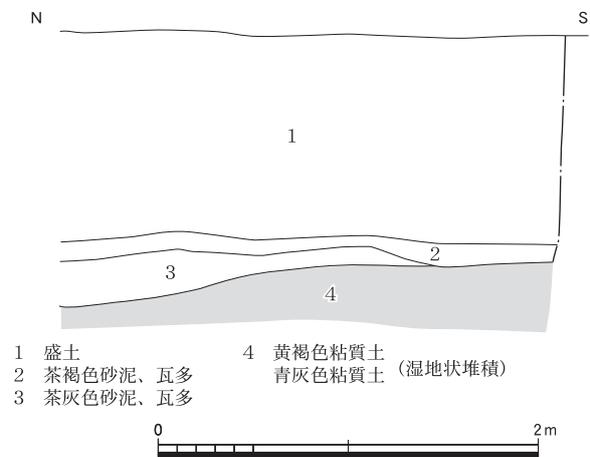


図47 調査区配置図（1：800）



- 1 盛土
- 2 茶褐色砂泥、瓦多
- 3 茶灰色砂泥、瓦多
- 4 黄褐色粘質土、青灰色粘質土（湿地状堆積）

図48 2区東壁断面図（1：40）

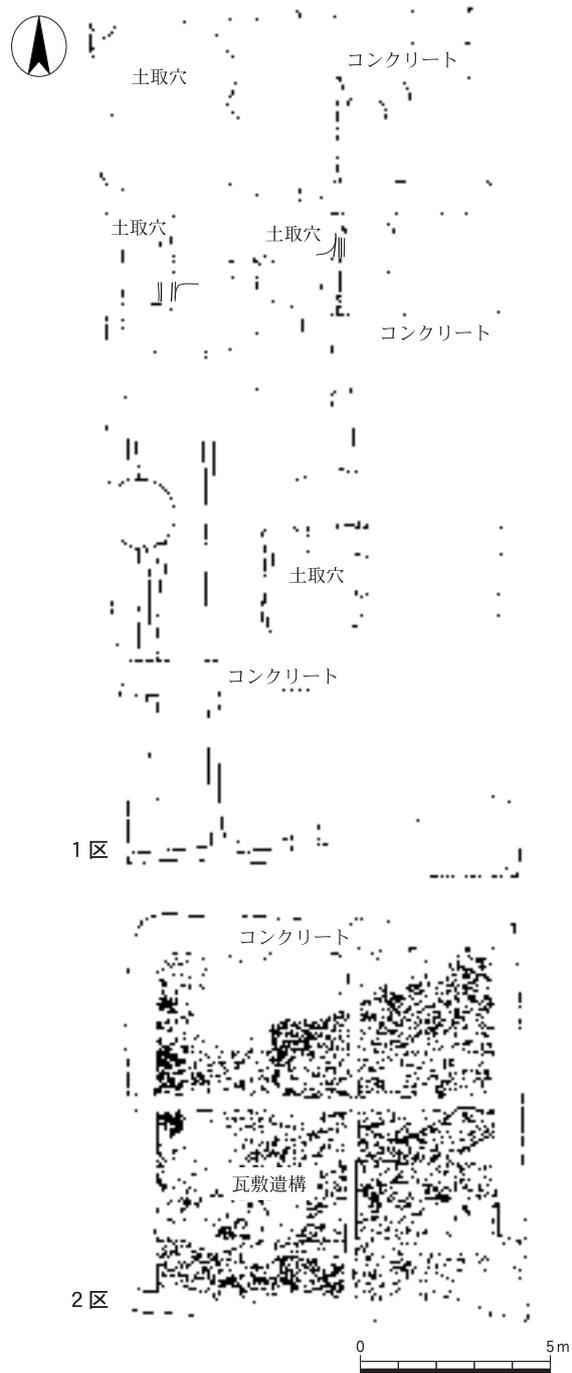


図49 遺構平面図 (1 : 200)

平安時代後期から鎌倉時代の土師器、近世の陶器・染付などがある。

小結 今回の調査では、御井・中務厨に関係する遺構は全く確認できなかった。ただ、当該地周辺は地下水位が浅く、土取穴底面の湧水の激しい状況から想定すると、平安時代でも有数の湧水地帯であったと考えられる。御井や北側の造酒司などの平安宮内における官衙配置を考える上で重要な手がかりとなろう。また、2区で検出した瓦敷遺構は大炊御門大路延長上にあたり、軟弱地を修復・整地したものと推定できる。

『平安宮 I』京都市埋蔵文化財研究所調査報告
第13冊 1995年報告

13 平安宮中務省跡 1

経過 今回の発掘調査は、事務所建設工事に伴うもので、当地域は推定平安宮中務省北西部内舎人にあたるため、調査を実施した。中務省3次調査である。

調査地内に、南北14m、東西4mの長方形の調査区を設定し、適時拡張した。重機で盛土層などを掘削した。その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（0.2～0.25m）、第2層暗灰色泥砂層（0.1～0.15m）、第3層黄灰色砂泥層（0.1～0.25m）、第4層暗灰色砂泥層、第5層黄褐色灰色泥砂層（地山）である。検出遺構には基壇、建物、溝、瓦溜、土壙などがある。第5層上面で上層・下層の2面の遺構を検出した。

上層では、調査区東側で基壇西辺を検出した。規模は南北約8.5mで東に継続し、高さは0.3mで、上層黄灰色細砂、下層黄褐色砂泥である。上面では礎石据付跡を3箇所検出した。掘形は径1.1～1.3m、深さ約0.3～0.4mで、底部に一辺0.3～0.4mの根石を据える。据付跡間隔は3.3～3.4mである。基壇南側ではL字形の雨落溝（幅約0.2m）を検出した。また、基壇の周辺には瓦溜があり、大量の瓦と平安時代後期の土器が出土した。遺構の時期は、平安時代中期から後期に属する。

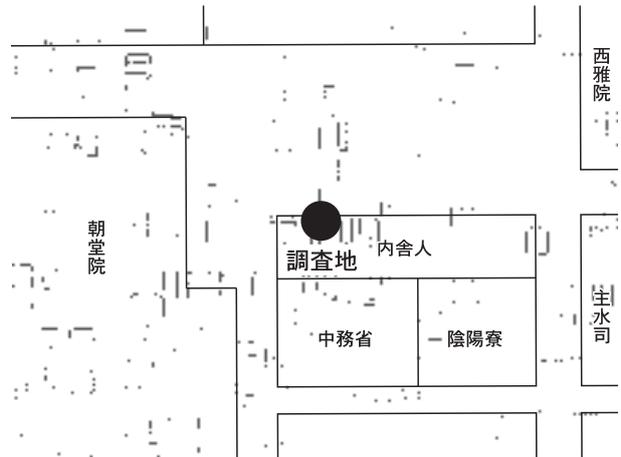


図50 調査位置図（1：5,000）

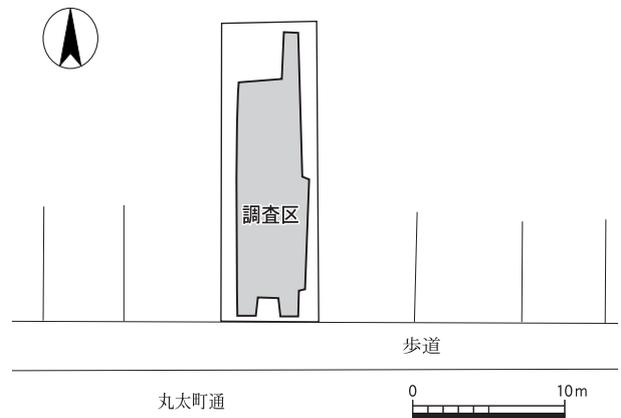


図51 調査区配置図（1：500）

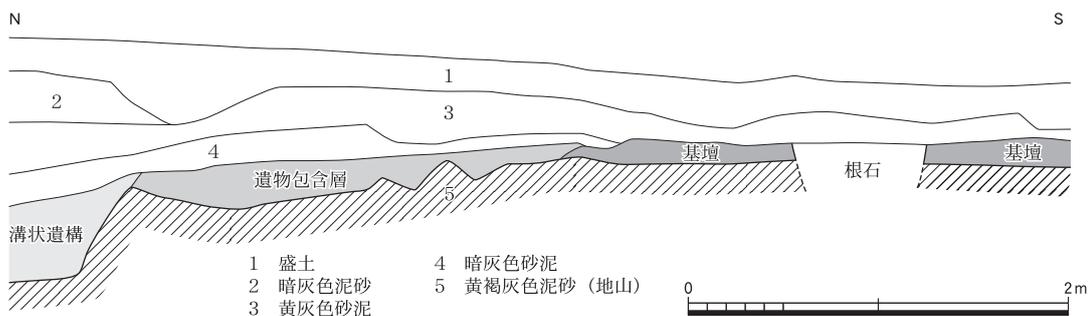


図52 東壁断面図（1：40）

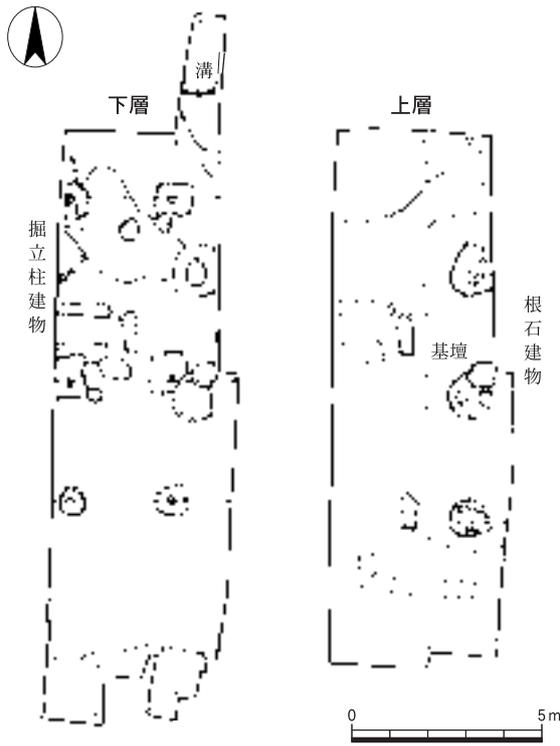


図53 遺構平面図（1：200）

下層では、調査区中央で掘立柱建物を検出した。建物は東西棟で南側に庇が付き、東西両側に続く。桁行2.7m、梁間1間2.4mで、庇出は3.3mである。柱掘形は身舎が一辺0.8～1.1mの隅丸方形、深さ0.5mで、庇が0.7～0.8mの円形、深さ0.4mである。調査区北端では東西溝を検出し、北に続く。深さは約1mで、埋土は黄灰色粘土層と砂層の互層で、下層から平安時代前期の遺物が出土した。遺構の時期は、いずれも平安時代前期に属する。

遺物 出土遺物は、60箱出土した。遺物には土師器、須恵器、黒色土器、陶器、磁器、瓦類などがある。大半が瓦類で、瓦溜から出土し、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦があり、平安時代中期から後期である。東西溝には上層に瓦が多く堆積し、下層に土器が集中する。

いずれも平安時代前期に属する。

小結 今回の調査では、平安時代前期の掘立柱建物と、その上層で基壇を持つ礎石建物を検出し、貴重な発見となった。また、東西溝は推定中務省北限築地内溝の位置にあたり、当地域の配置復元の定点となった。

『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

14 平安宮中務省跡 2

経過 今回の発掘調査は、民家新築工事に伴うもので、当地域は推定平安宮中務省北部内舎人にあたるため、調査を実施した。中務省4次調査である。

調査地内に、南北11m、東西3mの長方形の調査区を設定し、適時拡張した。機械で盛土層などを掘削した。その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.1~0.3m)、第2層茶灰色泥砂層(平安時代後期包含層:0.1~0.2m)、第3層茶灰色砂泥層(平安時代中期包含層:0.2m)、第4層茶褐色泥砂層(平安時代前期包含層:0.2~0.3m)、第5層黄灰色砂泥層(地山)である。第2層上面で第1面の遺構、第4層上面で第2面の遺構を検出した。検出遺構には、土壇、溝、建物、柱穴、井戸などがある。

第1面では、調査区全域で土壇を多数検出した。形状は不定形で、一辺約1.8~2.2m程度で、深さは深いもので1.15mある。埋土中に瓦や河原石を多く含むものもある。土壇18からは「内舎人」と墨書された土器が出土した。調査区中央部で井戸、北部で東西溝を検出した。遺構の時期は、平安時代中期から後期に属する。

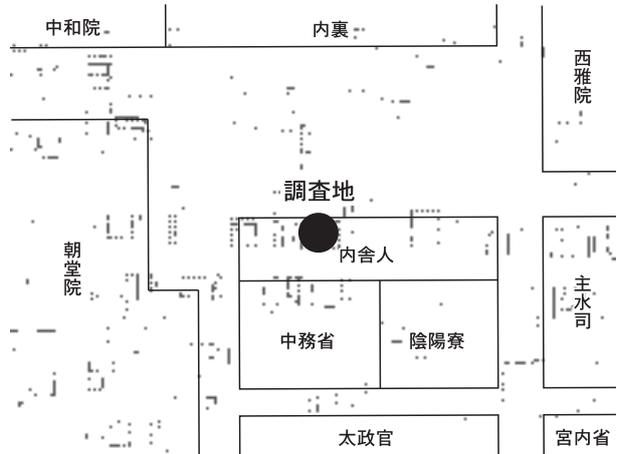


図54 調査位置図 (1:5,000)

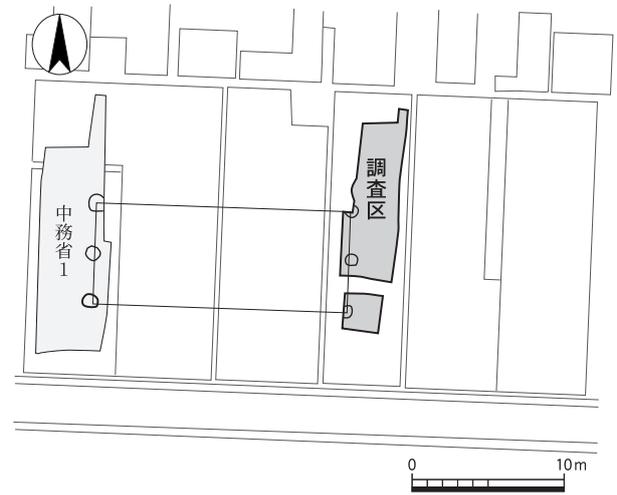


図55 調査区配置図 (1:500)

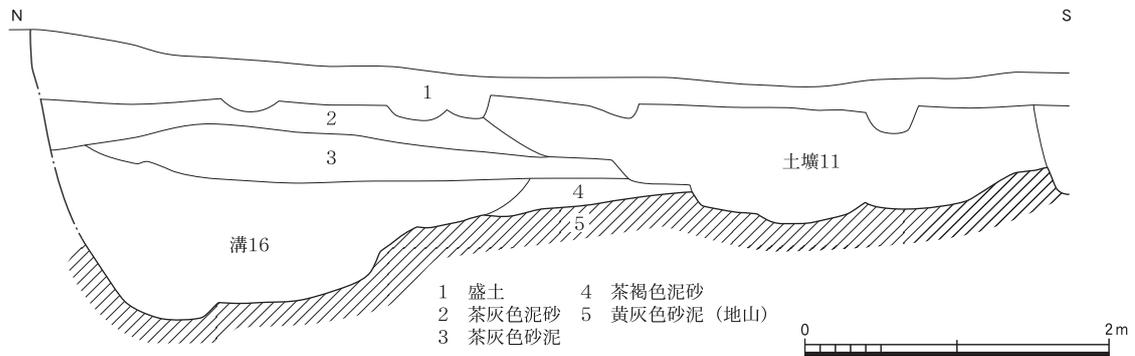


図56 東壁断面図 (1:50)

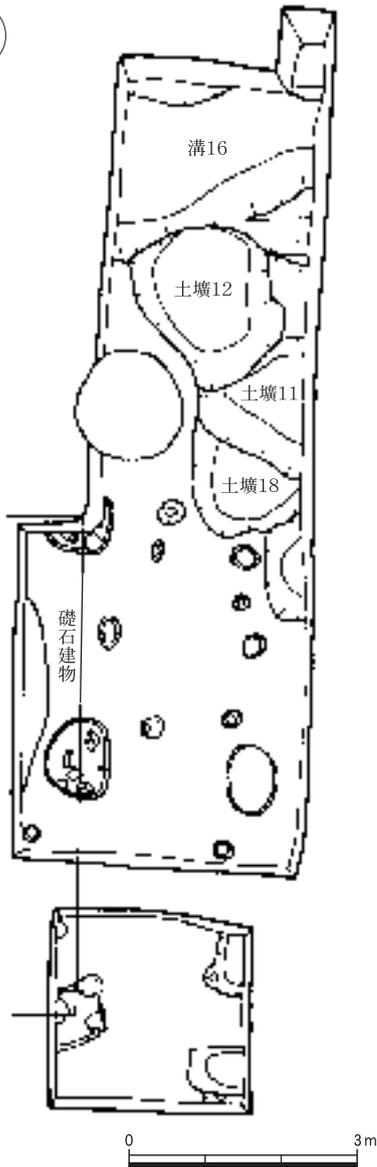


図57 遺構平面図（1：100）

第2面では、調査区南西部、南拡張区で建物礎石据付跡東端を3箇所検出し、西側に連続する。掘形は楕円形で、径約0.8～1.1m、深さ約0.3～0.4m、底部に一辺0.3～0.4mの根石を据える。据付跡間隔は3.3mである。上面は削平を受け、基壇は確認していない。調査区南西部では柱穴などを検出したが、建物としてはまとまらなかった。調査区北端では東西溝16を検出した。深さは約1mで、埋土は暗茶褐色砂泥と砂礫互層で、下層から平安時代前期の遺物が出土した。遺構の時期は、平安時代前期から中期に属する。また、調査区北半部で土壇を3基検出し、調査区外に広がるが、1基は一辺1.9～1.2m、深さ約0.2mである。時期は古墳時代に属する。

遺物 出土遺物は、40箱出土した。遺物には土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦類、鉄製品などがある。大半が瓦溜から出土した瓦類で、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・■があり、平安時代前期から後期のものである。同時期の土器類も少量出土した。この内墨書土器は須恵器杯蓋外面に「内舎人」と墨書し、内面に朱が残存する。

小結 今回の調査で検出した礎石建物は、1979年度3次調査（本報告13）検出建物の東妻と推定できる。また、東西溝は同調査で検出した中務省北限築地内溝の延長に相当する。

また、墨書土器は当該地が内舎人であることを補強する資料で、宮内における官衙名を墨書した土器の初例にあたる。

『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 1995年報告



図58 墨書土器

15 平安宮太政官跡

経過 今回の発掘調査は、住宅建築工事に伴うもので、当地域は推定平安宮太政官北東部朝所にあたるため、調査を実施した。太政官4次調査である。

調査地内に、幅約2.5m、東西に13.5mの逆L字形の調査区を設定し、適時拡張した。機械で盛土層を掘削した。その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.2~0.3m)、第2層茶褐色粘質土・黄色砂礫土層(地山)である。第2層上面で2時期の遺構を検出した。検出遺構には土壇、柱穴、溝がある。

1期の遺構は、調査区東部で土壇SK3を検出した。楕円形で径0.8m、深さ0.3mである。近接して径約0.3mの柱穴を小数検出した。調査区南西部では、東西溝SD4を検出した。底部に丸杭の痕跡があり、柵列の布掘溝と考えられる。遺構の時期は、いずれも近世に属する。

2期の遺構は、調査区東部で土壇SK1を検出した。不定形で一辺1.2m、深さ0.3mである。調査区南西部では、東西溝SD5を検出した。東西に続く。断面U字形で幅2.1m、深さ0.5mで、底部は平坦で護岸施設はない。埋土は上層が褐色

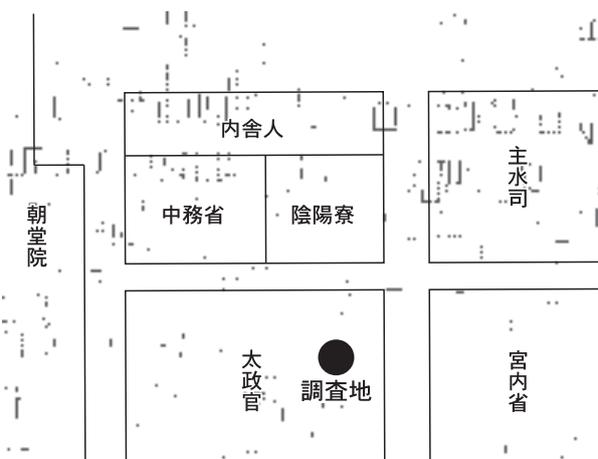


図59 調査位置図 (1 : 5,000)

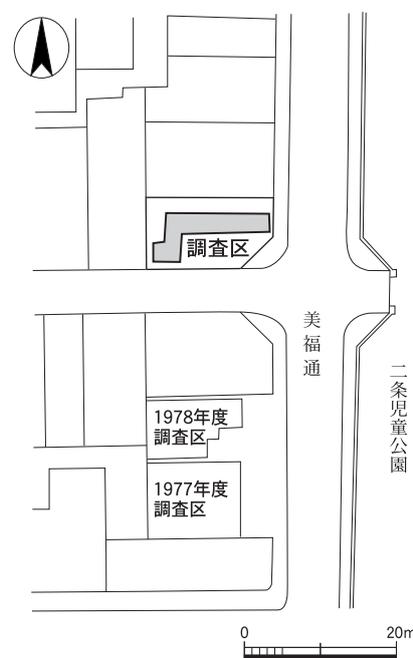


図60 調査区配置図 (1 : 1,000)

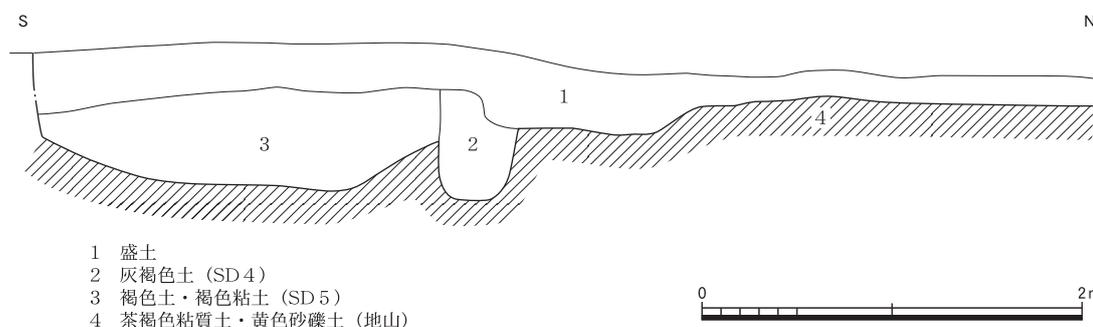


図61 西壁断面図 (1 : 40)

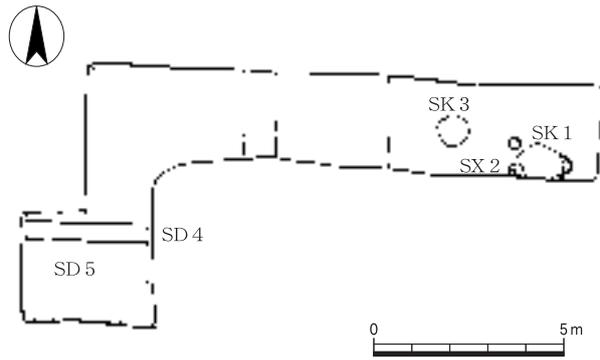


図62 遺構平面図（1：200）

土、下層は褐色粘土で平安時代中期の土器類・瓦を含み、下層の方が多い。遺構の時期は、土壙SK 1が平安時代後期、溝SD 5が平安時代中期に属する。

遺物 遺物整理箱で5箱出土した。遺物には土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦類などがある。溝SD 5からは土師器皿、須恵器杯、緑釉陶器、磁器、軒丸瓦・丸瓦・平瓦などが出土した。

小結 今回の調査地は、上面がかなり削平を受け遺構の残存状況は悪い。しかし、東西溝は推定太政官の南北の中心に近い場所に位置し、官衙内の区画溝と推定できる。

『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告



図63 SD 5（東から）

16 平安宮大炊寮跡

経過 今回の発掘調査は、住宅建築工事に伴うもので、当地域は推定平安宮大炊寮北東部にあたるため、調査を実施した。

調査では、南北8.8m、東西3mの長方形の調査区を設定し、適時拡張した。機械で盛土層を掘削した。その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.3~0.7m)、第2層黒灰色泥砂層(近世包含層:0.2~0.3m)である。調査区南半では、その下層は第5層黄灰色泥土層(地山)であるが、北半では、第3層暗灰褐色泥砂層(平安時代包含層:約0.2m)、第4層褐灰色砂泥層(平安時代包含層:約0.15m)、第5層黄灰色泥土層(地山)である。第3層・第5層上面で遺構を検出した。

調査区南端で東西溝の北肩部を検出した。深さ0.3mである。埋土は暗灰褐色泥砂で、底面近くには礫が多く含まれる。調査区全域で土壌を多数検出した。不定形のものも多く、規模は様々である。第5層まで掘り込まれたものと、第3層上面にとどまるものがある。土壌埋土は淡灰色泥砂・灰褐色砂泥で、埋土中に土師器、須恵器、

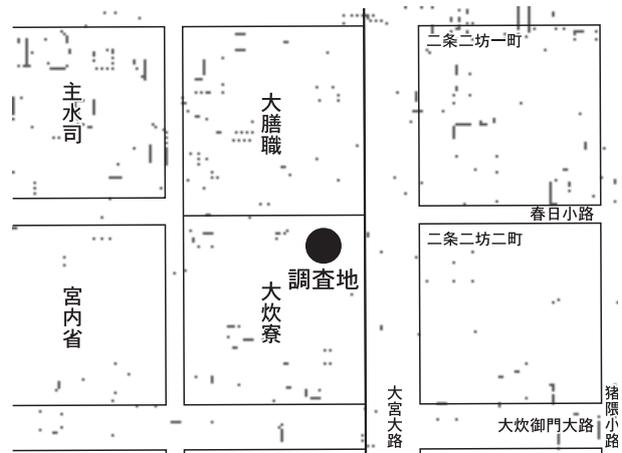


図64 調査位置図 (1:5,000)

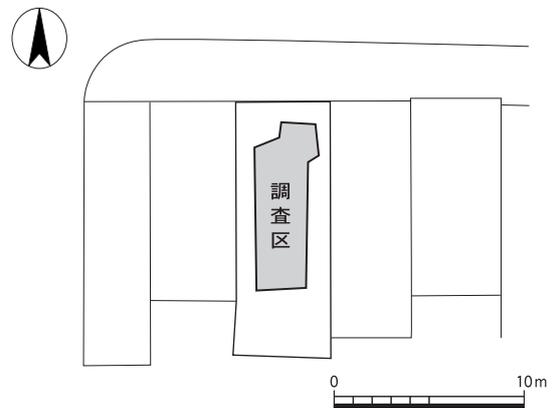


図65 調査区配置図 (1:400)

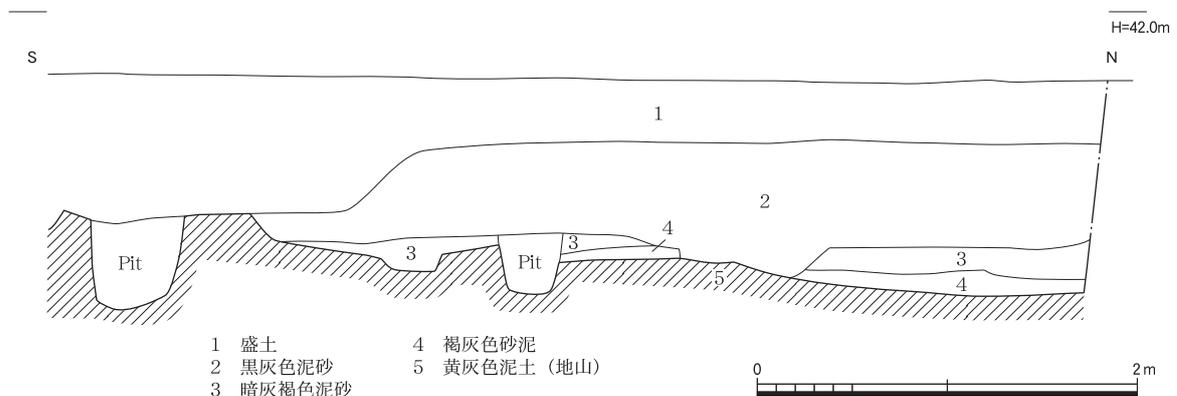


図66 西壁断面図 (1:40)

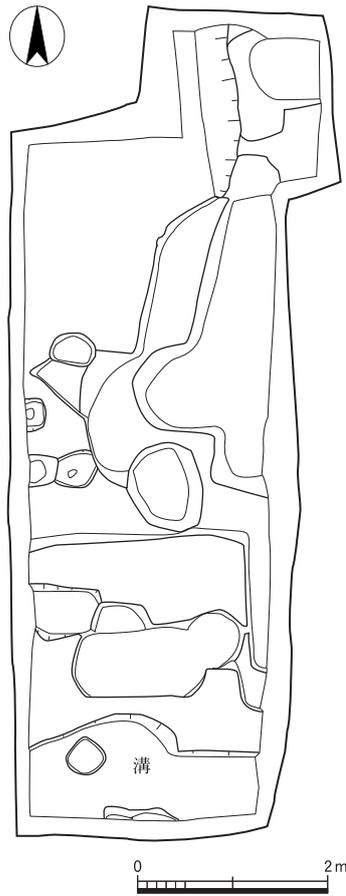


図67 遺構平面図 (1 : 80)

緑釉陶器と近世の陶器、磁器などが含まれる。調査区中央部で柱穴を検出した。方形と円形のものがあり、第3層・第5層を掘り込む。遺構の時期はいずれも近世に属する。

遺物 出土遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、陶器、磁器、瓦類、銅製**時**帯などがある。平安時代の遺物は主として第3層・第4層から出土し、近世の遺構にも含まれる。近世の遺物は各遺構から出土した。

小結 今回の調査では、近世の遺構を主に検出し、京都所司代に関係した遺構と推定できる。ただ、一部で平安時代の遺物包含層が残存しており、付近に当該期の遺構の存在が推定できる。

『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

17 平安京左京北辺三坊四町 (図版2)

経過 今回の発掘調査は、上京中学校校舎建築工事に伴うもので、当地域は、推定平安京左京北辺三坊四町にあたるため、調査を実施した。

調査では、南北11m、東西30mの長方形の調査区を設定し、機械により現代・近代層(地表下約1.5m)を掘削し、その後手掘りで攪乱を除いた後、調査を実施した。平面実測・写真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.2~0.4m)、第2層灰褐色砂泥層(近現代層:0.6m)、第3層暗灰褐色砂泥層(近世包含層:0.5m)、第4層灰褐色砂泥を中心とした土層(0.3~0.6m)、第5層暗茶褐色砂泥層(平安時代包含層:約0.3m)、第6層暗褐色泥砂層(古墳時代後期包含層:約0.2m)、第7層黄褐色泥砂層(古墳時代包含層:約0.15m)、第8層暗茶褐色泥土層(弥生時代包含層:約0.3m)、第9層黄褐色泥土(地山)である。第4層上面で第1面、第5層上面で第2面、第6層上面で第3面の遺構を検出した。

第1面では、土壙、井戸、石室、柱穴、礎石、溝などを検出した。土壙が最も多く、全域で検出し、形状・規模は多様である。井戸もほぼ全域に見られ、いずれも円形石組みである。調査区南西部では石室(SK6・42など)を検出した。柱穴・礎石は全域で検出したが、建物としてはまとまらない。調査区東部で大規模な南北堀SD67を検出した。断面逆台形で、底部はほぼ平坦である。規模は、

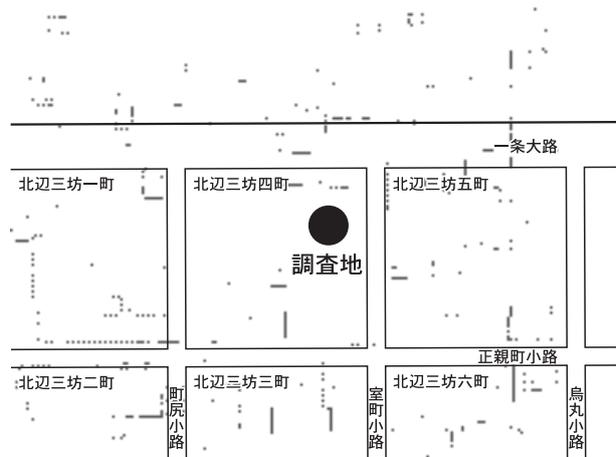


図68 調査位置図 (1 : 5,000)

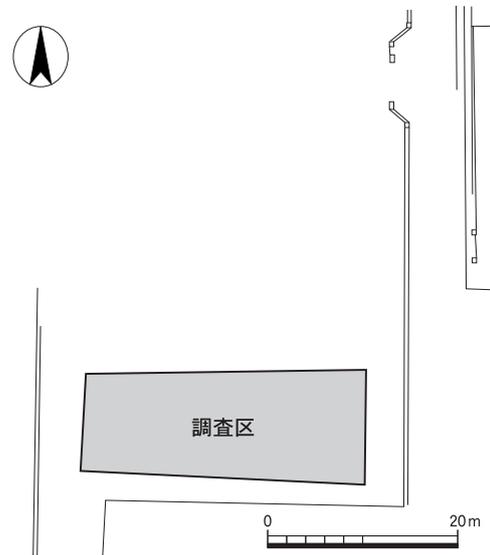


図69 調査区配置図 (1 : 800)

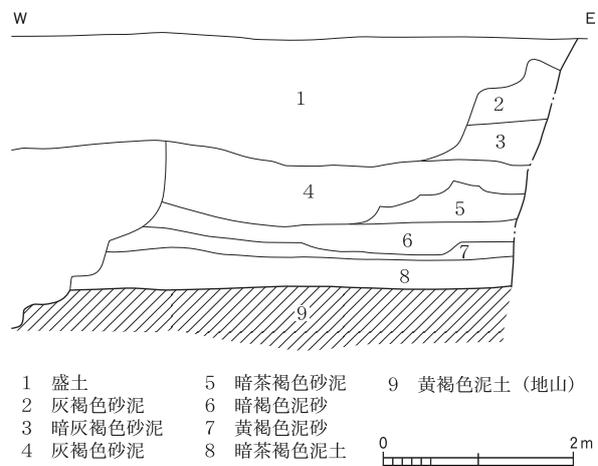
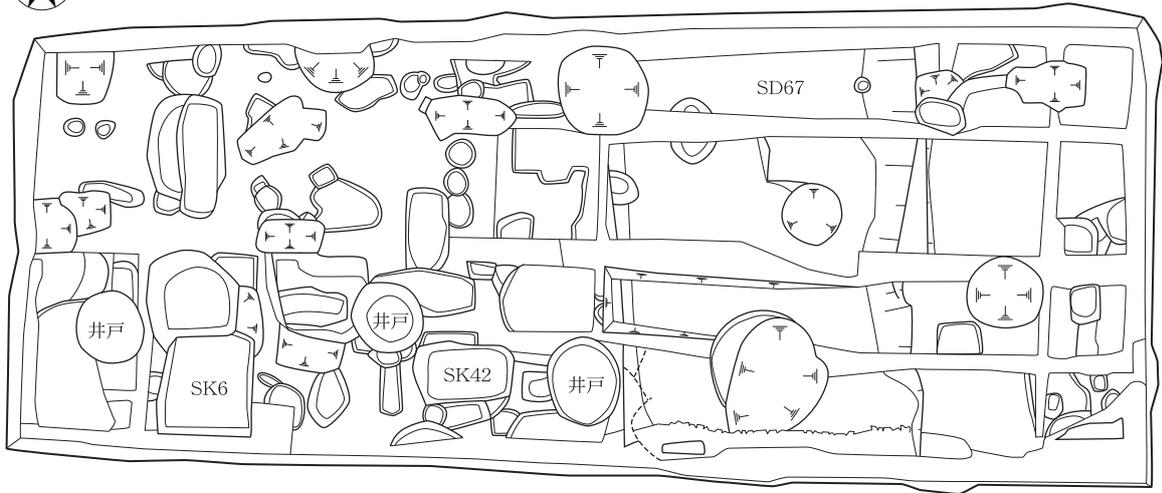


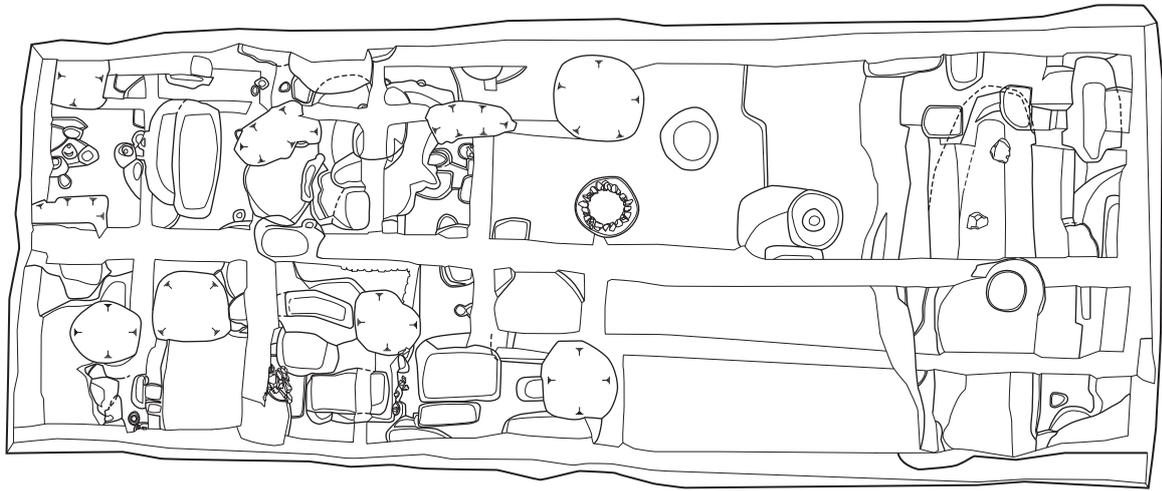
図70 断面図 (1 : 80)



第 1 面



第 2 面



第 3 面

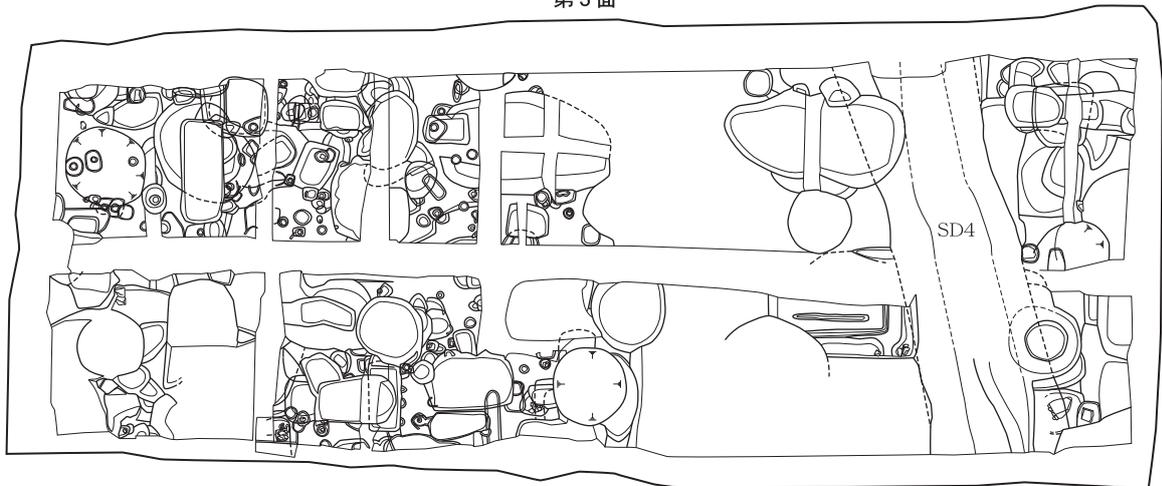


图71 遺構平面图 (1 : 200)

幅約8m、深さ約1.5mである。埋土は、上層茶灰色砂泥・下層暗茶褐色砂泥で、いずれも土器類、瓦類が大量に出土した。遺構の時期は、桃山時代から江戸時代に属する。

第2面では、土壙、井戸、柱穴などを検出した。土壙は調査区西側・東側で多数検出した。形状・規模は多様である。井戸は全域で数基検出した。いずれも円形石組みである。柱穴は主に調査区西部で検出したが、建物としてはまとまらない。遺構の時期は、鎌倉時代から室町時代に属する。

第3面では、土壙、井戸、柱穴、溝などを検出した。土壙は調査区西側・東側で多数検出した。形状・規模は多様である。井戸は調査区西側・東側で少数検出した。素掘りのものが多い。柱穴は調査区西部で多数検出したが、建物としてはまとまらない。調査区東部で斜方向の溝SD4を検出した。断面U字形で、幅約3m、深さ約0.4mである。埋土は暗茶灰色砂泥で土器類が出土した。遺構の時期は、平安時代から鎌倉時代に属する。また、調査区南辺で平安時代後期の整地層（厚さ0.02～0.03m）を一部検出した。

第3面より下層では弥生時代から古墳時代の包含層を検出した。遺構には古墳時代の柱穴が見られる。

遺物 遺物整理箱で169箱出土した。遺物には土器類、瓦類、石製品、木製品、金属製品などがある。時期は、弥生時代から近世にわたるが、桃山時代から江戸時代の遺物が大半を占め、他の時代の遺物は少ない。

弥生時代の遺物には弥生土器、石包丁などがある。土器は小片で少量である。古墳時代の遺物には土師器、須恵器がある。いずれも包含層などから出土した。

平安時代の遺物には、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、軒瓦・丸瓦・平瓦などがあり、土壙・溝SD4などから出土した。

鎌倉時代から室町時代の遺物には、瓦器、陶器、磁器、瓦、銭貨などがあり、土壙・井戸などから多く出土した。

桃山時代から江戸時代の遺物には、陶器、磁器、瓦、銭貨、鉄釘、漆器などがある。瓦には金箔軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦などもある。遺物は各遺構から出土したが、特に堀SD67・石室SK6からはまとまって出土した。

小結 今回の調査では、弥生時代から近世の遺物・遺構を多数検出し、当地域の変遷を知る上で貴重な資料となった。堀SD67は、掘削時期は明らかでないが、聚楽第が破却された文禄4年(1595)以前に造られたと推定できる。埋土から金箔瓦が大量に出土したことから、近辺に聚楽第(1585年造営)に伴う大名屋敷の存在をうかがわせる。堀は室町小路に沿っており、当該期の宅地を囲む「堀」と呼ばれる施設と推定できる。

18 平安京左京三条三坊五町（図版3）

経過 発掘調査は、千吉社屋建築工事に伴うもので、当地域は、推定平安京左京三条三坊五町にあたる。京都市文化観光局文化財保護課が試掘調査を行い、遺構が残存しているため、調査を実施した。

調査では、旧社屋跡地を避け、敷地北部に南北8m、東西23m、幅1.5mのL字形の調査区を設定し、機械により現代・近代層（地表下約1m）を掘削し、その後手掘りで攪乱を除いた後、調査を実施した。平面実測・写

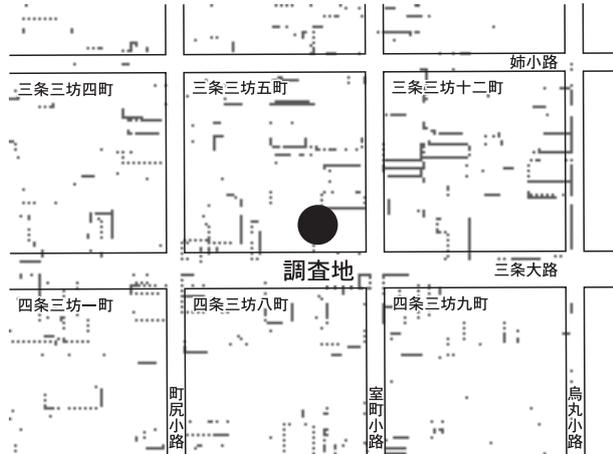


図72 調査位置図（1：5,000）

真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層近現代層（約1m）、第2層灰色砂礫層（0.25m）、第3層茶褐色土を中心とした層（近世層：約0.5m）、第4層茶褐色土を中心とした土層（0.25～0.5m）、第5層黒褐色土層（中世包含層：約0.7m）、第6層暗灰色砂礫層（地山）である。A区では第5層上面で第1面、第6層上面で第2面の遺構を検出した。B・C区では第6層上面で遺構を検出した。

A区では、第1面で東西方向の石組み溝、暗渠を検出した。暗渠は丸瓦を上下に組み合わせる。遺構の時期は、中世末から近世に属する。

第2面では、東端で南北溝1を検出した。西肩部を検出しただけで、深さは0.5m以上である。埋土は黒灰色砂泥で、土器類・木製品が出土した。西側で土壌を多数検出した。形状・規模は多様である。遺構の時期は、鎌倉時代から室町時代に属する。

B・C区では、C区北部で東西溝2を検出した。B区中央で井戸3を検出した。掘形径1.5m、内径0.3～0.4mの円形石組み井戸である。遺構の時期は、中世末から近世に属する。全域で土壌を検出した。形状・規模は多様である。B区西部の土壌4からは大量の土師器、陶磁器が、C区南部の土壌5からは人頭大の礫が出土した。遺構の時期

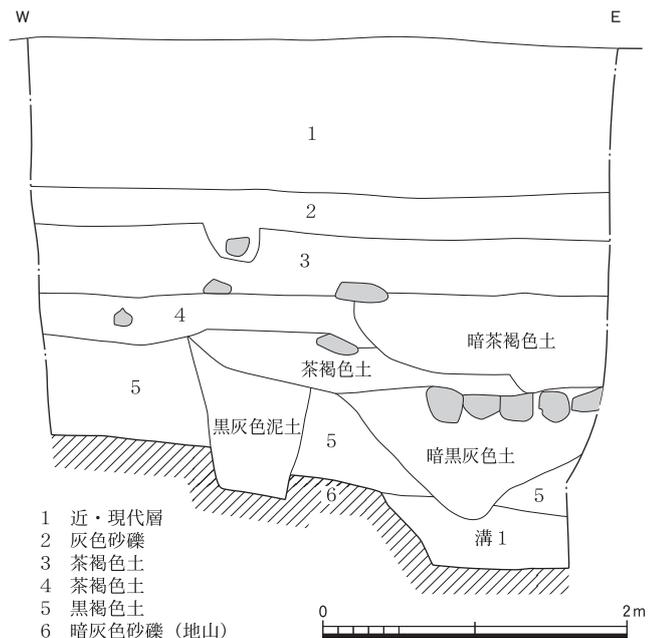


図73 北壁断面図（1：50）

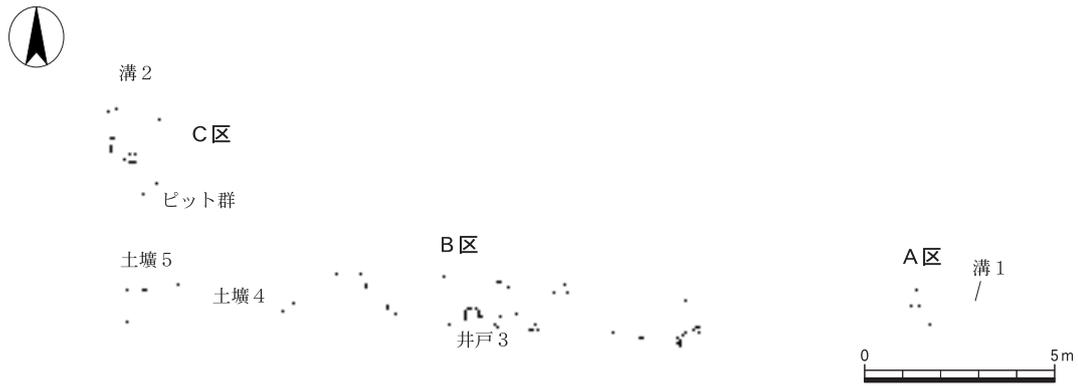


図74 遺構平面図（1：200）

は、室町時代に属する。C区中央部で柱穴を3基検出した。円形で径0.3~0.4mである。遺構の時期は、平安時代後期に属する。

遺物 遺物整理箱で16箱出土した。遺物には土器類、瓦類、金属製品などがある。時期は、平安時代から近世にわたるが、室町時代から江戸時代の遺物が大半を占め、他の時代の遺物は少ない。

平安時代の遺物には、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器などがある。鎌倉時代から室町時代の遺物には、土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦などがある。土壙を中心として多数出土し、土壙4からは室町時代の土師器、瓦器などがまとまって出土した。桃山時代から江戸時代の遺物には、土師器、陶器、磁器、瓦、銭貨などがある。遺物は各遺構から多数出土した。

小結 今回の調査では、弥生時代から近世の遺物・遺構を多数検出し、当地域の変遷を知る上で貴重な資料となった。特に溝1は、周辺の状況から室町小路の西側溝と推定できる。

19 平安京左京三条二～四坊（図版4）

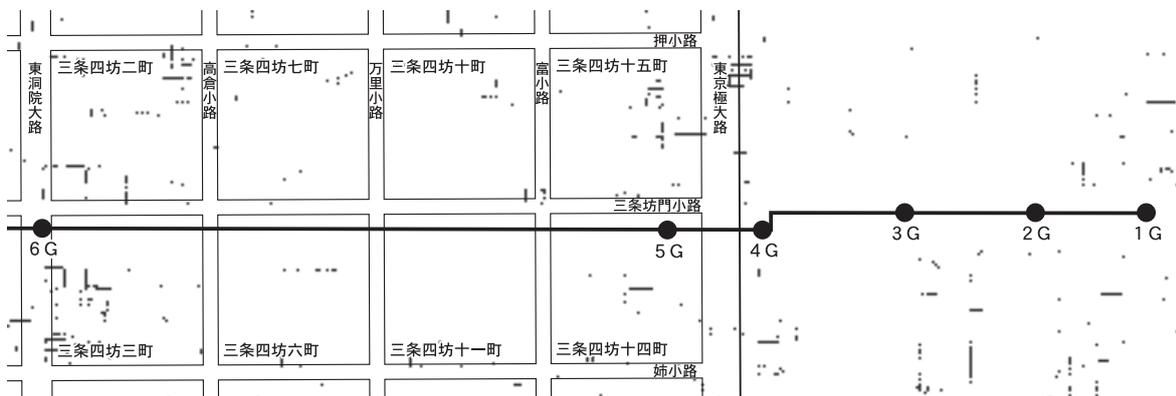


図75 調査位置図東半（1：6,000）

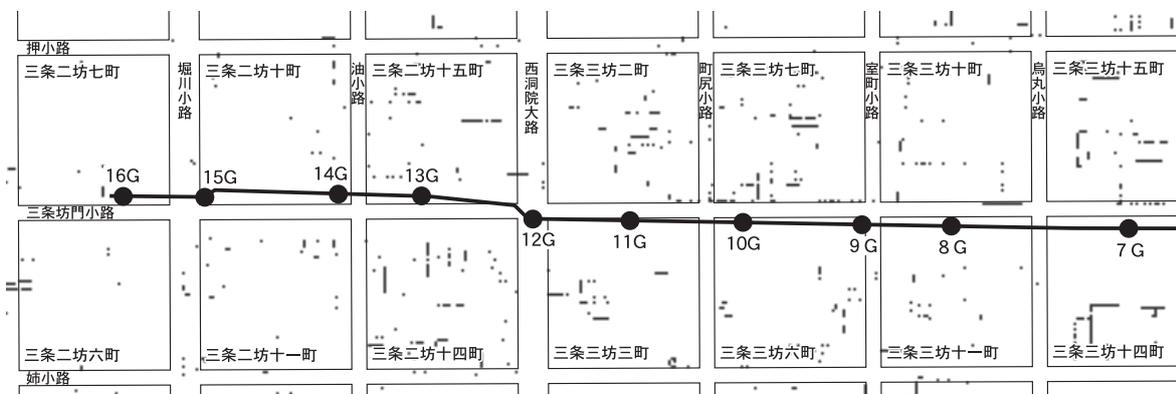


図76 調査位置図西半（1：6,000）

経過 今回の発掘調査は、木屋町通から堀川通までの御池通北側における、ガス・上下水道設置に伴うもので、平安京左京三条二～四坊にあたるため調査を実施した。竪坑部分などについては発掘調査を行い、その他の場所は立会調査を実施した。調査地は、左京東側（1～4 G）、三条四坊十四町（5 G）、東洞院大路（6 G）、三条三坊十四町（7 G）、三条三坊十一町（8 G）、三条三坊六町（9・10G）、三条三坊三町（11G）、西洞院大路（12G）、三条二坊十五町（13G）、三条二坊十町（14・15G）、三条二坊七町（16G）にあたる。

調査では、道路北側に長さ約10m、幅約5mの長方形または5m四方のグリッド（G）を設定して、機械により現代・近代層を掘削した。その後手掘りで調査を実施し、平面実測・写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、各グリッドによって異なるが、残存状況の良かった8 Gでは、第1層現代整地層（約1m）、第2層近世堆積層（約0.9m）、第3層茶灰色砂泥を中心とした層（近世以降包含層：0.1m）、第4層黄褐色砂泥を中心とした層（0.4m）、第5

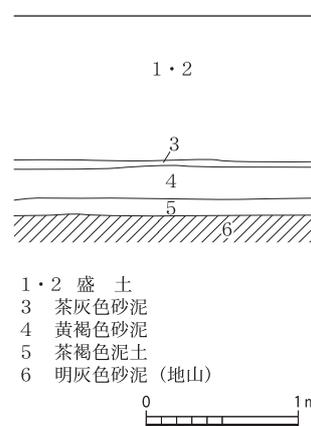


図77 8G基本層序（1：50）

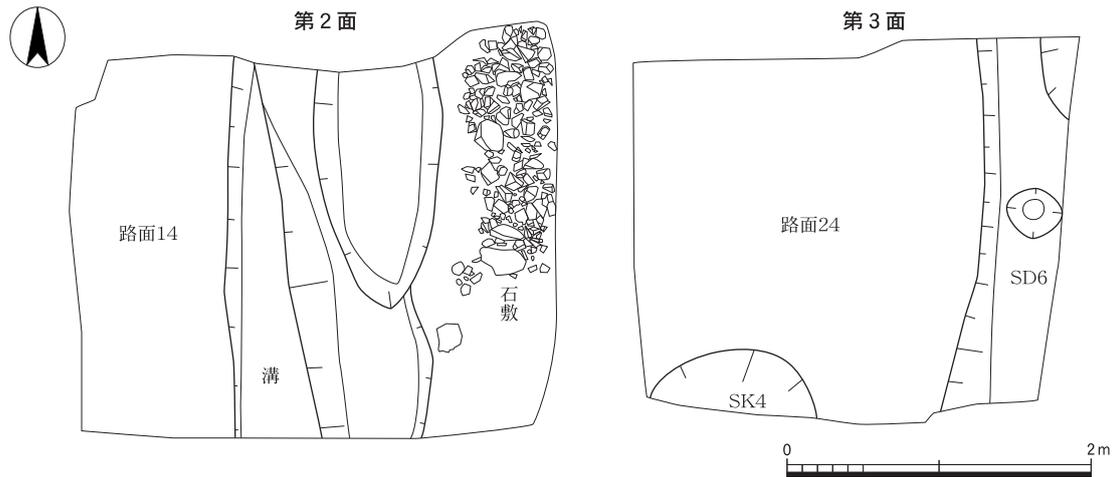


図78 6G遺構平面図 (1 : 50)

層茶褐色泥土層 (0.2m)、第6層明灰色砂泥層 (地山) である。第3層上面で第1面、第4層上面で第2面、第5層上面で第3面、第6層上面で第4面の遺構を検出した。

1 Gでは、地表から約2.5m掘り下げるが、全て砂礫層の堆積で、遺構は検出できなかった。

2 Gでは、調査区西側で落込みを検出した。時期は中世に属する。その下層から鎌倉時代から室町時代の包含層を確認した。

3 Gでは、調査区東側で落込みを検出した。時期は中世に属する。その下層から鎌倉時代から室町時代の包含層を確認した。

4 Gでは、第1面調査区全域で柱穴、土壌を検出した。遺構の時期は近世に属する。

5 Gでは、第1面調査区全域で小礎石・柱穴、南側で土壌を検出した。礎石・柱穴は建物としてはまともらなかった。遺構の時期は桃山時代から近世に属する。第2面では調査区全域で土壌、柱穴、中央部で東西溝を検出した。時期は鎌倉時代から室町時代に属する。第3面では調査区西側で集石遺構、甕据え付け土壌を検出した。時期は中世に属する。第4面では、調査区東側で井戸、土壌を検出し、西側では大規模な落込みSX57を検出した。時期は平安時代から鎌倉時代に属する。

6 Gでは、調査区中央で南北石組溝を検出し、その西側は路面が重複する。路面1から路面8までは近世に属する。第1面では調査区中央で南北溝、その西側で路面 (路面9) を検出した。室町時代頃に属する。第2面では調査区中央で南北溝、その西側で路面 (路面14)、東側で石敷を検出した。鎌倉時代から室町時代に属する。第3面では調査区東端で南北溝SD6、その西側で路面 (路面24) を検出し、南部で土壌などを検出した。鎌倉時代から室町時代

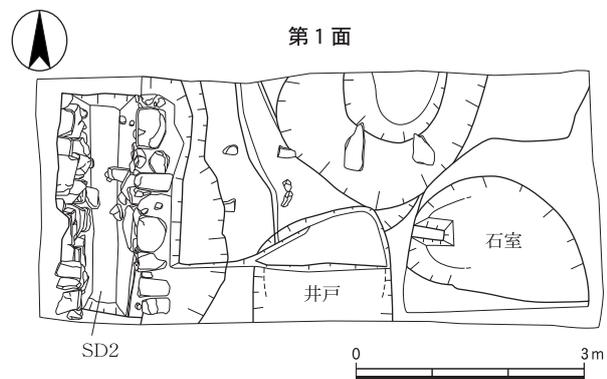


図79 7G遺構平面図 (1 : 100)

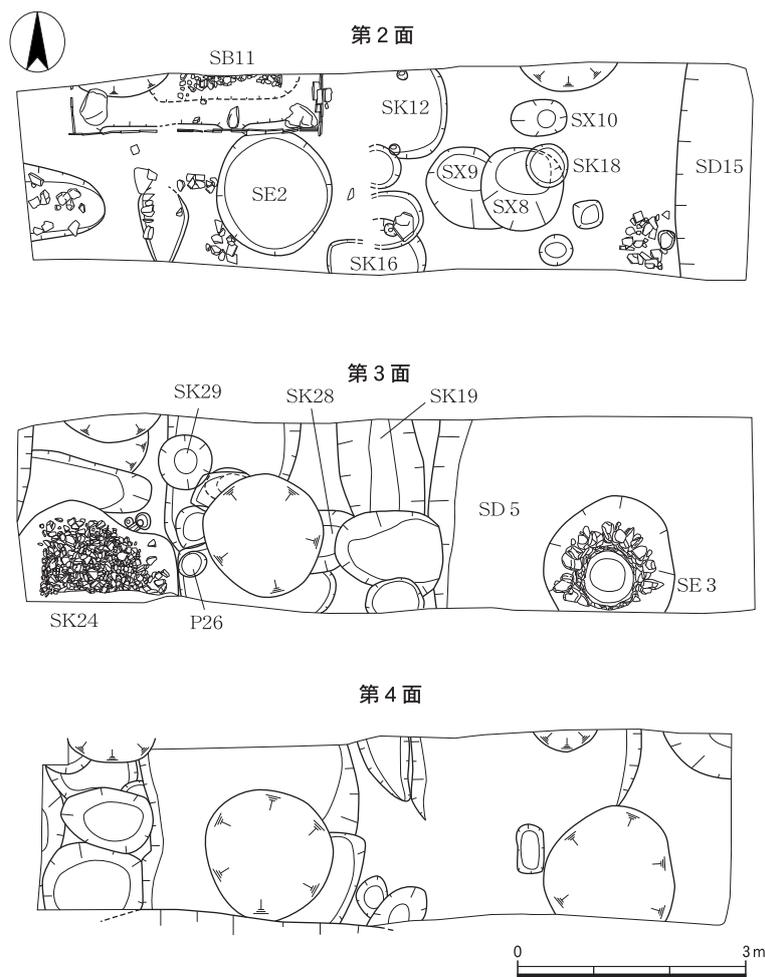


図80 8G遺構平面図（1：100）

した。北西部で建物SB11を検出した。礎石は東西3間（間隔0.9m）で、中央に小石を敷き、基壇は東西幅3.37mで、化粧は平瓦を立てて埋める。東端部で大規模な南北溝SD15を検出した。時期は桃山時代から近世である。第3面では調査区西側で土壌、柱穴を多数検出した。南西部の土壌には石が詰まる。東部では南北溝SD5を検出した。時期は桃山時代頃である。第4面では調査区全域で土壌、柱穴などを検出した。

9Gでは、第1面調査区東側で井戸、西側・南側で土壌、中央部で東西礎石列、その南側で東西瓦列を検出した。時期は近世に属する。第2面では調査区全域で土壌、柱穴、西側で井戸、北側で落込みSX6を検出した。時期は中世に属する。

10Gでは、調査区全域で土壌、落込みを検出した。時期は近世に属する。

11Gでは、第1面調査区全域で井戸、土壌、柱穴を検出した。時期は近世に属する。第2面では調査区西側・中央部で井戸、土壌を検出した。第3面では調査区西側が凹み、底面で集石遺構、土壌を検出した。中央東側では南北溝SD50、東部では落込みSX47を検出した。時期は中世に属する。第4面では調査区西側で落込み、斜行溝、土壌、東側で土壌を検出した。

12Gでは、第1面調査区全域で井戸、土壌、柱穴を多数検出した。土壌は不定形のものが多く、規模も様々である。また、全域で集石・石敷遺構を検出した。時期は近世に属する。第1面下層

に属する。路面は東洞院大路、各溝はその東側溝と推定できる。

7Gでは、第1面調査区東側で石室、中央から東側で土壌、井戸、西端で南北石組溝SD2を検出した。遺構の時期はいずれも近世に属する。第2面では調査区西側で大規模な南北堀SD13、東側で南側への落込み、土壌などを検出した。遺構は室町時代頃に属する。第2面の下層には鎌倉時代から室町時代の包含層が認められる。

8Gでは、第1面調査区西側で井戸、溝、東側で土壌を検出した。時期は近世に属する。第2面では調査区全域で土壌、柱穴、石列などを検出

に緑灰色砂泥が堆積する。第2面では調査区西側で南北溝SD20および路面、東側で落込みSX18を検出した。路面は2面確認した。路面は西洞院大路、SD20は西洞院大路東側溝と推定できる。時期は中世に属する。

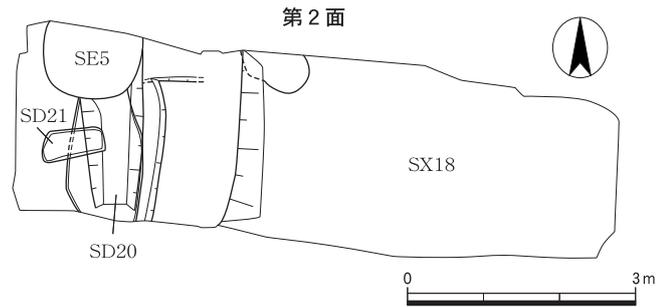


図81 12G遺構平面図（1：100）

13Gでは、第1面調査区全域で土壙、柱穴を多数、北辺で東西溝を検出した。土壙は不定形のものが多く、規模も様々である。時期は近世に属する。第2面では調査区全域で土壙、北半では東西溝SD43（幅0.4m、深さ0.2m）を検出した。時期は室町時代である。第3面では調査区

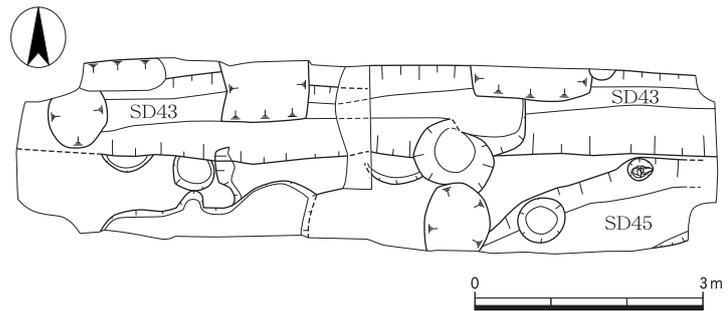


図82 13G遺構平面図（1：100）

南半で土壙、北半で東西方向溝SD45を検出した。SD45はSD43に切られて南方部が残存する。時期は鎌倉時代頃に属する。溝SD43・SD45は三条坊門小路北側溝と推定できる。

14Gでは、調査区南西部のみ遺構面が残存し、土壙、柱穴を検出した。他は攪乱で遺構は未検出である。時期は近世に属する。

15Gでは、第1面調査区西側で石組井戸、土壙、柱穴、土壙墓を検出した。東側は攪乱により遺構は未検出である。時期は中世から近世に属する。第2面では土壙、柱穴を検出した。時期は中世に属する。下層から淡黄灰色砂の遺物包含層を確認した。

16Gでは、第1面調査区全域で土壙、柱穴を検出した。土壙は不定形のものが多く、規模も様々である。時期は近世に属する。第2面では調査区全域で土壙、柱穴を検出し、それらに切られて南東側・北西側の落込みを検出した。

遺物 遺物は整理箱にして178箱出土した。出土した遺物の種類には、土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器、陶器、磁器、瓦類、銭貨、石製品、金属製品などがある。時期は、平安時代から近世までのものがあり、中世・近世のものが大半を占め、平安時代は少ない。

小結 今回の調査では、平安時代から近世の遺構を多数検出し、当地域の変遷を知る上で貴重な資料となった。ただ、調査に制約があり範囲が狭いこと、中近世の遺構が深くまで及んでおり、平安時代の遺構の残存状況は全体的に良くない。ただ、6Gでは東洞院大路路面・東側溝、12Gでは西洞院大路路面・東側溝、13Gでは三条坊門小路北側溝、7Gでは大規模な南北堀、8Gでは大規模な南北溝を検出し注目できる。

20 平安京左京三条四坊十町（図版5）

経過 今回の発掘調査は、柳池中学校体育館建築工事に伴うもので、当地域は、推定平安京左京三条四坊十町にあたるため、調査を実施した。

調査では、南北16m、東西23mの長方形の調査区を設定し、機械により現代・近代層を掘削し、その後手掘り調査を実施した。平面実測・写真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層褐色土層（近現代層：約0.7m）、第2層焼土層（江戸時代包含層：0.3m）、第3層灰色砂礫層（江戸時代包含層：0.2m）、第4層黒灰色土層（約0.2m）、第5層茶灰色土層（0.2m）、第6層灰褐色砂泥層（0.15m）、第7層灰褐色砂土層（0.2m）、第8層茶灰色砂土層（古墳時代包含層：約0.4m）、第9層灰褐色砂礫層（地山）である。第4層上面で第1面、第7層上面で第2面、第8層上面で第3・4面、第9層上面で第5面の遺構を検出した。

第1面では、土壙、井戸、石室、柱穴、石垣、溝などを検出した。土壙が最も多く、全域で検出した。形状・規模は多様で、埋土中からは多数の遺物が出土した。井戸もほぼ全域で検出した。円形または楕円形の石組みである。規模は大小さまざまである。石室は調査区全域に散在し、6基検出した。方

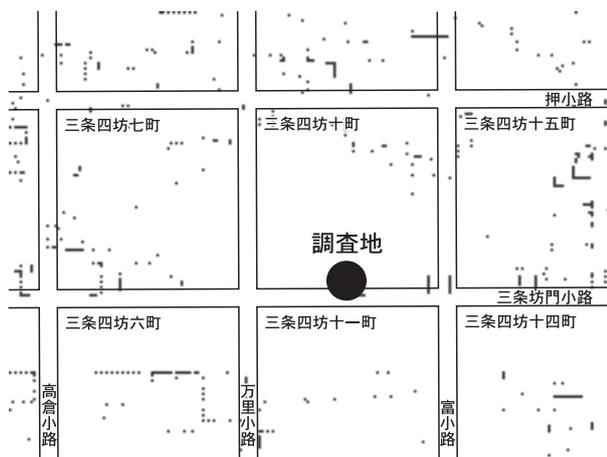


図83 調査位置図（1：5,000）

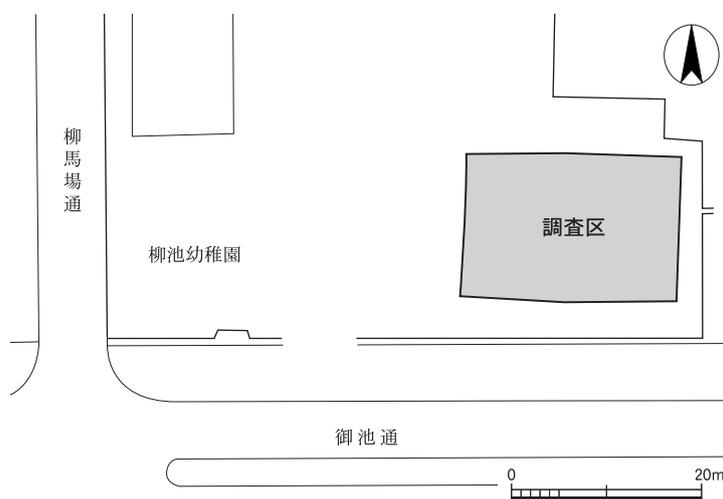


図84 調査区配置図（1：800）

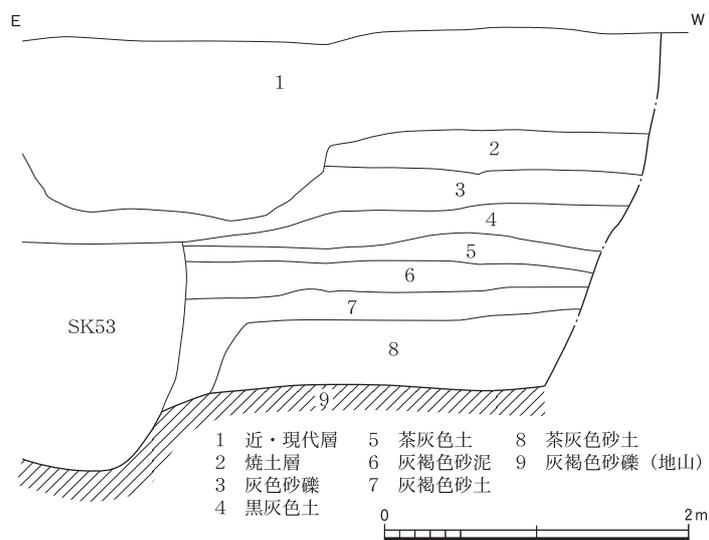
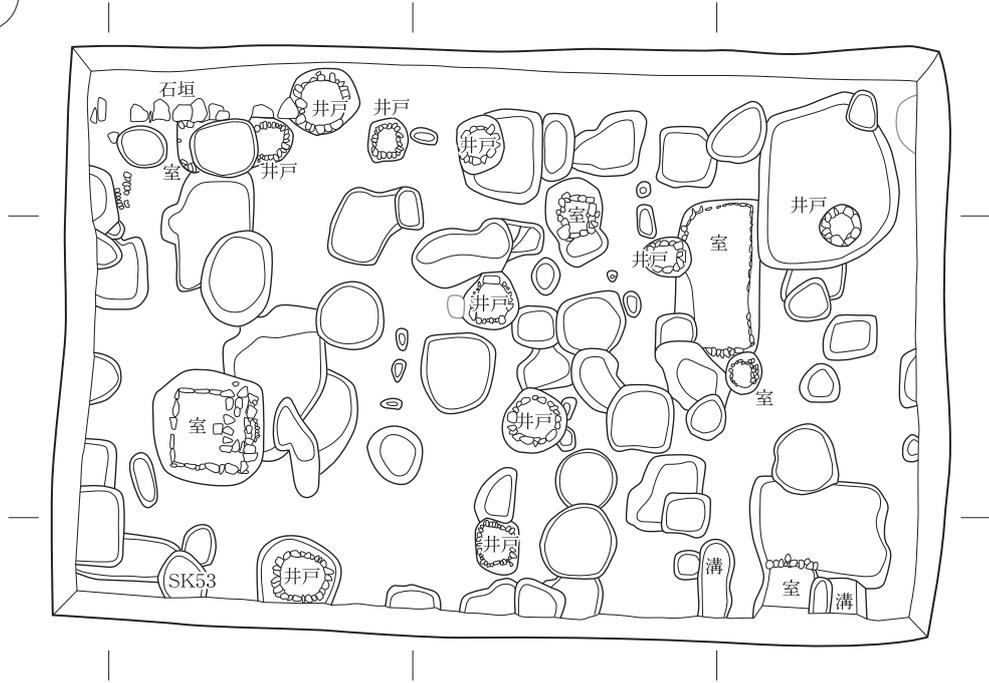


図85 南壁断面図（1：50）



第1面



第2面

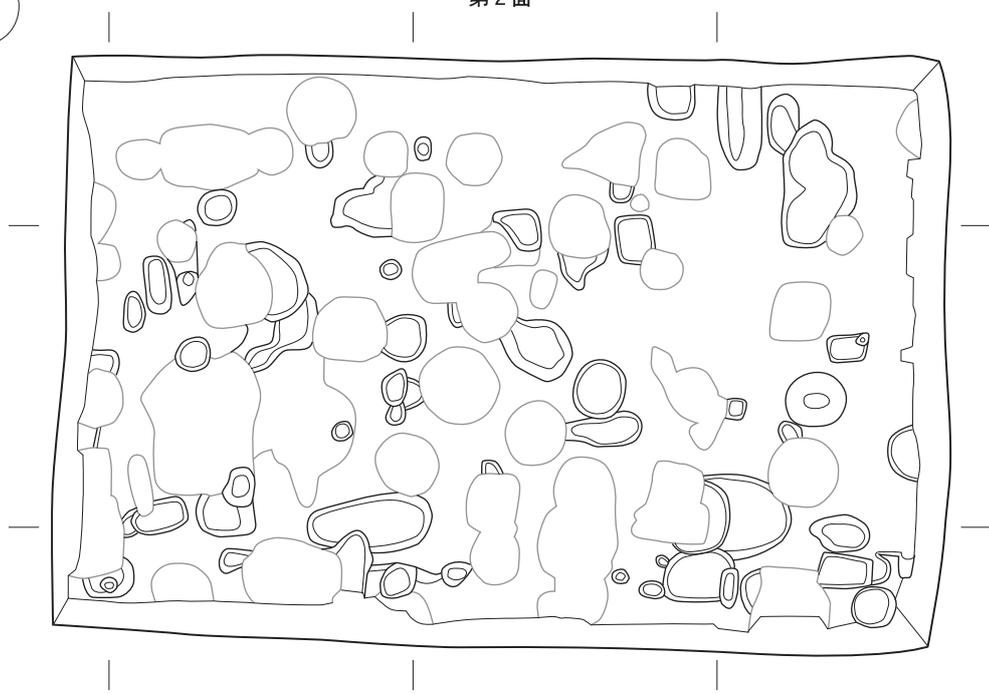
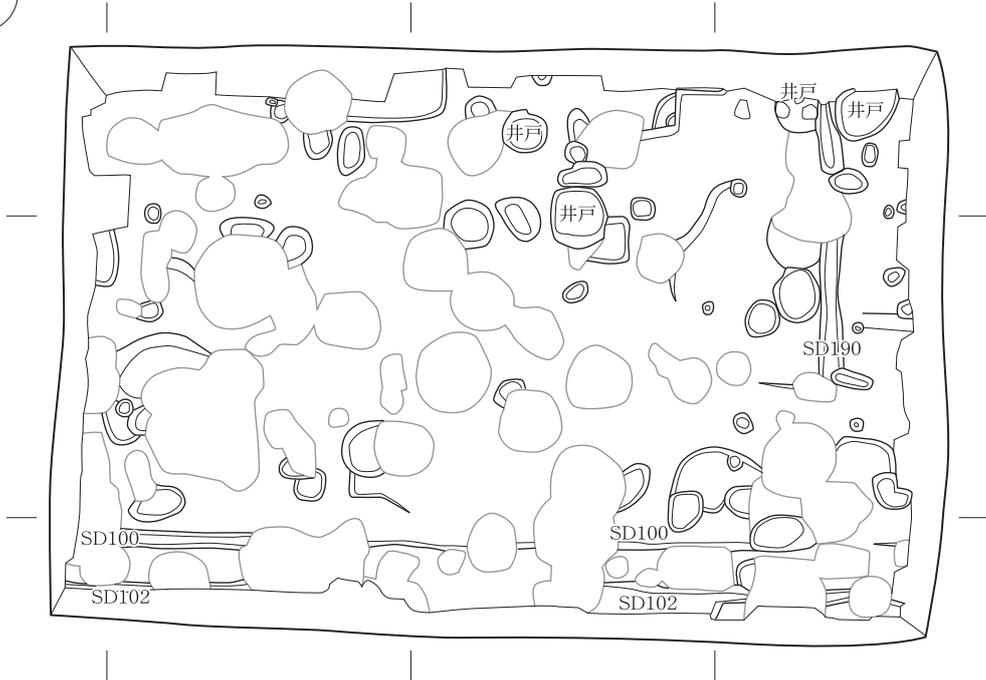


图86 第1・2面遺構平面図 (1 : 200)



第3面



第4・5面

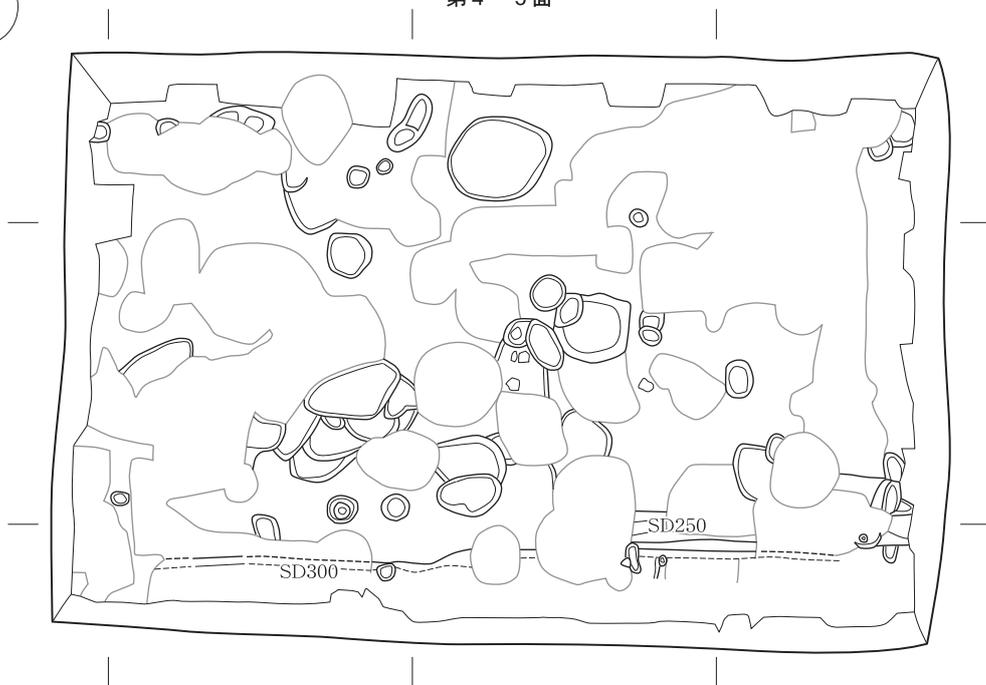


図87 第3～5面遺構平面図（1：200）

形大型石組みのものが多く、円形小型石組みのものや半月形大型埧・石組みのものも見られる。調査区北東部で南面の石垣の一部を検出した。柱穴は全域で検出したが、建物としてはまとまらない。また、部分的に黄色粘土の固く締まった面を確認した。遺構の時期は、桃山時代から江戸時代に属する。

第2面では、土壙、柱穴などを検出した。土壙は調査区全域で多数検出した。形状・規模は多様である。柱穴は全域で検出したが、建物としてはまとまらない。遺構の時期は、室町時代から桃山時代に属する。

第3面では、土壙、井戸、柱穴、溝などを検出した。土壙は調査区全域で多数検出した。形状・規模は多様である。井戸は調査区北側で数基検出した。素掘りのものが多い。柱穴は全域で多数検出したが、建物としてはまとまらない。調査区東部で南北溝SD190を検出した。幅0.6m、深さ0.1mである。調査区南辺では東西溝SD100・102を検出した。SD100は幅0.5m、深さ0.25m、SD102は幅0.5m以上、深さ0.5m以上である。遺構の時期は、鎌倉時代から室町時代に属する。

第4面では、土壙、柱穴、溝などを検出した。土壙は少なくなるが、調査区全域で散在する。規模は小型になる。柱穴は全域に散在して検出したが、建物としてはまとまらない。溝は調査区南部で東西方向の溝SD250を検出した。幅0.8m、深さ約0.2mである。また、部分的に平安時代後期の整地層（うぐいす色砂泥）を検出した。遺構の時期は、平安時代から鎌倉時代に属する。

第5面では、調査区南辺で東西溝SD300を検出した。断面U字形で、幅1m以上、深さ約0.3mである。埋土は茶灰色砂土で、土器を多数出土した。時期は古墳時代初頭である。

遺物 遺物整理箱で96箱出土した。遺物には土器類、瓦類、土製品、石製品、金属製品などがある。時期は、古墳時代から近世にわたるが、中世から江戸時代の遺物が大半を占め、他の時代の遺物は少ない。

古墳時代（庄内併行期）の遺物には、土師器がある。特にSD300からは土師器甕・壺などがまわって出土した。平安時代の遺物には、土師器、須恵器、磁器、緑釉陶器、瓦などがあり、土壙、SD250などから出土した。鎌倉時代から室町時代の遺物には、土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦、銭貨、石製砥石などがあり、土壙を中心として多数出土した。桃山時代から江戸時代の遺物には、土師器、陶器、磁器、瓦、埧、金属製品の筭・煙管などがある。遺物は各遺構から多数出土した。

小結 今回の調査では、古墳時代から江戸時代の遺物・遺構を多数検出し、当地域の変遷を知る上で貴重な資料となった。古墳時代のSD300では、良好な土器類が出土し、近接地に集落が想定できる。

平安時代から鎌倉時代のSD250・102は三条坊門小路の北側溝と推定できる。また、SD190や石垣は町内の区画施設と推定できる。

21 平安京左京四条三坊七町

経過 今回の発掘調査は、ビル建築工事に伴うもので、当地域は、推定平安京左京四条三坊七町および南蛮寺にあたるため、調査を実施した。

調査では、南北5m、東西20mの長方形の調査区を設定し、中央下水管部分の東側を1区、西側を2区とした。機械により現代・近代層を掘削し、その後手掘りで調査を実施した。平面実測・写真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層近現代層（約0.5m）、第2層茶灰色砂泥を中心とした層（江戸時代包含層：約0.6m）、第3層暗茶褐色砂泥を中心とした層（約0.25m）、第4層黄褐色泥土層（平安時代包含層：0.3m）、第5層灰黄色泥土層（地山）である。第3層上面で第1面、第4層上面で第2面の遺構を検出した。なお、第2層上面で部分的に固く締まった灰黄色砂泥層（漆喰）の面を確認した。

第1面では、土壌、井戸、柱穴、溝などを検出した。土壌が最も多く、全域で検出した。形状・規模は多様である。1区南西部で検出したSK106からは、土師器、瓦器、陶磁器、貝類などの多数の遺物が出土した。柱穴は全域で検出したが、建物としてはまとまらない。しかし、叩き締まった面を確認できた。遺構の時期は、桃山時代から江戸時代に属する。

第2面では2時期の遺構を検出した。中世の遺構と平安時代のものがある。中世の遺構には、土壌、柱穴、溝などがある。土壌は調査区全域で多数検出した。形状・規模は多様である。柱穴は全域で検出したが、建物としてはまとまらない。

1区北東部でSX133を検出した。北へ向かって傾斜し、溝あるいは池状の遺構と推定できる。

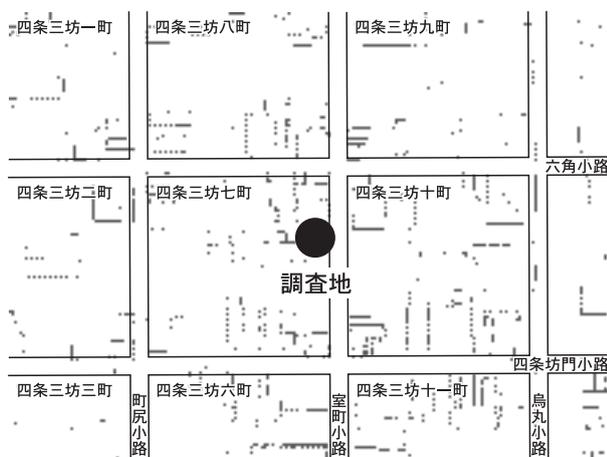


図88 調査位置図（1：5,000）

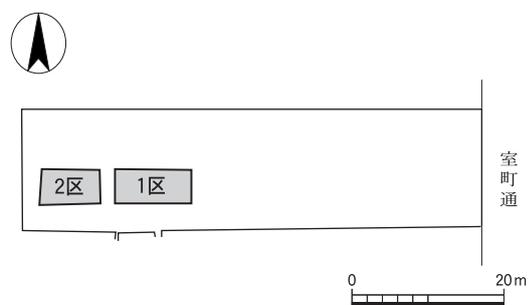


図89 調査区配置図（1：1,000）

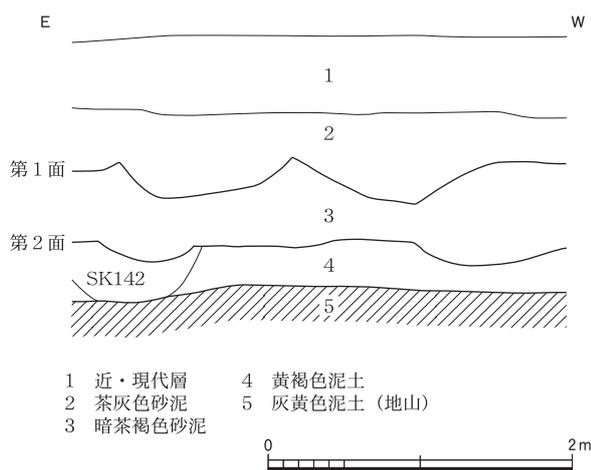


図90 1区南壁断面図（1：50）

埋土は上層は茶灰色砂泥、下層は青灰色泥砂である。遺物は大半が陶器で、土師器、瓦器は少ない。輸入陶磁器の白磁、青磁も多く出土した。遺構の時期は、鎌倉時代から室町時代に属する。

調査区東側で土壙SK108や柱穴P123などを検出した。埋土から多量の土師器が出土した。時期は平安時代後期である。

2区のSK208からは鎌倉時代の土師器が多数出土した。

遺物 遺物整理箱で65箱出土した。遺物には土器類、瓦類、土製品、石製品などがある。時期は、平安時代から近世にわたるが、中世から江戸時代の遺物が大半を占め、他の時代の遺物は少ない。

平安時代の遺物には、土師器、須恵器、緑釉陶器などがある。鎌倉時代から室町時代の遺物には、土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦などがあり、土壙を中心として多数出土した。桃山時代から江戸時代の遺物には、土師器、陶器、磁器、瓦、石製砥石などがある。遺物は各遺構から多数出土した。

小結 今回の調査では、後世の攪乱によって桃山時代から江戸時代初期の生活面および遺構は削平され、遺構の残存状況が悪いため、南蛮寺に関係した遺構は検出することができなかった。

中世の遺構ではSX133が注目でき、当地が六角通と蛸薬師通（四条坊門小路）のほぼ南北中心であるため、1町を区画する施設である可能性が高い。また、2区SX200・206もこれに平行する溝状遺構で、同様の性格をもつと推定できる。

平安時代中期には、地山上に黄褐色粘土を0.3m以上盛土して整地し、上面を平坦にしているが、これについては性格不明である。

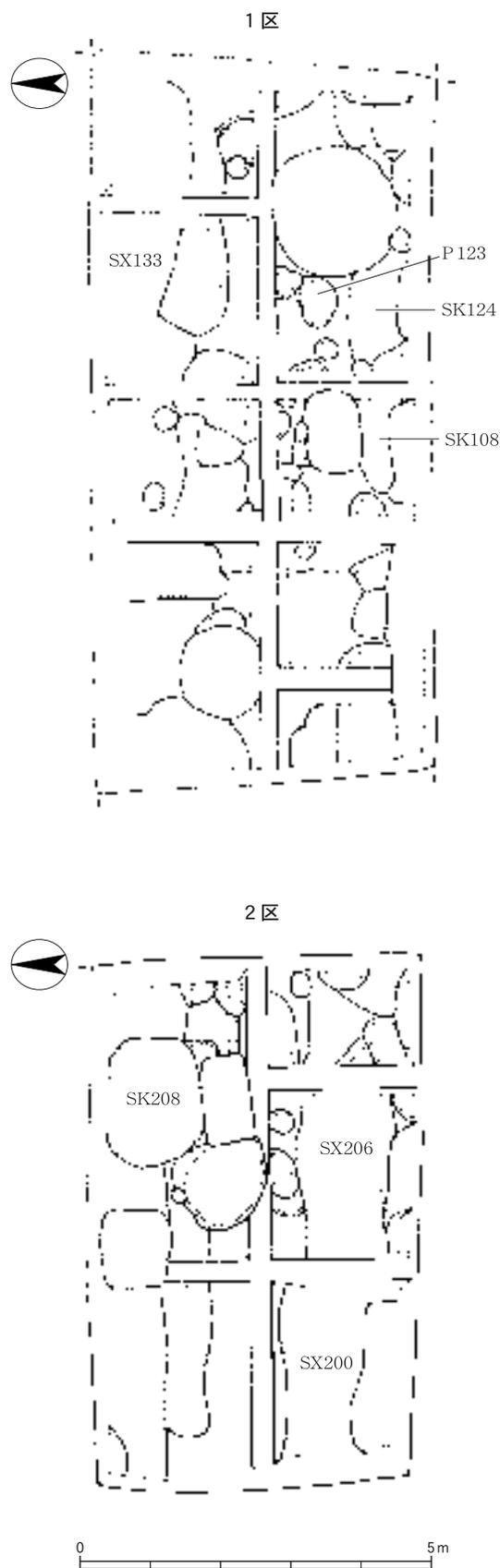


図91 遺構平面図（1：100）



図92 1区全景（西から）

22 平安京左京四条三坊十五町

経過 今回の発掘調査は、ビル建築工事に伴うもので、当地域は、推定平安京左京四条三坊十五町にあたるため、調査を実施した。

調査地内では、まず試掘調査を行い平安時代や中世の遺構が残存していたため発掘調査となった。南北35m、東西2mの長方形の調査区を設定し、機械により現代・近代層を掘削し、その後手掘りで調査を実施した。平面実測・写真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層近現代層（約0.4m）、第2層黄灰色土を中心とした層（0.3~1.5m）、第3層灰褐色土層（約0.5m）、第4層緑灰色砂土層（平安時代後期包含層：約0.4m）、第5層灰色砂礫層（地山）である。第3層上面で第1面、第4層上面で第2面の遺構を検出した。

第1面では土壌、柱穴などを検出した。土壌が最も多く全域で検出した。形状・規模は多様である。調査区北部のSK1からは土器類、瓦類などが大量に出土した。柱穴は全域で検出したが、建物としてはまとまらない。

なお、第1層上面では部分的に灰黄色砂泥層（漆喰）の面を確認した。遺構の時期は、桃山時代から江戸時代に属する。

第2面では、土壌、柱穴、溝などを検出した。土壌は調査区全域で多数検出した。形状・規模は多様である。柱穴は調査区中央部と南部で多数検出したが、建物としてはまとまらない。調査区北部で東西溝SD8を検出した。幅2.4m、深さ0.6mで、埋土は灰褐色土、埋土中から室町時代の土器類、瓦などが出土した。調査区南部で東西溝SD24を検出した。幅4.6m、深さ0.3mで、埋土は灰褐色砂礫、埋土中から鎌倉時代から室町時代の土器類、瓦などが出土した。調査区南端部で東西溝SD25を検出した。幅0.8m、深さ0.3mで、埋土は灰色土、埋土中から平安時代後期の土器類、瓦などが出土した。遺構の時期は、平安時代後期から室町時代に属する。

遺物 遺物整理箱で70箱出土した。遺物には土器類、瓦類などがある。時期は、弥生時代から



図93 調査位置図 (1 : 5,000)

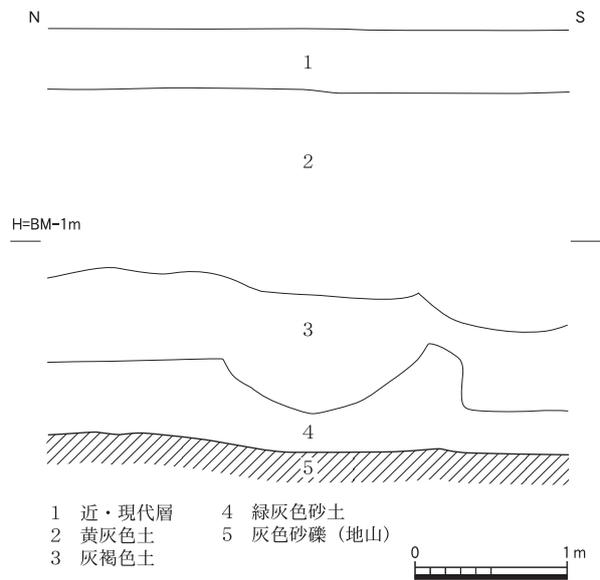
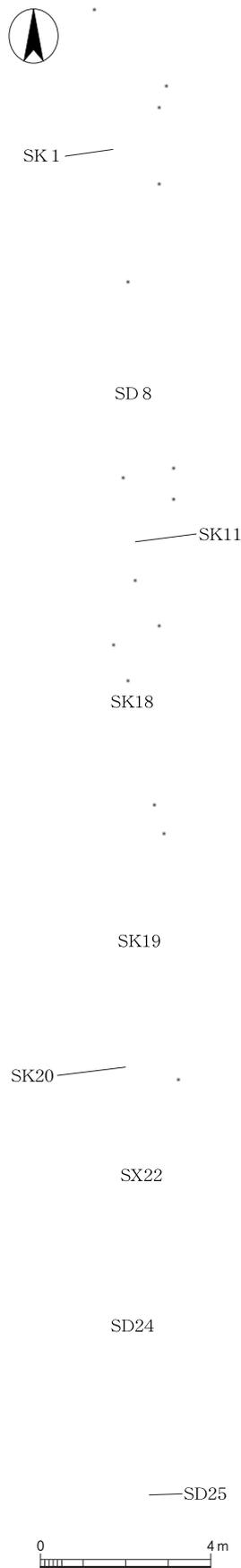


図94 東壁断面図 (1 : 50)



近世に至るが、中世から江戸時代の遺物が大半を占め、他の時代の遺物は少ない。

弥生時代・古墳時代の遺物は4層と5層の境で出土し、弥生土器は前期・後期、古墳時代の土器は6世紀の須恵器杯・甕がある。平安時代の遺物は量が少なく、SD25、SX22（ピット群）から出土したものと後世の遺構に含まれるものがある。土師器、須恵器、緑釉陶器などがある。中世の遺物は、SD8・24、SK11・18・20から多く出土し、土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦などがある。桃山時代から江戸時代の遺物は、SK1・19から多く出土し、土師器、陶器、磁器、瓦などがある。遺物は各遺構から多数出土した。

小結 今回の調査では、平安時代から江戸時代の遺構を検出したが、調査区が狭小なため遺構が調査区外に続き、遺構の性格については不明な点が多い。しかし、多数の遺構が検出され、周辺の調査成果と合わせて、当該地の変遷を知る上での貴重な資料となった。また、SD25は条坊推定復元から四条坊門小路北側溝に推定できる。

『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

図95 遺構平面図（1：160）

23 平安京左京六条一坊三・十一・十四町（図版6）

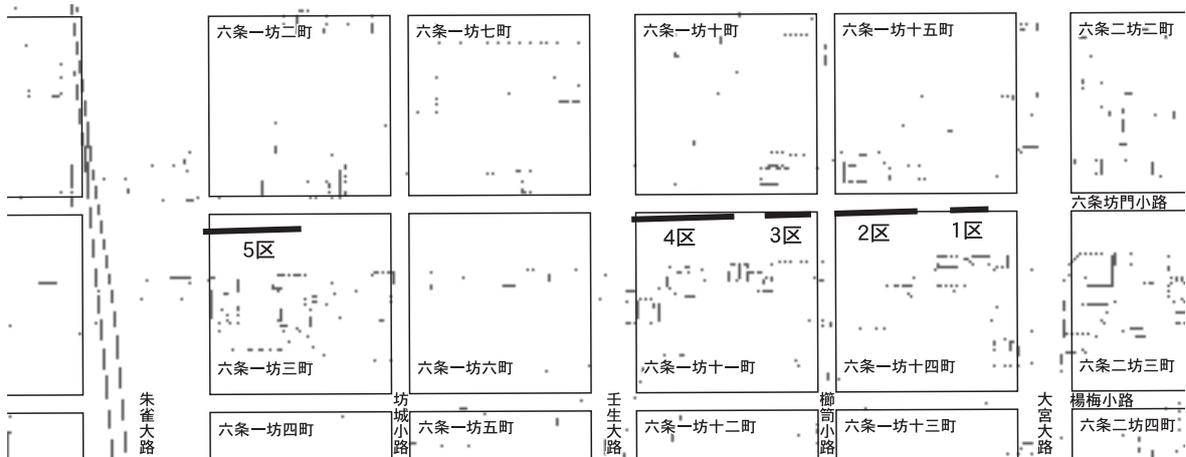


図96 調査位置図（1：5,000）

経過 今回の発掘調査は、五条通共同溝設置工事に伴うもので、当地域は、推定平安京左京六条一坊三町（5区）、十一町（4・3区）、十四町（2・1区）にあたるため調査を実施した。

調査では、中央分離帯北側に、幅6.5mの長方形の調査区を西から5区（長さ68m）、4区（長さ59m）、3区（長さ27m）、2区（長さ48m）、1区（長さ23m）と設定した。西から機械により現代・近代層を掘削し、その後手掘りで調査を実施した。平面実測・写真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、各調査区によって異なるが、2区を挙げておく。第1層近現代層（約1.1m）、第2層淡灰茶色砂土（地山）である。第2層上面で第1面の遺構を検出した。他の調査区では平安時代の包含層が残存していた場所もある。

1区では、調査区全域で土取穴、柱穴を検出した。東辺で六条坊門小路南側溝（SD60）が若干残存していた。遺構の時期は近世である。

2区は、第1面では調査区全域で土壌を、南部で柱穴を多数検出した。柱穴は建物としてはまもらなかった。遺構の時期は近世以降である。第2面では調査区北側で六条坊門小路南側溝を検出し、その南側に数時期の東西柵列が位置し、さらに南側で柱穴を多数検出した。側溝は確認できただけで20回近く掘

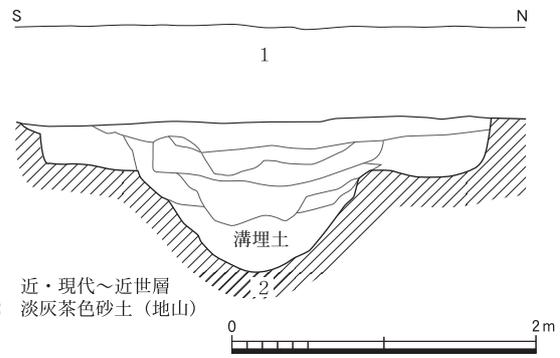


図97 2区断面図（1：50）

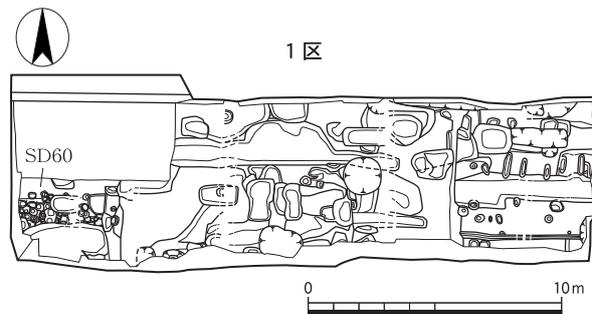


図98 1区遺構平面図（1：300）

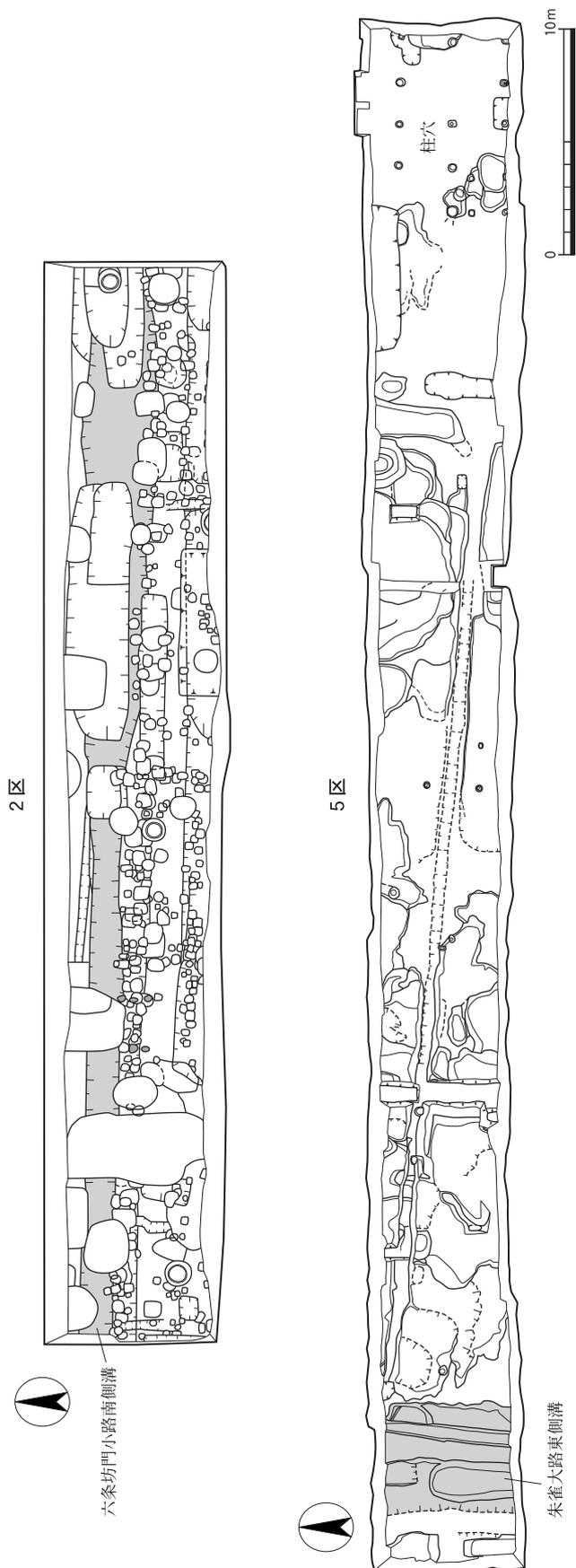


図99 2区・5区遺構平面図 (1 : 300)

り直され、柵も切り合いから数時期に渡る。柱穴は建物としてまとまらなかった。時期は平安時代中期から室町時代である。

3区では、調査区全域で土取穴を検出し、顕著な遺構はない。遺構の時期は近世である。

4区では、調査区全域で土取穴を検出し、西部で木製方形井戸を検出した。遺構の時期は近世である。

5区では、調査区全域で土取穴を検出し、西端で朱雀大路東側溝、東端で柱穴を検出した。時期は中世から近世である。

遺物 遺物整理箱で126箱出土した。遺物には土器類、瓦類、土製品、石製品などがある。時期は平安時代中期から近世のものがあるが、平安時代後期から鎌倉時代のものが多く、他の時代の遺物は少ない。

遺物は2区を中心にして出土し、特に六条坊門小路側溝から、土器類などがまとまって出土した。

小結 今回の調査では、櫛笥小路を境にして、西側は近世の土取やその後の耕地化に伴う地面の切り下げにより遺構の残存状況が悪かったが、東側は良好に残っていたことがわかった。

24 平安京左京六条一坊六町 (図版7)

経過 今回の発掘調査は、五条壬生川交差点の共同溝設置工事に伴うもので、当地域は、推定平安京六条一坊六町にあたるため調査を実施した。

調査では、五条通中央分離帯東側に、南北14.9m、東西10.2mの逆L字形の調査区を設定した。機械により現代・近代層を掘削し、その後手掘りで調査を実施した。平面実測・写真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層近現代層(0.9m)、第2層黒灰色砂泥層(0.1m)、第3層茶灰色砂礫土層(約0.2m)、第4層淡茶灰色砂を中心とした層(約0.2m)、第5層暗褐色砂礫層(地山)である。第3層上面で第1面、第4層上面で第2面、第5層上面で第3面の遺構を検出した。

第1面では、調査区中央部で東西溝SD1を検出した。幅2.3m、深さ約0.1mである。全域で土壌・柱穴などを検出した。柱穴は散在し、建物としてまとまらない。中央部の土壌(SK1~4)は底部に甕を据える。遺構の時期は、近世以降に属する。

第2面では、調査区全域で土壌、柱穴を検出した。土壌は中央から東側で多数検出し、形状・規模は多様である。柱穴は散在し、建物としてまとまらない。調査区東側で南北方向の石列SX1を検出した。遺構の時期は、中世に属する。

第3面では、調査区東側で南北溝SD8を検出した。幅2.1m、深さ約0.2mである。埋土は上層が灰色砂泥、下層が暗褐色砂で、土

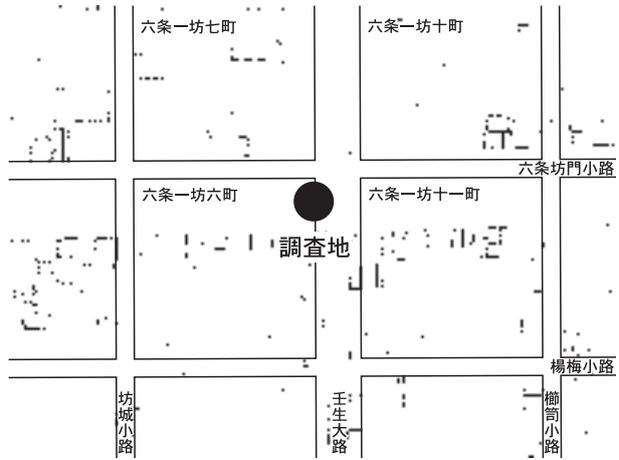


図100 調査位置図 (1:5,000)



図101 調査区配置図 (1:800)

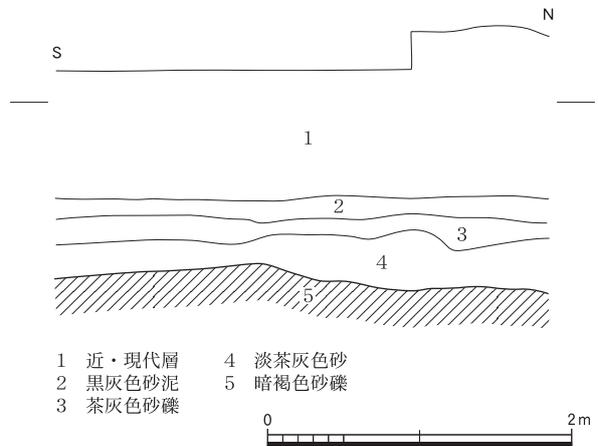


図102 西壁断面図 (1:50)

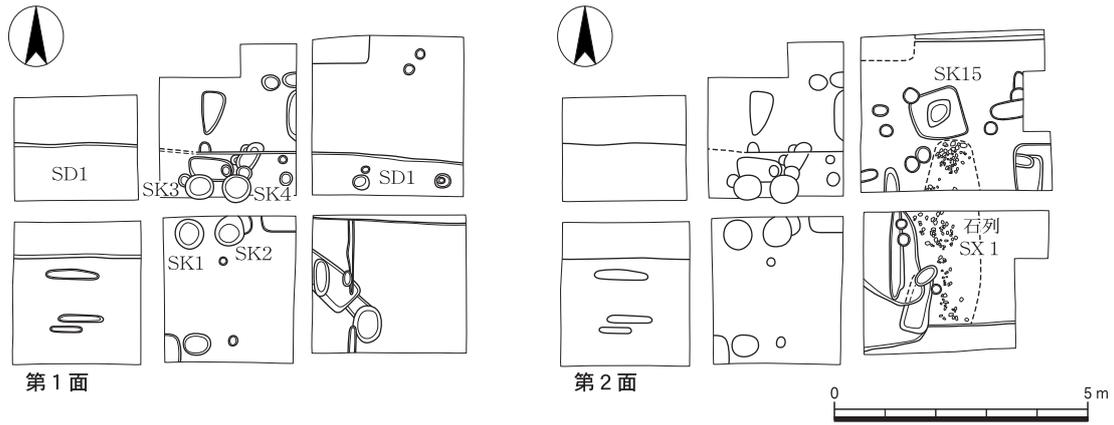


図103 第1・2面遺構平面図 (1 : 150)

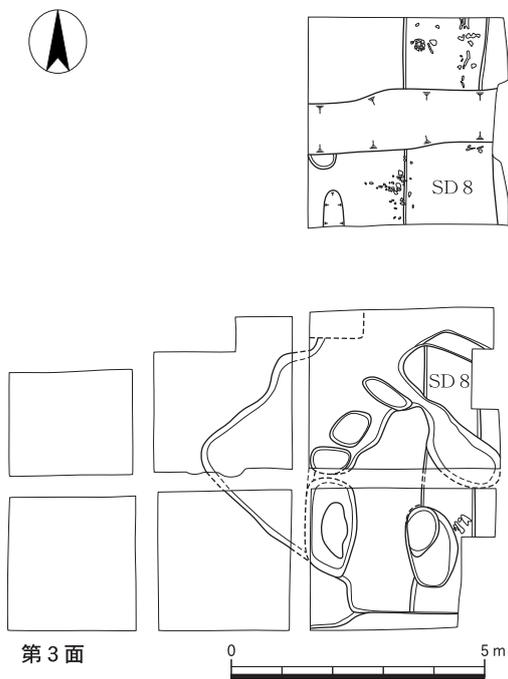


図104 第3面遺構平面図 (1 : 150)

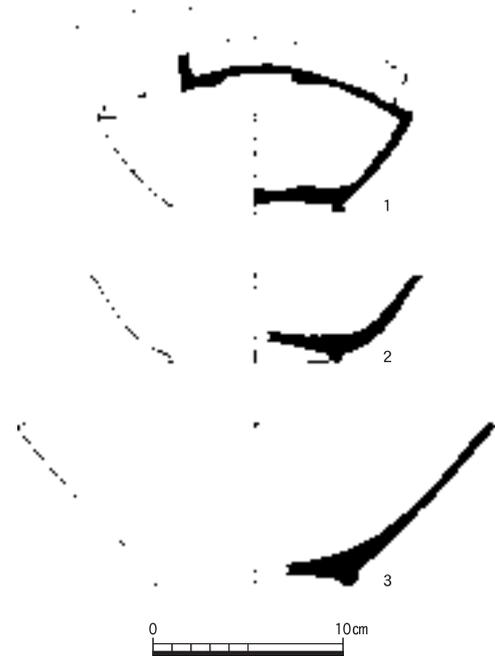


図105 遺物実測図 (1 : 4)

師器、須恵器、灰釉陶器、馬の歯・骨などが出土した。調査区南東部では土壙、落込みを多数検出し、形状・規模は多様である。遺構の時期は、平安時代から中世に属する。溝SD 8は平安時代前期から後期の遺物を含む。

遺物 遺物整理箱で14箱出土した。遺物には土師器、須恵器、瓦器、灰釉陶器、緑釉陶器、陶器、磁器、瓦類、土製品、石製品、金属製品、銭貨、骨などがある。時期は、平安時代から近世であるが、中世から江戸時代の遺物が大半を占め、他の時代の遺物は少ない。1は灰釉陶器平瓶、2は灰釉陶器碗、3は青磁碗で、いずれも9世紀のものである。

小結 今回の調査では、中・近世以降の遺構が多く、当地域の変遷が明らかとなった。それ以前の生活面および遺構の残存状況は良くない。中世以前の遺構では、南北溝SD 8が条坊推定復元から壬生大路西側溝であると推定できる。

25 平安京左京六条二坊五町・猪熊殿跡・本國寺跡（図版8～12）

経過 今回の発掘調査は、東急ホテル建設に伴うもので、当地域は、平安京左京六条二坊五町・猪熊殿跡・本國寺跡にあたるため、調査を実施した。

調査地内で先ず試掘調査を行い、北側一部を除き遺構の残存状況が良好なため、発掘調査を実施した。調査地北側に逆L字形の1トレンチ（南北22m、東西20m）、長方形の6トレンチ（南北6m、東西29m）、2トレンチ（南北18.5m、東西4m）、3トレンチ（南北24m、東西4m）、南側に方形の4トレンチ（一辺36m）、長方形の5トレンチ（南北36m、東西33m）の調査区を設定し、4・5トレンチ西側と北側は建物柱穴検出のため随時拡張した。また、5トレンチ西側も最後に拡張した。機械により現代・近代層を掘削し、その後手掘りで調査を実施した。平面実測・写真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は各地区によって異なるが、4トレンチでは、第1層近現代層（0.15m）、第2層黄色粘土層（0.25m）、第3層淡灰色泥砂を中心とした層（約0.5m）、第4層暗茶褐色砂礫層（地山）である。第2層上面で第1面、第3層上面で第2面、第3層上面で第3面の遺構を検出した。

1トレンチでは、調査区東側は攪乱を受ける。西側は全域で溝、土壇、柱穴などを検出した。溝は、西側中央部で東西溝SD4（幅4.7m）、南部で東西溝SD13（幅2m以上、深さ1.6m以上）を検出した。土壇は散在し、形状・規模は多様である。柱穴は多数検出したが、建物としてまとまらない。遺構の時期は、SD13が室町時代末、他は鎌倉時代から近世に属する。

2トレンチでは、全域が攪乱（旧池跡）のため、機械掘削の後断面を確認し、調査を終了した。

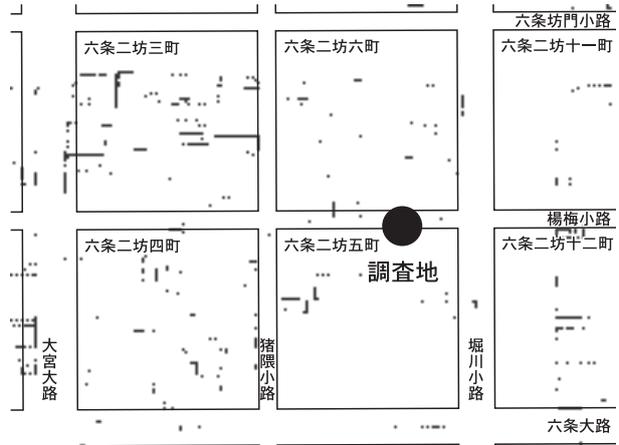


図106 調査位置図（1：5,000）

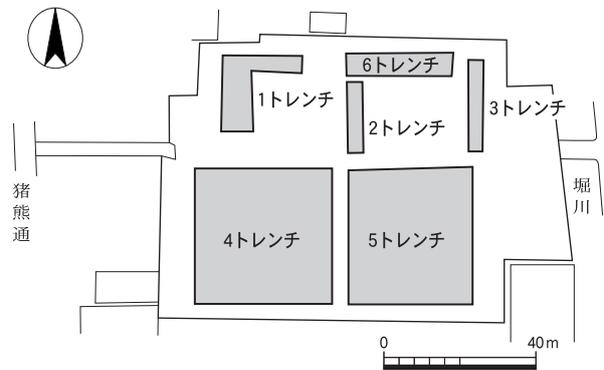


図107 調査区配置図（1：2,000）

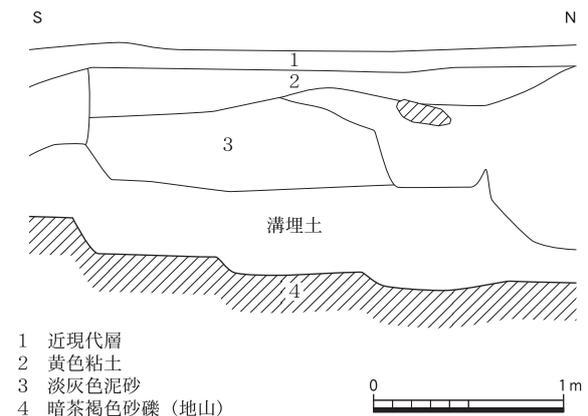


図108 西壁断面図（1：40）

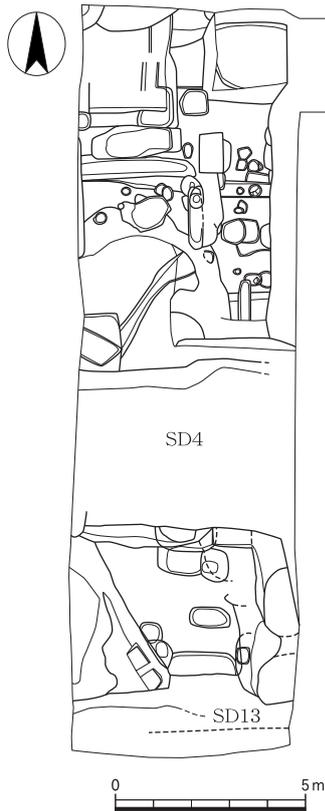


図109 1トレンチ遺構平面図 (1:200)

3トレンチでは、中央部と南端部は攪乱（旧池跡）を受ける。北側・南側一部では全域で土壌、柱穴、溝を検出した。土壌は散在し、形状・規模は多様である。柱穴は多数検出したが、建物としてまとまらない。時期は中世から近世に属する。

4トレンチでは、3面の遺構を検出した。第1面では、調査区南西部で礎石建物、南東部では土蔵基礎、中央部で石組み井戸、中央部から西側にかけて柱穴、全域で土壌を検出した。建物は、南北4間以上（間隔2.3m）、東西5間以上（間隔約5m）で東側約2mに庇が付く。柱穴は方形で一辺約1m、根石を入れ礎石が

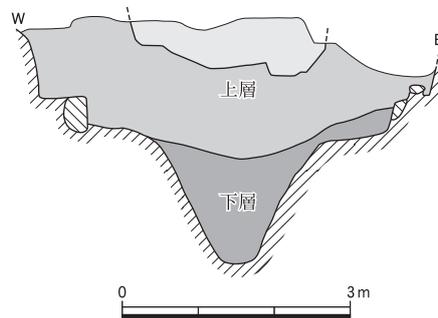


図110 4トレンチSD166東西セクション南壁断面図 (1:100)

残存したものもある。庇外側には両側を石で護岸する雨落溝SD3（幅0.5m、深さ約0.4m）が巡る。柱穴は多数検出し、円形で径0.5m程度、建物としてまとまらない。土壌は散在し、形状・規模は多様で、一辺5m程度の大規模なものも多数見られる。遺構の時期は近世以降に属する。

第2面では、調査区北部、中央部で溝を数条、調査区南部で井戸、全域で土壌、柱穴を検出した。北部の溝には東西溝SD263・320、逆L字形の溝SD306・390、クランク形の溝SD219、南北溝SD299、斜方向のSD296、東部では東西溝SD297・309、斜方向のSD272などがある。溝の幅1m前後のものが多いが、幅2mに達するものもある。断

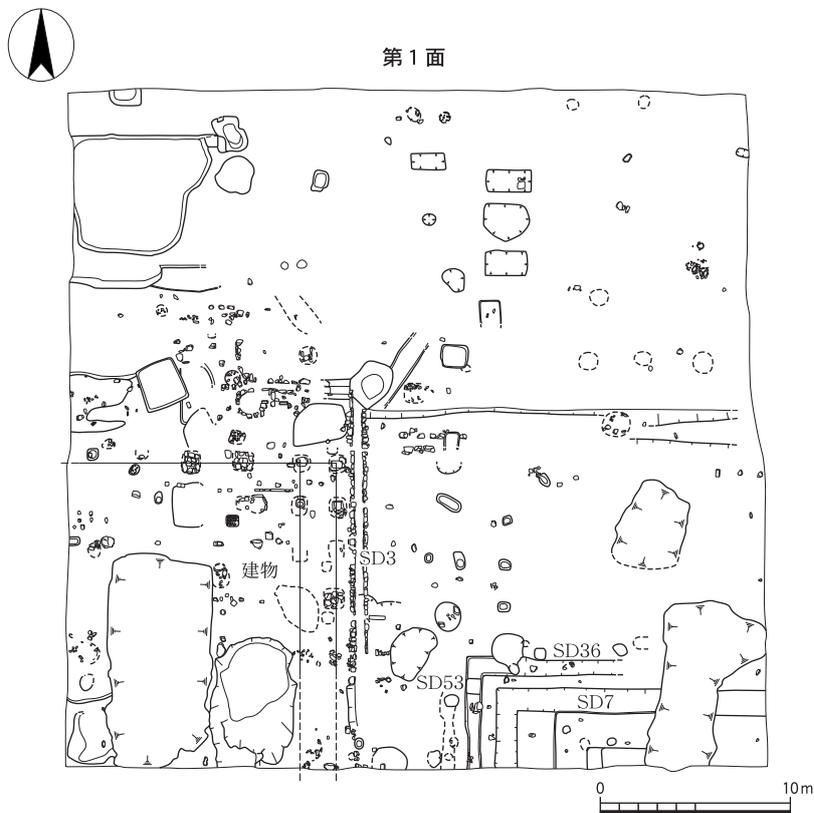


図111 4トレンチ第1面遺構平面図 (1:400)

面V字形・逆台形で深さ0.5～1 m、途中で中断するものが多く連続性がない。中央で検出した南北溝SD166は、断面U字形で幅約5.3m、南辺から16 mまでは深さ約1.5mで、以北は深さ約0.4mと浅くなり、南辺から30mで止まる（上層）。また、溝底部中央の南辺から北へ7 mまでは、断面V字形で幅2 m、深さ1.7mと深い（下層）。上層両岸には南辺から北へ12mまで、高さ約1.5mの石組護岸が残存する。埋土は、下層が灰色シルト、上層が暗灰色砂泥を中心とした土で上部には炭が多く堆積する。埋土からは多量の土器が出土し、特に上層北側で土師器皿などが大量に出土した。井戸は円形石組のものが主体であるが、方形横棧縦板組のものも見られる。土壌は形状・規模は多様である。南東部の土壌は径0.7～1 m前後で規則的に並び、甕据え付け跡と推定できる。柱穴は円形で径0.2～0.5mで、多数検出したが建物としてまとまらない。時期は、溝SD166を含め

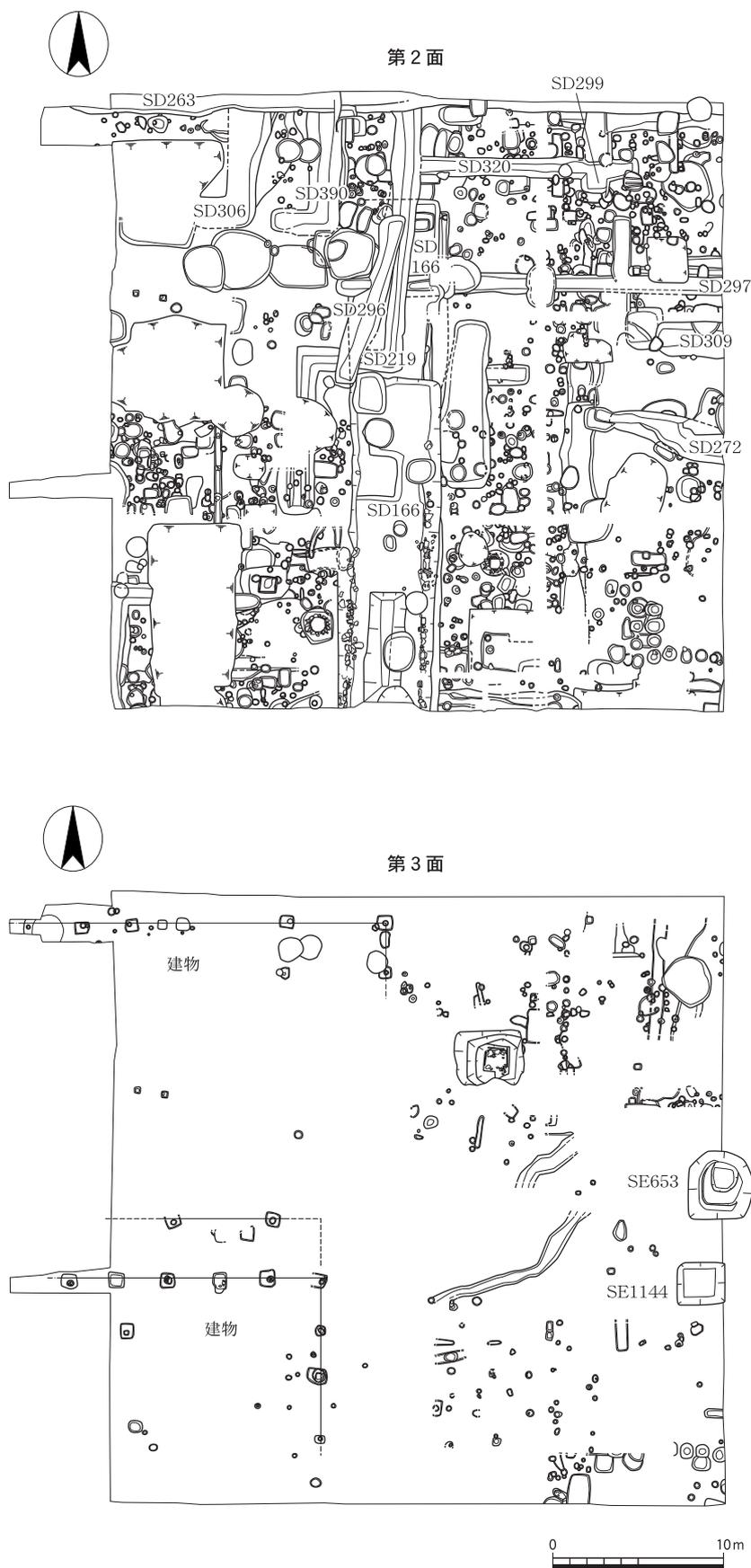


図112 4トレンチ第2・3面遺構平面図（1：400）

溝類が室町時代末、他の遺構は中世から近世に属する。

第3面では、調査区北西部と南西部で掘立柱建物、北東部から中央で斜方向の溝を数条、東部で井戸を数基、全域で土壌、柱穴を検出した。北西部建物は東西棟で梁間1間（間隔約3m）、桁行7間分（間隔約3m）を検出したが、調査区外に続く可能性もあり全体の規模は不明である。南西部建物は東西4間（間隔約3m）、南北2間分（間隔約2.8m）を検出し、北側3.5m、西側2.6mに庇が付く。南西部が攪乱・後世遺構のため全体の規模は不明である。いずれも柱穴は方形で一辺約0.8mである。溝は北東から南西方向で、いずれも小規模で浅い。井戸は方形横棧縦板組のものが主体である。土壌は形状・規模は多様であるが、2面に比べ小規模である。柱穴は円形で径0.1~0.2m、多数検出したが建物としてまとまらない。遺構の時期は、建物が平安時代中期、井戸が平安時代後期から鎌倉時代、他は平安時代以前から中世に属する。

5トレンチでは、3面の遺構を検出した。第1面では、調査区南部で礎石建物、コの字形溝、東側中央で舟入SX5130、北側中央では東西柵、調査区全域で土壌、柱穴を検出した。建物は梁間3間（間隔約2m）、桁行2間（間隔約3m）以上である。柱穴は楕円形で径約1m、根石を入れるが礎石は残存していない。舟入SX5130は南北9m、東西5m以上、深さ2mで南辺を除き石組みが残存する。東西柵は柱穴径0.3~0.5mで、間隔約1.3mである。土壌は形状・規模ともに多様で、一辺4m程度の大規模なものも多数見られる。柱穴は円形で径0.2~0.5m、多数検出したが建物としてまとまらない。遺構の時期は近世以降に属する。

第2面では、調査区中央部から西側で東西・南北溝、調査区全域で土壌、柱穴を検出した。北

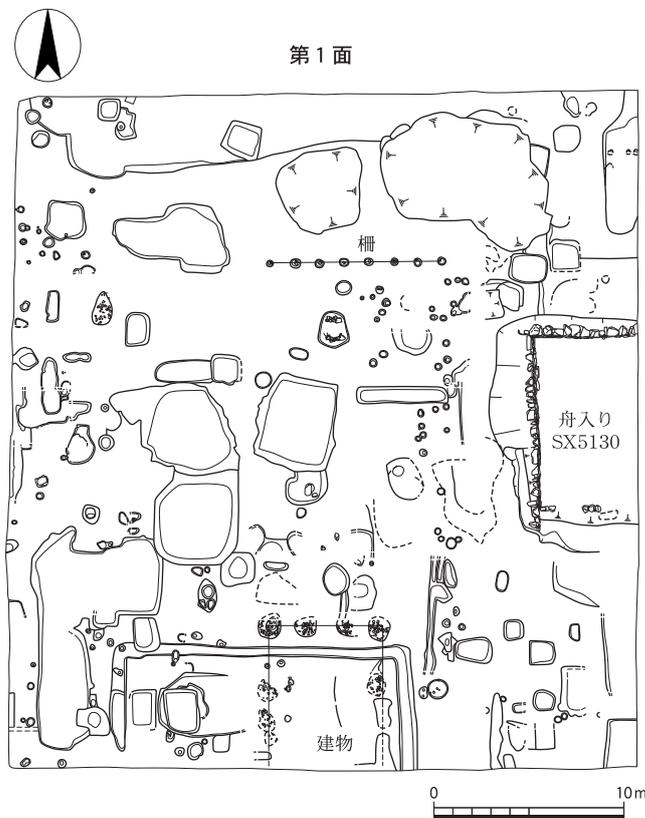


図113 5トレンチ第1面遺構平面図（1：400）

部の南北溝SD218は、断面逆台形で幅2m、深さ1mで中央で止まる。SD207は南部から中央で西側に曲がる逆L字形の溝で、断面U字形で幅1.5m、深さ約0.6m、西側は部分的に底部が深くV字形となり、SD218を切る。SD207の東西方向部分は東西溝SD309（幅2m、深さ0.4m）によって切られ、4トレンチに連続する。南部ではSD207の東側に沿って南北溝SD230（幅0.6m、深さ0.3m）を検出した。これらの溝埋土は茶褐色砂泥が中心で、大量の土器が出土した。土壌は散在し、一辺5m程度の大規模なものの一辺0.5~1m程

度のものに分かれ、形状は多様である。柱穴は円形で径0.2~0.5m、多数検出したが建物としてまとまらない。時期は、溝類が室町時代末、他は鎌倉時代から近世に属する。

第3面では、調査区北西部で南北溝、北東部で井戸を数基、全域で土壌、柱穴を検出した。溝は南北方向で小規模で浅い。井戸は散在して検出した。木組と考えられるが、残存状況は悪い。土壌も散在して検出した。形状・規模は多様で、第2面に比べ小規模である。柱穴は方形で一辺約0.3mのものと円形で径0.1~0.2mのものがある。方形のものは調査区中央(延長5m)や東辺(延長6m)で並ぶが、性格は不明である。円形のもの多数検出したが、建物としてまとまらない。遺構の時期は、方形柱穴列が平安時代中期、井戸が平安時代後期から鎌倉時代、他は平安時代から中世に属する。

6トレンチでは、2面の遺構を検出した。第1面は調査区北側が攪乱を受ける。南側では全域で土壌などを検出した。時期は近世以降に属する。第2面では、調査区南側で東西溝SD19、南辺と中央で柱穴、井戸などを検出した。SD19は断面逆台形で幅2.2m、深さ約0.8mで、底部は

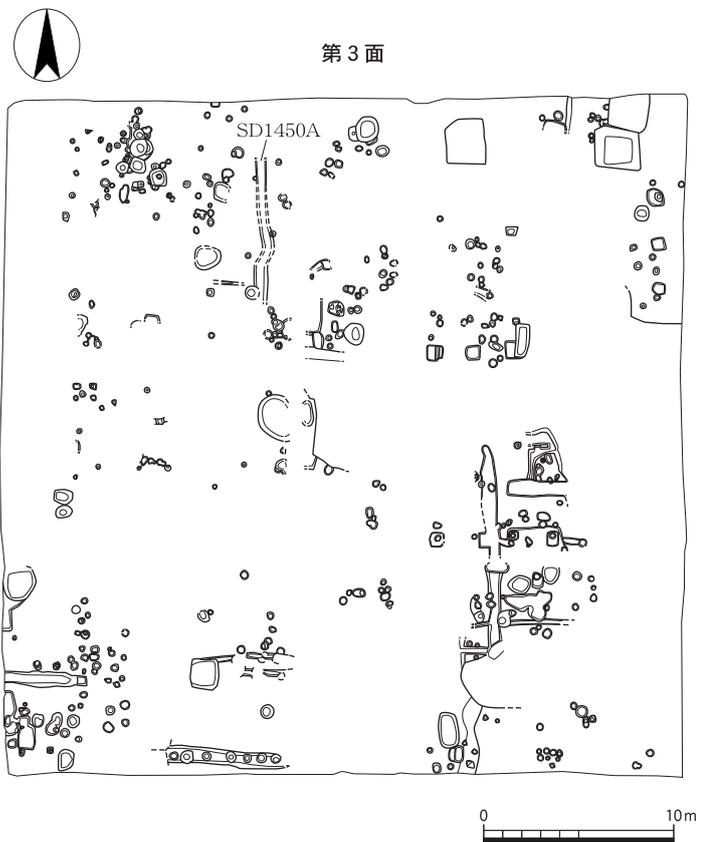
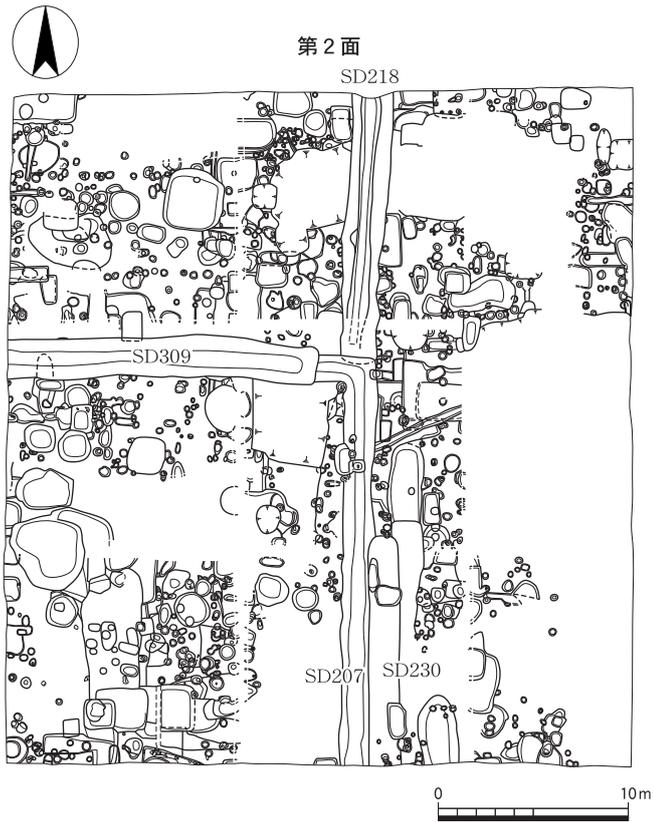


図114 5トレンチ第2・3面遺構平面図(1:400)

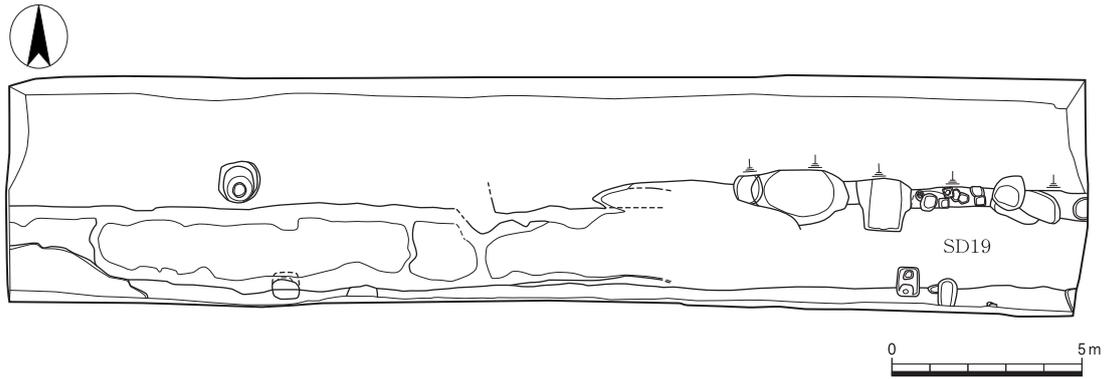


図115 6トレンチ遺構平面図（1：200）

凹凸がある。埋土は上層茶灰色砂泥、下層茶灰色砂を中心とした層で、土器類が大量に出土した。時期は、SD19上層が中世、下層が平安時代、他の遺構は中世に属する。

遺物 遺物整理箱で1694箱出土した。遺物には土師器、須恵器、瓦器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、陶器、磁器、瓦類、土製品、石製品、金属製品、銭貨、骨などがある。時期は平安時代から近世で、中世から江戸時代の遺物が大半を占め、他の時代の遺物は少ない。土器類が大半を占め、溝・井戸・舟入などからまとまって出土した。他の遺物は少ない。また、室町時代後期の井戸から「日蓮」墨書土器（181）、SD166下層から墨画土器（182・183）、5トレンチ土壌から金属製馨（184）などが出土した。特に時期の明らかな遺物が出土したことは注目できる。本國寺は貞和元年（1345）に日静が堀川西・六条坊門南・大宮東・七条北の12町を光明天皇から賜り創建される。SD19はこの時に埋められたと推定できることから、出土土器（1～85）はこの時期以前に属すると考えられる。SD19からは土師器皿（1～50）・椀（51～53）・釜（54）・深鉢（55）、白色土器杯（56）・高杯（57）、瓦器鍋釜類（58～62）、須恵器鉢（63）、焼締陶器鉢（64）・甕（65～68）、灰釉系陶器鉢（69）、中国製白磁皿（70～73）・椀（74・75）・合子（76）・壺（77）、中国製青磁椀（78～82）・杯（83・84）・壺（85）、褐釉陶器などが出土した。土師器皿の赤色系には小型皿（1～8）・大型皿（9～16）がある。白色系には小型皿（17～36）・大型皿（37～47）のほか、少量ながらさらに大型で深い皿（48～50）がある。小型皿には底部中央を突き上げるヘソ皿が目立つ。椀・釜はいずれも小型で、（52）は片口を作る。（55）は小さな平底から口縁部が大きく開く。調整は粗雑で粘土紐の積み上げ痕が明瞭に残る。白色土器は少なく、いずれも小片である。瓦器釜（58）は小型で鍔が巡る。瓦器鍋には口縁部が屈曲するもの（59～61）と鍔が巡るもの（62）がある。須恵器鉢（63）は東播産である。焼締陶器は甕が多くを占め鉢は少ない。（67）は肩部外面にヘラ描きがある。（64・68）は備前産、（65）は信楽産、（66・67）は常滑産である。灰釉系陶器鉢は内面に薄く自然釉がかかる。中国製白磁皿には口縁部が内弯気味のもの（70・71）と外反するもの（72・73）がある。（74・75）は内面、（76・77）は外面に型で文様を表現する。中国製青磁椀は外面に蓮弁を浮き彫りするもの（78・79）、底部内面には線彫りで草花を表現するもの（81・82）がある。（83・84）は内外面に厚く施釉する。これらのほかに滑石製鍋（86）が出土している。

SD166護岸石組みの掘形からは永正六年（1509）銘鬼瓦（185）が出土しており、下層出土土器

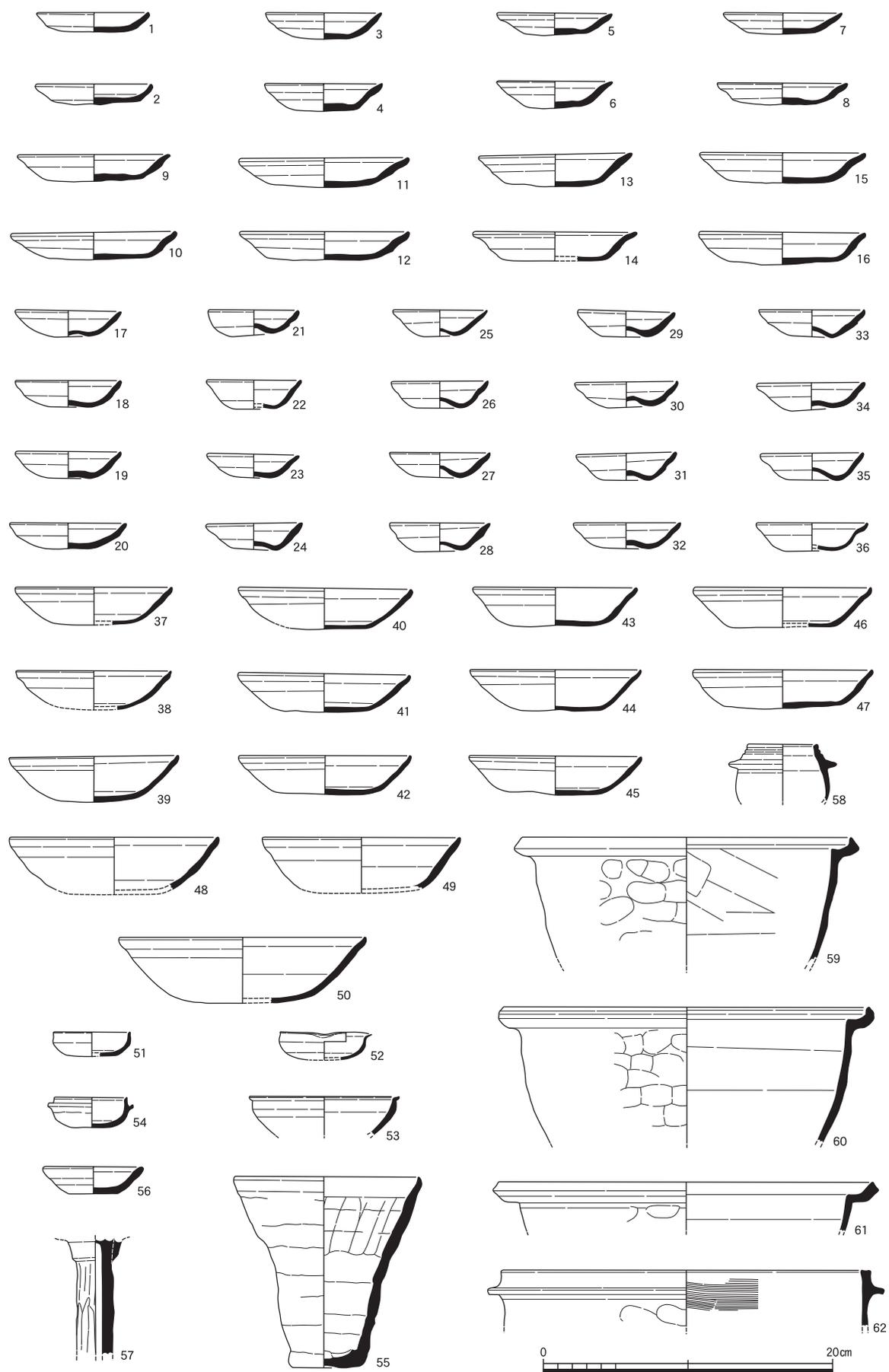


图116 SD19出土土器实测图1 (1 : 4)

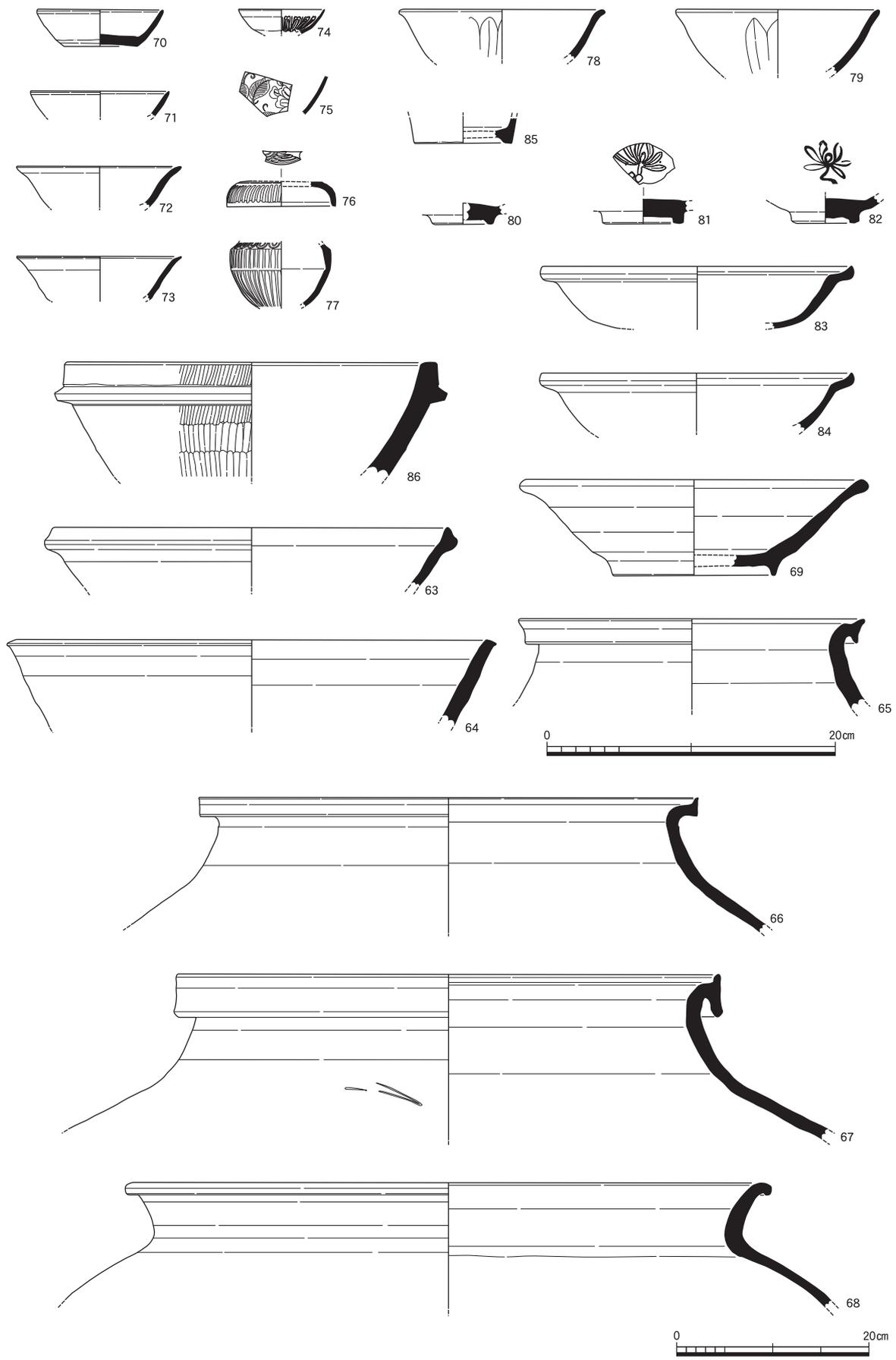


图117 SD19出土土器实测图2 (1:4、1:6)

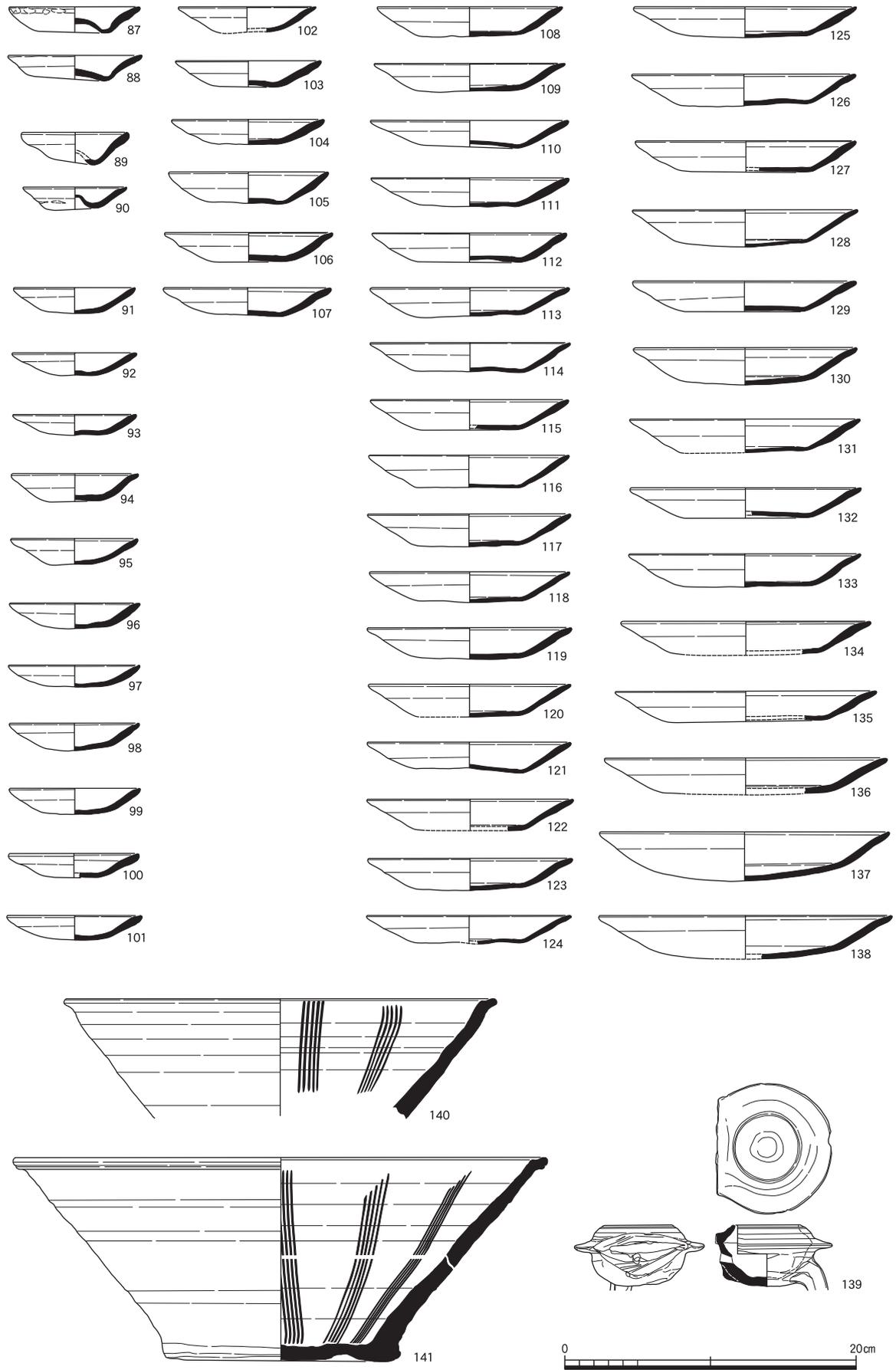


图118 SD166下層出土土器実測図 (1 : 4)

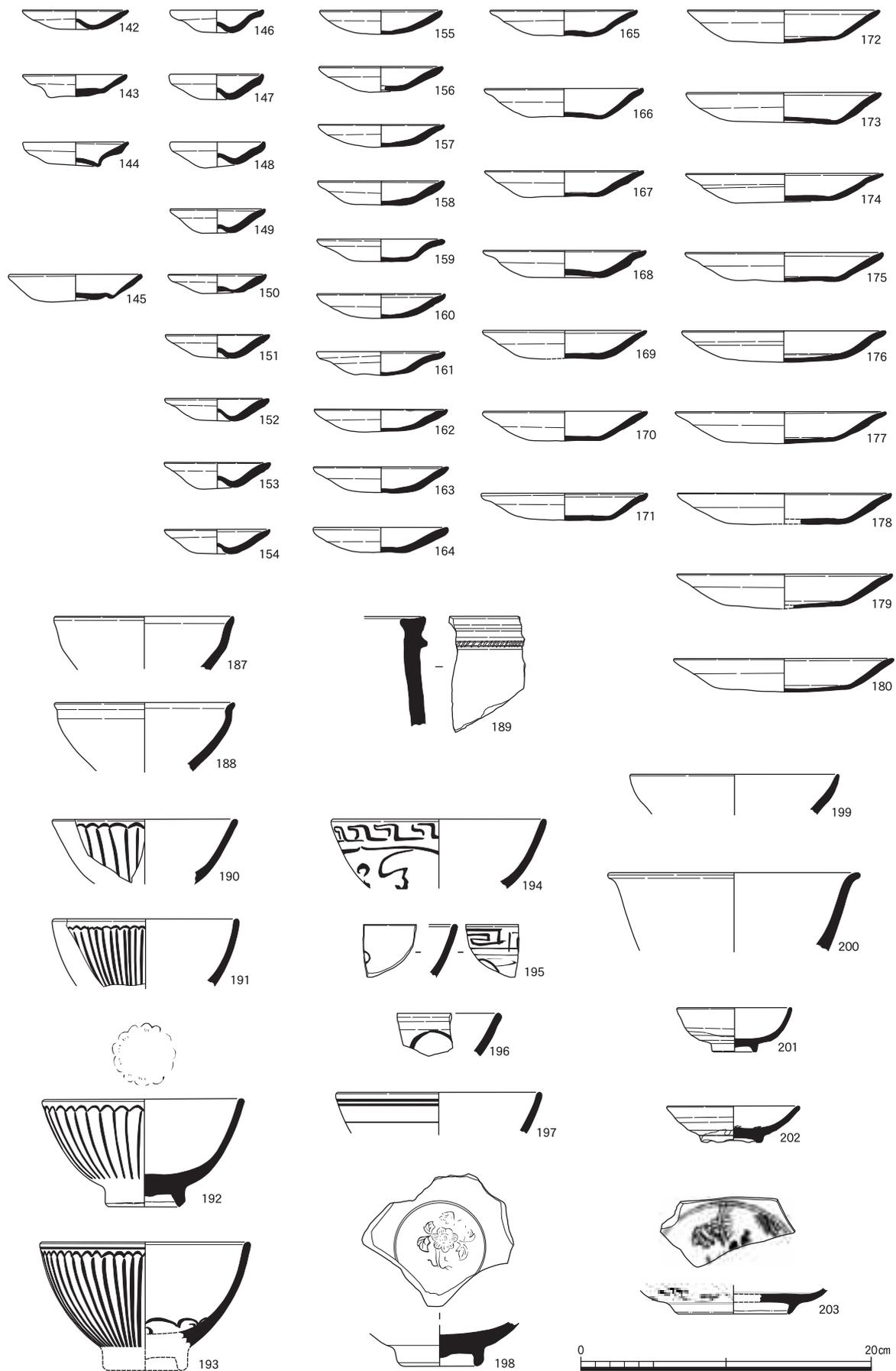


图119 SD218出土土器实测图 (1 : 4)

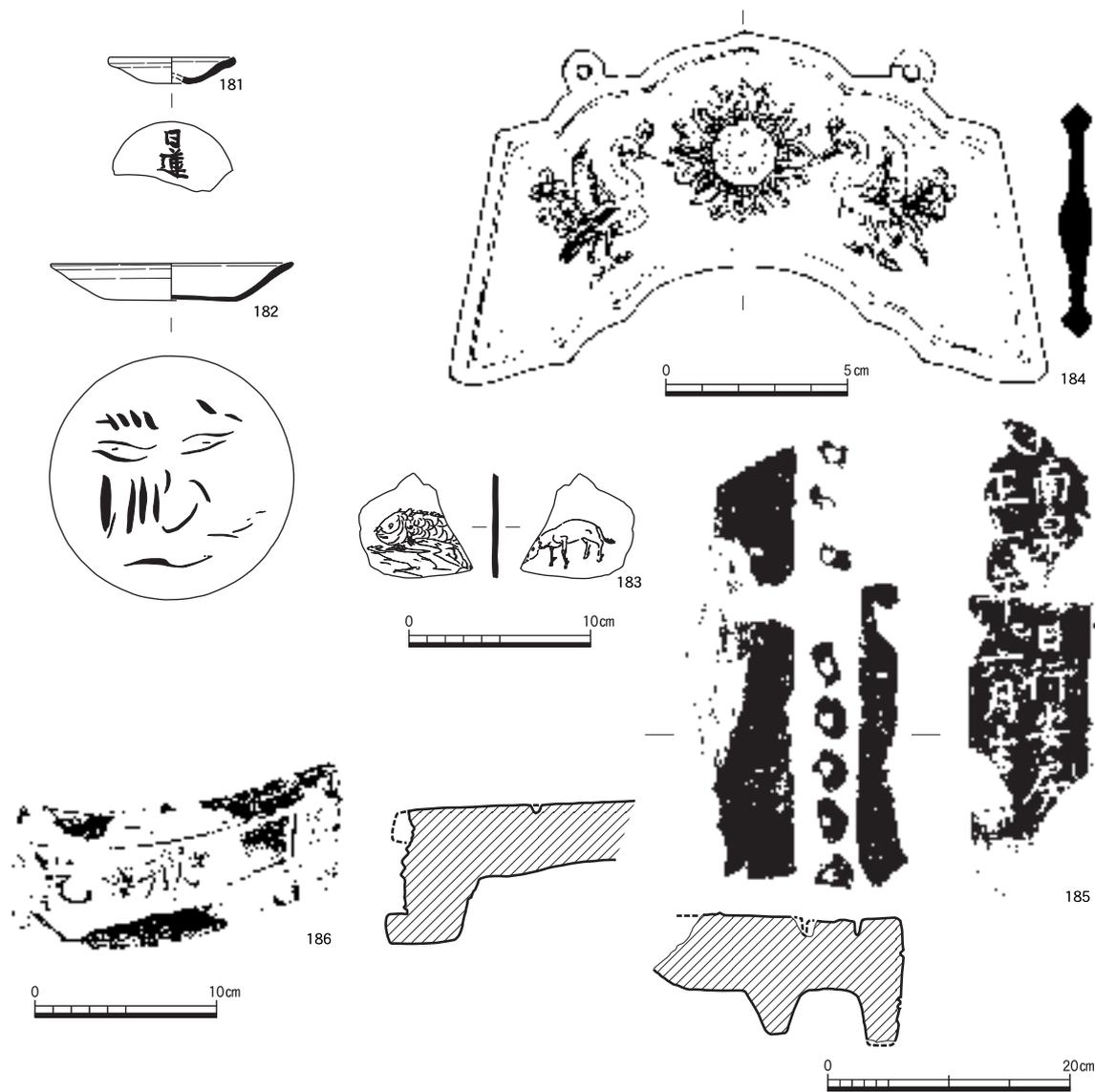


図120 遺物実測図（1：2、1：4、1：6）

(87～141) はこの時期前後に属すると考えられる。SD166下層からは土師器皿（87～138）、瓦器釜（139）、焼締陶器播鉢（140・141）などが出土した。赤色系土師器皿（87・88）は少ない。白色系土師器皿にはヘソ皿（89・90）をはじめ、小型（91～101）から大型（136～138）まで様々な口径のものがある。瓦器釜（139）は小型で鐙が巡り、3方に脚が付く。焼締陶器播鉢は内面に5条一組の播目を施す。信楽産である。

天文五年（1536）には法華の乱により本國寺が全焼するが、その後天文十六年（1547）には再建される。また、旧境内の一部には天文十七年（1548）に細川春元が八条猪熊戒光寺薬師堂を移築される。SD207埋土からは「戒光」銘軒平瓦（186）が出土した。SD218はSD207よりも古い。これらのことからSD166上層出土土器、SD218出土土器（142～180・187～203）はこの時期以前に属すると考えられる。SD218からは土師器皿（142～180）、施釉陶器碗（187・188）・鉢（189）、中国製青磁碗（190～198）、白磁碗（199～202）、中国製青花皿（203）などが出土した。赤色系土師器皿は少なく、小型皿（142～144）・大型皿（145）がある。白色系土師器皿にはヘソ皿（146～154）

のほか小型（155～164）から大型（172～180）まで様々な口径のものがある。

小結 今回の調査では、平安時代から江戸時代の遺構・遺物を大量に検出し、当地域の変遷が明らかとなった。

平安時代以前の遺構は少ないが、斜方向の溝を数条検出し、自然地形に沿った流路と考えられる。遺物は出土していないため、時期は不明であるが古墳時代などの可能性がある。

平安時代にはやや遺構が増加するが、後世の遺構・攪乱のため部分的に残存する。調査地は、五町の北半分にあたり、6トレンチで楊梅小路南側溝SD19を検出した。また、五町北西部（4トレンチ）で大規模な掘立柱建物を2棟検出し、北半部（4・5トレンチ）では井戸、土壙、柱穴などが散在し、中期から後期にかけて宅地となっていたことがわかる。建物などの規模は不明であるが、これらの遺構が猪熊殿に関連した可能性は高い。また、平安時代後期に実施された緑灰色砂泥の整地部分が残存する。

鎌倉時代から室町時代には、遺構・遺物共に増加する。井戸、土壙、柱穴などが急増し、以前に比べ土地の利用頻度が高くなったことを示す。室町時代前期には当地域に本國寺が創建され、調査地は境内の北東部に位置する。大規模な建物・施設などの遺構は検出されておらず、雑舎などを想定することができよう。また、象嵌高麗青磁瓶、吉州窯鉄絵瓶、吉州窯玳瑁蓋などの輸入陶磁器類の優品が多数出土し、当該期の寺勢を示唆する遺物といえよう。

室町時代末には、調査地内では幅1～2m程度のL字形やクランク形のV字形溝が多く造られ、人為的に埋められ、頻繁に造り替えられる。これらの溝は柵や土塁などと組み合って境内を複雑に区画したと推定できる。さらに、幅5m以上の南北溝SD166なども造られている。『二水記』に「……本國寺要害馳走」とある状況を彷彿とさせる。

その後、天文法華の乱（天文五年、1536年）には全焼し、溝などがある程度埋められる。火災の際の焼土は、SD166などに集められる。その11年後の天文十六年（1547）には、再建が始まり、溝などが完全に埋められ、かなりの建物・施設が建てられる。

江戸時代の段階では、遺構・遺物がやや減少するが、境内の重要部になったと推定できる。4トレンチで大規模な礎石建物を検出した。また、5トレンチでは大規模な舟入を検出し、堀川から船を引き入れたと想定できる。その後、境内には、ゴミ処理土壙などが多く造られる。調査区は、主要堂舎からやや外れた場所となったと思われる。

本國寺は昭和47年に当所から山科の地に移転するが、江戸時代以降の遺構については調査対象としておらず、また移転時に壊されたものと考えられ、把握できていない。

26 平安京左京七条三坊十五町

経過 今回の発掘調査は、柴田法衣店建築工事に伴うもので、当地域は、推定平安京左京七条三坊十五町、および七条坊門小路に該当するため、調査を実施した。

調査地内では、まず京都市文化観光局文化財保護課が試掘調査を行い路面・側溝が残存していたため発掘調査となった。南北4m、東西10mの長方形の調査区を設定し、機械により現代・近代層を掘削し、その後手掘りで調査を実施した。平面実測・写真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層近現代盛土層（約1m）、第2層暗茶灰色泥砂層（0.15～0.25m）、第3層黄灰色砂泥を中心とした層（平安時代後期から室町時代の路面整地層：約0.25m）、第4層茶灰色砂泥（整地層：0.15m）、第5層灰色粗砂層（整地層：0.2～0.3m）、第6層黄灰色粗砂・茶褐色砂礫層（地山）である。第3層上面で各時期の遺構を検出した。

平安時代後期の遺構には、土壇、柱穴、路面および北側溝などがある。柱跡は調査区北東で検出し、底部に礎板を据えたものも見られる。

鎌倉時代の遺構には、土壇、路面および北側溝などがある。

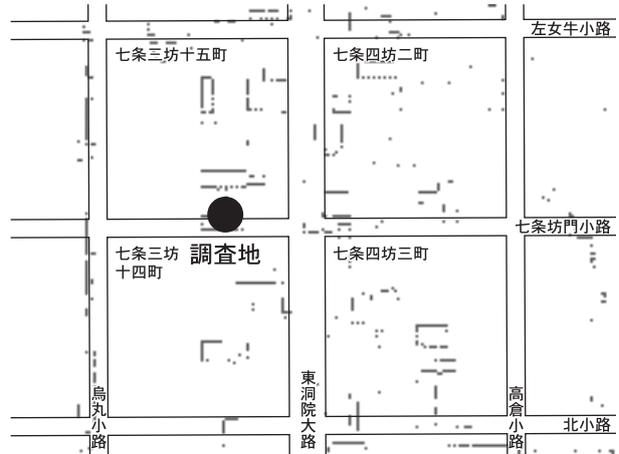


図121 調査位置図（1：5,000）

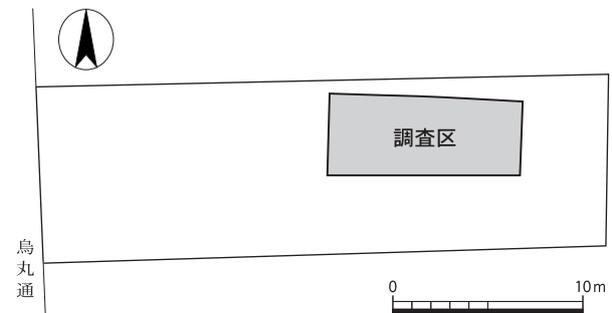
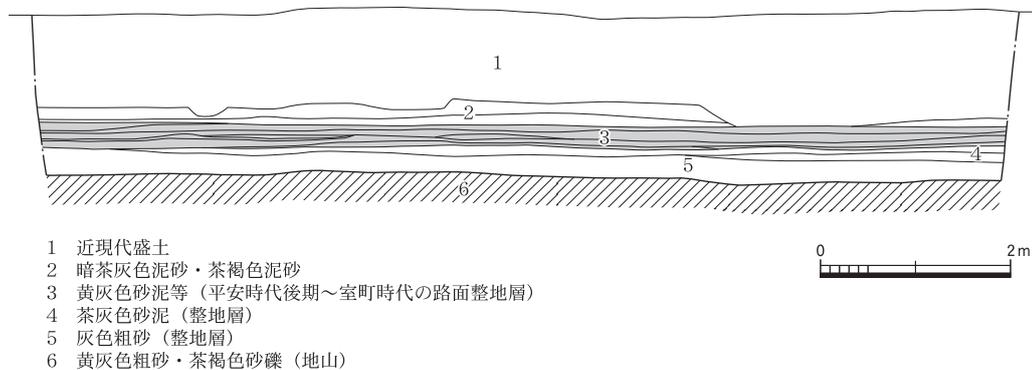


図122 調査区配置図（1：400）



- 1 近現代盛土
- 2 暗茶灰色泥砂・茶褐色泥砂
- 3 黄灰色砂泥等（平安時代後期～室町時代の路面整地層）
- 4 茶灰色砂泥（整地層）
- 5 灰色粗砂（整地層）
- 6 黄灰色粗砂・茶褐色砂礫（地山）

図123 南壁断面図（1：80）

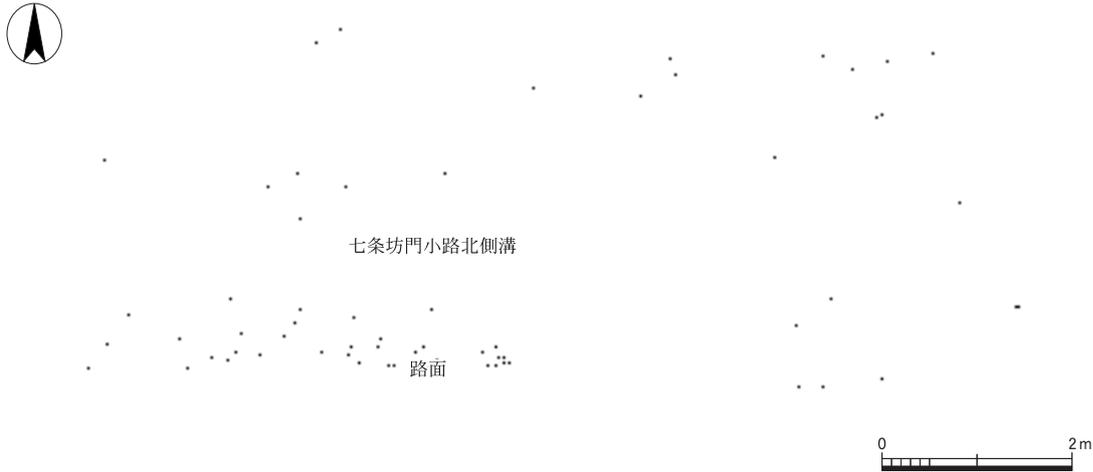


図124 遺構平面図（1：80）

室町時代の遺構には、土壌、柱穴、路面および北側溝などがある。土壌は掘形内に多量の礫が含まれる。

各時期の路面は調査区南側で検出し、側溝南肩口から幅0.7～0.8m確認し、南に続く。路面は部分的に礫を敷き、中央からやや北側に0.01～0.015m傾斜する。路面は4面確認し、北側溝と対応する。側溝は幅1～1.2m、深さは0.15～0.7mである。埋土は6層で、1・2層は室町時代、3・4層は鎌倉時代、5層は平安時代後期の遺物を包含する。

遺物 遺物整理箱で18箱出土した。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦器、陶器、磁器、金属製品、石製品、骨などがある。弥生土器は砂礫層に含まれるが少量・小片である。平安時代後期から室町時代の土器類は、側溝からまとまって出土した。

小結 今回の調査では、平安時代から室町時代の遺構を多数検出した。調査区南部で検出した路面および側溝は、条坊推定復元から七条坊門小路路面と北側溝に推定できる。本調査でこれらの変遷を確認したことは、大きな成果である。ただ、調査区が狭小なため、十五町内の遺構は調査区外に続き、遺構の性格については不明な点が多い。しかし、周辺の調査成果と合わせて、当該地の変遷を知る上での貴重な資料となった。

『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

27 平安京左京八条三坊二町 (図版13)

経過 今回の発掘調査は、下京区役所建設工事に伴う2回目のもので、当地域は、推定平安京八条三坊二町にあたるため、調査を実施した。

調査では、1977年の1次調査の南側に、南北8m、東西15mの長方形の調査区を設定した。機械により現代・近代層を掘削し、その後手掘りで調査を実施した。平面実測・写真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層近現代盛土層(約1.8m)、第2層耕土・床土層(約0.2~0.3m)、第3層茶灰色泥砂層(約0.1m)、第4層暗褐色砂礫層(地山)である。第3層上面で第1面、第4層上面で第2面の遺構を検出した。

第1面では、調査区全域で東西・南北方向の耕作畝、道路を、中央部では漆喰作り円形井戸を検出した。遺構の時期は、近世以降に属する。

第2面では、調査区南側は南に落込みで顕著な遺構は認められない。北側では中央部で東西方向の溝2条、西部で逆L字形の溝、中央北辺・東部で井戸、全域で土壌、柱穴を検出した。東西溝は幅約0.2m、深さ約0.2mである。井戸には方形縦板組、円形石組み、素掘りのものがある。柱穴は散在し、建物としてまとまらない。遺構の時期は、鎌倉時代以降に属する。

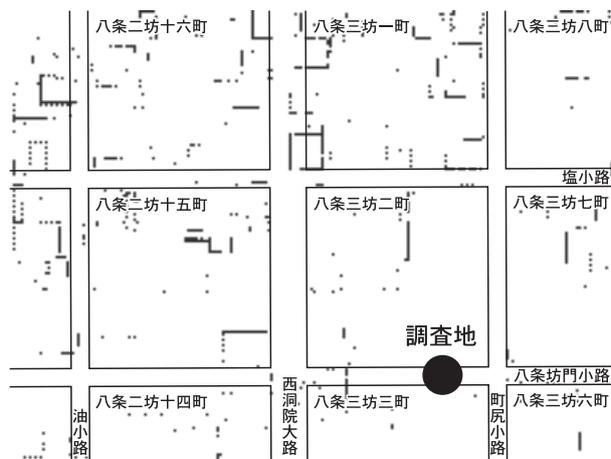


図125 調査位置図 (1:5,000)

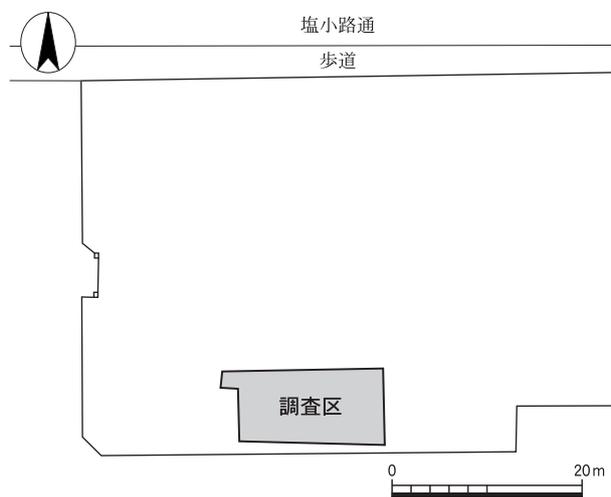


図126 調査区配置図 (1:800)

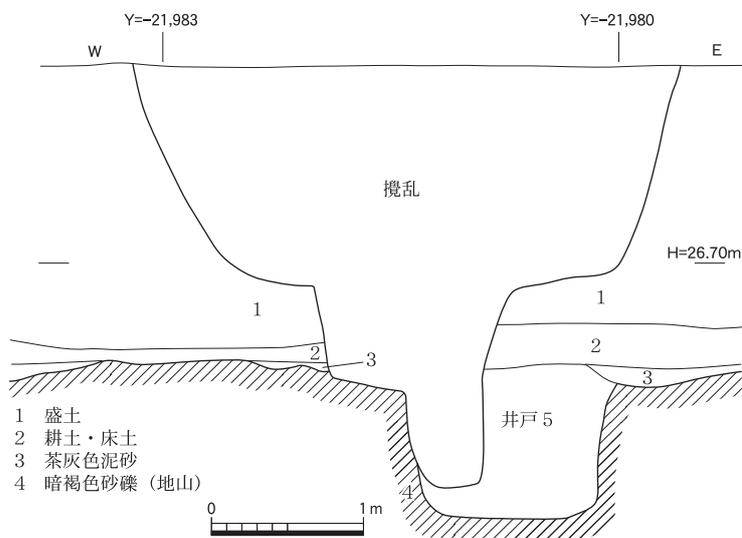


図127 北壁断面図 (1:50)

遺物 遺物整理箱で14箱出土した。遺物には土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器、瓦類、銭貨などがある。時期は、鎌倉時代から近世で、中世の遺物が大半を占め、他の時代の遺物は少ない。落込みからは中世の遺物が比較的まとまって出土した。

小結 今回の調査では、中・近世の遺構が多く、当地域の変遷が明らかとなった。鎌倉時代以前の遺構はほとんどないが、中世以前の遺構では鎌倉時代の井戸を3基検出し、東西溝は条坊推定復元から八条坊門小路北側溝の可能性はある。

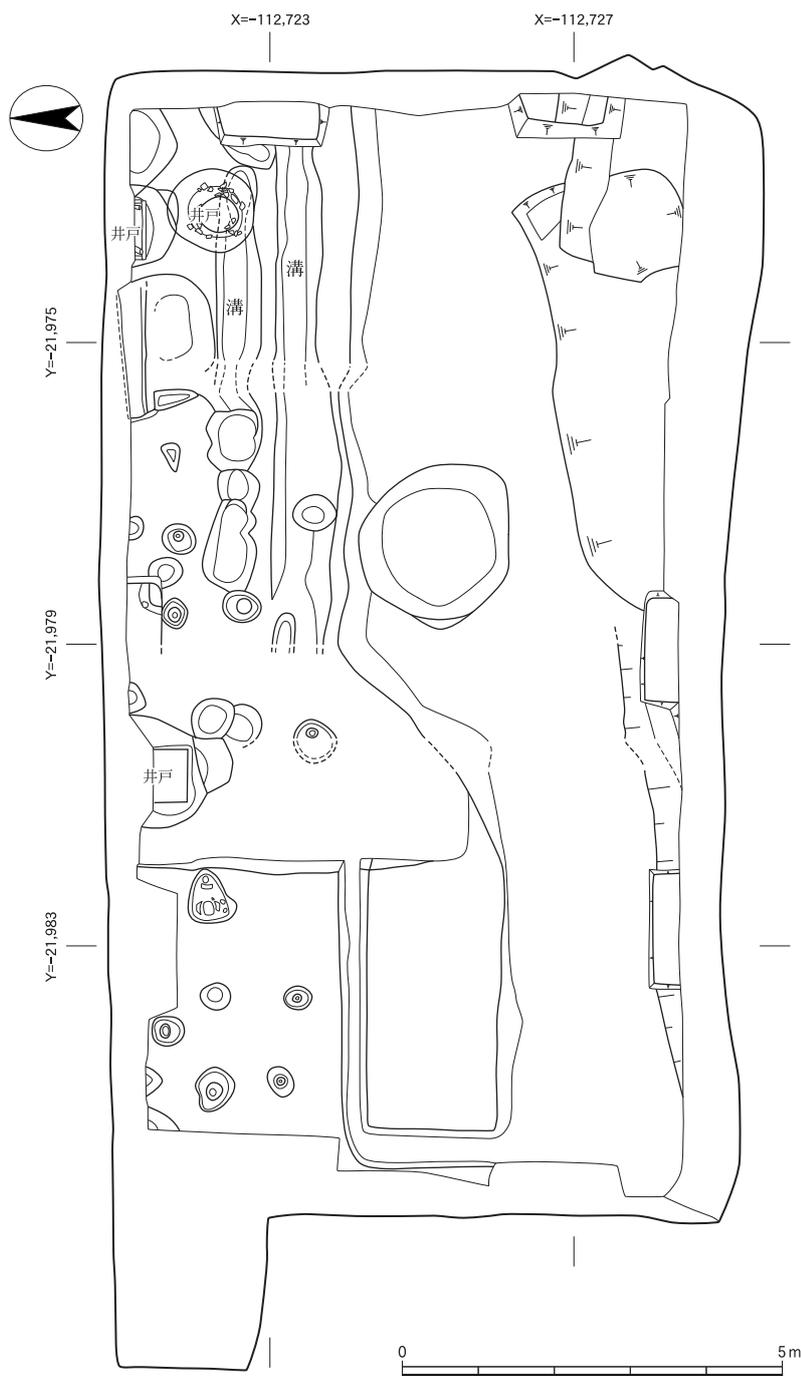


図128 遺構平面図（1：100）

28 平安京左京九条三坊五町

経過 今回の発掘調査は、若杉学園園舎建設工事に伴うもので、当地域は、推定平安京左京九条三坊五町にあたるため、調査を実施した。

調査では、南北10m、東西7mの長方形の調査区を設定した。機械により現代・近代層を掘削し、その後手掘りで調査を実施した。平面実測・写真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層近現代盛土層(0.5m)、第2層耕土・床土層(約0.1m)、第3層淡灰色泥砂層(約0.1m)、第4層暗茶色礫砂層(約0.2m)、第5層赤褐色砂礫層(地山)である。第2層上面で第1面、第3層上面で第2面の遺構を検出した。

第1面では、調査区全域で東西方向の耕作溝を等間隔で検出した。遺構の時期は、近世以降に属する。

第2面では、調査区北東側に落込みを検出した。他に顕著な遺構は認められない。遺構の時期は不明である。

第3層は部分的に堆積し、平安時代中期の遺物を包含する。第4層中には、弥生土器を包含する。

遺物 遺物整理箱で1箱出土した。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、瓦類などがある。弥生土器は少量・小片で摩滅する。

小結 今回の調査では、近世以降の耕作のため削平を受け、遺構がほとんど残っていなかった。しかし、平安時代中期の包含層が残存し、周辺に当該期の遺構が存在する可能性が高い。

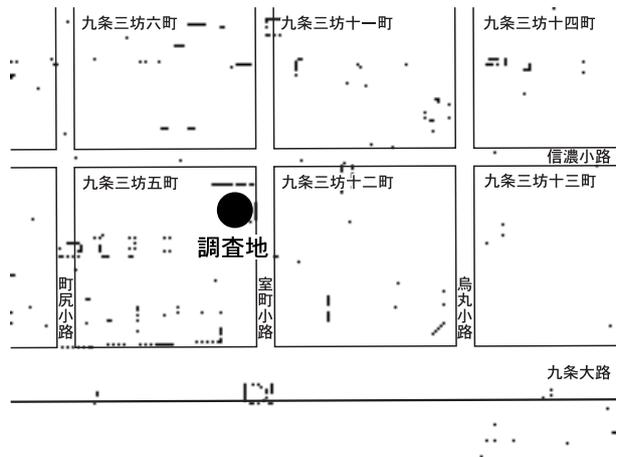


図129 調査位置図 (1:5,000)

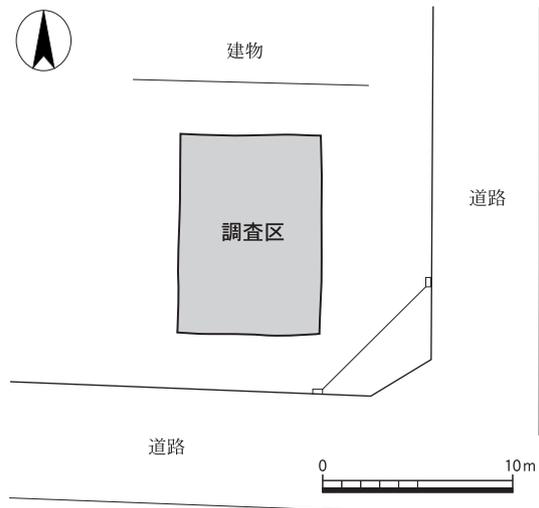


図130 調査区配置図 (1:400)

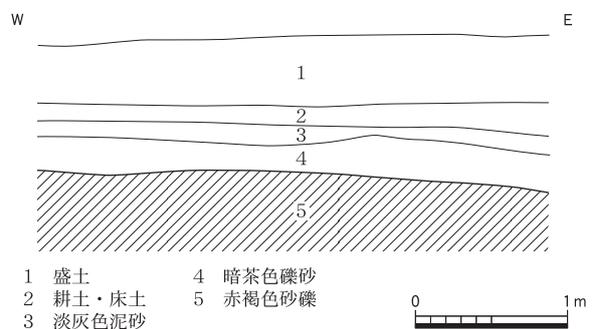


図131 中央セクション北壁断面図 (1:50)

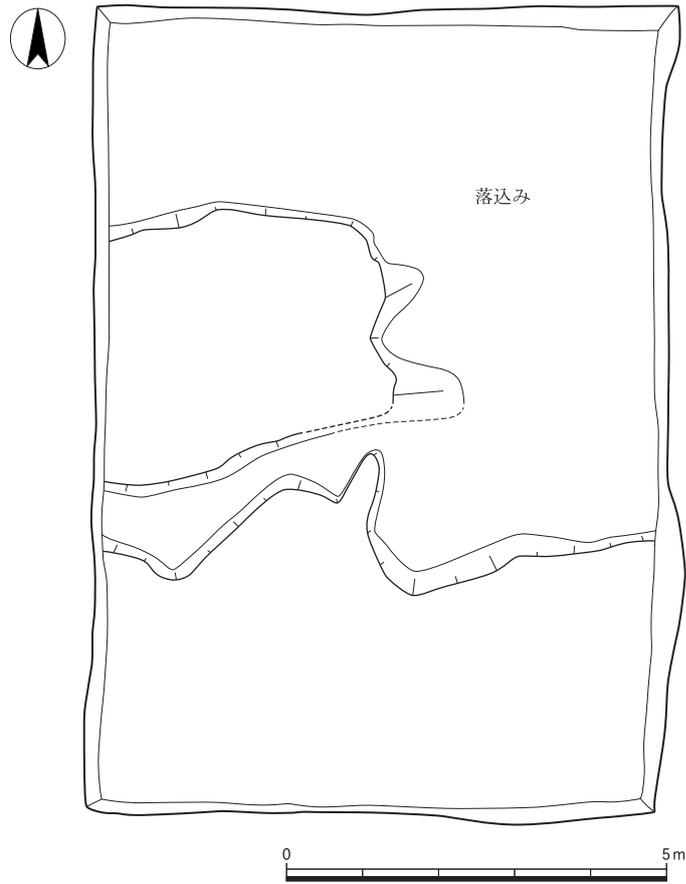


図132 第2面遺構平面図（1：100）



図133 第2面調査区全景（南から）

29 平安京左京九条三坊十六町

経過 今回の発掘調査は、京都駅南口アバンティ建設工事に伴うもので、当地域は、推定平安京左京九条三坊十六町にあたるため、調査を実施した。

調査地中央に2トレンチ（南北30m、東西60m）、北西部に1トレンチ（南北15m、東西45m）を設定したが、2トレンチは煉瓦造り建物と重複し、中央北辺を除いて攪乱部は埋め戻した。その後、2トレンチの南側に西から5トレンチ（南北8.2m、東西20m）、3トレンチ（南北30m、東西27m）、4トレンチ（南北6m、東西20m）、さらに調査地南西部に6トレンチ（南北21m、東西25m）の調査区を設定し、随時拡張した。機械により現代・近代層を掘削し、その後手掘りで調査を実施した。平面実測・写真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、各調査区によって異なるが、第1層近現代盛土層（約0.5m）、第2層耕土・床土層（約0.15m）、第3層暗灰色砂泥層（平安時代から室町時代の包含層：0.1～0.4m）、第4層灰色砂礫層・灰色細砂層（地山）である。1トレンチでは第3層はなく、第4層上面で遺構を検出した。4・6トレンチでは第3層は薄い、東側の3トレンチでは厚く堆積する。2トレンチのみ第3層上面、他のトレンチは第4層上面で遺構を検出した。

1トレンチは、調査区全域で井戸を10基検出した他は、顕著な遺構は確認できなかった。井戸はSE6を除き方形ないし円形の掘形で、

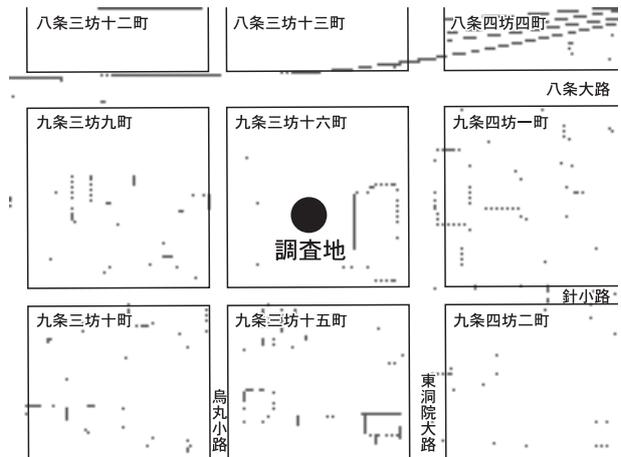


図134 調査位置図（1：5,000）

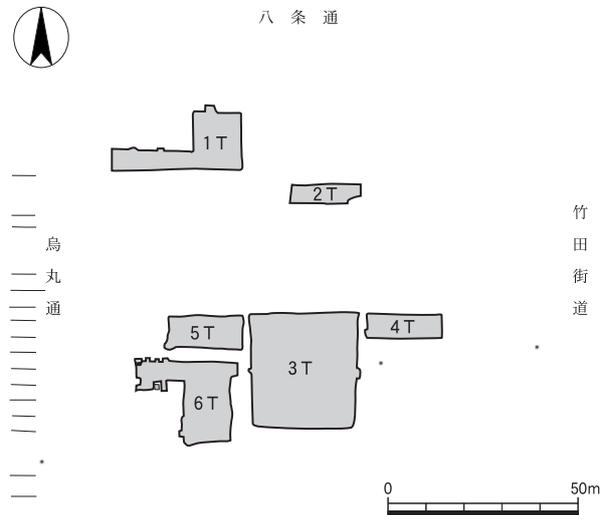


図135 調査区配置図（1：2,000）

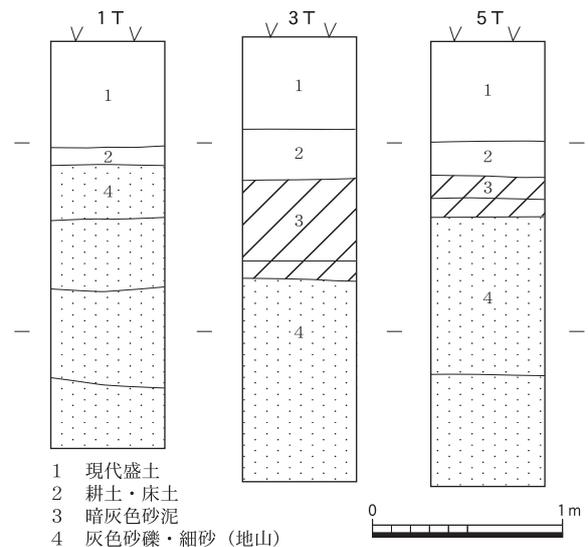


図136 基本層序断面図（1：40）

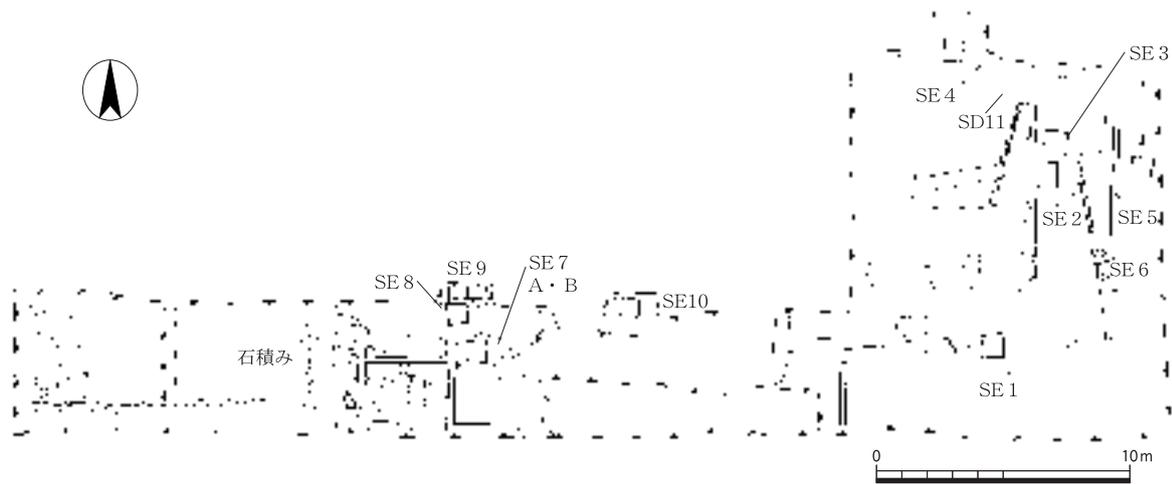


図137 1トレンチ遺構平面図（1：300）

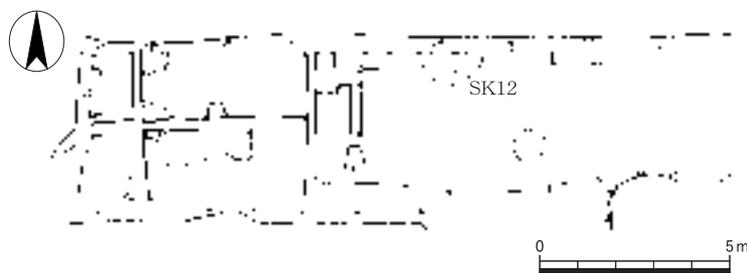


図138 2トレンチ遺構平面図（1：200）

井戸枠は横棧縦板組である。大半が上面が削平され残存状態は悪い。遺構の時期は鎌倉時代に属する。

2トレンチでは、攪乱が大半で中央北辺に遺構面が残り、土壙・柱穴を検出した。第4層上

面では遺構は確認していない。遺構の時期は中世に属する。

3トレンチでは、調査区南西から北東部に集中して遺構を検出した。井戸枠は横棧縦板組のものが大半を占めるが、SE28は八角縦板組である。全域で土壙を多数検出した。形状・規模は様々であり、土師器が多量に出土したものもある。調査区北東部で斜方向の河川を検出したが、遺物は出土しなかった。遺構の時期は平安時代後期から室町時代に属する。SE19は飛鳥時代後期の遺物が出土した。

4トレンチでは、攪乱が多く、中央部と西辺で遺構面が残り、土壙、南北溝を検出した。土壙は不整形の土壙である。南北溝は幅0.6m、深さ0.2mで両端は攪乱に切られる。遺構の時期は中世に属する。

5トレンチでは、調査区全域で柱穴を多数検出し、中央部と東部で南北柵2条、東西柵1条、西部で掘立柱建物1棟としてまとまった。建物は2間×2間（東西1.8m・2.1m、南北2.3m・2.0m）総柱である。東部で井戸を検出した。掘形は方形で井戸枠は残存していない。遺構の時期は井戸は平安時代後期、他は中世に属する。

6トレンチでは、調査区全域で柱穴を多数検出し、西部で掘立柱建物1棟としてまとまった。建物は3間×3間（東西2.1m・2.5m・2.2m、南北2.1m・2.2m・2.8m）総柱である。井戸は北部を中心に5基検出した。掘形は方形で横棧縦板組である。遺構の時期は、井戸は平安時代後期から鎌倉時代、他は中世に属する。

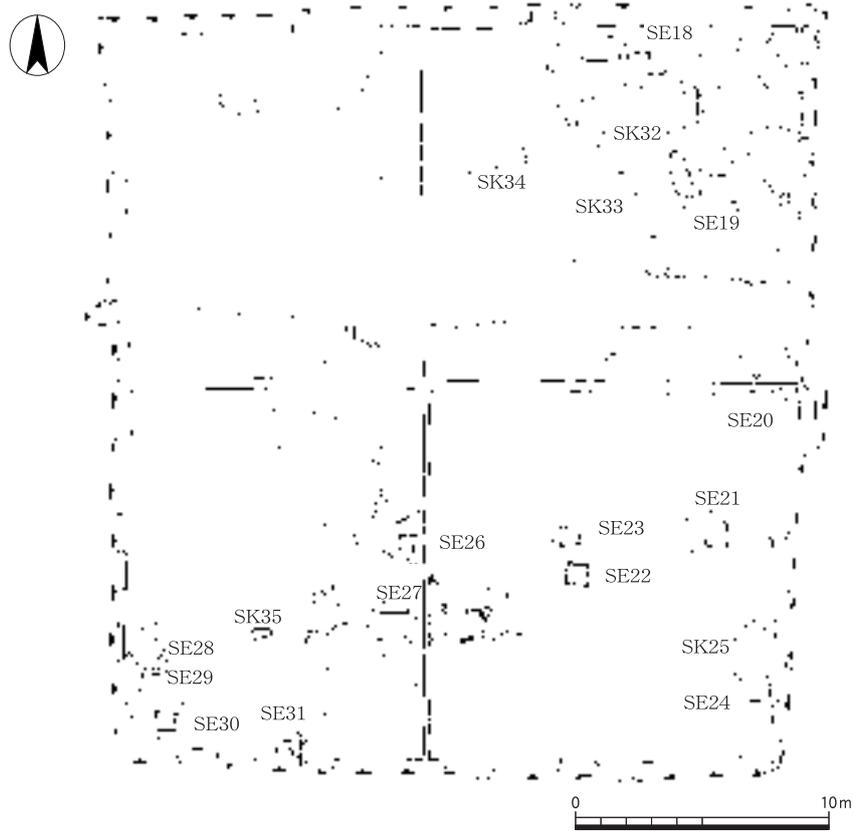


図139 3トレンチ遺構平面図 (1 : 300)

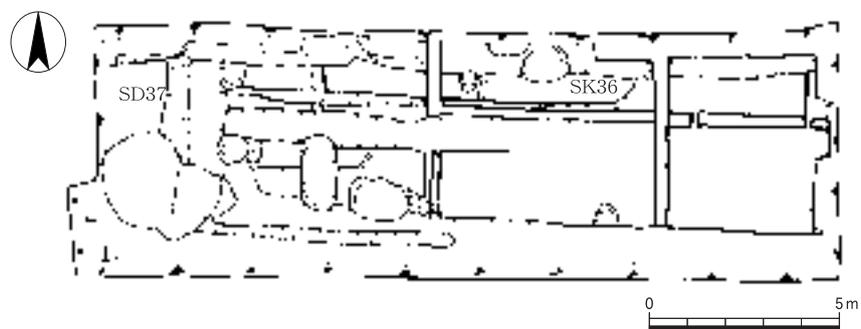


図140 4トレンチ遺構平面図 (1 : 200)

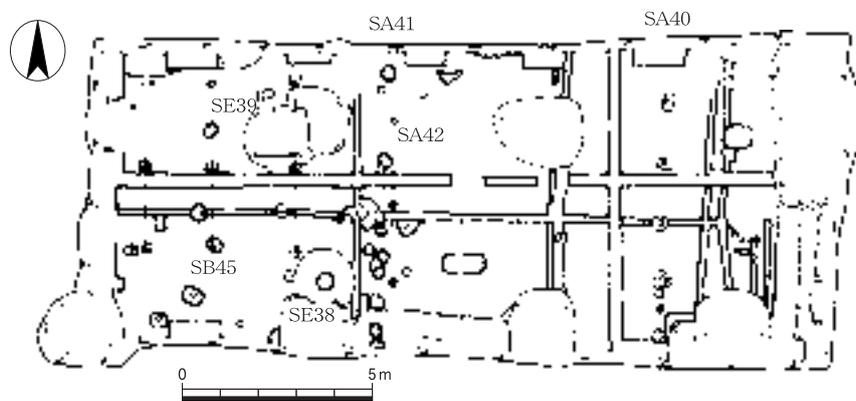


図141 5トレンチ遺構平面図 (1 : 200)

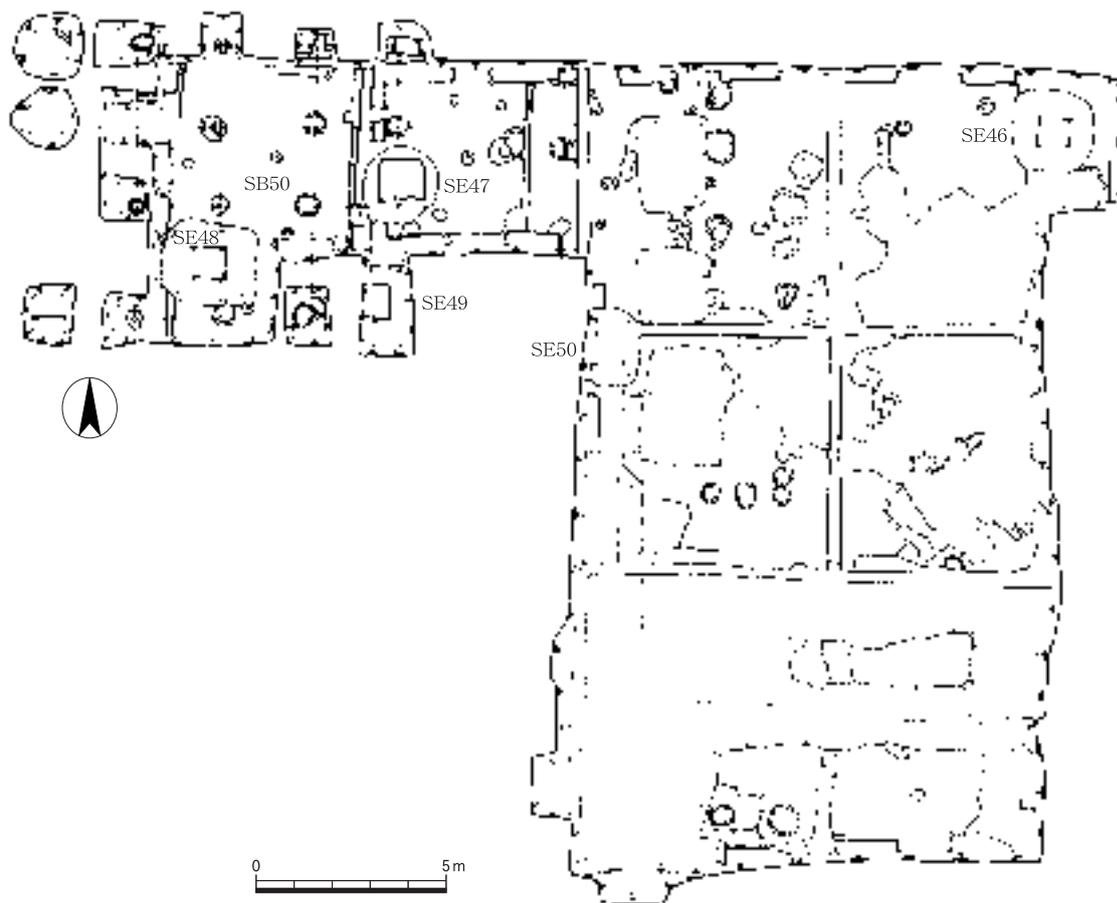


図142 6トレンチ遺構平面図（1：200）

遺物 遺物整理箱で約150箱出土した。遺物には、土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器、瓦類、金属製品、木製品などがある。土器類は第3層や井戸からまとめて出土し、平安時代から室町時代初めのものを含むが、平安時代後期から鎌倉時代のものが主体である。特に輸入陶磁器が多いことが注目でき、唐三彩陶枕が1点出土した。瓦は少なく、平安時代後期のものが数点ある。金属製品には銭貨、独鈷杵がある。木製品には横櫛、漆器、斎串があり、井戸から出土した。

小結 今回の調査では、平安時代から室町時代初めの遺構・遺物を多数検出し、当地の変遷がかなり明らかになった。

最も古い遺構としては、飛鳥時代後期の井戸がある。他に同時期の遺構が全くないため、性格は不明である。平安時代以降の遺構としては、井戸、建物、柵、溝などを検出した。特に井戸は形態や年代が類似し、井戸相互の間隔がほぼ一定している点で注目できる。また、第3層上面は削平を受けており、本来はこの層の上面で遺構が存在した可能性が高い。

当該地は平安時代から鎌倉時代を通して住居の場となっていたが、室町時代頃には急速に衰退したことが明らかとなった。

『平安京左京九条三坊跡 京都駅南口第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財調査概報 昭和54年度』
1980年報告

30 平安京右京北辺三坊二町 (図版14)

経過 今回の発掘調査は、大將軍小学校校舎建設工事に伴うもので、当地域は、推定平安京右京北辺三坊二町にあたるため、調査を実施した。

調査は、調査対象地北側に東からA区(南北4.6m、東西8.2m)、B区(南北4.6m、東西6.5m)、南側に西からC区(南北4.9m、東西3.1m)、D区(南北4.9m、東西6.5m)、E区(南北4.9m、東西2.2m)、F区(南北4.9m、東西3.1m)の調査区を設定し、随時拡張した。機械により現代・近代層を掘削し、その後手掘りで調査を実施した。平面実測・写真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、各調査区によって異なるが、D区を挙げておく。第1層近代現代盛土層(0.35m)、第2層黒褐色砂泥層(約0.1m)、第3層淡黄灰色砂泥層(約0.5m)、第4層黄褐色砂礫層(地山)である。第2層上面で第1面、第3層上面で第2面、第4層上面で第3面の遺構を検出した。

A区では、調査区全域に攪乱(旧校舎の基礎)が見られ、全域で東西、南北両方向の小溝群、中央部で柱穴を少数検出した。遺構は中世(室町時代か)に属する。

B区では、調査区中央から西側で湿地、南東部で弧状の溝(幅約1m、深さ約0.5m)を検出した。湿地は平安時代、溝は弥生時代に属する。

C区では2面の遺構面を確認した。第1面では調査区全域に攪乱(旧校舎の基礎)が見られ、調査区西端・中央(幅約0.8m、深さ約0.2m)、東端で南北溝、その間で土壌を検出した。遺構は中世に属する。第2面では調査区南東部で方形井戸、北側で溝(深さ約1m)を検出した。井戸は方形縦板組で(一辺0.8m)、底部中央が円形に凹む。井戸は平安時代、溝は弥生時代に属する。

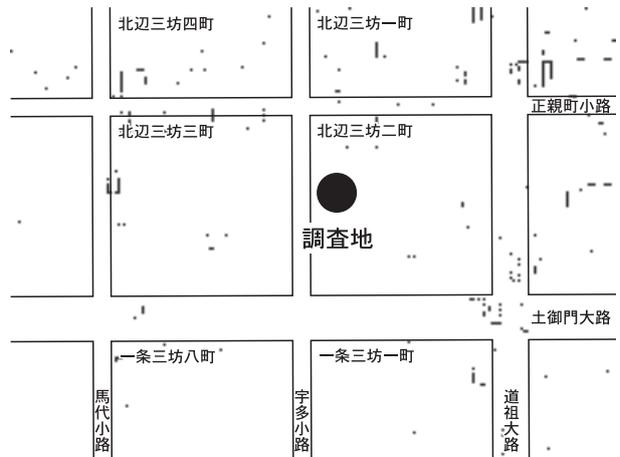


図143 調査位置図 (1:5,000)

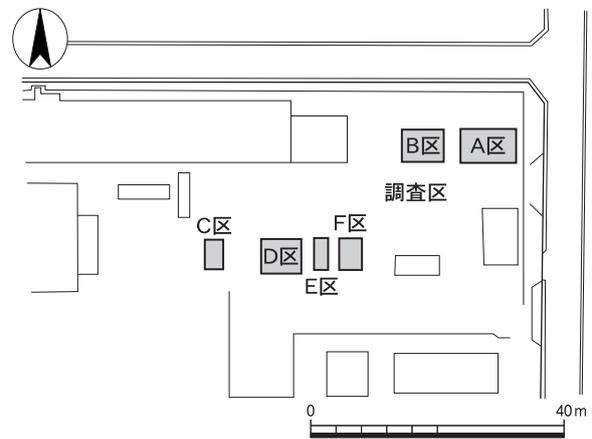


図144 調査区配置図 (1:1,200)

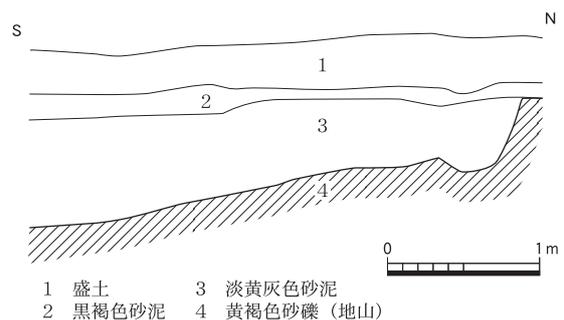


図145 D区西壁断面図 (1:50)

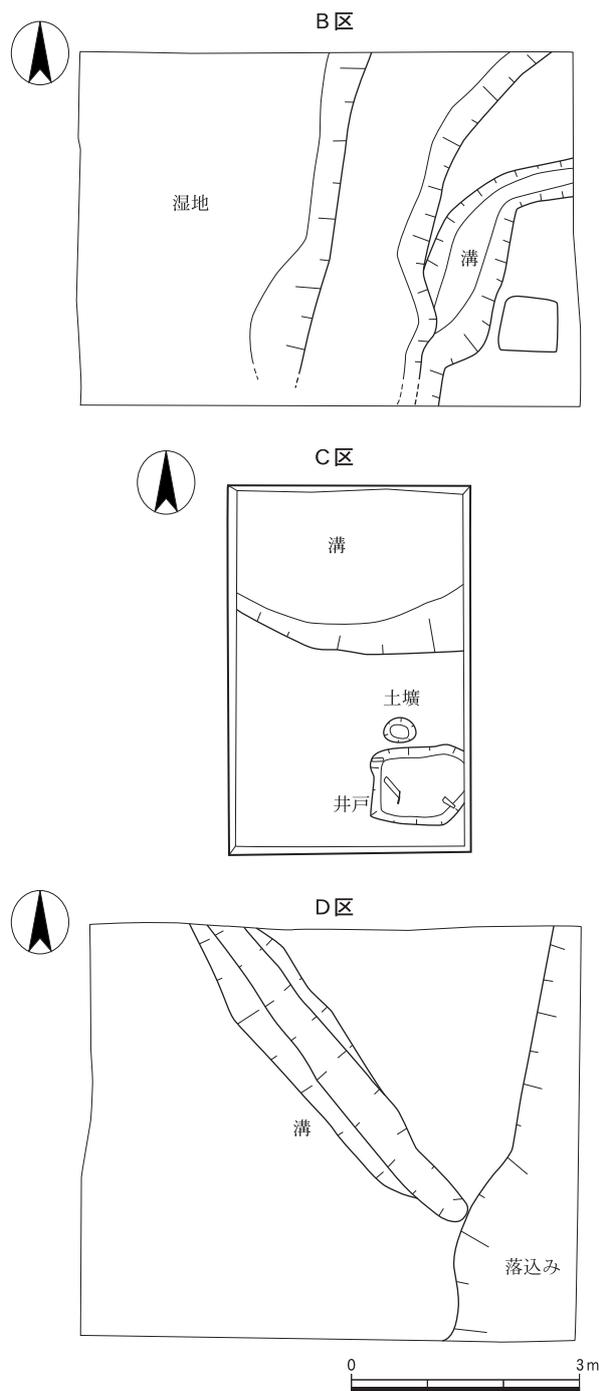


図146 B・C・D区遺構平面図（1：100）

D区では、3面の遺構面を確認した。第1面では調査区南側に攪乱（旧校舎の基礎）が見られ、同位置に柱穴列、その北側に東西溝を検出した。遺構は中世に属する。第2面では、東側で落込み、中央部で斜行溝、南西部で溝を検出した。落込み、溝の岸には杭列が若干残存する。南西部溝はC区南側溝に継続する。遺構は平安時代に属し、南西部溝（深さ約0.8m）は弥生時代である。第3面では中央部が弧状に落ち込む。時期不明である。

E区では、2面の遺構面を確認した。第1面では調査区中央に攪乱（旧校舎の基礎）が見られ、南側に柱穴列、その北側に東西溝、西側に南北溝、北側で北に落ちる落込みを検出した。柱穴列、東西溝、北側落込みはD区から継続する。遺構は中世に属する。第2面では、北側で落込みを検出し、D区から継続する。時期不明である。

F区では、2面の遺構面を確認した。第1面では調査区全域に攪乱（旧校舎の基礎）が見られ、南側に柱穴列、その北側に東西溝、中央に南北溝、北側東西溝を検出した。柱穴列、東西溝、北側東西溝はD・E区から継続する。遺構は中世に属する。第2面では、北側と南側で落込みを検出し、北側落込みはD・E区から継続する。時期不明である。

遺物 遺物整理箱で16箱出土した。遺物には弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、

瓦類、木製品などがある。弥生時代の溝からは、まとめて弥生土器、木製品が出土した。

小結 今回の調査では、校舎建設のため削平を受け、近世以降の遺構は残存していない。中世の遺構は全調査区で散在して検出し、特にD・E・F区南側では東西柵列、東西溝を検出したが性格は不明である。平安時代の遺構は、D・E・F区地区で包含層を検出し、B区で湿地、C区で井戸、D区で落込み・溝を散在的に検出したにとどまった。また、B・C・D区では、中世遺構面と同一面または下層で弥生時代の溝を検出し、周辺に当該期の集落が存在した可能性が高い。

31 平安京右京北辺四坊五町・史跡妙心寺境内 1

経過 今回の発掘調査は、妙心寺境内ゆりかご保育園園舎建築工事に伴うもので、当地域は、推定平安京右京北辺四坊五町、および妙心寺境内に該当するため、調査を実施した。

まず、調査地東側に南北9m、東西20mの長方形のトレンチを設定し、その後西側に幅3m、東西20mのL字形のトレンチを設定した。機械により現代・近代層を掘削し、その後手掘りで調査を実施した。平面実測・写真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。さらに南東側にトレンチを設定したが、近世の攪乱のみで遺構は検出できなかった。

遺構 調査区の基本層序は、第1層近現代盛土層（約0.3～0.5m）、第2層淡黄褐色混礫砂泥・黄褐色礫（地山）である。第2層上面で各時期の遺構を検出した。検出した遺構には、溝、柱穴、土壇、井戸などがある。

溝は、調査区南西部と東部で東西溝・南北溝を検出した。時期は、いずれも江戸時代後期に属する。

井戸SE1は、調査区西部で検出した。掘形は隅丸方形で、東西1.9m、南北2m、深さ1.8mで、素掘りである。埋土は、1層黒褐色混礫泥土、2層黄褐色混礫泥土で、1層から青磁、瓦器、須恵器、土師器、灰釉陶器、瓦など、2層から土師器、須恵器、瓦などが出土した。時期は平安時代後期に属する。

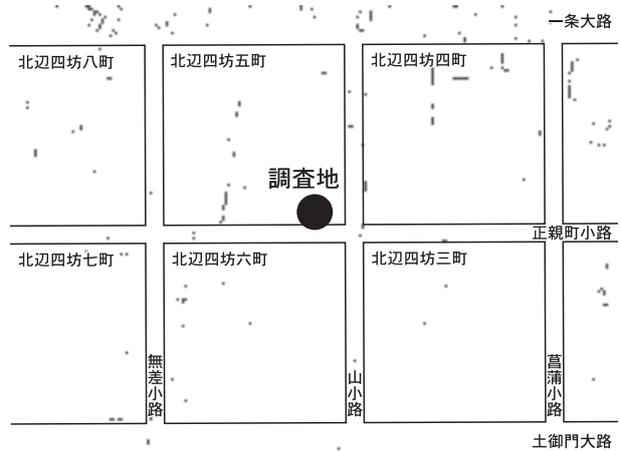


図147 調査位置図（1：5,000）

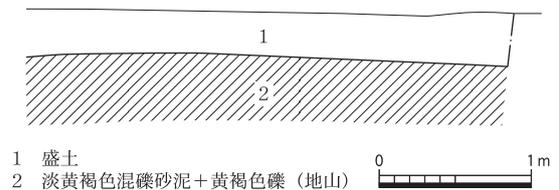


図148 東壁断面図（1：50）

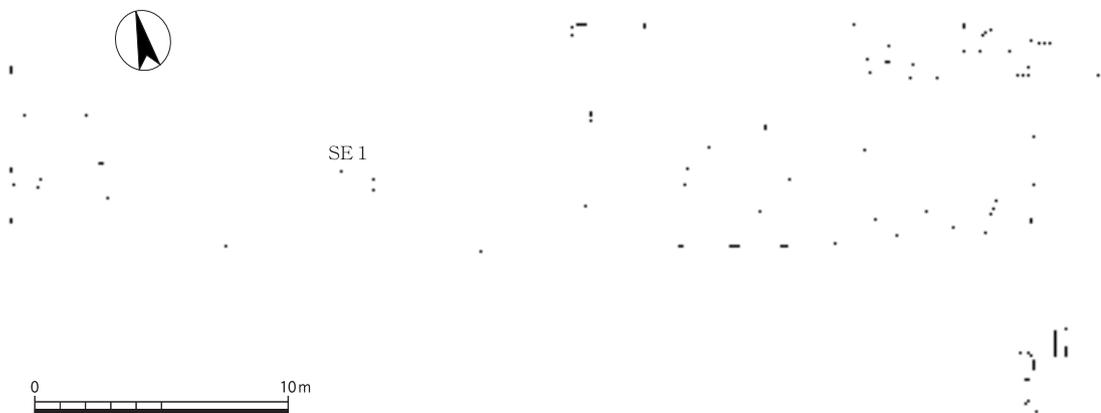


図149 遺構平面図（1：300）

遺物 遺物には土器類、瓦類、石製品などがある。時期は平安時代後期から近世で、近世のものが多く、他の時期のものは少ない。遺物は溝、井戸からまとまって出土し、攪乱からも出土した。

小結 今回の調査では、平安時代の井戸、近世の溝の他は攪乱墳が多く、遺構の残存状況は良くなかった。調査地は江戸時代に知勝院に関する建物の造営によって削平されたと考えられる。近世の溝は子院関係したものと推定できる。

また、調査区内に推定された正親町小路北側溝・山小路西側溝も、同様に削平されたと考えられる。

『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

32 平安京右京北辺四坊六町・史跡妙心寺境内 2

経過 今回の発掘調査は、妙心寺境内の微妙殿建築工事に伴うもので、当地域は、推定平安京右京北辺四坊六町・土御門大路、および妙心寺境内に該当するため調査を実施した。

調査地西側に南北15m、東西18m、幅2～3mの逆L字形の調査区（1・2区）、調査地東側に東西12.5m、幅3mの調査区（3区）を設定した。機械により現代・近代層を掘削し、その後手掘りで調査を実施し、平面実測・写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。さらに北側に調査区（4区）を設定したが、近世の攪乱のみで遺構は検出できなかった。

遺構 調査区の基本層序は、第1層近現代盛土層（約0.3～0.4m）、第2層黄褐色礫（地山）である。第2層上面で各時期の遺構を検出した。検出した遺構には、溝、柱穴、土塋などがある。

1・4区では、全域で土取穴を検出した。

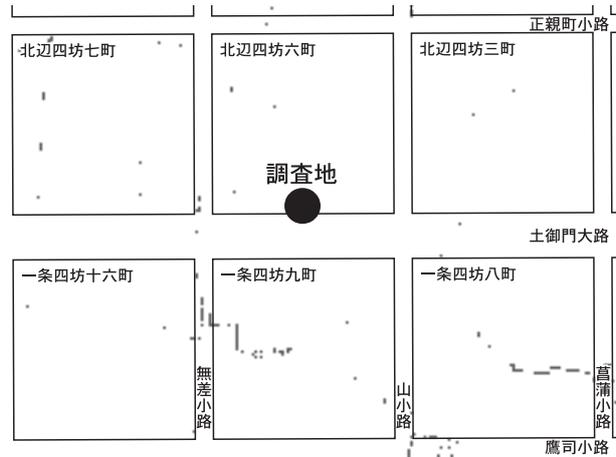


図150 調査位置図（1：5,000）

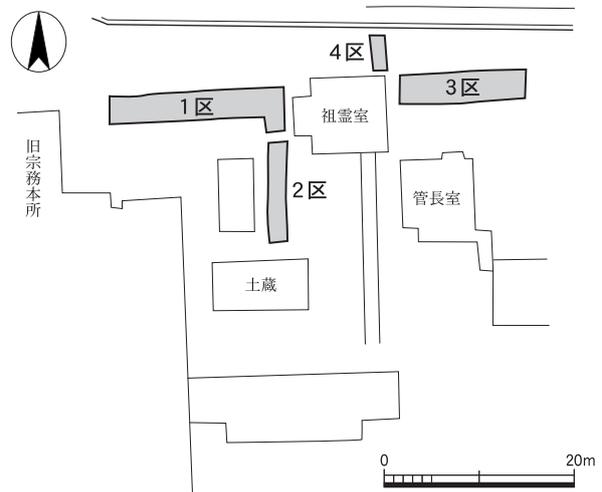


図151 調査区配置図（1：800）

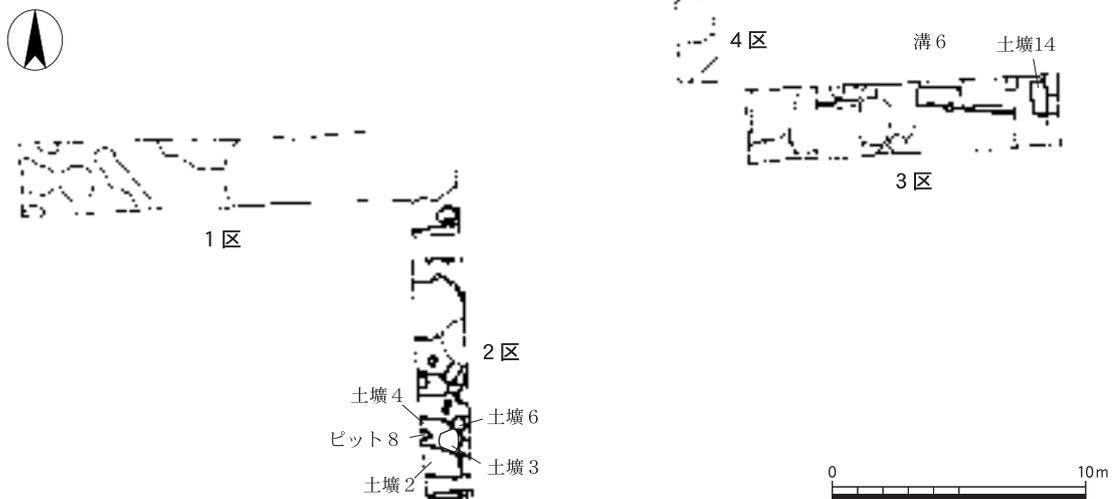


図152 遺構平面図（1：300）

時期は江戸時代以降に属する。

3区では、北辺で東西溝6、全域で土壙、柱穴を検出した。溝6は、幅約0.8m、深さ0.1mで、埋土中から土師器、緑釉陶器などが出土した。土壙は東側で数基検出し、不定形のものも多く、規模も様々である。溝6は平安時代前期、他の遺構の時期は室町時代に属する。

2区では、全域で土壙、柱穴を検出した。土壙は南側に多く、数基（土壙2～4・6）検出した。形態・規模共に多様である。柱穴は径0.3m程度の小型である。遺構の時期は室町時代以降に属する。

遺物 遺物は整理箱に8箱出土した。遺物には土師器、須恵器、緑釉陶器、磁器、陶器、瓦類などがある。時期は平安時代前期から近世で、近世のものも多く、他の時期のものは少ない。平安時代前期の遺物には、土師器杯・椀、緑釉陶器椀などがあり、溝6などから出土した。平安時代中期の遺物には、土師器皿、須恵器鉢、青磁・白磁椀などがあり、土壙、柱穴から出土した。

小結 今回の調査は、江戸時代以降の攪乱や削平が多く、平安時代や中世の遺構の残存状況は良くなかった。しかし、少数ではあるが、平安時代の遺構を検出したことは貴重な成果である。溝6は条坊推定復元や付近の立会調査から、土御門大路北側溝の可能性が高い。これより南側は大路路面となるが、平安時代中期の土壙、柱穴を検出し、当該期には路面部分の宅地化が開始されたと推定できる。

『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告 -』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊
1997年報告

33 平安京右京北辺四坊六町・史跡妙心寺境内3 (図版15)

経過 今回の発掘調査は、妙心寺境内の微妙殿建築工事に伴うもので、当地域は、推定平安京右京北辺四坊六町・土御門大路、および妙心寺境内に該当するため調査を実施した。

調査地西側に1区(南北32m、東西6m)、北側に2区(南北6m、東西23m)、南東部に3区(南北10m、東西6m)の調査区を設定した。機械により近代・現代層を掘削し、その後手掘りで調査を実施し、平面実測・写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、各調査区によって異なるが、第1層近現代盛土層(約0.5m)、第2層黄褐色泥砂層(地山)で、1区・3区の南側では第2層の上面に暗褐色泥砂層(0.2~0.3m)が堆積する。第2層上面で中世以降の遺構を検出したが、平安時代の遺構は暗褐色泥砂層下で検出した。

2区では全域で瓦溜、溝、土壇、柱穴を検出した。遺構の時期はいずれも近世に属する

1区では全域で瓦溜、溝、土壇、柱穴を検出した。南部で検出した土壇SK13Bは暗褐色泥砂層の下で確認し、楕円形で南北2.5m、東西2m、深さ0.3m、埋土中に多量の土器を含む。時期は平安時代後期である。他の遺構は中世から近世である。

3区では中央で土壇、それを切って全域で溝、土壇、柱穴を検出した。土壇SK5は南北3.5m、東西4m、深さ2.5m、埋土は遺物を多量に含む層と無遺物層が互層となる。井戸の可能性が高い。時期は室町時代である。他の遺構は中世から近世である。

遺物 遺物は整理箱で40箱出土した。遺物には、土師器、須恵器、瓦器、磁器、陶器、瓦類などがある。近世の瓦類が大半を占め土器類は少ない。時期は飛鳥時代から江戸時代である。

飛鳥時代(7世紀前半)の遺物には須恵器杯身・甕があり、SK5から出土した。平安時代後期の遺物は土師器、瓦器、白磁、陶器などがあり、SK13Bなどから出土した。室町時代の遺物は土師器、瓦器、磁器、陶器などがあり、SK5などから出土した。

小結 調査では、飛鳥時代の土器が出土し、調査地東方の集落跡である花園遺跡との関係が指

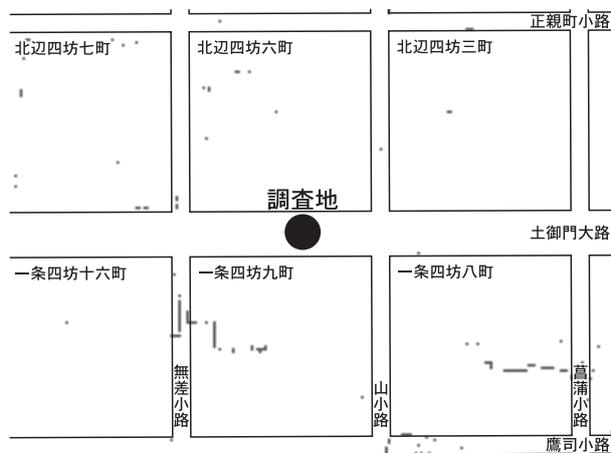


図153 調査位置図 (1 : 5,000)

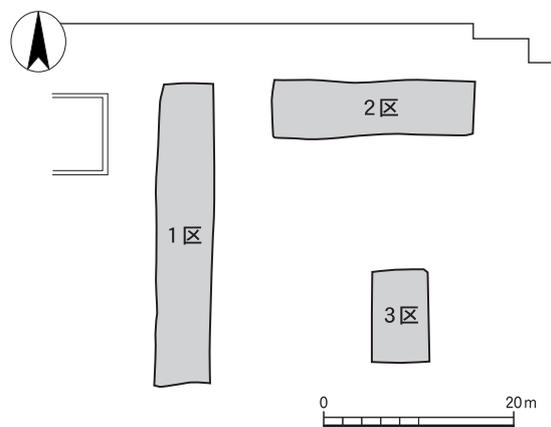


図154 調査区配置図 (1 : 800)

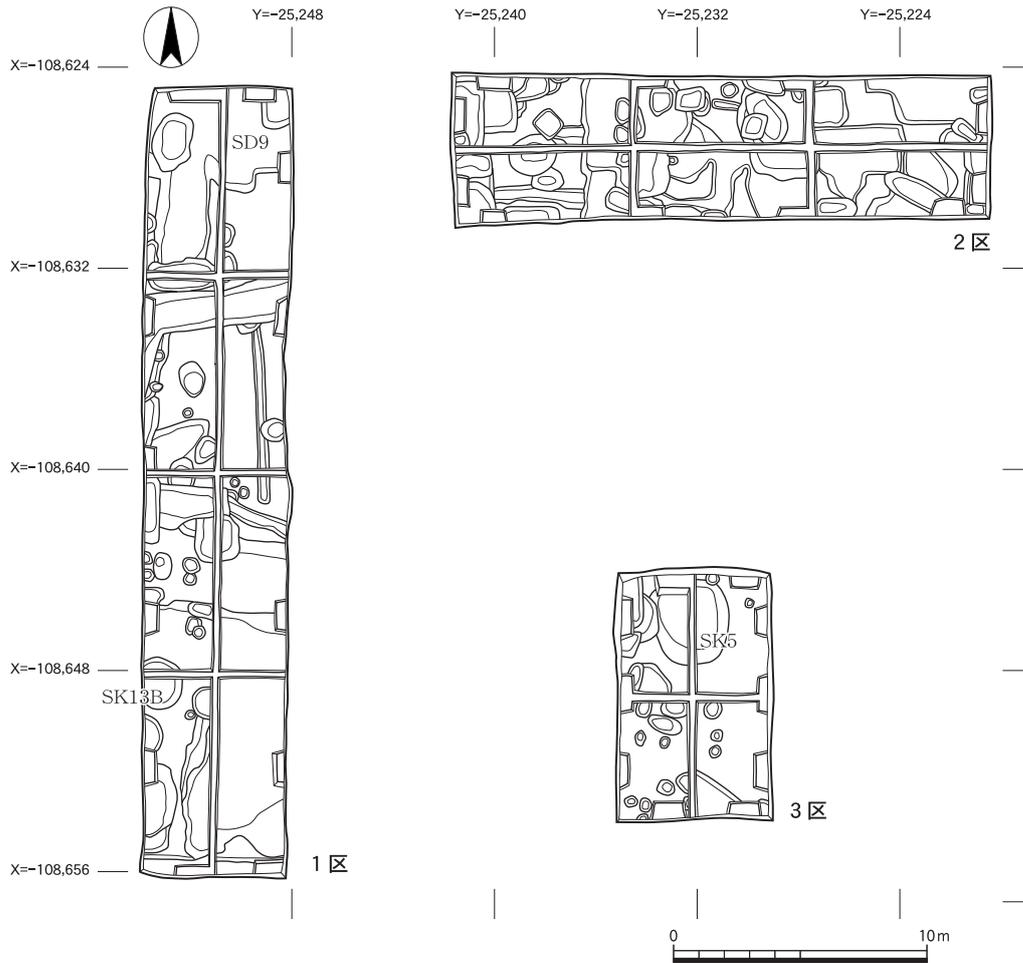


図155 遺構平面図（1：300）

摘できる。調査地西隣の2次調査では、平安時代の土御門大路側溝を検出したが、江戸時代以降の攪乱や削平が多く、今回は検出できなかった。しかし、平安時代後期の土壌を検出し、これ以前には居住域となっていたと推定できる。当地に所在した源有仁の「池館」の廃絶時期が平安時代後期であり、これとの関係が想定できる。室町時代の遺構・遺物は花園天皇の離宮や妙心寺に関連したものといえる。

『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告 -』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊
1997年報告

34 平安京右京二条三坊二町 (図版16)

経過 本調査は、朱雀第八小学校校舎建設工事に伴うもので、推定平安京右京二条三坊二町にあたるため、調査を実施した。

調査地内に南北15m、東西25mの調査区を設定した。重機で近現代層を掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。その後、部分的に断割りして下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(0.6m)、第2層耕土層(0.15m)、第3層黒褐色砂泥層(平安時代包含層、0.2m)、第4層黄褐色砂泥・砂礫層(地山)で、2層と3層の間に部分的に茶灰色砂泥層(中世包含層)、暗茶褐色砂泥層(平安時代包含層)が堆積する。第3層上面で第1面の遺構、第4層上面で第2面の遺構を検出した。

第1面では、中世・平安時代の2時期の遺構を検出した。中世の遺構には土壙、柱穴などがあり、全体に散在する。出土した土器から14世紀頃と推定できる。平安時代の遺構には溝、土壙、柱穴などがあり、調査区南半に集中する。溝はいずれも東西方向で散在し、幅0.5~0.7m、深さ0.1m程度と浅く、途中で止まるものが多い。土壙は散在して検出し、規模・形状は多様である。柱穴は多数検出し、円形で径0.3~0.4m程度である。建物としてはまとまらない。これらの遺構に切られて南側で東西方向の溝SD11を検出した。幅約7m、深さ0.9mで、埋土は黒色泥土で多数土器が出土した。中世の遺構は13~14世紀代で、平安時代の遺構は、9~10世紀代に属する。

第2面では河川、落込みを多数検出したが、かなり切り合い、方向などは不明である。古墳時代に属する。

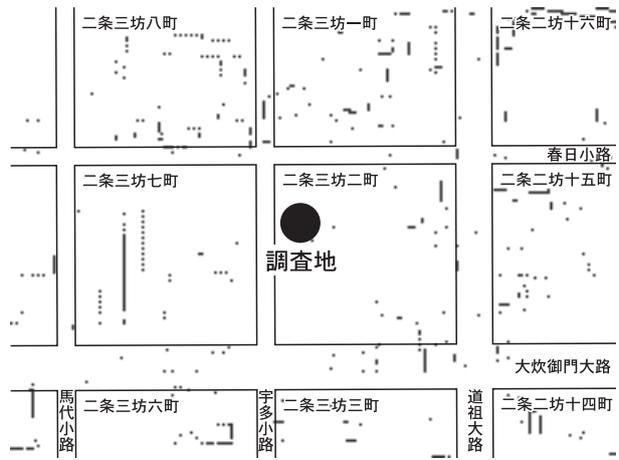


図156 調査位置図 (1 : 5,000)

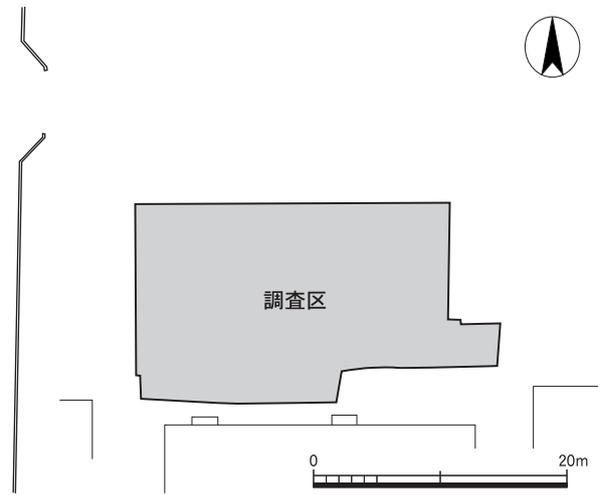


図157 調査区配置図 (1 : 600)

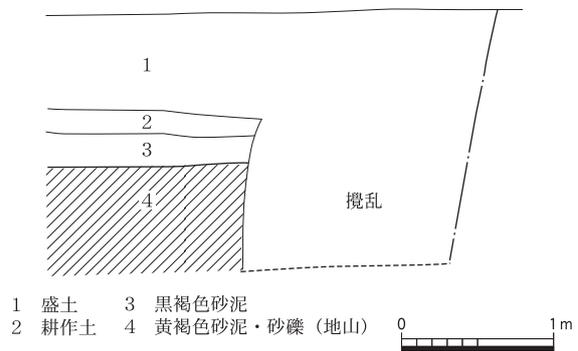


図158 断面図 (1 : 50)

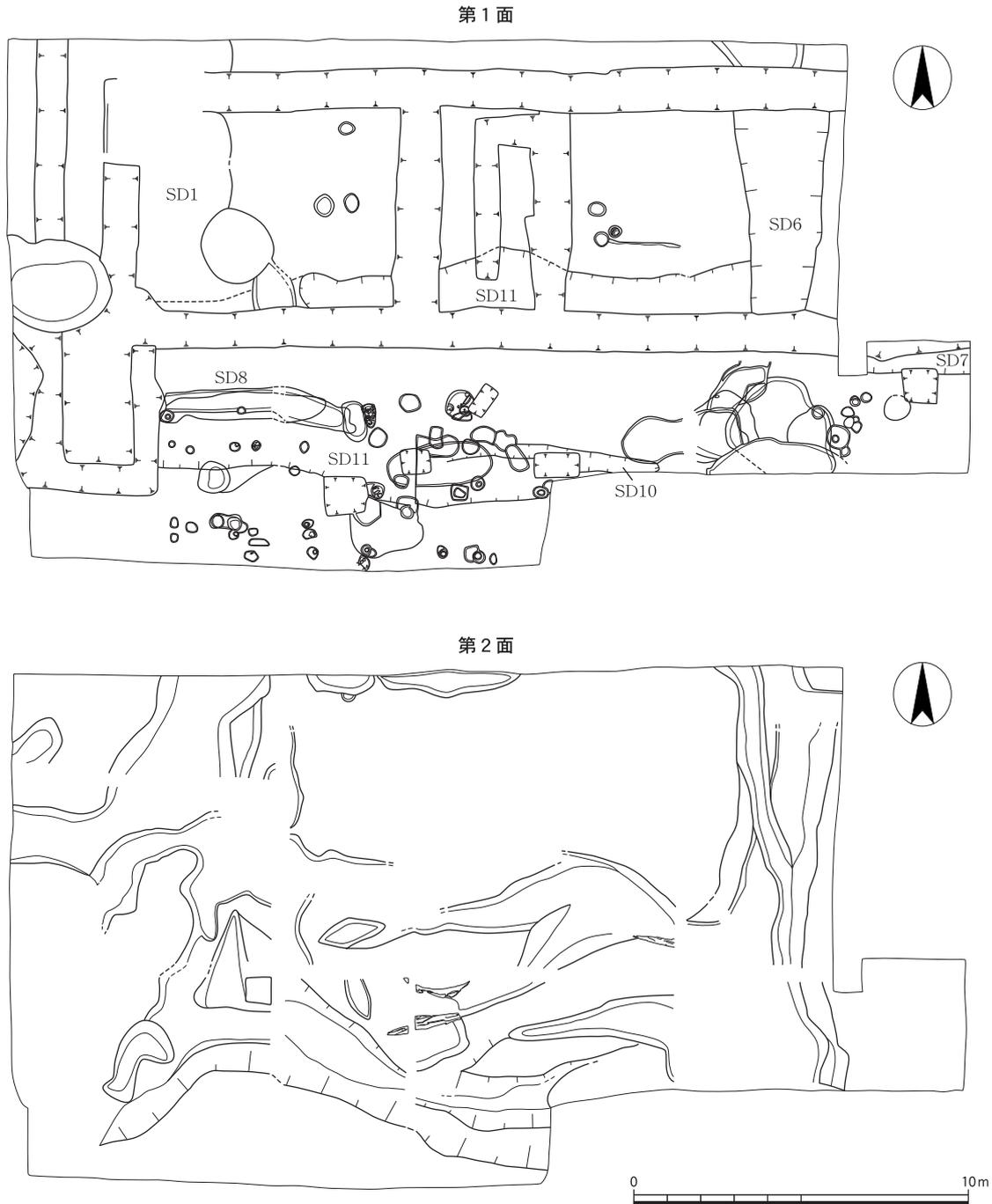


図159 遺構平面図（1：200）

遺物 遺物は、整理箱で56箱出土した。遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、磁器、陶器、石製鍋、鉄製品、土製竈、土馬などが出土した。土器類が大半を占め、瓦類などは少ない。時期は、古墳時代、平安時代中期、鎌倉時代から室町時代のものが中心で、他の時期は少ない。

平安時代中期の遺物は、土壙や溝などからまとまって出土し、特にSD11からは土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、青磁などの他、蝶文褐釉壺（1）や黄釉褐彩水注（4）などが出土し注目される。また、暗茶褐色砂泥層から双魚文緑釉椀（2）、二彩陶器（5）、風字硯、絞



図160 出土遺物

胎陶枕、土壙から三彩陶器壺（3）などが出土した。

小結 今回の調査では、古墳時代から中世までの遺構を多数検出し、当地域の変遷が明らかとなった。

古墳時代には河川などが多く見られ、当該期の遺物も少なく、氾濫源となっていたと推定できる。

平安時代には遺構・遺物が急増し、居住地となっていたことが知られる。特に南辺の東西溝SD11は規模が大きく、何らかの区画溝とも推定できる。建物などは検出できなかったが、多くの遺物が出土した。遺物の中には輸入陶磁器が多数含まれており、居住者には高級貴族を想定することができよう。SD11から出土した一括遺物は当時期の好資料となる。

鎌倉時代ごろから遺構・遺物が少なくなり、居住者が少なくなったことを示唆し、その後の遺構・遺物は見られない。

35 平安京右京三条三坊十町

経過 本調査は、島津製作所建物建設工事に伴うもので、推定平安京右京三条三坊十町南北中心地にあたるため、調査を実施した。

調査地内で試掘調査を行い、西側で湿地状堆積、東側で遺構・包含層を検出した。この結果から、西側に南北4m、東西32mの1区、東側に南北25m、東西73mの2区の2箇所の調査区を設定した。重機で近現代層・耕土層を掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。その後、断割りして下層の堆積状況を確認し、実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（1.5～1.6m）、第2層耕土層（0.2～0.3m）、第3層淡黄褐色砂泥層（地山）で、調査区東部では2層と3層の間に茶灰色砂泥層（0.05m、遺物包含層）が堆積する。第3層上面で遺構を検出した。

1区では、中央部を除き西側・東側共に湿地SX47を検出した。時期は平安時代（9世紀後半）に属する。

2区では、平安時代と平安時代以前の2時期の遺構を検出した。平安時代の遺構には、掘立柱建物、柵、溝、土壇、墓、落込みなどがある。調査区中央で東西溝SD38を検出し、西部で南に曲がる。その北側で柵SA41を検出し、柵の東側には門SB45が付く。溝SD38の南側では掘立柱建物

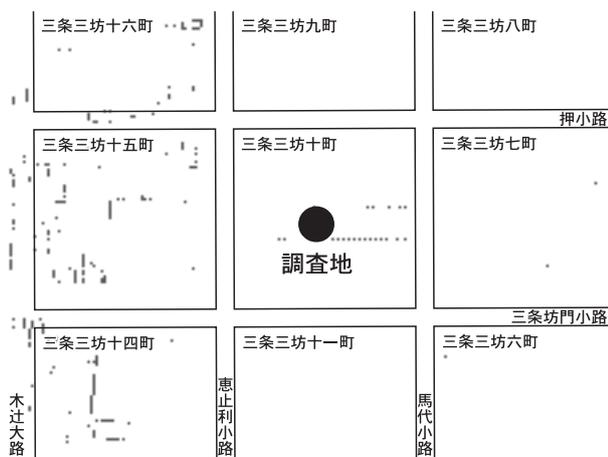


図161 調査位置図（1：5,000）

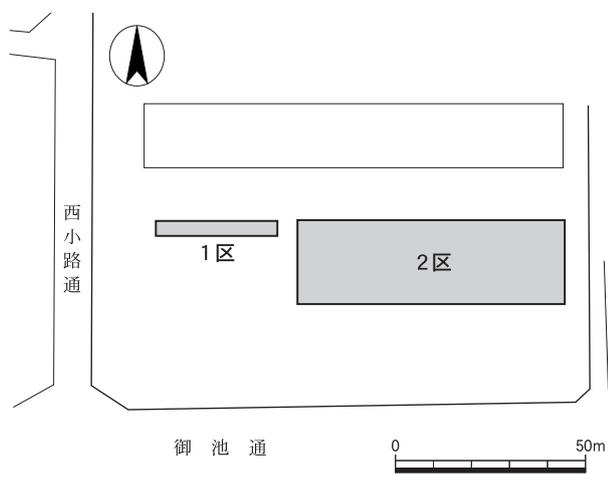


図162 調査区配置図（1：2,000）

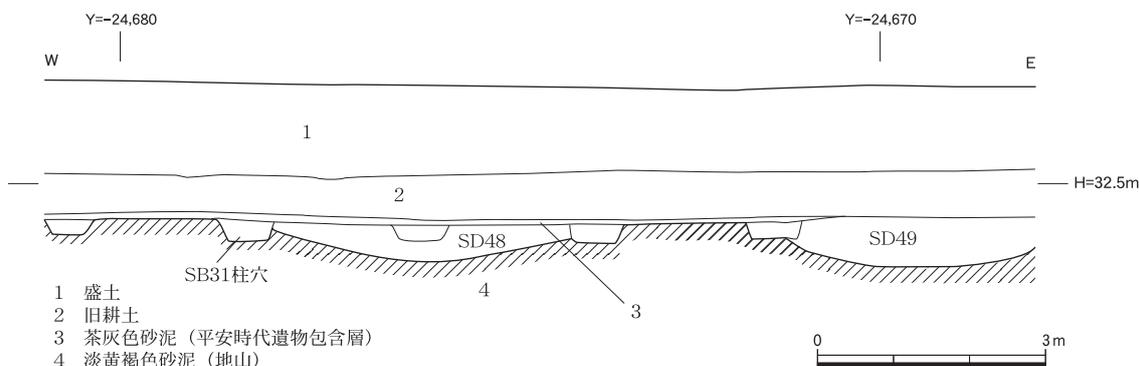


図163 断面図（1：100）

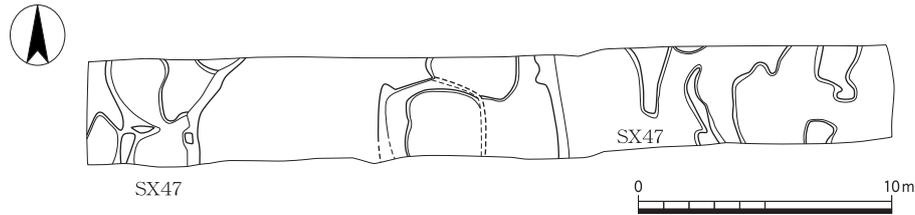


図164 1区遺構平面図（1：300）

SB29（東西棟1間×4間、南に庇および縁が付く）、SB32（東西2間以上×南北3間、総柱）、SB30（東西2間×南北1間以上、東に庇が付く）、SB31（東西4間×南北2間、東・南・西の3面に庇、さらに西側に縁が付く）、SB37（東西棟1間×1間）、SB33（南北棟1間×3間以上）を検出した。各建物は重複するが、SB29・30・31・32・33などは柱筋が揃い、同時期と考えられる。溝の北側ではSB36（東西棟1間×1間）、SB34（東西棟2間×2間）、西側ではSB35（南北棟1間×2間以上）を検出した。また、北辺で土壙SK43、西側で墓SX46を検出した。遺構の時期は大半が9世紀前半、墓SX46は10世紀前半である。平安時代以前の遺構には建物、溝がある。中央部で掘立柱建物SB50（南北棟2間×3間）、東部で南北溝SD48・49を検出した。時期はSD48が古墳時代、他は不明である。

遺物 出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器、白色土器、磁器、瓦類、石製品、木製品、銭貨などがある。土器類が大半を占め、瓦類などは少ない。時期は、平安時代前期から中期のものが中心で、他の時期は少ない。

平安時代前期の土器類は、SK43・SD38・SX47などからまとめて出土した。また墓SX46からは土師器、銅鏡の他、漆皮折敷、漆器皿、合子、串状木製品、銅製毛抜き、玉、墨がセットで出土した。

小結 今回の調査では、平安時代の遺構を多数検出し、十町内の構造が明らかとなった。古墳時代頃には河川などが見られたが、平安京造営時までには埋め立てられたと推定できる。平安時代前期には遺構・遺物が急増し、居住地となったことが知られる。SD38・SA41は十町のほぼ南北中央に位置し東西中心西側で南に曲がり、検出した主要建物はこの溝内側に位置する。SD38・SA41の西側には湿地が広がり、これらは邸宅内の区画施設と推定できる。

建物などは9世紀前半に造られ、西側湿地は9世紀後半には埋められ、その後墓SX46が造られる。このことから、当該地は、9世紀代で利用されなくなったと考えられよう。

『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 1990年報告



图165 2区遺構平面図 (1 : 300)

36 平安京右京四条四坊六町 (図版17)

経過 本調査は、山ノ内小学校体育館建設工事に伴うもので、推定平安京右京四条四坊六町南西部、および山ノ内遺跡の範囲内にあたるため調査を実施した。小学校内調査では、3回目である。

調査地内に、南北約30m、東西約20mの調査区を設定した。重機で近現代層・耕土層を掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。その後、断割りして下層の堆積状況を確認し、実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層(約0.7m)、第2層耕土層(約0.25m)、第3層茶灰色砂泥層(平安時代包含層:約0.1m)、第4層黄灰色粘土層(地山)である。第4層上面で遺構を検出した。検出した遺構は、溝、包含層、土壇、流路などである。

調査区中央から南東部で土壇を検出した。不定形で一辺0.1~0.15mで、深さは0.3m程度である。埋土は茶灰色砂泥である。調査区北側では流路3、南西部では落込み1・2を検出した。流路3は北東から南西に流れ、北側に下がる。北端で深さ約0.2mで、底部では斜方向の溝SD1を検出し、埋土は2時期に分かれ、上層は暗褐色砂泥、下層は黒褐色砂泥である。落込み1・2は不定形で、深さ約0.2m、埋土は暗褐色砂泥で弥生土器が出土した。遺構の時期は、土壇1が平安時代後期、他の土壇は遺物が出土していないため不明、流路3は弥生時代に属する。

遺物 出土遺物は整理箱に7箱で、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶器、石鏃などが出土した。平安時代以降の遺物が中心で、

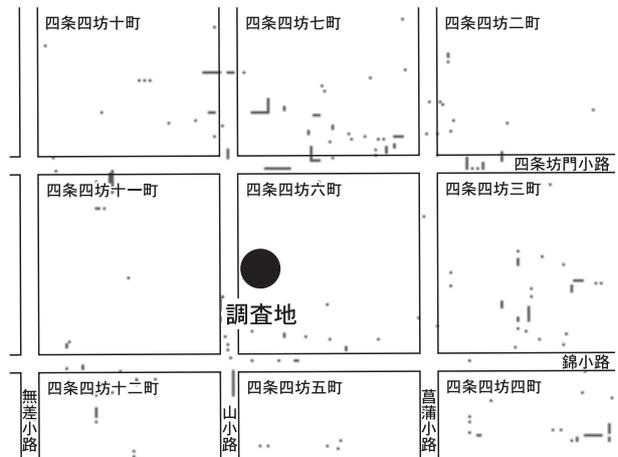


図166 調査位置図 (1 : 5,000)

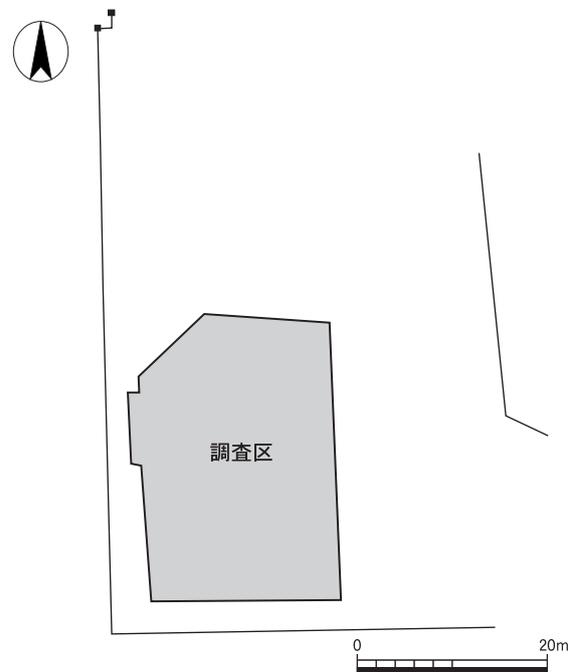


図167 調査区配置図 (1 : 800)

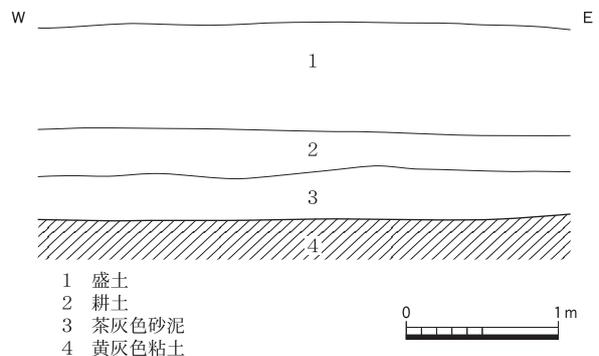


図168 断面図 (1 : 50)

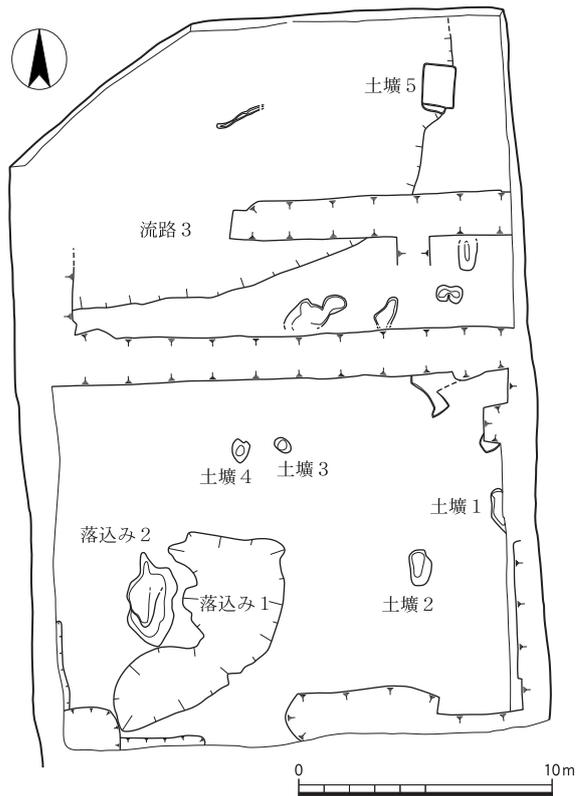


図169 遺構平面図（1：300）

弥生土器は少ない。

平安時代の土器類は、包含層などからまとまって出土した。弥生土器は流路3から出土し、下層からは前期の底部片が出土し、上層からは後期の土器や石鏃がまとまって出土した。

小結 今回の調査では、弥生時代の流路・落込みなどを検出した。北側の1・2次調査でも当該期の溝、川状遺構を検出しており、広範囲に遺構が展開していると推定できよう。

平安時代の遺構は包含層と土壌しか検出できなかった。1・2次調査では当該期の遺構は未検出で、上面がかなり削平を受けていると推定できる。

37 平安京右京九条一坊十二町・西寺跡

経過 本調査は、唐橋小学校建物建設工事に伴うもので、推定平安京右京九条一坊十二町および西寺南西部にあたるため、調査を実施した。西寺内調査では、16次調査である。

調査地内に、一辺10.5mの方形の調査区を設定した。重機で耕土層などを掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。その後、断割りして下層の堆積状況を確認し、実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層耕土・床土層（約0.25m）、第2層淡灰色砂泥を中心とした層（約0.35m）、第3層灰色砂礫層（地山）である。第3層上面で遺構を検出した。検出した遺構は、土塙、瓦溜である。

調査区北東で土塙SX3を検出した。半円形で調査区北に続く。深さは0.3mである。埋土は淡黄灰色土を中心とした土で炭・土師器片を多量に含む。北西では調査区北側で瓦溜SX2を検出した。北・西共に調査区外に続く、深さは0.3mである。埋土は暗灰褐色砂泥で瓦片を多量に含む。遺構の時期は、いずれも平安時代に属する。

遺物 出土遺物は整理箱に40箱で、土師器、須恵器、瓦などが出土した。瓦類が大半を占め土器類は少ない。時期は平安時代が中心で以降のものは少ない。

小結 今回の調査では、平安時代の土塙、瓦溜を検出したが、西寺に関連する顕著な遺構は検出することができなかった。

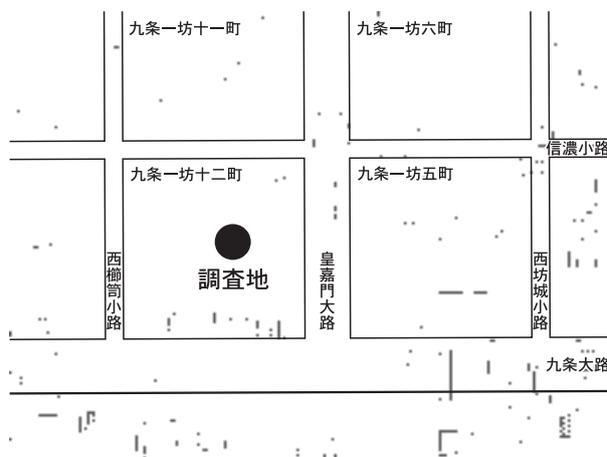


図170 調査位置図（1：5,000）

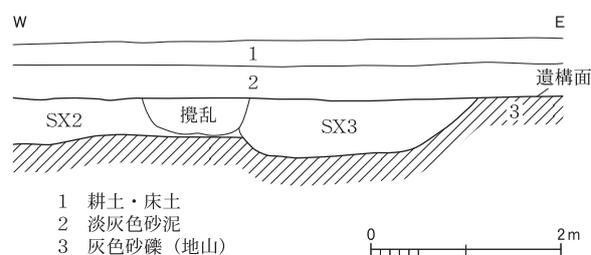


図171 断面図（1：80）

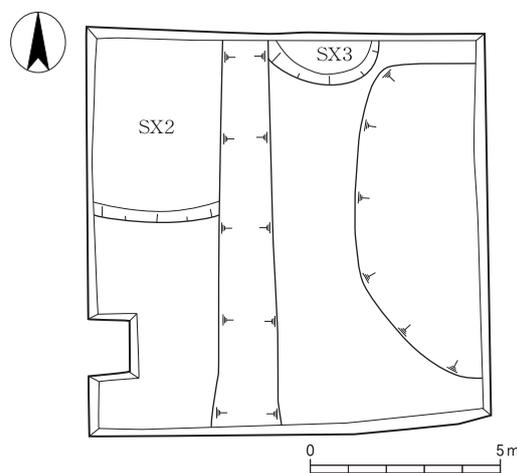


図172 遺構平面図（1：200）

Ⅲ 白河街区跡

38 尊勝寺跡

経過 本調査は、京都国立近代美術館新館建物建設工事に伴うもので、推定尊勝寺にあたるため、調査を実施した。

調査地内南部に南北7m、東西7mのA区、北部に南北10m、東西5mのB区の2箇所の調査区を設定した。重機で近現代層・耕土層を掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。その後、断割りして下層の堆積状況を確認し、実測などを行った。

遺構 A区・B区とも基本層序はほぼ同様で、B区では、第1層近世・近代盛土層（約0.3m）、第2層灰褐色泥砂層（耕土：0.4m）、第3層黄褐色砂層（地山）である。両調査区共に、第3層上面で遺構を検出した。

A区では、不定形な落込みを数箇所検出した。遺物は出土せず、時期は不明である。

B区では、調査区全域で溝を検出した。北側の溝は南北方向で途中で止まる。南西部の溝SD1は逆L字形で調査区外に続く。いずれも幅は0.5～1.5mで、深さは0.3m程度である。遺物はSD1を除きほとんど出土していない。全域で土壌を検出した。規模や形状は様々である。中央から南東部で墓壙を3基検出した。SX1は南北1.8m×東西0.9mの方形で、底部に石を四隅に据える。南壁と平行して釘を検出した。埋土中から土師器小片、金属製五鈷杵が出土した。SX3は南北0.6m×東西1.2mの隅丸方形で、人骨の頭を西にして屈葬状態で検出した。埋土中から土師器、瓦片が出土した。SX5は南北2m×東西2.2

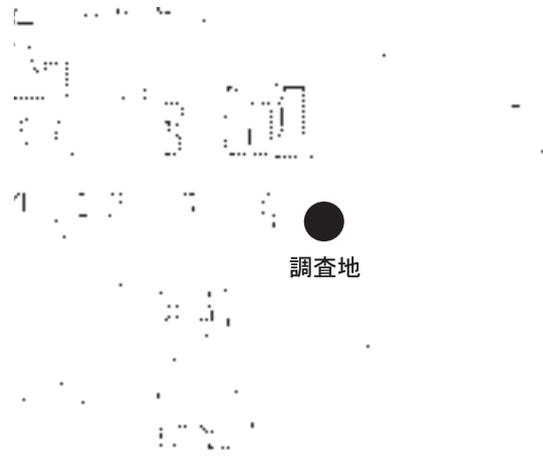


図173 調査位置図（1：5,000）

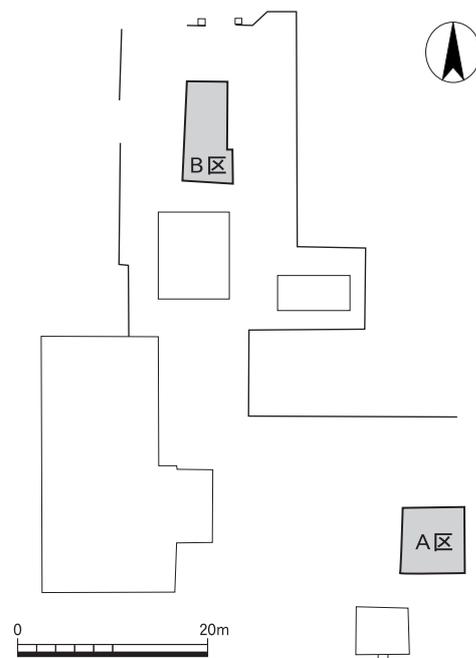


図174 調査区配置図（1：800）

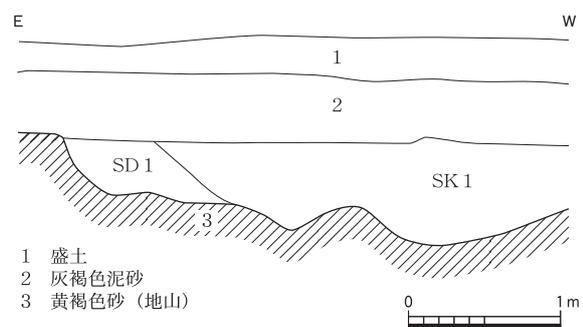


図175 B区南壁断面図（1：50）

mの楕円形で、人骨の頭を北にして屈葬状態で検出した。釘が30点出土したが、対応関係は不明である。埋土中から平安時代の土師器、須恵器、瓦が含まれるが、室町時代末の土師器が出土した。遺構の時期は溝、土壌は出土遺物が少ないため不明、墓壙は中世に含まれる。

遺物 出土遺物は整理箱で7箱出土した。遺物には、土師器、須恵器、磁器、陶器、瓦類、鉄釘、漆器、金属製品、人骨などがある。土器類が大半を占め、瓦類などは少ない。時期は、平安時代から近世のものがある。

小結 今回の調査では、平安時代の遺構は検出できなかった。ただ、後世の遺構に平安時代の遺物が含まれており、近接地に平安時代の包含層・遺構の存在が推定できる。

また、当地は中世以降墓域が形成されたと考えられるが、規模・性格は不明である。

『尊勝寺跡 京都国立近代美術館新館建設予定地発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

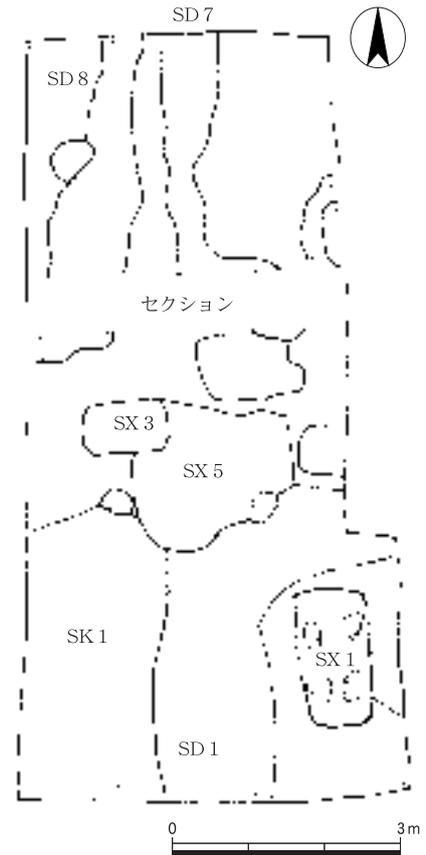


図176 B区遺構平面図（1：100）



図177 B区SX 1（北西から）

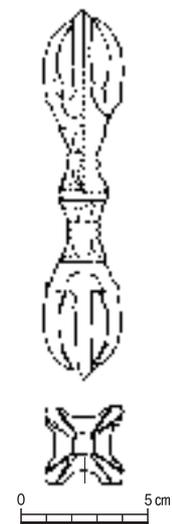


図178 B区SX 1出土遺物実測図（1：3）

39 白河南殿跡

経過 本調査は、個人住宅建設工事に伴うもので、推定白河南殿にあたるため、調査を実施した。

調査地内北側に南北3.5m、東西13mの長方形の調査区を設定した。重機で近現代層を掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。その後、断割りして下層の堆積状況を確認し、実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層近世・近代盛土層（1～2m）、第2層淡茶灰色砂泥（包含層：0.1m）、第3層黄灰色砂礫層（地山）である。第2層は調査区南東部に一部残存し、他の部分は近世土壌によって掘削されている。第2・3層上面で近世の遺構を、第3層上面で平安時代の遺構を検出した。

調査区全域で溝、土壌、井戸を検出した。土壌は規模や形状は様々であり、かなり大きな規模のものもあり、調査区外に続く。時期はいずれも近世以降に属する。

調査区南東部で土壌1を検出した。南北2.2m以上、東西2.3m以上、深さ0.8mで、調査区外に継続する。埋土は、上層が茶灰色砂泥で少量の土師器、瓦を含む。下層は淡灰色泥砂で多量の軒丸瓦、軒平瓦、土師器、瓦器、陶器を含む。時期は平安時代後期に属する。

遺物 出土遺物は整理箱で42箱出土した。遺物には、土師器、須恵器、磁器、陶器、瓦類などがある。遺物の大半は近世の土師器、陶磁器類で、他の時期のものは少ない。平安時代のものは土壌1、包含層からまとめて出土した。

小結 今回の調査では、調査区の大部分を

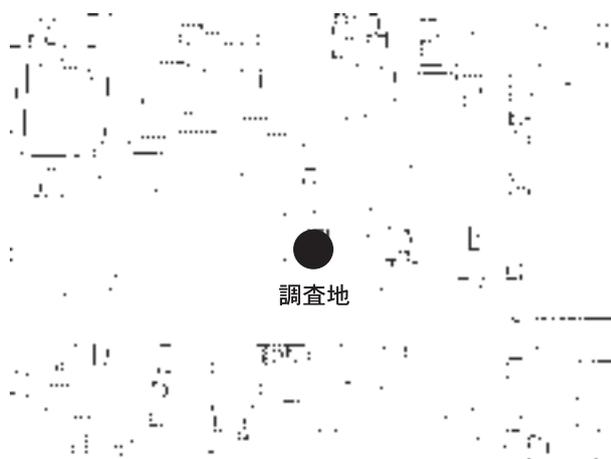


図179 調査位置図（1：5,000）

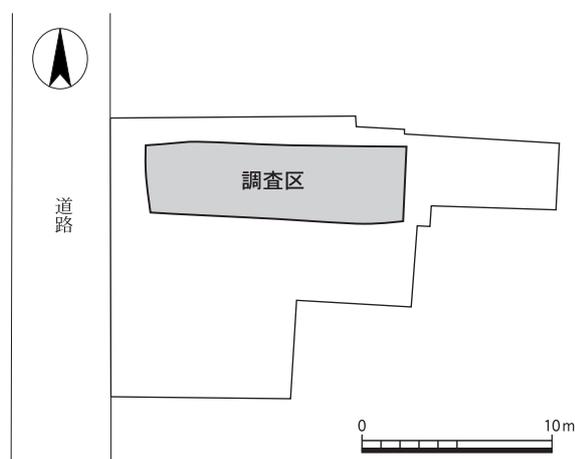


図180 調査区配置図（1：400）

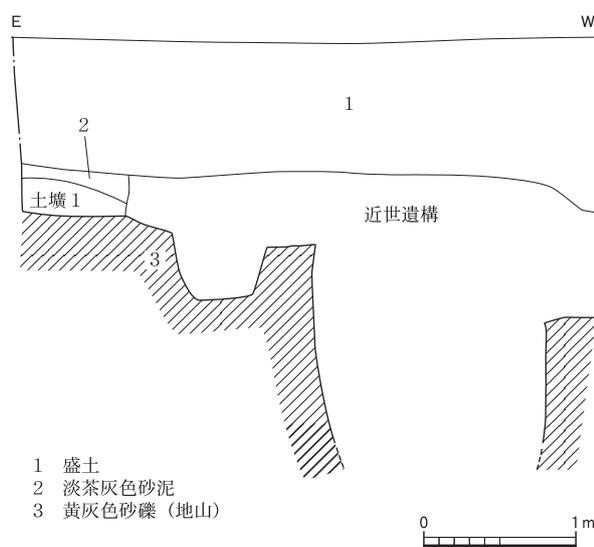


図181 南壁断面図（1：50）

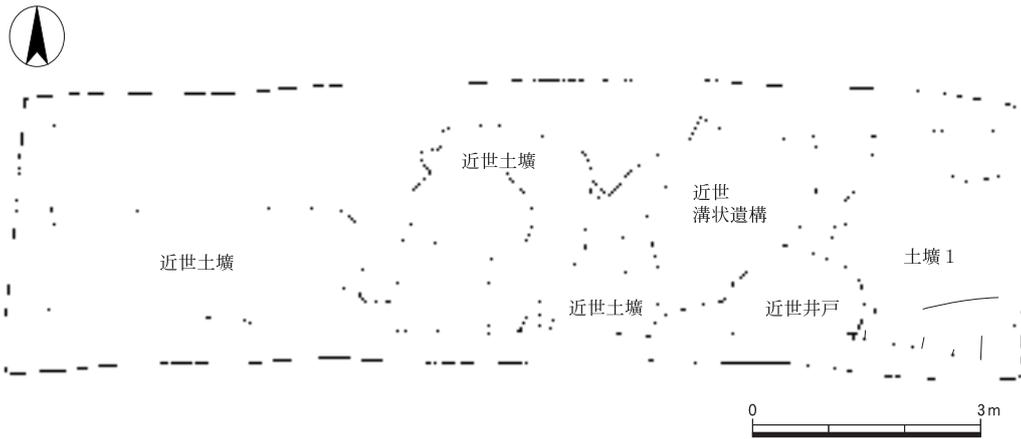


図182 遺構平面図（1：100）

近世以降の遺構によって削平を受け、それ以前の包含層、遺構はほとんど残存していなかった。しかし、調査地内で平安時代後期の遺構が存在したことが明らかとなった。これまで、白河南殿内では調査がほとんど行われておらず、当該期の遺構は検出されていないことから、今回の調査は貴重な成果といえよう。

『白河南殿跡 文化庁国庫補助事業による六勝寺関連の発掘調査の概要、1979年度』 1980年報告

IV 鳥羽離宮跡

40 鳥羽離宮跡49次調査

経過 本調査は、個人住宅建設工事に伴う発掘調査で、鳥羽離宮跡東殿にあたる。調査地は、9次の舟入遺構（建物地業）の南東隅に隣接し、42次の南側に位置している。

調査区は2箇所あり、西側の1区は南北約10m、東西約13m、東側の2区は南北10m、東西8.5mである。重機で盛土・耕土・床土を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割り、下層の堆積状況や遺構を確認して、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層盛土層（0.65m）、第2層耕土層（0.2m）、第3層灰褐色粘質土層（0.45m）、第4層青灰色砂礫層（地山）である。第4層上面で遺構を検出した。

1区・2区中央で、北東から南西方向の溝SD1を検出した。幅4m、深さ1.5mである。素掘りで、護岸施設はない。埋土は茶褐色および黒褐色の有機物層で、埋土から土器、瓦、木製品などが大量に出土した。2区南部で井戸SE1を検出した。円形で、径約1m、深さ0.5mで底部に小型の曲物が一段残存する。井戸の東側では幅0.3m、深さ0.15m前後の溝が検出された。遺構の時期は平安時代後期に属する。

遺物 出土遺物には、土器、瓦、木製品、獣骨、植物遺体などがある。土器は土師器、須恵器、陶器、輸入陶磁器などに分けられる。そして遺物の大半は溝SD1から出土し、瓦器椀、輸入褐釉四耳壺、木製曲物・箸・独楽・墨書板などは遺存状態が良好である。瓦器は椀がほとんどで、皿が少量みられ

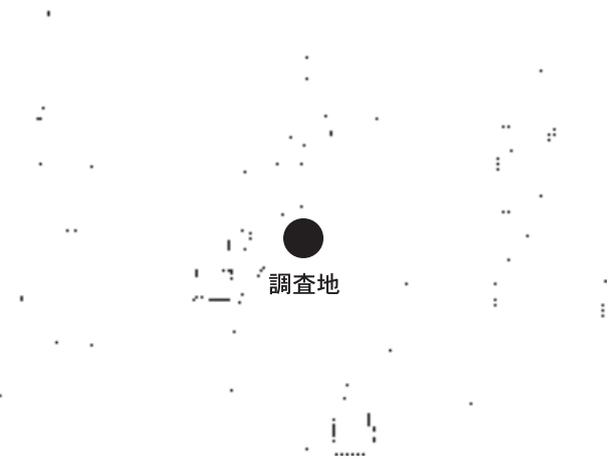


図183 調査位置図（1：5,000）

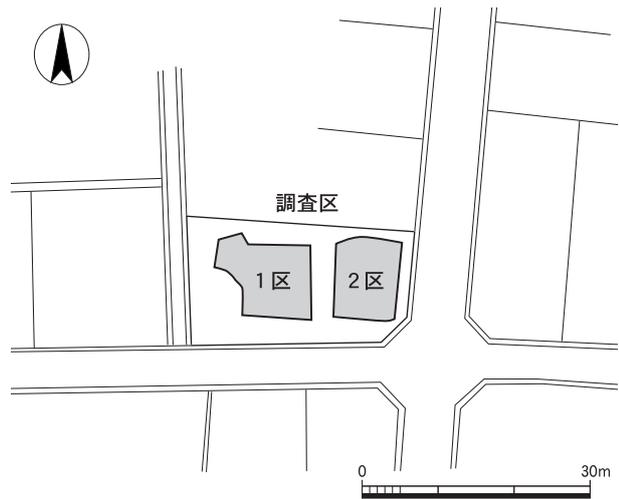


図184 調査区配置図（1：1,000）

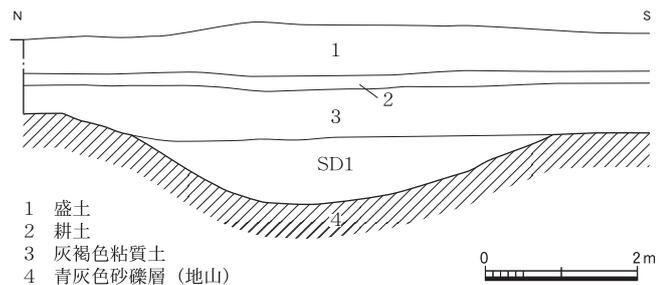


図185 東壁断面図（1：100）

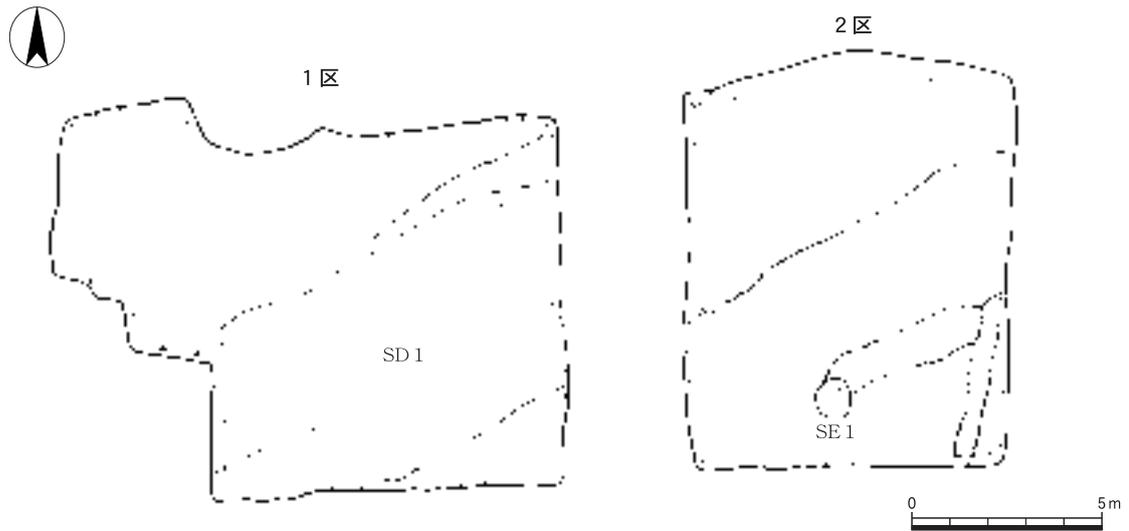


図186 遺構平面図（1：200）

る。椀は成形手法、特に口縁部のナデ、体部内外面に認められるヘラミガキなどによって2種に分けられる。輸入陶磁器は褐釉の四耳壺である。独楽の出土は今回が初例で、外面は刀子状の工具で丁寧に仕上げている。軸は鉄製である。

小結 今回の調査で検出した溝は、11次・32次調査で確認した溝と一連のものと考えられる。この溝は東殿の庭園を囲むように設けられており、東殿の池の導水・排水施設と連結している可能性がある。

『鳥羽離宮跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

41 鳥羽離宮跡50次調査

経過 本調査は、個人住宅建設工事に伴うもので、当地は鳥羽離宮跡東殿にあたり、江戸時代の安楽寿院12ヶ院の遍照院に推定されている地域である。

調査区は、南北約9m、東西約5.3mである。重機で盛土・耕土・床土を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割り、下層の堆積状況や遺構を確認して、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層盛土・耕土層（約0.3m）、第2層褐色粘質土層（0.3m）、第3層淡褐色粘質土層（0.1m）、第4層淡褐色粘砂質土層（0.1m）、第5層淡灰色粘質礫土層（地山）である。第2層上面で第1期遺構面、第4層上面で第2期遺構面、第5層上面で第3・4期遺構面を検出した。

第1期遺構面では、調査区北西部で礎石建築物を検出したが、礎石がかなり抜き取られており、規模・構造は不明である。礎石は径0.3m前後の自然石で、上面に一辺0.15mの角柱の痕跡が残るものもある。東側では石敷遺構、漆喰土間、井戸を検出した。井戸は径0.8mで瓦質の方形板を組み合わせる。遺構の時期は江戸時代に属する。

第2期遺構面では、調査区北東部で井戸を検出した。井戸は径0.7mの石組みで、底部に曲物を据える。井戸から南側に幅0.3mの溝が南に延び、その南側は礫・瓦敷き遺構が認められる。

第3期遺構面では、調査区北辺で東西溝を検出した。幅0.3mで両側に板をあてて護岸する。南東部では井戸を検出した。井戸は径0.8mで上部は石組み、下部は木桶を据える。遺構の時期は江戸時代に属する。

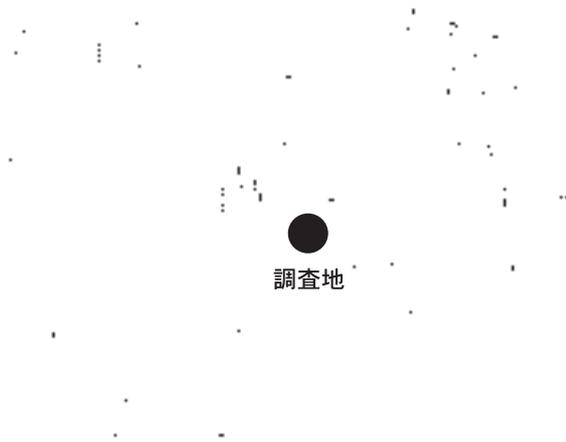


図187 調査位置図（1：5,000）

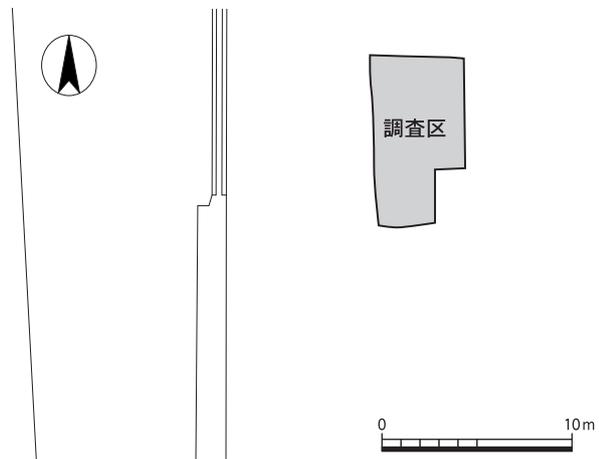


図188 調査区配置図（1：400）

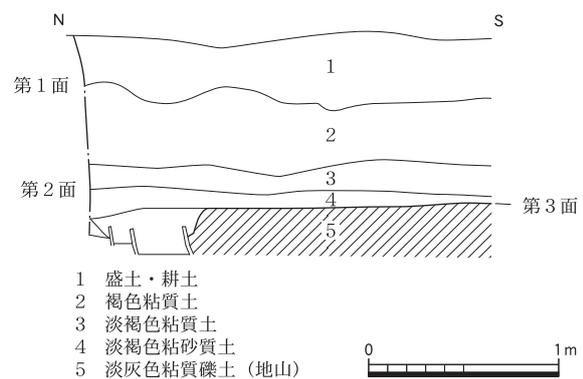


図189 東壁断面図（1：40）

第4期遺構面では、調査区南部が徐々に落込み、青灰色粘土層が堆積する南部では土壌がいくつか見られる。

遺物 出土遺物には、土師器、瓦器、木製品などが少量みられる。時期は近世が多いが、平安時代から鎌倉時代のものも見られる。

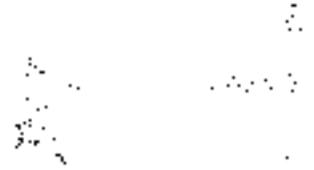
小結 今回の調査で検出した遺構は、江戸時代の安楽寿院境内の遍照院に関する遺構と考えられ、26・33次の調査成果と合わせて、院内の実態・変遷が具体的に明らかとなってきた。また、鎌倉時代以降から慶長年間までの状況も確認することができた。

『鳥羽離宮跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告



第1期遺構面

第2期遺構面



第3期遺構面

第4期遺構面

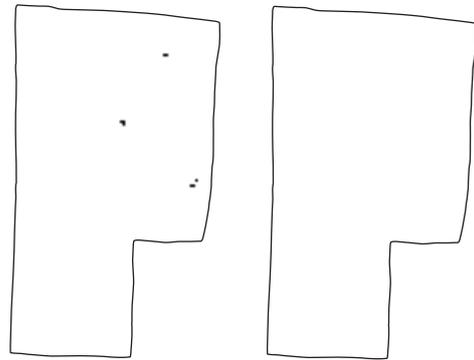


図190 遺構平面図 (1 : 200)

42 鳥羽離宮跡51次調査

経過 本調査は、新油小路側溝工事に伴うもので、一部は発掘調査、他は立会調査とした。当地は推定鳥羽離宮跡東殿にあたるため、調査を実施した。

調査区は、南北15m、東西約2mの長方形である。重機で盛土・耕土・床土を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割り、下層の堆積状況や遺構を確認して、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層盛土層（約1m）、第2層淡青灰色砂泥・淡緑灰色砂泥層（0.5m）、第3層淡灰色粘土層（地山）である。第3層上面で遺構を検出した。遺構は切合いから2時期に分けられる。

期の遺構は、調査区北端で南北溝SD3を検出した。南肩を検出し、深さ0.8mで、北側は調査区外に継続する。埋土は明灰色砂泥で、西側はSD1に切られる。埋土中から土師器、瓦器、木製品が出土した。北端で東西溝SD2を検出した。南肩を検出し、深さ0.6mで、北側は調査区外に継続する。埋土は暗灰色砂泥で、西側はSD1・3に切られる。調査区中央部で土壙を数基検出した。SK2は南北1m、東西1m以上、深さ0.4mである。柱穴は7個検出し、円形で径約0.3m、深さ0.2m程度、底に根石を据えるものもある。この他にも根石を検出したが、建物としてはまとまらない。遺構の時期は鎌倉時代に属する。

期の遺構は、調査区西端で南北溝SD1を検出した。断面V字形で、幅1m、深さ0.6mで、北・南に継続する。埋土は暗灰色粘土が主で、南端で焼け灰層が堆積し、この層および最低部で多量の土器が出土した。遺構の時期は室町時代に属する。

遺物 出土遺物は、整理箱にして12箱であ

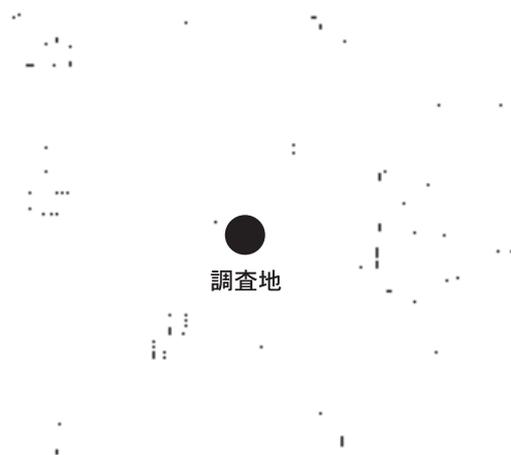


図191 調査位置図（1：5,000）

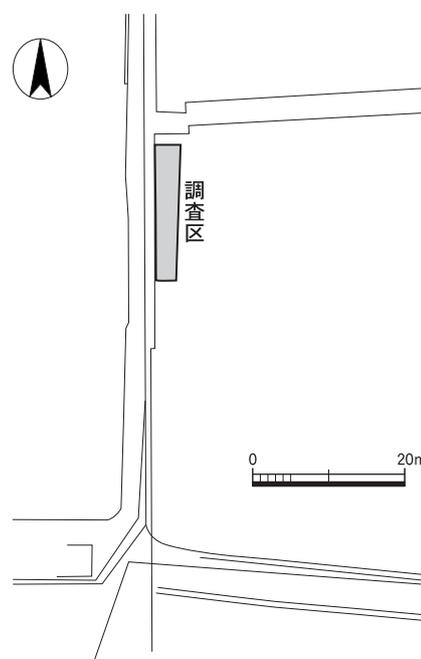


図192 調査区配置図（1：1,000）

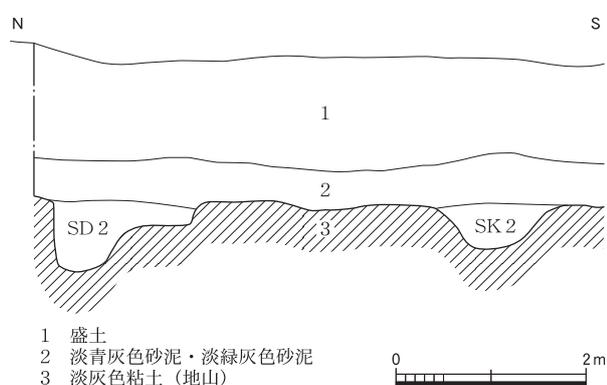


図193 東壁断面図（1：80）

る。遺物には土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦、木製品などがある。時期は平安時代から中世に至り、SD 1 からは室町時代の遺物がまとまって出土した。

小結 今回の調査では、南北溝SD 1 を検出し、立会調査では路面と思われる層状に堆積した礫敷き面を検出した。この路面は平安京油小路の延長線上にあたり、九条から南へ真っ直ぐのびる道路である。SD 1 は油小路の側溝に想定される。SD 1 の時期は出土土器から室町時代と判断でき、鳥羽離宮跡造営時には名称が出てこないが、少なくとも室町時代には油小路が造られていたことが判明し、成立時期を知る上で重要な調査となった。

『鳥羽離宮跡 区画整理道路予定地内発掘調査概要 昭和54年度』
1981年報告

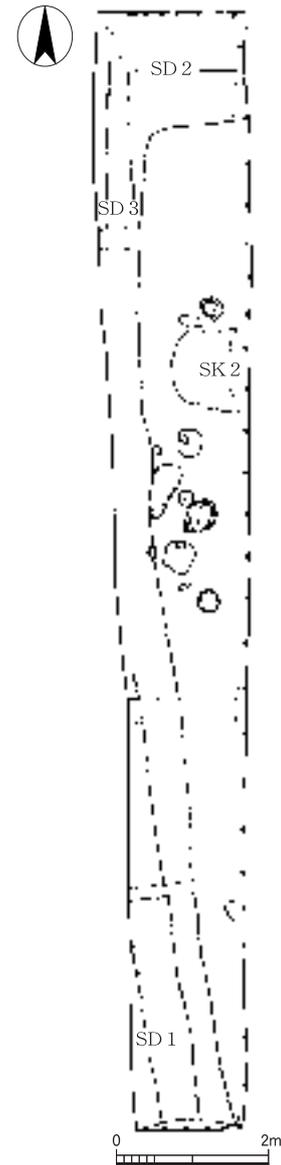


図194 遺構平面図（1：100）

43 鳥羽離宮跡52次調査

経過 本調査は、個人住宅建設工事に伴うもので、当地は鳥羽離宮跡東殿にあたるため、調査を実施した。

調査区は、南北約7.5m、東西約18mである。重機で盛土・耕土・床土を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割り、下層の堆積状況や遺構を確認して、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層盛土(約1.2m)、第2層耕土層・床土層(約0.5m)、第3層茶褐色粘質土・茶褐色有機物層(遺物包含層:0.3~0.5m)、第4層青灰色砂礫層(地山)である。各層上面では顕著な遺構面は検出できなかった。第2層は第3層の下がりにつれて中央から西・東に厚くなり、最も深い部分に有機物層が堆積する。これらは長期間に堆積したと推定できる。また、第3層上面では弥生土器が数点出土した。第2層は平安時代後期から鎌倉時代に属する。

遺物 出土遺物には、弥生土器、土師器、瓦器、陶磁器、木製品、瓦などがある。第2層から土師器、瓦器、陶磁器、木製箸・曲物などがまとめて出土した。時期は平安時代後期から鎌倉時代である。弥生土器は甕・壺などがあり、弥生時代中期に属する。

小結 今回の調査では湿地状の遺構を検出し、調査地付近は鳥羽離宮跡造営以前から低湿地であったと考えられる。この周辺は調査があまり行われておらず、鳥羽離宮跡造営期にどのような状況であったかは明らかではない。

『鳥羽離宮跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

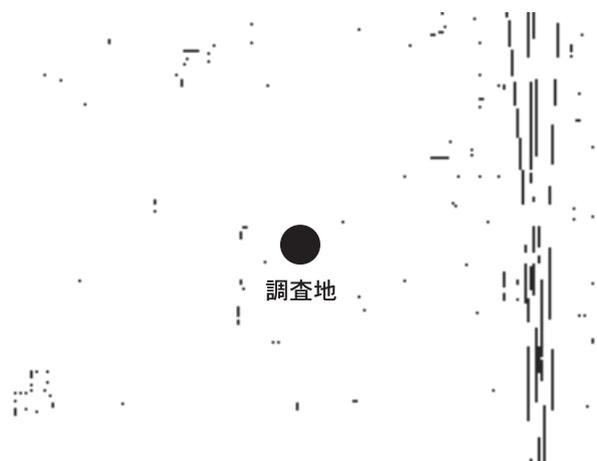


図195 調査位置図 (1 : 5,000)

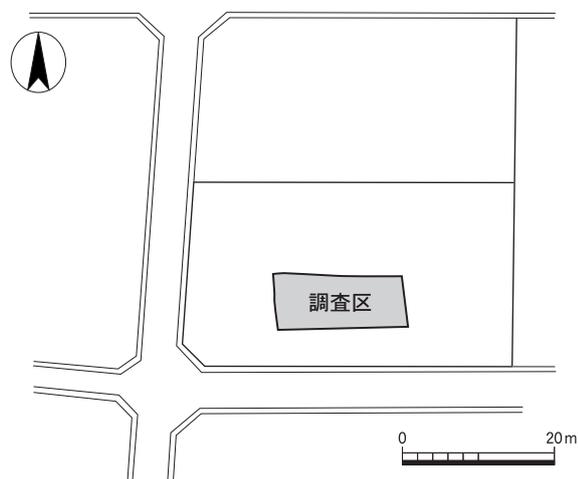


図196 調査区配置図 (1 : 1,000)

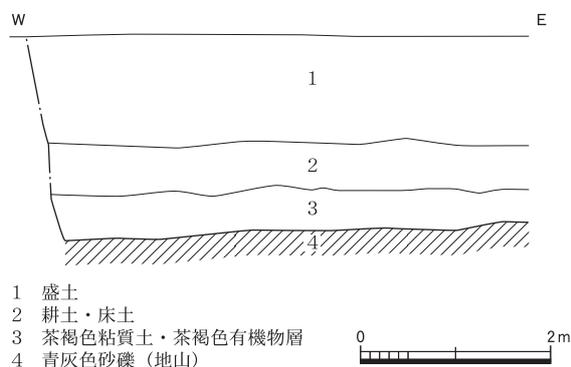


図197 北壁断面図 (1 : 80)

44 鳥羽離宮跡53次調査

経過 本調査は、個人住宅建設工事に伴うもので、当地は鳥羽離宮跡東殿にあたるため、調査を実施した。

調査は、当初中央部分に調査区（南北16m、東西約22m）を設定し、その後北側・南側に調査区を設け調査を実施した。全体として南北約40m、東西約22mの変形の調査区となる。重機で盛土・耕土・床土を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割り、下層の堆積状況や遺構を確認して、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層耕土・床土など（約0.3m）、第2層茶褐色砂泥層（0.3m）、第3層暗茶褐色泥砂・灰色粘質土層（0.5m）、第4層褐色砂礫層（地山）である。第3層の上面には焼土層が堆積する。第2層・第3層上面で第1面、第4層上面で第2面を検出した。

第1面では、調査区西部で礎石建物・基壇石列など、北部では平瓦を敷き詰めた方形竪穴・礎石据付跡、北東部で井戸などを検出した。礎石がかなり抜き取られているものの、検出された部分を江戸時代末に描かれた明照院の間取り図と照合した結果、庫裏・御堂・湯殿などであることが明らかとなった。また、調査区北側で東西溝・南北溝、調査区東側で南北溝、調査区南部で逆L字形溝・東西溝・南北溝などを検出した。遺構の時期は江戸時代に属する。

第2面では、調査区北西部で柱穴を検出した。円形で径0.2~0.3m前後で、柱痕が残存していたものもある。建物としてはまとまらなかった。中央部で井戸を数基検出した。径0.7m前後で、上部は石組み下部は桶を設けるものと、曲物を使用するものがある。調査区全域で土壌を検出した。不定形のものが多く、規模も様々である。

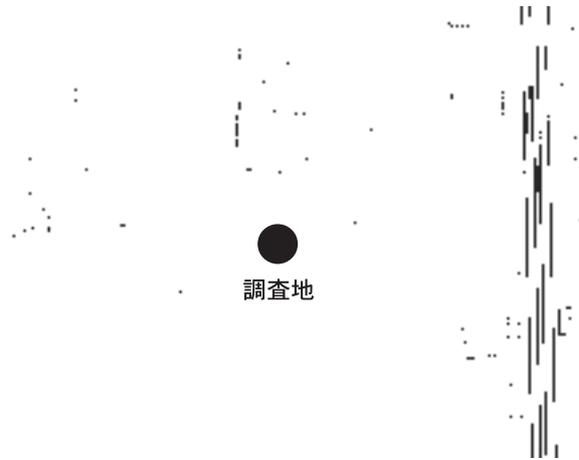


図198 調査位置図（1：5,000）



図199 調査区配置図（1：1,000）

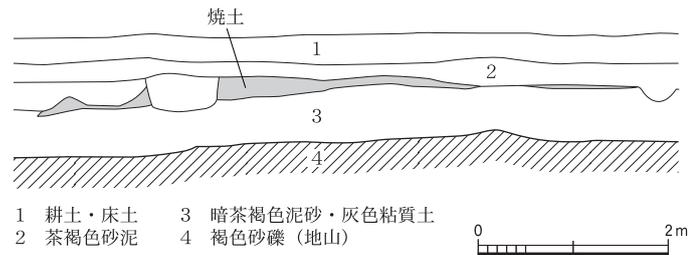


図200 東西中央セクション断面図（1：80）



図201 第1面遺構平面図（1：200）



図202 第2面遺構平面図（1：200）

調査区南辺で東西濠を検出した。幅6m、深さ1.5m、素掘りで護岸施設はない。35次調査のSD11と規模・方向が一致し、同一の遺構と推定できる。遺構の時期は平安時代末から鎌倉時代に属する。

第3面では、東西溝の北側で湿地状の落込みを検出した。落込みは濠によって切られる。また、北側肩口からは瓦が、一括して投げ込まれたような状況で大量に出土した。落込みは東側が最も深く、底部に腐植土層が堆積し、多量の土器、瓦、木製品が出土した。時期は鳥羽離宮期から鎌倉時代に属する。

遺物 出土遺物には、土師器、瓦器、木製品などがある。平安時代後期の遺物は落込みからまとまって出土し、土師器、瓦器、木製の箸・鳥形代・船形代・墨書板などがある。



図203 調査区全景（北西から）

する可能性が高い。

『鳥羽離宮跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

小結 今回の調査で検出した遺構は、安楽寿院境内の明照院に関する遺構と考えられ、院内の実態・変遷が明らかにできた。この建物は慶長年間から江戸時代末までに2回以上の火災を受けており、15次調査の玉蔵院も同様な状況であった。ただ同時期かどうかは不明である。また、鎌倉時代以降から慶長年間までの状況も確認することができた。調査区南辺の東西濠は平安時代以降に設けられ、慶長年間に至るまで利用されていたことが明らかとなった。このような遺構は、21・31・35・54・55次で検出されているが、相互の関係を具体的に明らかにするまでには至っていない。

今回の調査では、鳥羽離宮跡に関する明確な遺構は検出できなかったが、当該期の遺物が多数出土し、近辺に当該期の遺構が存在

45 鳥羽離宮跡54-A次調査

経過 本調査は、新油小路建設工事に伴うもので、当地は推定鳥羽離宮跡東殿にあたるため、調査を実施した。

調査区は、南北37m、東西約27mの長方形である。重機で盛土・耕土・床土を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割り、下層の堆積状況や遺構を確認して、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層盛土層（約0.3m）、第2層耕土・床土層（0.25m）、第3層茶褐色泥土を中心とした層（包含層：0～0.4m）、第4層茶褐色砂層（地山）である。調査地は南半部は北半部より約0.6m低く、南半部は近世以降に削平されたと考えられる。そのため、第3層は南半部にしか見られない。第3層・第4層上面で第1面の遺構、第4層上面で第2面の遺構を検出した。

第1面の遺構には、柱穴、土壇、溝などがある。中央部で柱穴を検出した。散在し、建物としてまとまらない。溝は全域で検出した。南西部の溝SD6は大規模で、断面逆台形で幅3m、深さ0.7mで、逆L字形にクランクして調査区外に続く。調査区東側で南北溝、北部で東西溝、中央部でL字形溝・南北溝などを検出した。溝の規模は幅0.5～1.5m程度で、かなり重複し、接続するものや調査区外に続くものもある。遺構の時期は平安時代後期以降に属する。

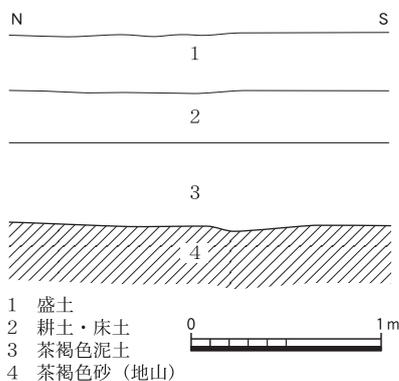


図205 東壁断面図（1：40）

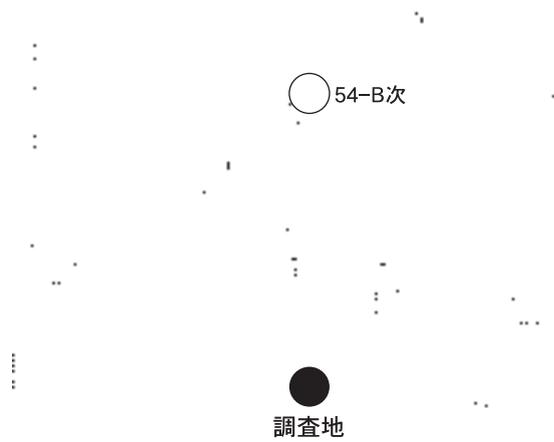


図204 調査位置図（1：5,000）

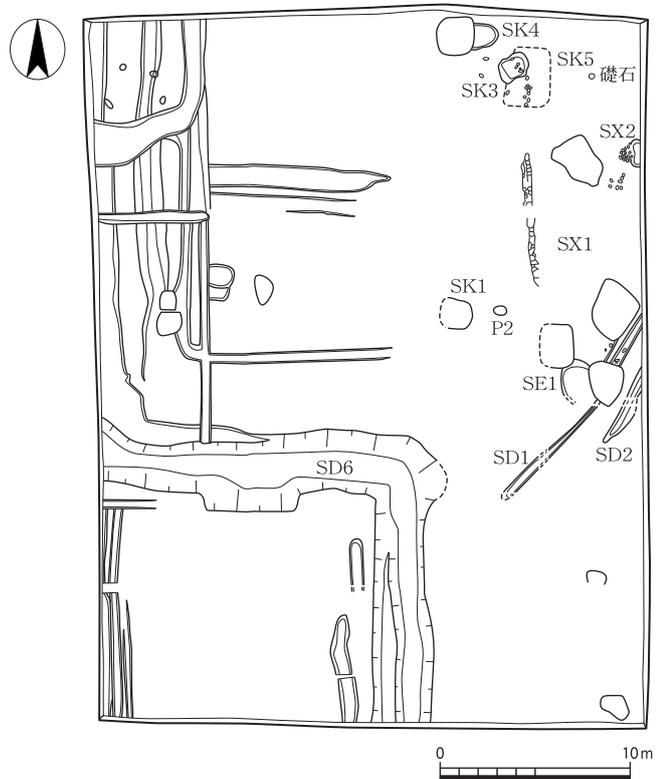


図206 遺構平面図（1：400）



図207 第2面全景（北西から）

第2面の遺構は、北東部で検出し、他の地区では見られない。遺構には土壇、溝、井戸などがある。土壇は散在し、一辺約2m程度の規模で、不定形である。SK1は2×3mの瓦溜で大量の瓦が出土した。調査区東部中央で斜め方向の溝を検出した。幅約0.3m、深さ約0.3mである。中央部で土壇を検出した。円形で径2m、深さ1.5mで、底部に礫を敷く。北西部で石列SX1、集

石SX2を検出した。また、径0.5mの礎石を検出し、21次調査検出の礎石と並ぶ。遺構の時期は平安時代後期に属する。さらに、調査区南東部では、南に傾斜する落込みがあり、黒色土器、緑釉陶器などが出土した。

遺物 出土遺物は、整理箱にして78箱である。遺物には土師器、瓦器、黒色土器、緑釉陶器、陶器、磁器、瓦、木製品などがある。時期は平安時代から近世に至る。SK1からはまとめて瓦が出土し、軒丸瓦・軒平瓦などがある。SK5からは土器類がまとめて出土し、土師器、陶磁器、瓦器などがある。またSD6からは、土器類、木製品が出土し、漆器椀・曲物などがある。

小結 今回の調査では、南半部が削平を受けていたため、東殿の遺構は残存状況が悪く、遺構の性格は不明な点が多い。しかし平安時代後期以前の包含層を検出したことは注目できよう。

平安時代後期以降の遺構には大規模な濠や溝を多数検出し、この地域が当該期に活用されていたことを示している。

『鳥羽離宮跡 区画整理道路予定地内発掘調査概要 昭和54年度』 1981年報告

46 鳥羽離宮跡54-B次調査

経過 本調査は、新油小路建設工事に伴うもので、当地は推定鳥羽離宮跡東殿にあたるため、調査を実施した。

調査区は2箇所設定し、北トレンチ南北36m、東西約26m、南トレンチ南北27m、東西約16mである。重機で盛土・耕土・床土を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割り、下層の堆積状況や遺構を確認して、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層盛土層(約0.2m)、第2層茶褐色泥砂層(約0.4m)、第3層灰褐色砂泥を中心とした層(包含層:約0.2m)、第4層暗灰色砂礫・灰色粘土層(地山)である。第2層上面で第1面の遺構、第3層で第2面の遺構、第4層上面で第3面の遺構を検出した。

第1面では、南北トレンチを貫通する南北溝SD7を検出した。北端は調査区北側に継続し、東岸には小礫で護岸(SX1)を施す。溝断面はU字形を呈する。規模は、幅約6m、深さ約1.3m。埋土は茶灰色砂泥・青灰色粘土で、土器類、木製品が大量に出土した。室町時代頃に造られた後、何度かの改修・拡張・付け替えが行われ、最終的に江戸時代に埋まる。

第2面では、北トレンチ南部で東西溝SD10、南北溝SD9を検出した。SD10は調査区東側に継続し、35次調査区検出の東西溝に続く。溝より北東側では全域で柱穴、土壇、井戸、小溝を検出した。柱穴は多数あるが、建物としてまとまらない。ほとんどの柱穴の底部に石を据えるが、ないものや礎石として表面にみられるものもある。土壇、井戸は北東部に散在する。井戸は石積みのもものが多いが、瓦積みのもものも見られる。南トレンチでは南部で東西溝SD16・17、北部で南北溝SD18を検出した。溝周辺で柱穴を多数検出したが、建物としてまとまらない。土壇はほぼ散在する。遺構の時期は、いずれも鎌倉時代～室町時代に属する。

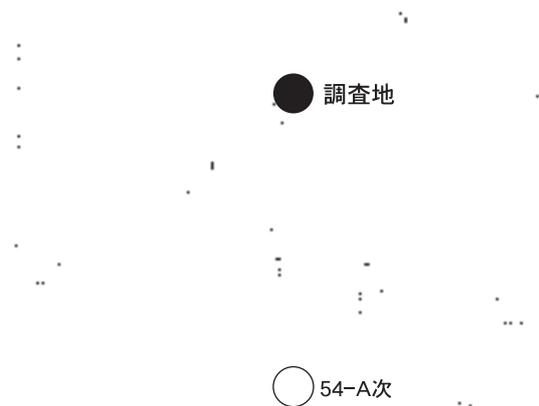


図208 調査位置図 (1:5,000)

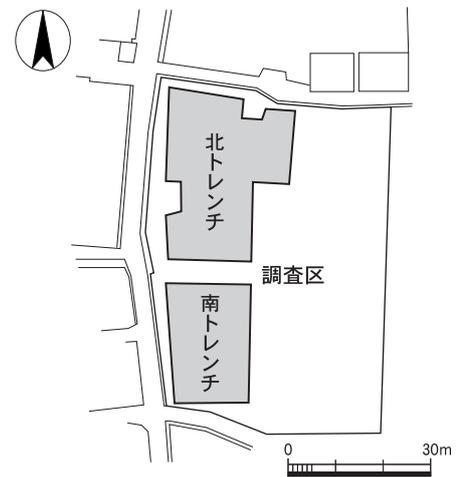


図209 調査区配置図 (1:1,600)

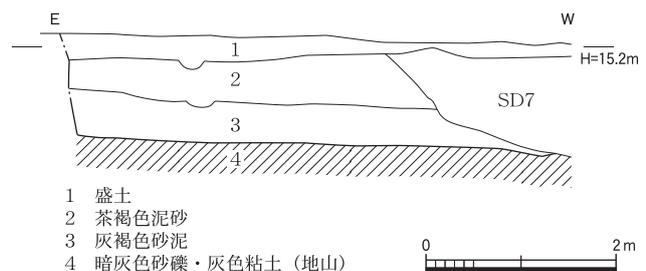


図210 断面図 (1:80)

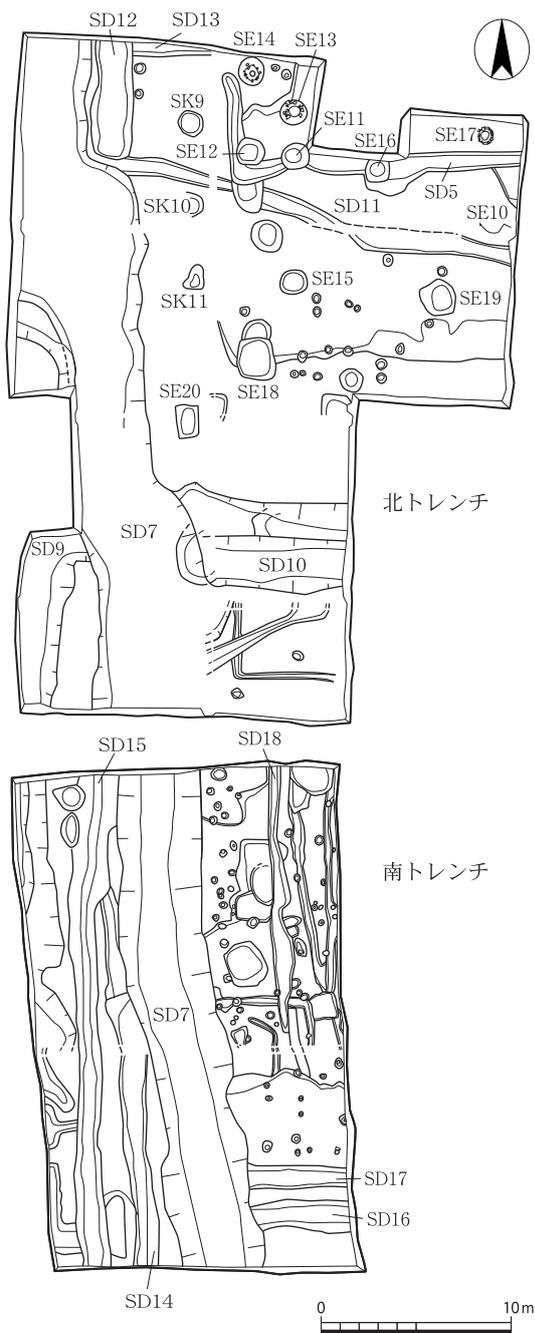


図211 遺構平面図 (1 : 400)



図212 第2面全景 (北東から)

第3面では、北トレンチ北部中央で土壌を検出した。土壌は不定形で、いずれも瓦溜である。溝は東西溝SD11・SD13で、これらを切る南北溝SD12を検出した。南トレンチ南西部では2本の南北溝SD14・15が平行する。遺構の時期は平安時代後期に属する。

遺物 出土遺物は、整理箱にして土器・瓦類が226箱、木製品が37箱である。遺物には土師器、陶器、磁器、瓦、木製品、金属製品などがある。最も多く出土した遺物は瓦類で、瓦積み井戸からまとまって出土した。木製品は北トレンチ

SD10、南トレンチSD7からまとまって出土し、墨書札・塔婆・仏像2点・将棋駒、銅製水滴・椀などがある。

小結 今回の調査では、東側の35次調査と同様の状況であったが、東西溝SD10と南北溝SD9の交差点を検出することができた。このことは周辺の遺構の性格を考える上で重要である。これらの溝は鎌倉時代に造られ、大半が室町時代末には埋没する。溝によって区画される範囲は21・12・20次調査成果と合わせ、南北100m、東西50m程度となる。現段階では溝の性格は不明であるが、中世村落の居館を囲う溝の可能性はある。

『鳥羽離宮跡 区画整理道路予定地内発掘調査概要 昭和54年度』 1981年報告

47 鳥羽離宮跡55次調査

経過 本調査は、道路建設工事に伴うもので、当地は推定鳥羽離宮跡東殿にあたるため、調査を実施した。

調査区は4箇所設定し、1～3トレンチは南北約3m、1トレンチ東西22m、2トレンチ東西9m、3トレンチ東西23mである。4トレンチは南北約2m、東西13mである。調査地は畑地として利用され、北側が一段高く、南側が低く水田となる。重機で盛土・耕土・床土を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。調査の結果1トレンチから2トレンチ西端まで庭園を検出したが、他のトレンチでは遺構は検出できなかった。

遺構 調査区の基本層序は、1トレンチでは第1層耕土・床土層（約0.2m）、第2層淡茶褐色泥土層（約0.3m）、第3層茶褐色砂泥層（約0.2m）、第4層茶褐色粗砂層（地山）である。第3層上面で遺構を検出した。

2・3トレンチでは地表下0.4mで暗茶褐色砂泥が見られ、その下は茶褐色砂泥・淡灰褐色砂質土・淡灰褐色砂層である。

1トレンチでは、園池を検出した。北から南に緩やかに下がり、最も深い所で、0.7mである。陸部と池部の間に石を集中して据える。石は花崗岩で、長軸約1mの長方形を呈す。池底部には径0.05～0.1mの小礫を第4層上面に敷き詰めて洲浜とする。池部と陸部の境は特に礫を密に固める。園池埋土は大きく2層に分かれ、上層は茶灰色泥土・明灰色粘土で、下層は暗青灰色粘土

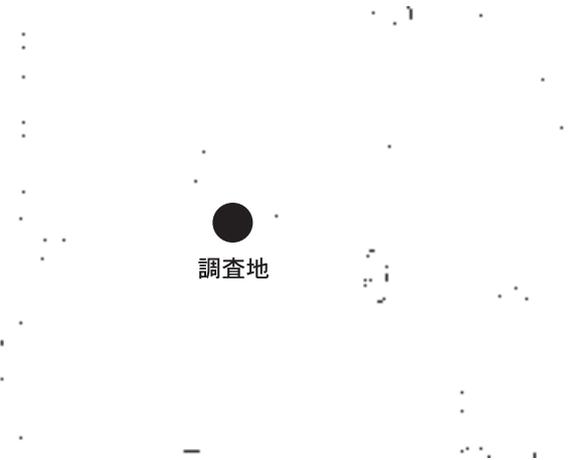


図213 調査位置図（1：5,000）

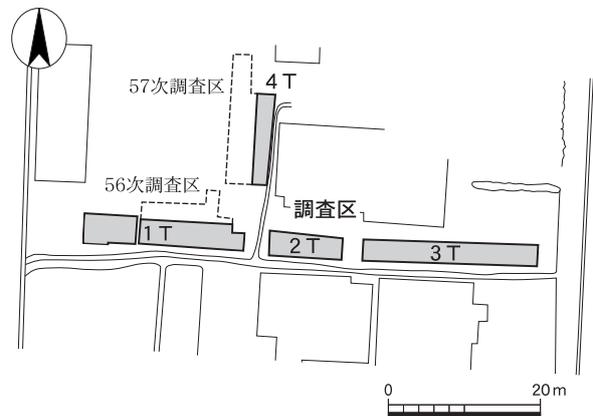


図214 調査区配置図（1：1,000）

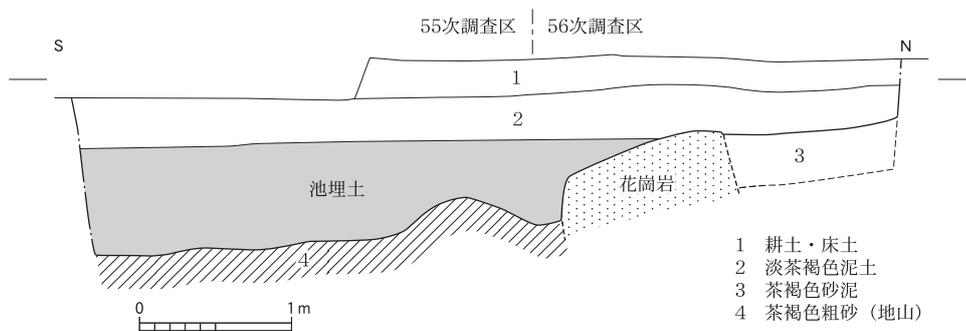


図215 1トレンチ・56次調査区西壁断面図（1：50）

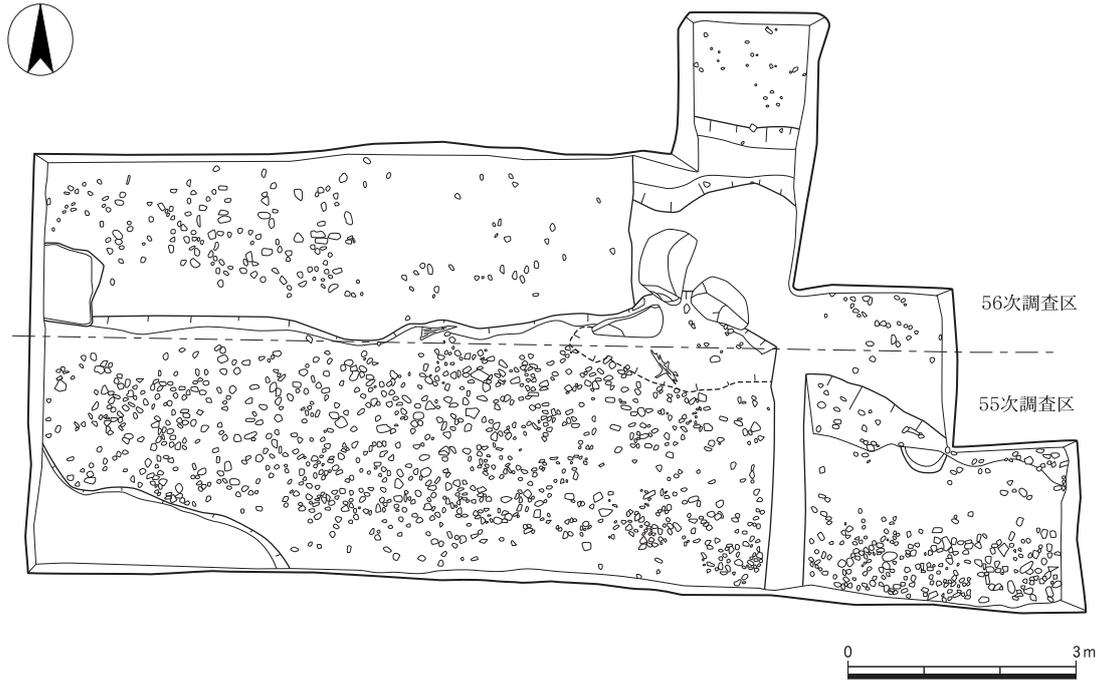


図216 1 トレンチ東部・56次調査区遺構平面図（1：100）

層・灰色泥土で腐植土を含む。

遺物 遺物は、整理箱にして5箱出土した。遺物には土師器、陶器、磁器、瓦、木片などがある。園池埋土からは木片が多く出土したが、明確な木製品は確認できなかった。

小結 今回の調査では、調査地西側で園池を検出し、西側に継続することが明らかとなった。白河天皇陵の北側は調査が少なく、性格は不明である。

『鳥羽離宮跡 区画整理道路予定地内発掘調査概要 昭和54年度』 1981年報告

48 鳥羽離宮跡56次調査

経過 本調査は、道路建設工事に伴うもので、当地は推定鳥羽離宮跡東殿にあたるため、調査を実施した。

調査地は55次調査の北側に接しており、55次調査と並行して行った。調査区は南北3m、東西12mである。調査地は畑地として利用され、55次調査区より一段高い。重機で盛土・耕土・床土を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層耕土・床土層（約0.2m）、第2層淡茶褐色泥土層（約0.3m）、第3層茶褐色砂泥層（約0.2m）、第4層茶褐色粗砂層（地山）である。第3層上面には小礫を含み、上面で遺構を検出した。

調査地北部と南部との間に段を造り、調査区西部に1個、東部に3個の石を集中して据える。石は花崗岩で、長軸約1mの長方形を呈す。南側は落込み、埋土は上層が暗茶灰色泥土、下層は暗灰色泥土で腐植土を含む。

なお、断面図・遺構平面図については、55次調査の項で合わせて掲載した。

遺物 遺物は、55次調査と合わせて整理箱にして5箱出土した。遺物には土師器、陶器、磁器、瓦、木片などがある。

小結 今回の調査では、調査区南側で園池を検出し、西側に継続することが明らかとなった。園池の性格は不明である。

『鳥羽離宮跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

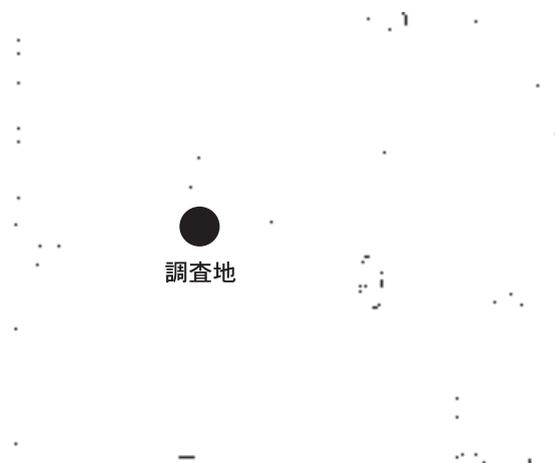


図217 調査位置図（1：5,000）

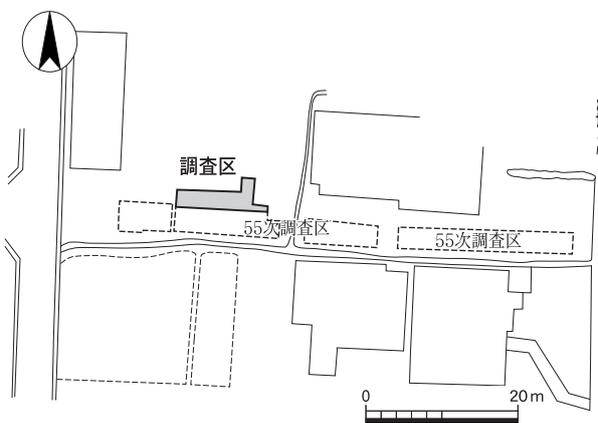


図218 調査区配置図（1：1,000）

49 鳥羽離宮跡61次調査

経過 本調査は、区画整理道路建設工事に伴うもので、当地は推定鳥羽離宮跡の東殿北西部にあたるため、調査を実施した。

調査地の北東部に南北1m、東西6mの北トレンチ、南西部に南北8.5m、東西2mの西トレンチを設定した。北トレンチは手掘りで近現代層を掘削し、西トレンチは重機で近現代層を掘削した。その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割り、下層の堆積状況や遺構を確認して、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、北・西トレンチで異なる。北トレンチでは第1層現代盛土層（約0.3m）、第2層黄褐色砂泥層（近世整地層：0.2～0.3m）、第3層茶灰色粘質土・暗茶灰色粘砂質土層（地山）である。第3層上面で遺構を検出した。

西トレンチでは第1層盛土層（約0.4m）、第2層暗茶褐色泥土層（0.2～0.4m）、第3層黄褐色泥土層（約0.3m）、第4層黄暗青灰色粘土・暗黒灰色粘土層（湿地：約0.8m）、である。第3層上面で遺構を検出した。

北トレンチでは、調査区東側で落込みを検出した。落込みは一辺が2m以上で調査区外に続く。深さ1.2mで、埋土は灰色泥土・暗灰色泥土・青灰色泥土で、土器の他に木製品が出土した。調査区西側では柱穴を数個検出した。建物としてはまとまらない。柱穴は径0.3m程度で、底に石を据えるものもある。遺構の時期は近世である。

西トレンチでは、調査区北部で井戸を検出した。径0.6mで素掘りである。その下層では調査区中央から北側に下がる湿地状の落込

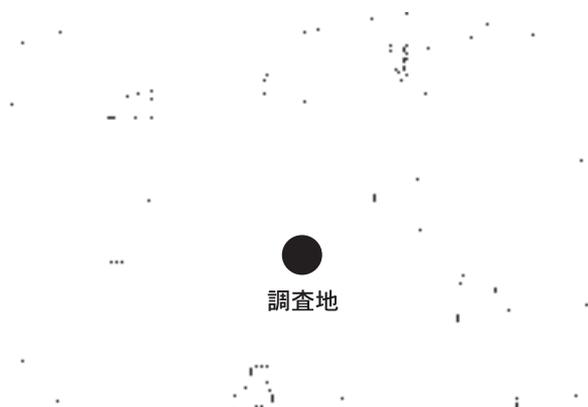


図219 調査位置図（1：5,000）

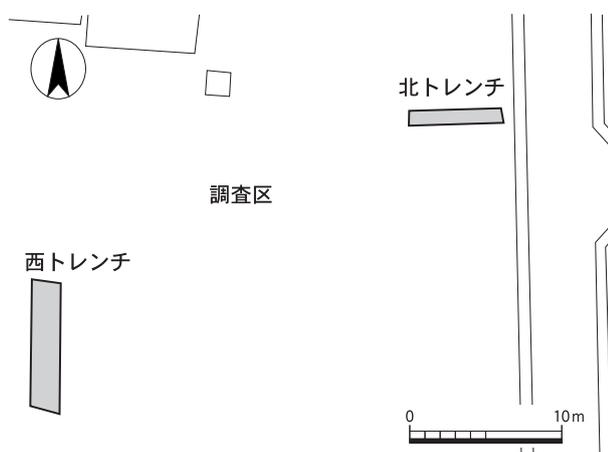


図220 調査区配置図（1：500）

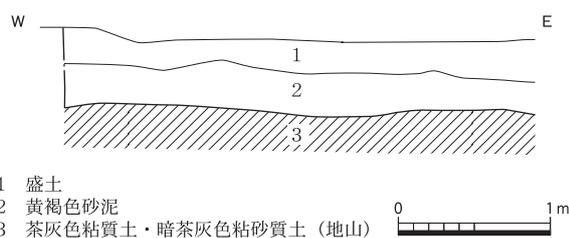


図221 北トレンチ北壁断面図（1：50）

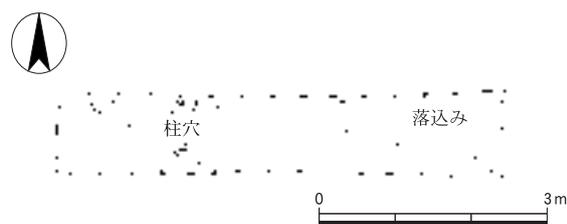


図222 北トレンチ遺構平面図（1：100）

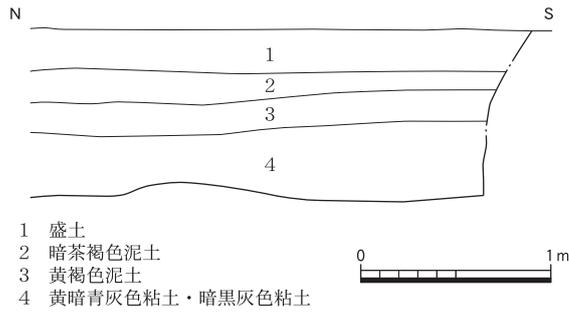


図223 西トレンチ東壁断面図（1：40）

みを検出した。落込み北半部には拳大の礫を敷いた面が認められた。遺構の時期は、井戸が江戸時代、落込みが平安時代から鎌倉時代である。

遺物 出土遺物は、両調査区共に少なく、小片が多い。

小結 今回の調査では、調査範囲が狭く、遺構の性格を明らかにすることができなかった。しかし、旧地形の一部を知ることができた。



図224 西トレンチ遺構平面図（1：100）

『鳥羽離宮跡 区画整理道路予定地内発掘調査概要 昭和54年度』 1981年報告

50 鳥羽離宮跡64-1次調査

経過 本調査は、区画整理道路建設工事に伴うもので、当地は推定鳥羽離宮跡の東殿南部にあたるため、調査を実施した。

調査地内に南北16m、東西6mの長方形の調査区を設定した。重機で近現代層を掘削し、その後手掘りにより遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割り、下層の堆積状況や遺構を確認して、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査区の基本層序は、第1層現代盛土層（約0.4m）、第2層灰色砂泥と黄灰色粘質土の互層（近世版築整地層：0.2～0.3m）、第3層茶褐色砂泥層（約0.3m）、第4層暗褐色砂泥層（約0.3m）、第5層茶褐色砂礫層（地山）である。第4層上面で遺構を検出した。

調査区中央で逆L字形の溝を検出した。幅0.6m、深さ0.15mで、両端共に調査区外に続き、北東から南西へ流れる。調査区全域で柱穴・土壙を検出した。柱穴は径0.3～0.6m、深さ0.1～0.5m程度で、底に石を据えるものもある。柱穴は多数検出したが、建物としてはまとまらなかった。土壙は規模・形状共に様々である。東壁中央の土壙からは、野鍛冶に使用されたと思われる窯壁の破片が焼土と共に大量に出土した。東壁中央の土壙の下から井戸を検出した。井戸SE2は、一辺0.8m方形木組みで、深さ0.45m残存する。厚さ0.01mの板を縦に、その内側に厚さ0.02m程の板を横に組み、中央に径0.4mの曲物を据える。調査区北側で落込みを検出した。深さは北端で約0.5mである。埋土は青灰色粘土である。遺構の時期は鎌倉時代から江戸時代に属する。

遺物 出土遺物には、土師器、瓦器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦などがある。遺物は主として

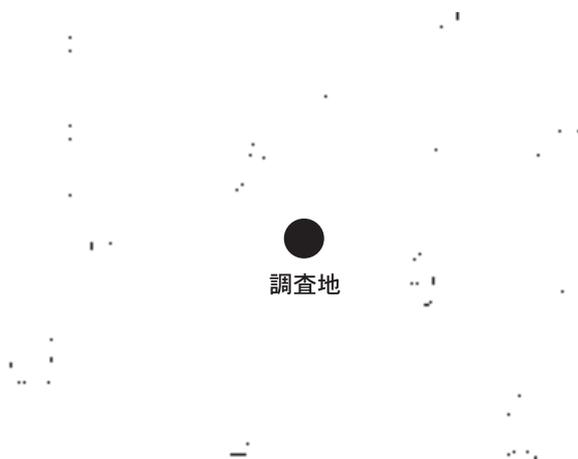


図225 調査位置図（1：5,000）

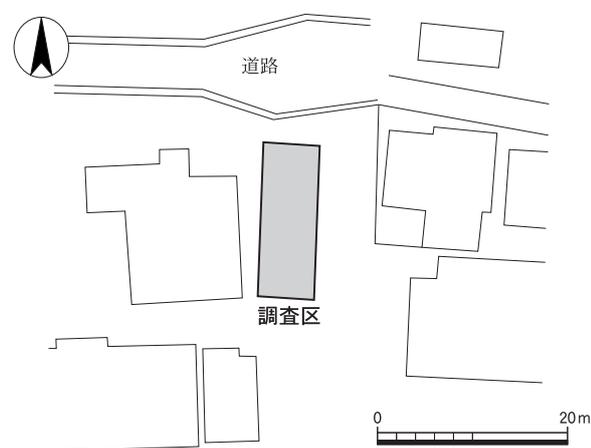


図226 調査区配置図（1：800）

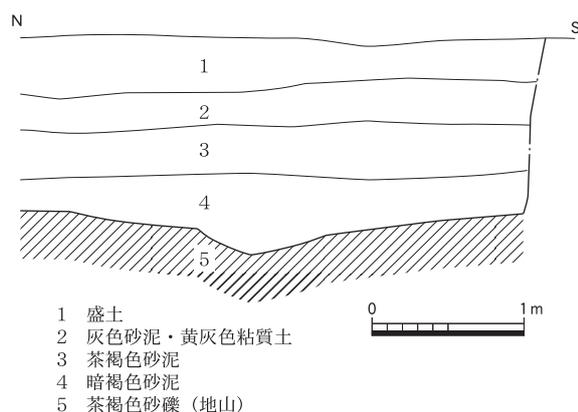


図227 東壁断面図（1：50）

北側落込みから出土し、土師器皿、須恵器鉢・甕、瓦器椀、瓦質土器羽釜、陶器甕・鉢、磁器椀・壺などがある。

小結 今回の調査では、北側の湿地と建物群の境を明らかにすることができた。建物の柱穴は規模などに差があり、時期差が認められるが、建物の平面形は不明である。

『鳥羽離宮跡 区画整理道路予定地内発掘調査概要 昭和54年度』 1981年報告

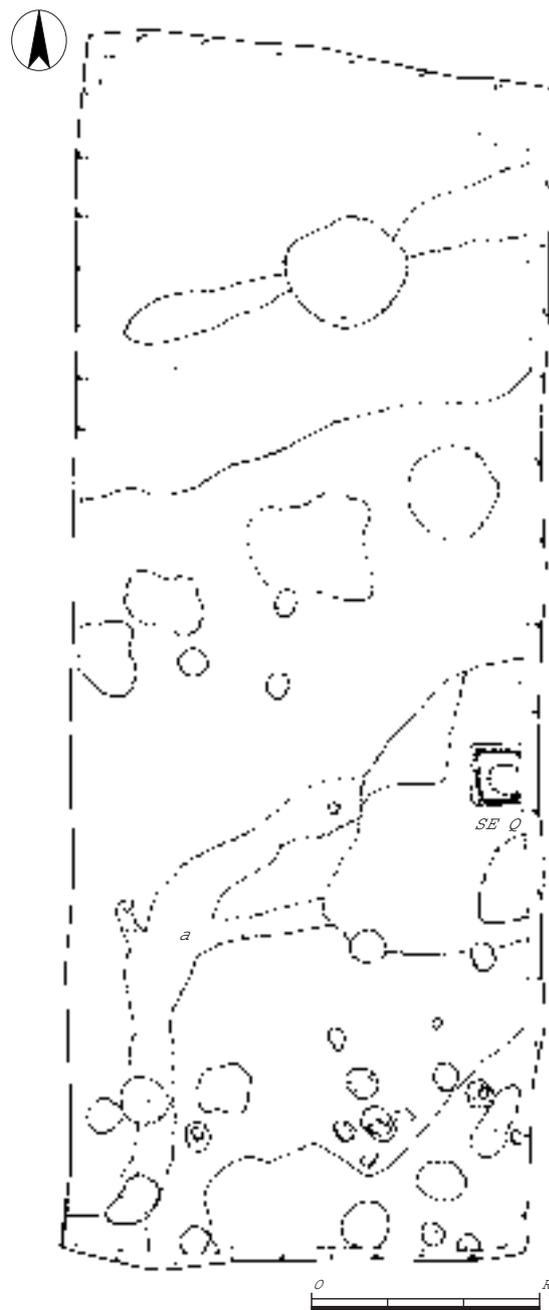


図228 遺構平面図 (1 : 100)

V 中臣遺跡

51 中臣遺跡15-2次調査

経過 今回の発掘調査は、1978年度に実施した15次調査地点の北西側敷地拡張に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の南西部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵上南西斜面に位置し、北東から南西に緩やかに傾斜する。

調査は、調査地内に南北4.5m、東西12.5mの調査区を設定した。耕土・床土などを手掘りで掘削し、その後遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土・床土層（約0.3m）、第2層灰褐色砂泥層（耕土：0.3m）、第3層暗褐色砂泥層（0.05m）、第4層黄褐色粘土層（地山）である。第4層上面で遺構を検出した。

調査区東部で、東西方向の溝状遺構を検出した。幅0.9m、深さ0.15mで、長さ1.8m検出した。

遺物 遺物は、出土していない。

小結 今回の調査は、範囲が狭いため詳細は不明である。検出した溝は、1976年度の7次調査で検出した溝の続きと推定できるが、性格は不明である。15次調査検出の溝は方形周溝墓であることから、今回の検出の溝も方形周溝墓の可能性は高く、調査地は遺跡南西部の弥生時代終末期の墓域と想定できる。

『中臣遺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

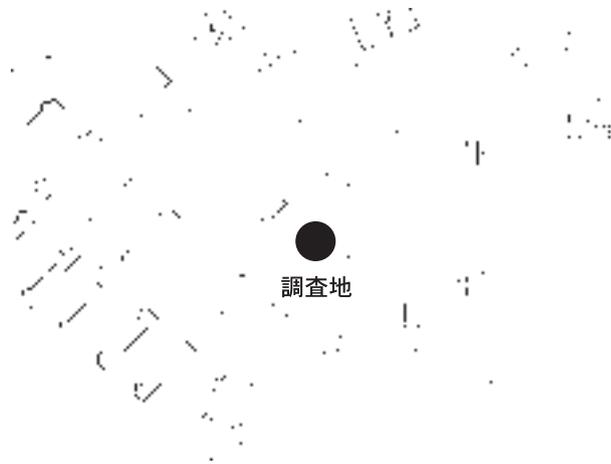


図229 調査位置図（1：5,000）

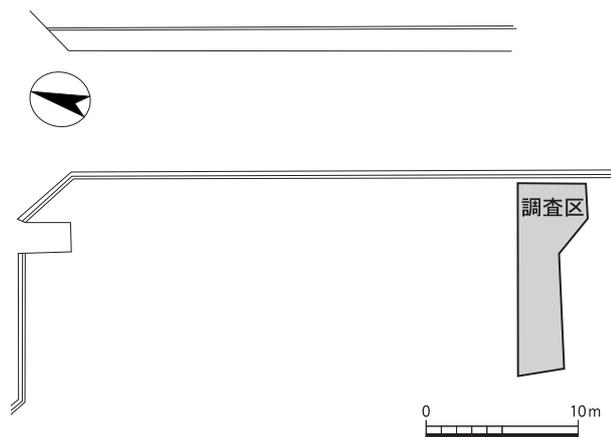


図230 調査区配置図（1：500）

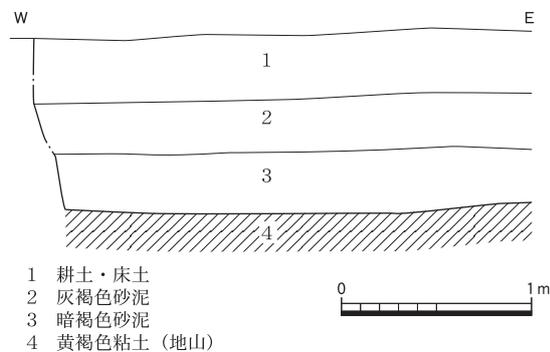


図231 北壁断面図（1：40）

52 中臣遺跡20次調査

経過 今回の発掘調査は、個人住宅建設工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の南部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は旧安祥寺川の河岸段丘上で、北から南へ緩やかに傾斜する。

調査は、調査地内に南北15.5m、東西46mの調査区を設定した。耕土・床土などを手掘りで掘削し、その後遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土層（約0.1m）、第2層黄褐色砂泥層（床土：0.05m）、第3層暗褐色砂泥層（耕土：0.05m）、第4層茶灰色砂泥層（包含層0.1m）、第5層茶褐色砂泥層（地山）である。第5層上面で遺構を検出した。

調査区西部で8棟、中央部で2棟の竪穴住居を検出した。西部ではかなり重複して造られているが、中央部は単独である。各住居の主軸方向は多少の違いはあるが、いずれも北側で西に振る。竪穴住居の切り合いから、1号・4号が最も古く、重複関係は4→6→5号、1→10→2号、4→3→2号となる。

住居は方形または隅丸方形で、規模は一辺4.8～6.8m、壁溝は幅0.15～0.25m、深さ0.04～0.05mで全周する。壁溝内で小ピットを検

出した例もある（8号・9号）。支柱穴は4箇所、径0.3～0.4m、深さ0.3～0.4mである。中央に焼土・炭が散在したものや（2号・5号・9号）、焼土・炭が入った土壌が検出された例（3号・8号）などがあり、中央に炉跡が推定できる。床面は貼床を施し固めたもの（8号・9号・10号）、南辺中央にU字形の盛り上がりがあるもの（1号）、北東コーナーに砂礫を叩き締めたもの（2号）がみられる。また、床面南辺中央で土壌（3号・10号）、北東コーナーで土壌（5号）、南辺中央で土壌（8号）などを検出し、貯蔵穴の可能性はある。

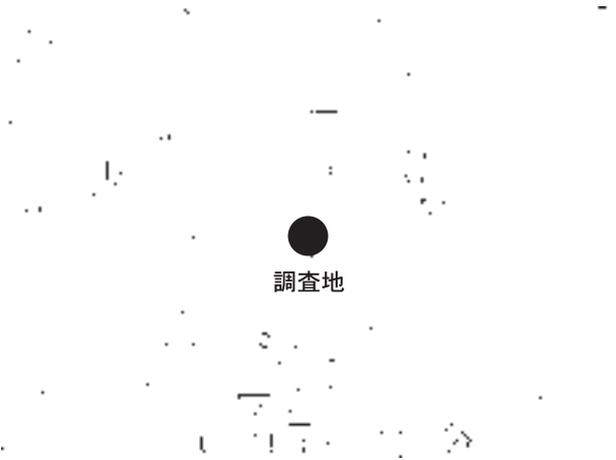


図232 調査位置図（1：5,000）

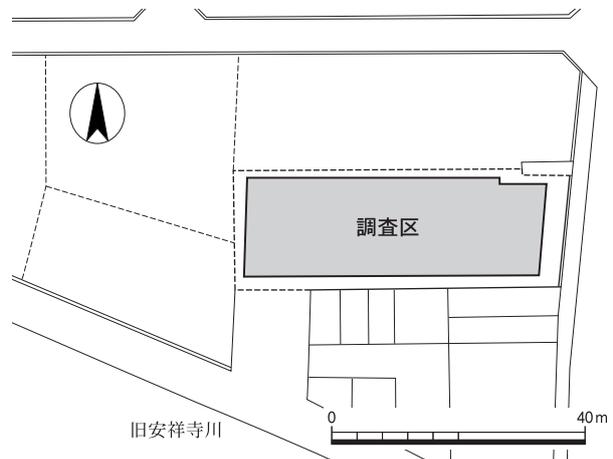


図233 調査区配置図（1：1200）

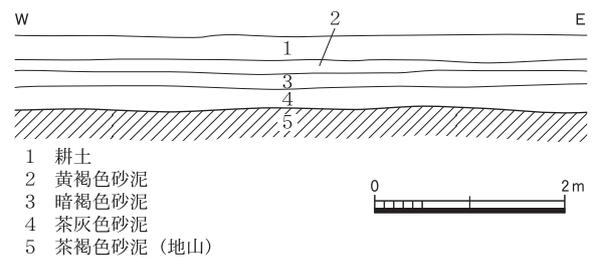


図234 北壁断面図（1：80）

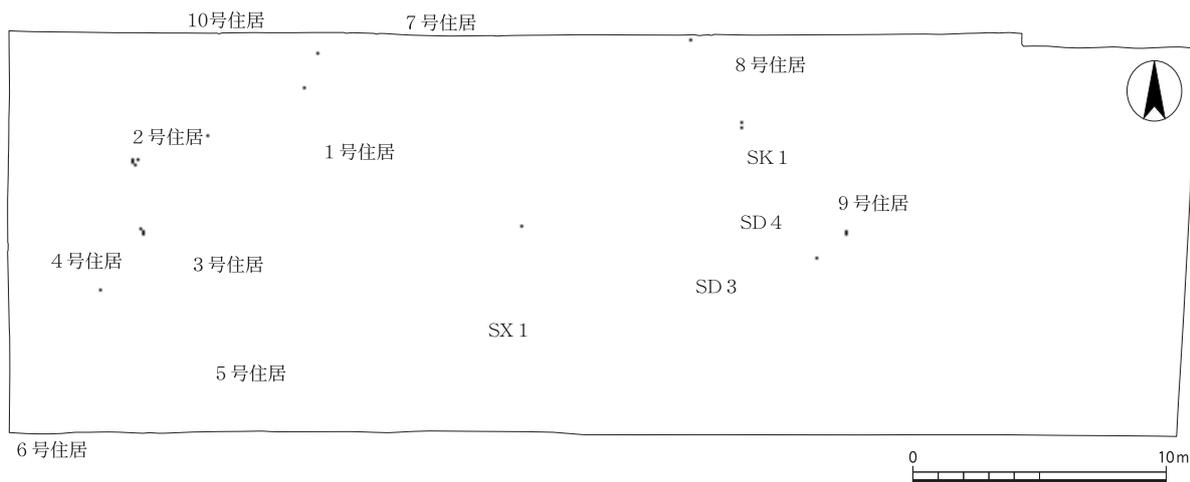


図235 遺構平面図 (1 : 300)

竪穴住居の埋土は暗褐色砂泥を中心とした土層で、埋土中から1号・2号・6号では鉄鏃、2号・8号では叩き石、8号では白色粘土の塊、9号では南東コーナーで小石集積を検出した。

調査区中央部で住居と同時代と考えられる溝を3本検出した。幅0.6~0.7m、深さ0.05mで方向は不定である。

調査区西部から中部で土壇・柱穴を多数検出した。土壇は規模・形状共に多様である。中央のSX 1は2.8m×2.2m、深さ0.6mで、溜池のようなものと推定できる。また、土壇SK 1は1.0m×0.9



図236 調査区全景 (東から)

m、深さ0.3mで、袋状を呈し、外部貯蔵穴の可能性がある。柱穴は多数検出したが、建物としてはまとまらなかった。遺構の時期は、いずれも弥生時代後期から古墳時代前期である。

遺物 出土遺物には、土師器、須恵器、銅鏃、鉄鏃などがある。遺物は第4層や各竪穴住居から出土した。

小結 今回の調査では多数の竪穴住居を検出した。中臣遺跡では最南端の地点であり、集落の範囲を考える上で重要な発見となった。また、調査地は旧安祥寺川と20mと近接しているが、河川の影響は全く認められなかった。

『中臣遺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

53 中臣遺跡21次調査

経過 今回の発掘調査は、宅地造成工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の南部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵から山科川に向かう低位段丘上に立地する。

調査は、調査地内に南北約40m、東西約28mの調査区を設定した。耕土・床土などを重機で掘削し、その後手掘りで調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、北東部では第1層盛土層（0.1～0.6m）、第2層耕土層（0.05m）、第3層床土層（0.05m）、第4層黒褐色混礫砂泥層（包含層：0.1～0.2m）、第5層黒色泥土層（縄文時代後期から弥生時代中期包含層：0.1m）、第6層黄灰色粘土層（地山）である。第5層黒色泥土層上面で4時期の遺構を検出した。

第1期の遺構には、調査区南部で竪穴住居を1棟検出した。13号住居は円形で、規模は径8m、壁溝は幅0.1m、深さ0.05mで全周する。支柱穴は4箇所確認したが、それ以上あると推定できる。中央に上段一辺1.1mの方形、下段径0.7mの円形の掘

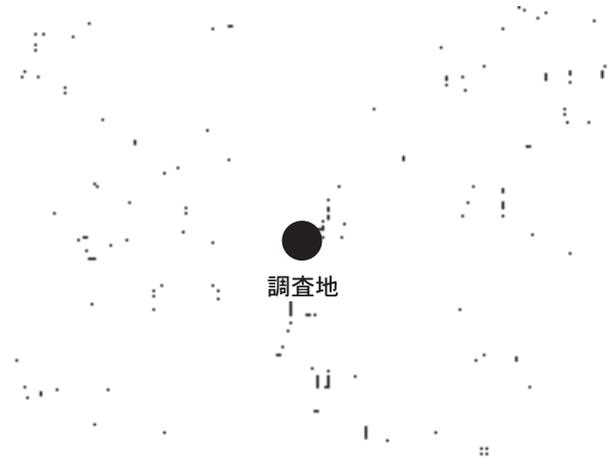


図237 調査位置図（1：5,000）

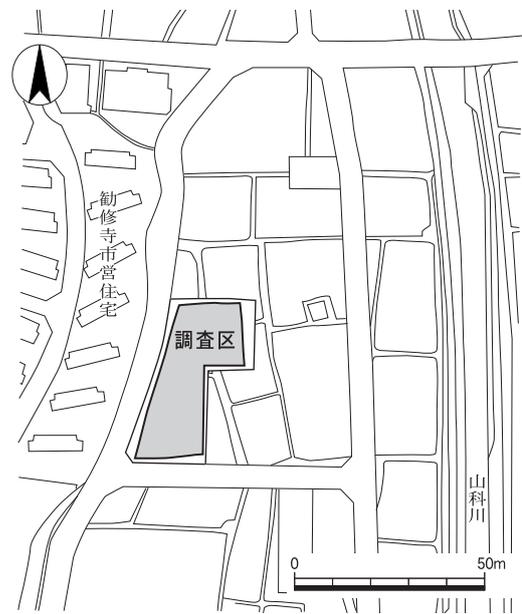


図238 調査区配置図（1：2,000）

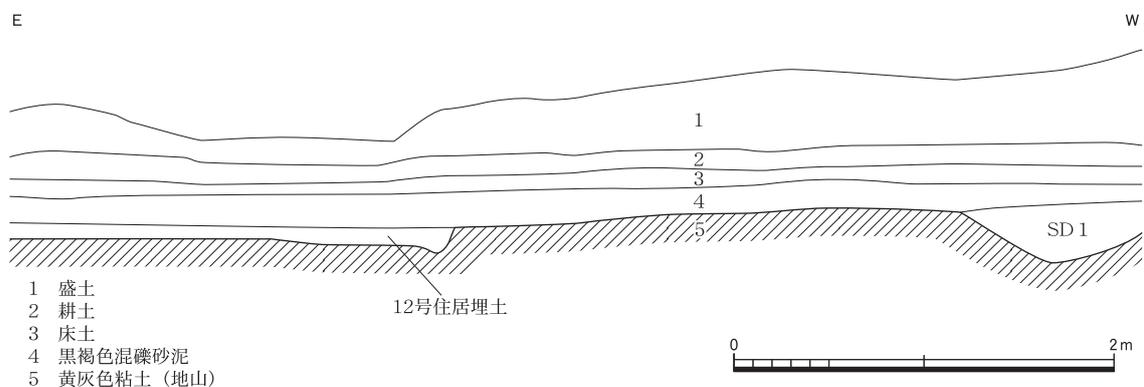


図239 北壁断面図（1：40）

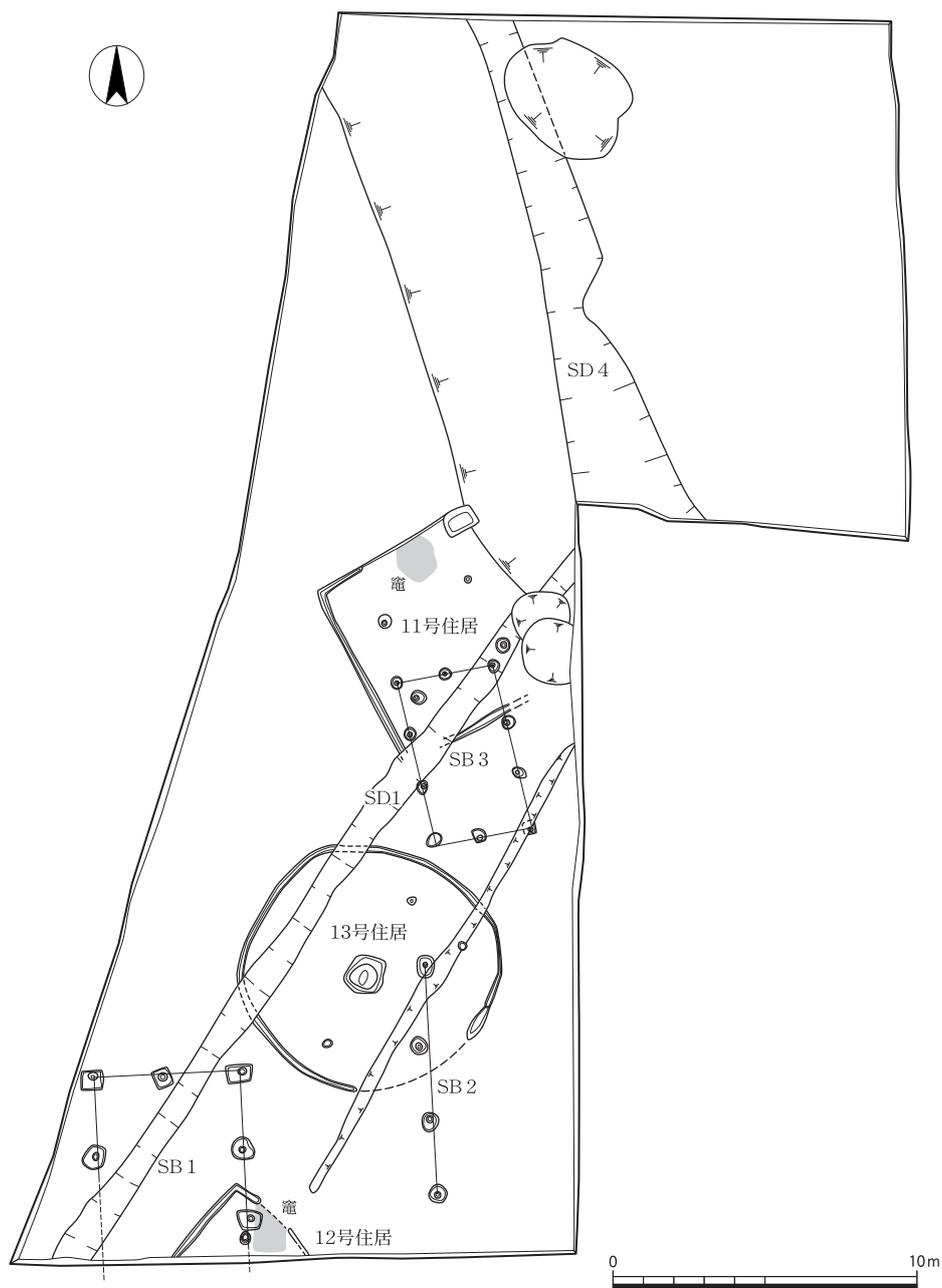


図240 遺構平面図（1：250）

り込みがあり、黒色泥土が堆積する。遺物は含んでいない。時期は弥生時代後期に属する。

第2期の遺構には、調査区南辺と中央部で竪穴住居を2棟、中央部で掘立柱建物1棟を検出した。住居は方形で、11号住居は一辺5m、壁溝は幅0.15m、深さ0.15mである。支柱穴は4箇所、径0.3~0.4m、深さ0.15mである。北辺中央に竈の痕跡があるが残存状況は良くない。竈周辺に土器が散在する。12号住居は北側の一部を検出し、調査区南部へ続く。壁溝は幅0.2m、深さ0.15mである。竈は東北辺中央に深さ0.2m程度で良好に残存する。竈周辺の貼床は固く締まる。中央部の建物SB3は2間×3間の南北棟で、北側で西へ振る。柱間は梁間が1.6m等間、桁行は1.8m等間である。柱穴の内、11号住居床面から確認されるものもあり、同時期かそれより古いと考えられ

る。時期は、古墳時代後期（7世紀初め）に属する。

第3期の遺構には、調査区南部で掘立柱建物を検出した。南西部のSB1は2間×3間以上の南北棟である。柱間寸法は梁間が2.4m等間、桁行は北から2.7m・2.4mである。柱穴は方形・楕円形で一辺0.6～0.7mである。南東部の建物SB2は柱間2.4mの柱列を南北3間分検出した。東西に対応する柱穴はなく、柵の可能性が高い。柱穴は円形で一辺0.6mである。SB1と柱筋は揃う。時期は、平安時代前期（9世紀）に属する。

第4期の遺構には、調査区北部で南北溝を検出した。溝SD4は斜行し、幅1.5mである。時期は、平安時代中期（10世紀）に属する。

その他の遺構には調査区中央の斜行溝SD1がある。時期は切り合いから古墳時代と平安時代の間である。調査区全域で柱穴・土壌を検出したが、性格は不明である。

遺物 出土遺物には、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、黒色土器などがある。遺物は包含層や各住居、溝などから出土した。

小結 今回の調査では、弥生時代から平安時代に至る各時期の遺構を検出し、調査地の変遷を考える上で重要な調査であった。特にこれまで遺構として捉えることのできなかった弥生時代後期の住居を検出したことは、同時期の集落が確実に山科川沿いまで広がっていることを示しており意義は大きい。また、平安時代前期の遺構は、当該期における小単位の遺構群を考える上で重要である。

『中臣遺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告



図241 12号住居（南西から）

54 中臣遺跡22次調査

経過 今回の発掘調査は、宅地造成工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡中央部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵から山科川に向かう低位段丘上に立地する。

調査区は4箇所設定し、A・Bトレンチからはじめ、土砂を反転しC・Dトレンチの調査を実施した。耕土・床土などを重機で掘削し、その後手掘りで調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土・床土層（約0.3m）、第2層黒色土層（0.2m）、第3層褐色粘土層（地山）である。

第3層上面は西に向かって傾斜しており、遺構は検出できなかった。

遺物 出土遺物には、土師器、陶器、砥石などがある。遺物は包含層などから出土した。

小結 今回の調査では、遺構は検出できなかった。おそらく水田化の際に遺構が削平を受けたものと推定される。

『中臣遺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

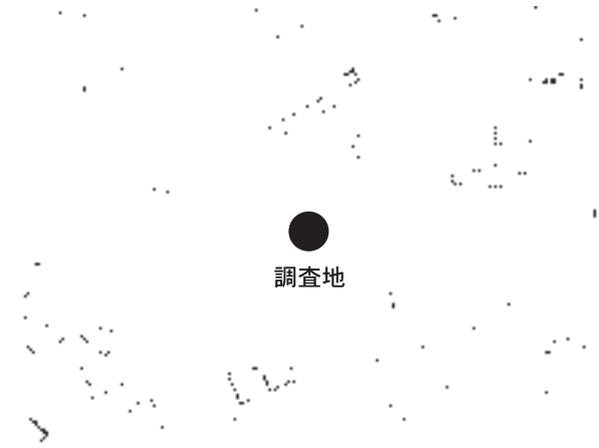


図242 調査位置図（1：5,000）



図243 調査区配置図（1：2,500）

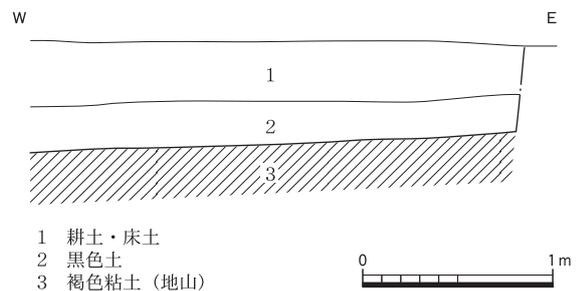


図244 北壁断面図（1：40）

55 中臣遺跡23次調査（図版18）

経過 今回の発掘調査は、山科川中小河川改修工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の西部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵から山科川に向かう低位段丘上に立地する。

調査地は、事前に試掘調査・ボーリング調査などを実施し、北からA・B・C・D区の4箇所の調査区を設定した。A・D区から調査を実施したが、A区南部・D区全域・B区北部は攪乱が多く調査不可能のため、D区は埋め戻し、A・B区は縮小した。調査は耕土・床土などを重機で掘削し、その後手掘りで調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序はA区とB・C区では異なる。A区では第1層耕土・床土層（0.15m）、第2層暗灰褐色砂泥層（0.1m）、第3層暗褐色砂泥層（0.05m）、第4層暗褐色泥砂層（0.1m）、第5層褐灰色砂泥層（0.1～0.2m）、第6層砂礫層（地山）である。

遺構は、第5層上面で第1面、第6層上面で第2面の遺構を検出した。B・C区では耕土・床土下は黒褐色泥砂・暗茶褐色砂泥層（包含層）・砂礫層（地山）で、おおむね黒褐色泥砂・暗茶褐色砂泥層上面で第1面、砂礫層上面で第2面の遺構を検出した。

A区第1面では、調査区南部で掘立柱建物SB1を検出した。3間×4間以上の東西棟で、柱間南北1.7m、東西1.8m等間である。柱穴は円形で一辺0.6mである。北部でも柱穴を検出したが、建物としてまとまらなかった。遺構の時期は不明である。

A区第2面では、調査区南西部で12号住居を検出した。規模は長方形で5.3m×4.3m、壁溝は幅0.3m、深さ0.05mで全周する。住居の北東部を攪乱されているが、主柱穴は3箇所確認した。北東隅で貯蔵穴を検出した。中央から北部で方形周溝墓を4基検出し、2号から4号は南北に並び1号は振れる。上面は削平を受け、主体部は確認していない。規模は1号が一辺約10m、2号が9m、3号が7.8m、4号が10mである。溝幅は0.5～1.0m、深さ0.2～0.4mである。溝内からは土器が出土したが、供献されたものかどうか不明である。全域で土壌を検出し、土器廃棄穴（SK4）、

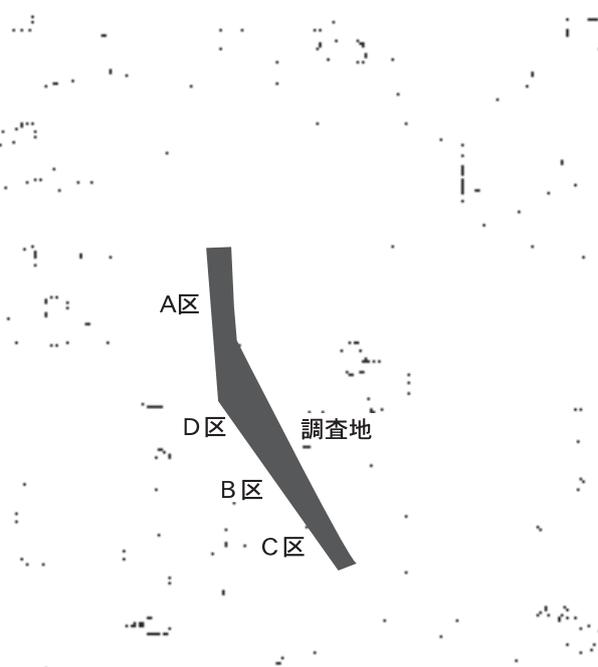


図245 調査位置図（1：5,000）

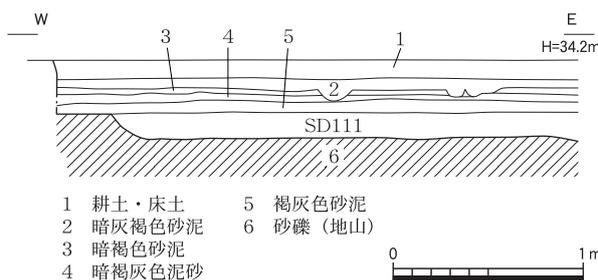


図246 A区北壁断面図（1：40）

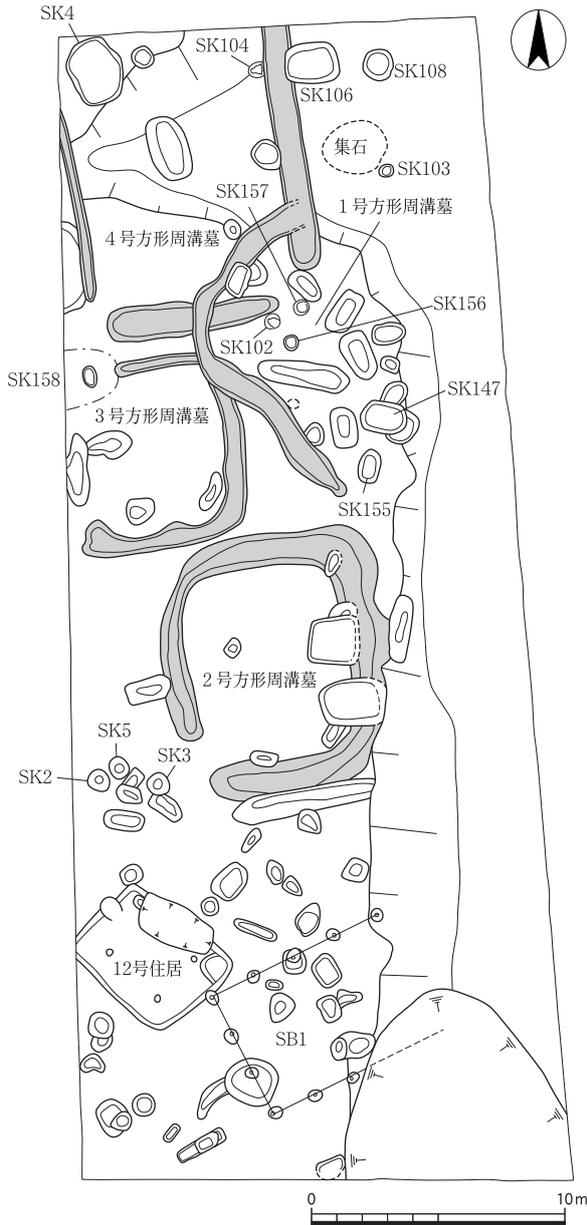


図247 A区遺構平面図（1：300）

土器棺墓（SK104・157・102・156・2・3・5・22・155）、土壙墓（SK106・147）、住居に伴う土壙（SK158）などがある。また全域で柱穴を検出したが、建物としてまとまらなかった。遺構の時期は、12号住居が古墳時代後期、方形周溝墓が弥生時代前期から中期、土器廃棄穴（SK4）が縄文時代晩期、甕棺墓が縄文時代晩期・弥生時代前期・弥生時代中期初頭、壺棺墓が弥生時代前期、土壙墓が古墳時代中期に属する。

B・C区第1面では、調査区全域で掘立柱建物を検出した。SB2は3間×5間南北棟、SB3は3間×2間以上南北棟、SB4は2間×4間南北棟、SB5は3間分を検出、SB6は2間以上を検出、SB7は3間×5間東西棟、SB8は2間×4間以上南北棟である。柱間は1.5～1.8mで、柱穴は円形または方形で、一辺0.3～0.6mである。方向はかなりばらつき、規則性が見られない。また、この他に全域で柱穴を検出したが、建物としてまとまらなかった。中央部から南部で竪穴住居12棟を検出した。1号は隅丸方形で一辺7.25m、2号は隅丸方形で一辺5.5m、3号は方形で一辺7.2m、4号は隅丸方形で一辺3.3m、5号は北東部を検出し規模不明、6号は方形で

一辺5m、7号は方形で一辺5.6m、8号は長方形で4.4×4.05m、9号は方形で一辺7.5m、10号は南西部を検出し規模不明、11号は長方形で4.4m×5.6m、13号は方形で一辺3.6mである。全ての竪穴住居で壁溝を確認し、幅0.1～0.3m、深さ0.05～0.3mで、3号では溝内で小ピットを確認した。主柱穴は全体を確認したのものでは4箇所（3・8・9号）、他も同様であろう。竈は北辺中央で検出したもの（1～3・5～7号）が多い。また、貯蔵穴を検出した例（1・2・6～8号）もある。遺構の時期は、竪穴住居・掘立柱建物のうち4号住居を除き古墳時代後期、4号住居が弥生時代後期に属する。

B・C区第2面では、調査区南側を中心に土壙を多数検出した。形状は不定形のものが多く、規模は様々である。中央部では、柱穴や溝を少数検出した。遺構の時期は、弥生時代前期・中期に属する土壙が確認できた。

遺物 遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、石器、石仏などが出土した。時期は、旧石器時代から近世にまで至る。旧石器時代の石器は耕土中から出土し、有舌先頭器・エンドスクレーパーがある。縄文時代晩期の土器、石器は土器棺墓、包含層などから出土し、甕・鉢、石鏃・凹石・磨石・打製石斧・磨製石斧・石皿などがある。弥生時代の土器は墓、竪穴住居、土壙、包含層などから出土し、壺・甕などがある。古墳時代の土器は竪穴住居、土壙、包含層などから出土し、土師器壺・高杯、須恵器杯・蓋・壺などがある。平安時代の土器は包含層などから出土し、土師器などがある。鎌倉時代の土器は包含層などから出土し、瓦器椀などがある。

小結 今回の調査では、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代と各時期の遺構・遺物を検出し、調査地の変遷を確認できた。縄文時代晩期では、遺構・遺物を多数検出し、土器棺墓は検出したものの住居は未検出で、当該期の集落・墓域のあり方を考える上で重要な遺構となった。また、縄文時代晩期後半の土器と弥生時代前期の土器が伴出しており、貴重な資料となった。弥生時代では、中期初頭と考え

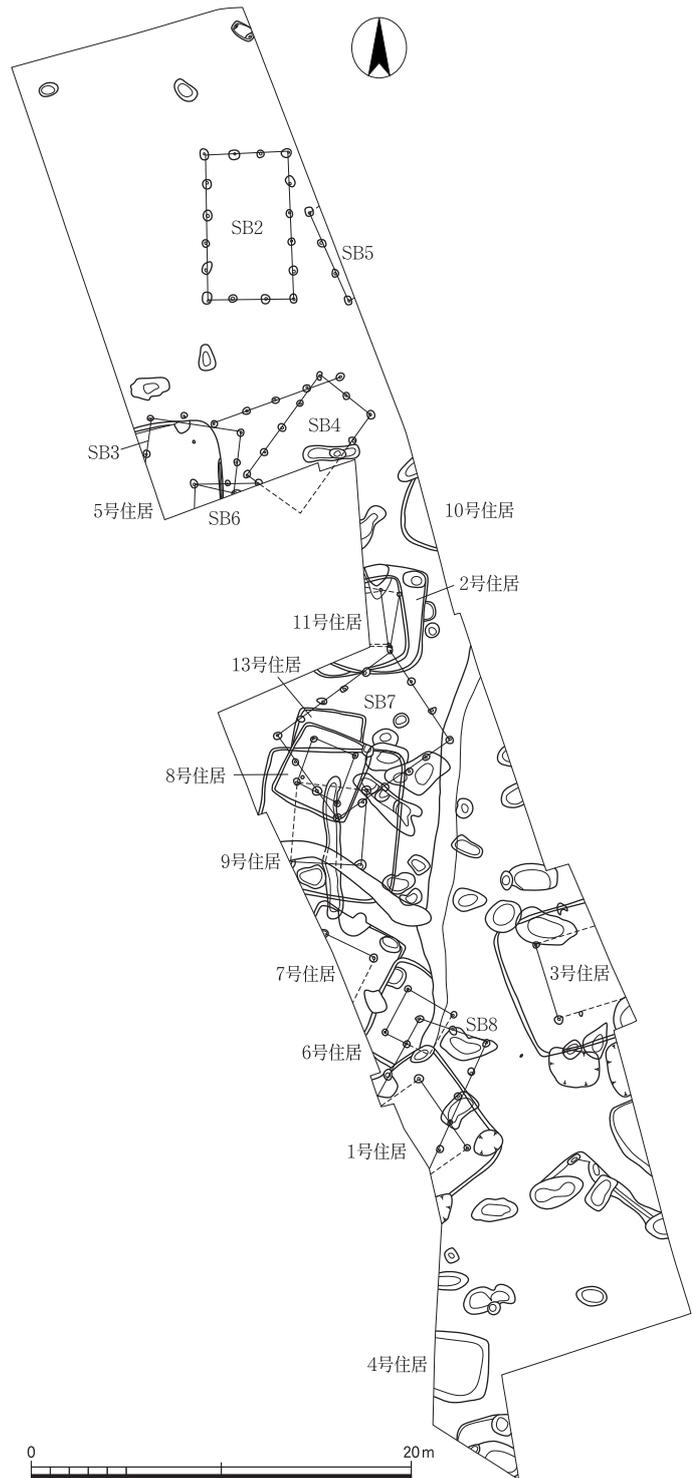


図248 B・C区遺構平面図（1：400）

られる方形周溝墓を栗栖野丘陵上で検出し、墓域を考える上で問題となる。さらに、弥生時代後期の遺構は4号住居だけであり、出土遺物も少ない。丘陵を取り巻く低位段丘上に立地する集落は、調査地周辺にまで及んでいなかったとも考えられ、集落の範囲を推定する重要な遺構となった。また、古墳時代中期の土壙墓を検出し、当該期の遺構の検出は初めてであった。これも墓だけで住居が確認されておらず、今後の課題である。

56 中臣遺跡24次調査

経過 今回の発掘調査は、宅地造成工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡南西部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵から旧安祥寺川に至る低位段丘上の最も低い地点に立地する。

調査は、南北18m、東西4mの長方形の調査区を設定し、調査を実施した。耕土・床土などを重機で掘削し、その後手掘りで調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土(約0.2m)、第2層盛土層(約0.2m)、第3層旧耕土(約0.15m)、第4層暗褐色砂泥層(0.25m)、第5層黄褐色粘土層(地山)である。

北部で溝状の凹みを検出したが、顕著な遺構は検出できなかった。

遺物 出土遺物には、古墳時代の土師器・須恵器があり、耕土・旧耕土から少量出土した。

小結 今回の調査では、遺構は全く検出できなかった。周辺も含めて中臣遺跡の中で遺構の空白地帯である。

『中臣遺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

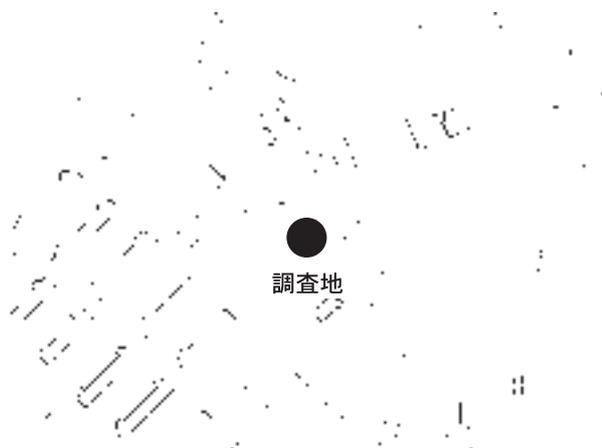


図249 調査位置図 (1 : 5,000)

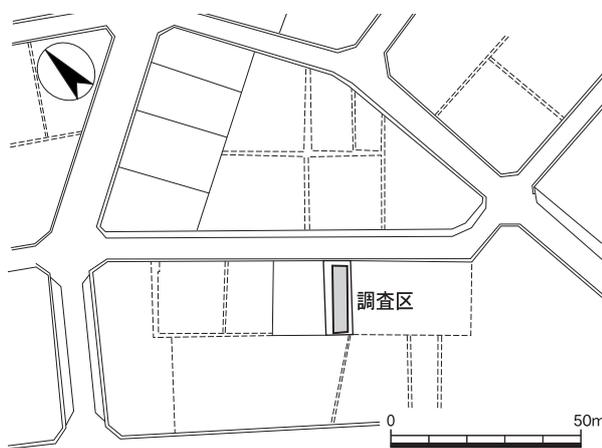
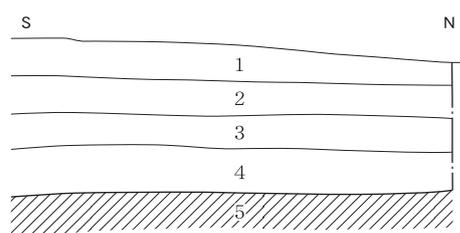


図250 調査区配置図 (1 : 2,000)



- | | |
|-------|--------------|
| 1 耕土 | 4 暗褐色砂泥 |
| 2 盛土 | 5 黄褐色粘土 (地山) |
| 3 旧耕土 | |

図251 断面図 (1 : 40)

57 中臣遺跡25次調査

経過 今回の発掘調査は、宅地造成工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡東部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵から山科川に至る低位段丘上に立地する。

調査は、南北8m、東西3mの調査区を設定し、一部拡張した。耕土・床土などないため、手掘りで調査を実施し、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、耕土などは除去され、第1層黒灰色砂泥層（包含層：約0.2m）、第2層黒色砂泥層（包含層：約0.1m）、第3層黄褐色粘土層（地山）である。遺構は第2層または第3層上面で検出した。

遺構には土壇・柱穴状ピットがあるが、性格は不明である。遺構埋土からの遺物も少ない。

遺物 出土遺物には、縄文土器、弥生土器、石器などが出土した。土器には、縄文土器中期・後期・晩期の甕・鉢、弥生土器第Ⅰ様式甕などがあり、第1層・第2層から出土した。

小結 今回の調査では、縄文時代から弥生時代の遺物が出土しているが、縄文時代・弥生時代の遺構は全く検出できなかった。調査区が小範囲であるため、検出した土壇・ピットは性格は不明であるが、本来上層にあったと考えられる古墳時代以降のものであったと考えられる。

『中臣遺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

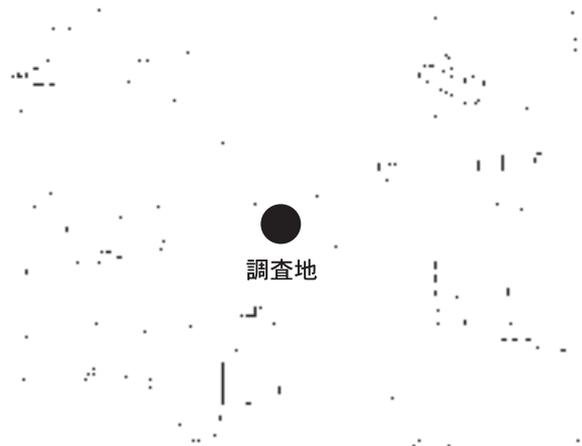


図252 調査位置図（1：5,000）

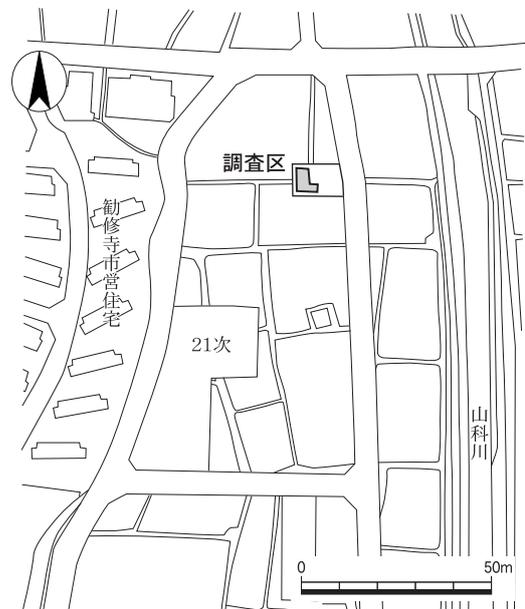


図253 調査区配置図（1：2,000）

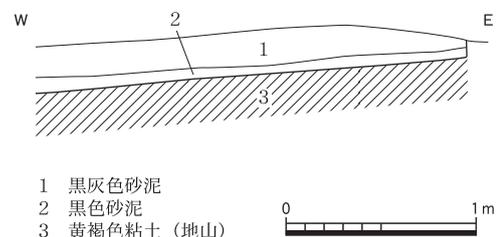


図254 北壁断面図（1：40）

58 中臣遺跡26次調査

経過 今回の発掘調査は、宅地造成工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡東部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵から山科川に至る低位段丘上に立地する。

調査は、南北26m、東西7mの長方形の調査区を設定し、調査を実施した。盛土・耕土などは重機で掘削し、手掘りで調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、第1層盛土層（約0.6m）、第2層耕土層（約0.2m）、第3層砂礫層（約0.2m）、第4層淡茶灰色砂泥（約0.1m）、第5層灰色砂礫層（地山）である。南部では、第4・5層間で暗黄褐色泥土が堆積し、少量の縄文時代後期の土器片を含む。遺構は第5層上面で出した。

遺構には凹み、柱穴状ピットがあるが、性格は不明である。

遺物 出土遺物には、縄文土器などがあり、少量小片である。

小結 今回の調査では、縄文時代の遺物が出土しているが、当該期の遺構は全く検出できなかった。第3層砂礫層は山科川の氾濫による堆積と考えられる。暗黄褐色泥土の堆積はブロック的であり、これも山科川の氾濫による堆積と考えられる。

『中臣遺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

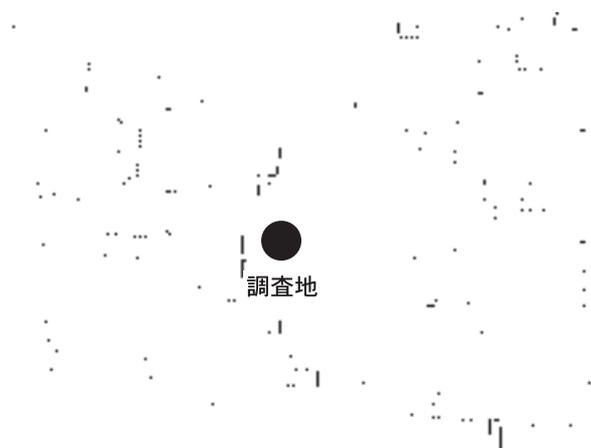


図255 調査位置図（1：5,000）

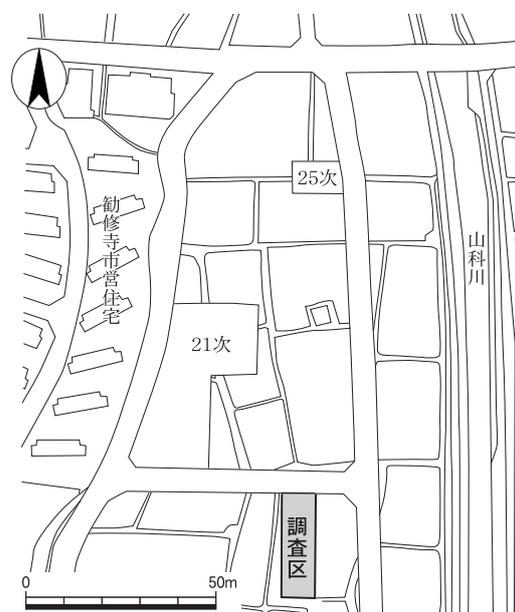


図256 調査区配置図（1：2,000）

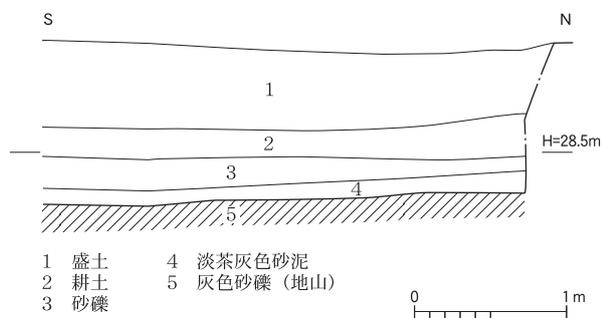


図257 西壁断面図（1：50）

59 中臣遺跡27次調査（図版19）

経過 今回の発掘調査は、宅地開発工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の中央部西側にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵上の西側に立地する。

調査地は、事前に試掘調査などを実施し、南北54m、東西33mの1区を設定し、随時拡張した。1区終了後に、南北55m、東西5mの2区を設定し、随時拡張した。調査は耕土・床土などを重機で掘削し、その後手掘りで調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土・床土層（0.2～0.3m）、第2層暗茶褐色砂泥層（0.1m）、第3層暗黄褐色粘土層（地山）である。遺構は、第3層上面で検出した。

調査区南西部で方形周溝墓を2基検出した。1号周溝墓は一辺8mで、周溝幅約1m、深さ0.2～0.4mで、埋土は黒褐色砂泥で弥生時代を少量含む。主体部は南側で検出し、南北2.7m、東西1.5mで、埋土は暗茶褐色砂泥が中心である。2号周溝墓は東部を検出した。周溝幅約0.5m、深さ約0.1mで、上部は削平され主体部は未検出である。いずれも北で西へ振れる。時期は弥生時代中期初めである。

調査区全域で溝、柱穴、土壙などを検出したが、いずれも耕作などに関係するものと考えられる。時期は近代以降である。

遺物 出土遺物には、弥生土器などがある。弥生土器「様式頃」で、方形周溝墓から少量出土した。

小結 今回の調査では、かなりの面積を調査した割には、明確な遺構は方形周溝墓2

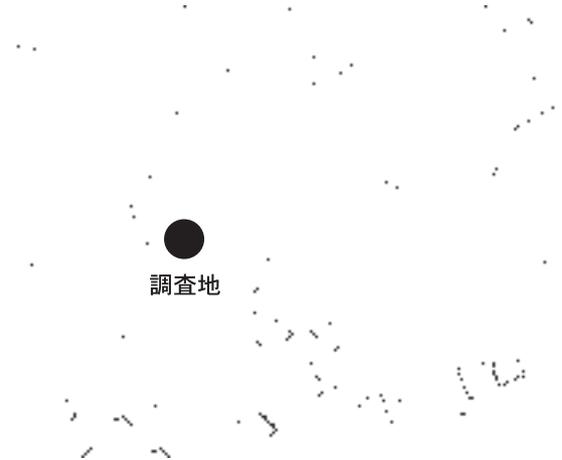


図258 調査位置図（1：5,000）

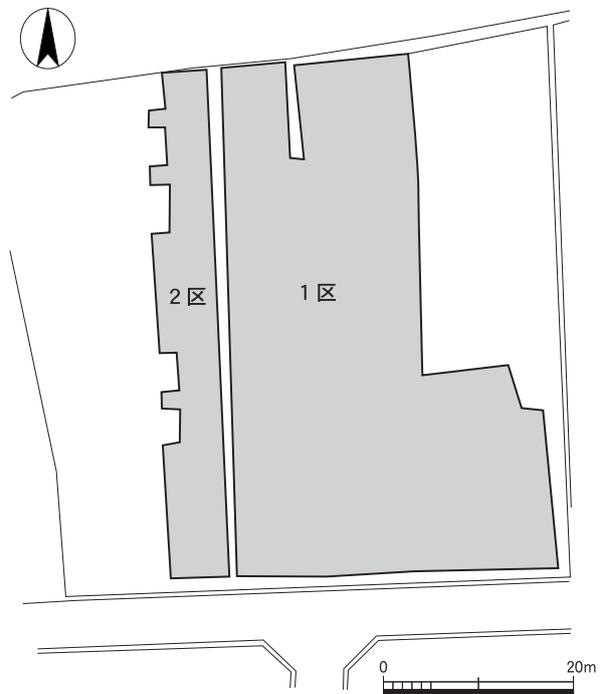


図259 調査区配置図（1：800）

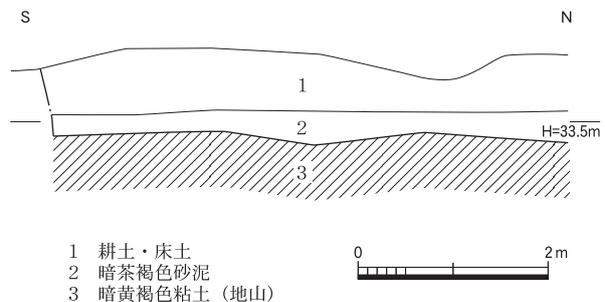


図260 1区西壁断面図（1：80）

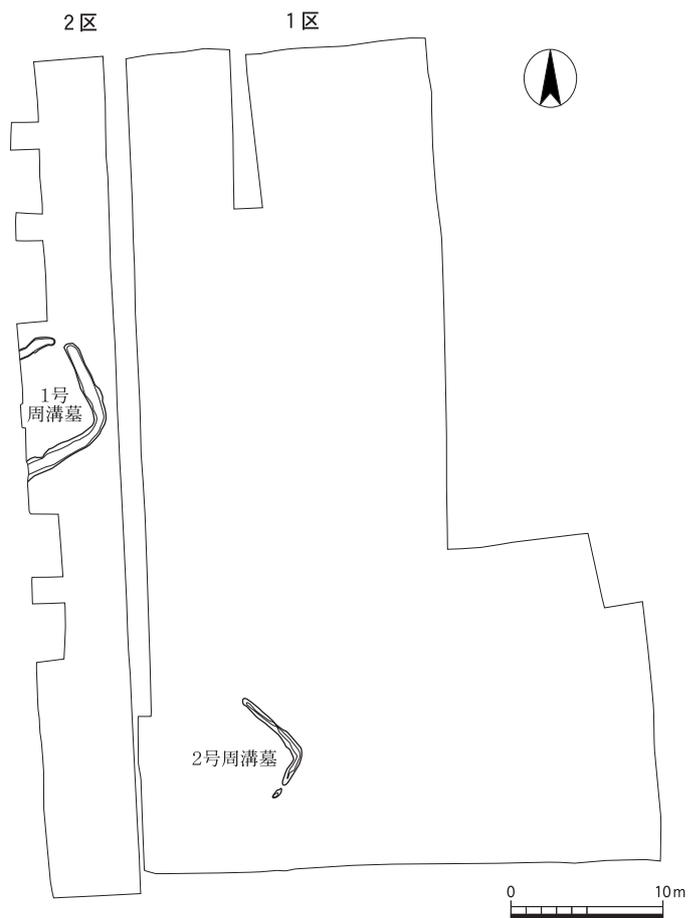


図261 遺構平面図（1：500）

基にとどまった。周溝の深さも浅く、耕作の際などにより遺構面が削平を受けたと推定できる。ただ、丘陵上で弥生時代の方形周溝墓を検出し、当該期の墓域を考える上で重要な遺構となった。

60 中臣遺跡28次調査

経過 今回の発掘調査は、宅地造成工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の南部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵から旧安祥寺川へ向かう低位段丘上に立地する。

調査は、調査地内に北と南の2箇所のトレンチを設定したが、後結合し南北約19m、東西約11mの長方形の調査区を設定し、随時拡張した。耕土・床土などを重機で掘削し、その後手掘りで調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土・床土層（約0.35m）、第2層暗褐色砂泥層（包含層：約0.5m）、第3層灰褐色泥土層（地山）である。遺構は、第3層上面で検出した。検出した遺構には、竪穴住居・溝・柱穴・土塋などがある。

調査区中央東側で竪穴住居14号を検出した。隅丸方形で南北4.4m×東西4.7mで、深さ0.3mである。壁溝は幅約0.3m、深さ0.1mで全周する。主柱穴は4箇所、南北間隔2m、東西間隔2.4m、掘形約0.4m、柱径0.12mである。北辺中央に竈が付設され、竈内には土師器甕を伏せ、煮炊き用の甕も散在する。床面は2度改変され、床面も2面確認できた。当初南西にあった貯蔵穴を埋め、厚さ0.02mの黄色粘土の貼床を施し、北に貯蔵穴を造り、竈を改修する。

調査区西側で斜方向の溝を検出した。幅0.5～0.9m、深さ0.2～0.3mで少量の遺物が出土した。

調査区全域で柱穴・土塋を散在的に検出した。柱穴は建物としてまともならなかった。遺構の時期は、古墳時代に属する。

遺物 出土遺物には、土師器、須恵器、陶器、磁器などが出土した。土師器、須恵器は住居跡

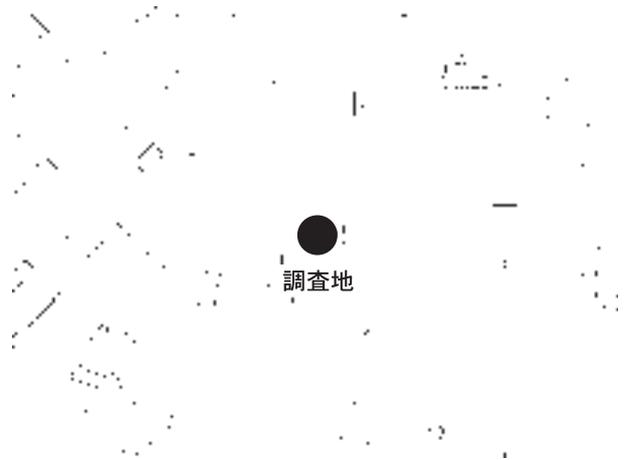


図262 調査位置図（1：5,000）

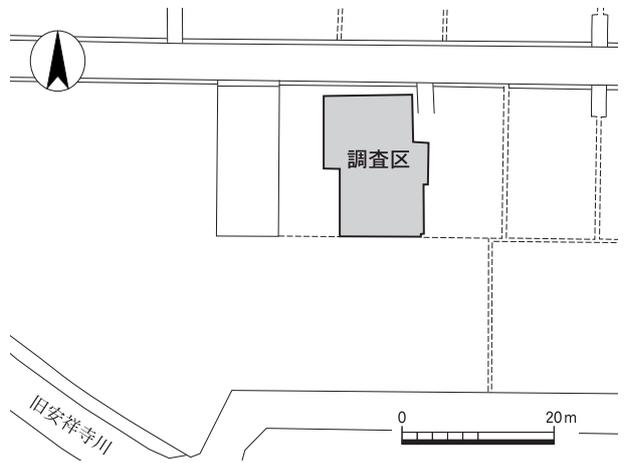


図263 調査区配置図（1：1,000）

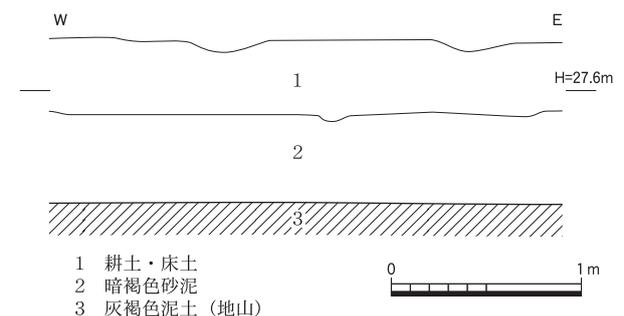


図264 北壁断面図（1：40）

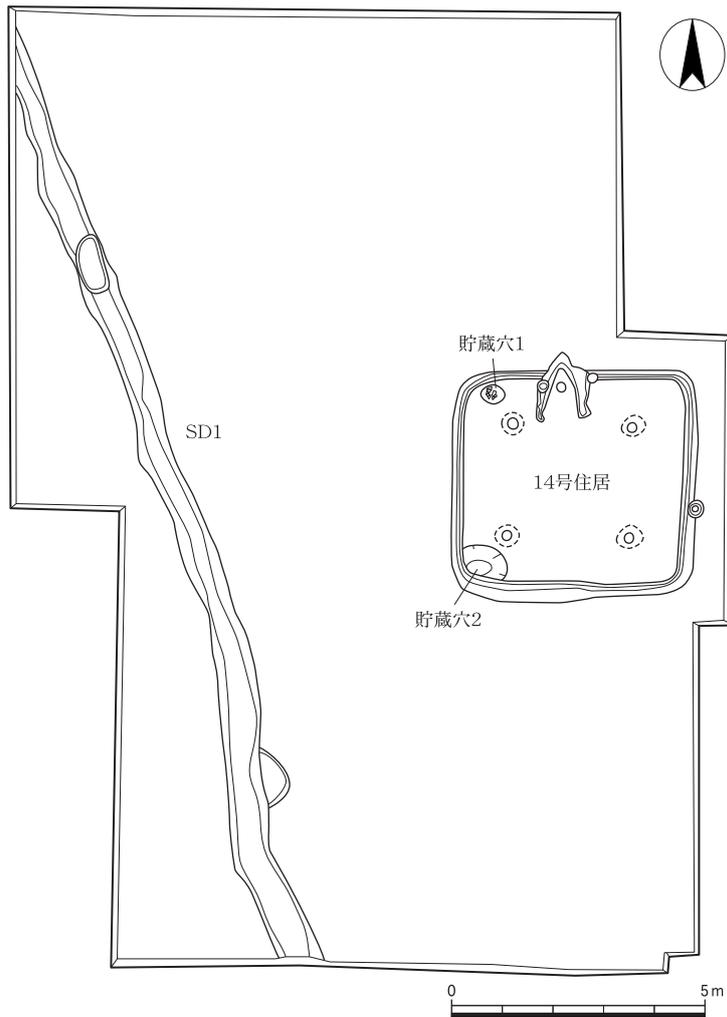


図265 遺構平面図（1：150）

や包含層から出土し、14号住居からは土師器甕・椀・高杯、須恵器などが出土した。

小結 今回の調査では、古墳時代の竪穴住居を検出し、20次調査と合わせ、低位段丘のかなり下の方まで住居地区となっていたことが明らかになった。遺跡内の住居地区などの分布を考える上で重要な発見となった。

『中臣遺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告



図266 14号住居（東から）

61 中臣遺跡29次調査

経過 今回の発掘調査は、宅地造成工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の南側にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵から旧安祥寺川に至る低位段丘上に立地する。

調査は、調査地内に南北1.5m、東西約1.2mの台形の調査区を設定し、調査を実施した。現代盛土などを重機で掘削し、その後手掘りで調査を行い、断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面を実測して調査を終了した。

遺構 調査地の基本層序は、第1層現代グラウンド盛土（3.1m）、第2層耕土層（約0.15m）、第3層褐色砂泥層（包含層：0～0.15m）、第4層暗褐色砂礫層（地山）である。遺構は、第4層上面で検出した。

調査区北部で、円弧状の溝を検出した。幅0.5m、深さ0.35mである。埋土は暗灰褐色礫混砂泥で、土師器が少量出土した。遺構の時期は不明である。

遺物 遺物は、土師器が少量出土した。

小結 今回の調査では、円弧状の溝を検出したが、調査範囲が狭いため性格は不明である。

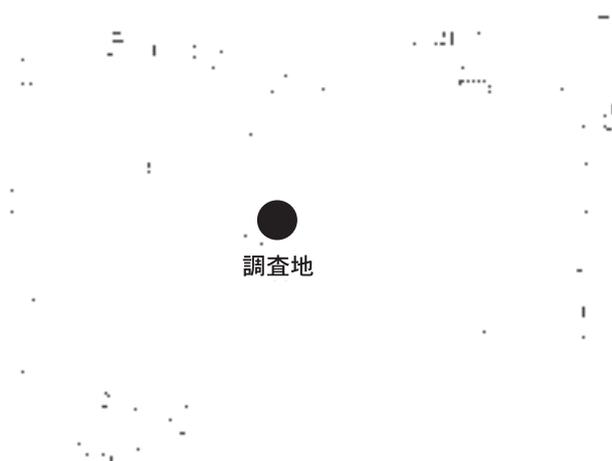


図267 調査位置図（1：5,000）

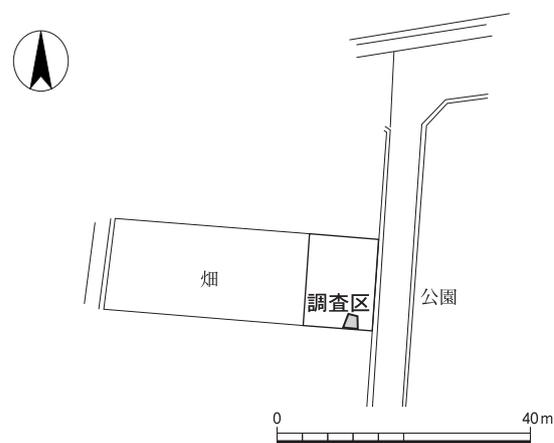


図268 調査区配置図（1：1,200）

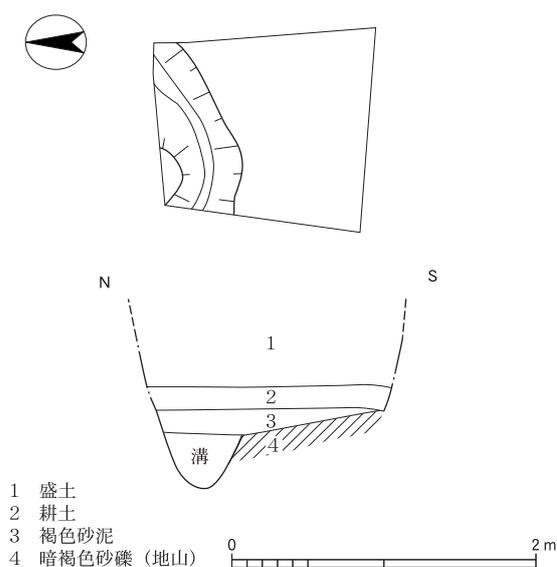


図269 遺構実測図（1：50）

62 中臣遺跡30次調査

経過 今回の発掘調査は、勸修中学校建設工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の東側にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵から山科川を越えた沖積平野である。

調査は、調査地内に南北3m、東西10mの長方形の調査区3箇所を設定し、調査を実施した。耕土・床土などを重機で掘削し、その後手掘りで調査を行い、断割りにより下層の堆積状況を確認し、最も北側の調査区の断面を実測して調査を終了した。

遺構 調査地の基本層序は、第1層グランド盛土(1.1m)、第2層耕土・床土層(0.2m)、第3層暗青灰色砂泥層(約0.2m)、第4層暗褐灰色砂礫層(約0.2m)、第5層暗灰色泥土層(約0.2m)、第6層灰色砂礫層(約0.4m)、第7層暗黄灰色砂礫層(地山)である。遺構の時期は近現代に属する。

遺物 遺物は出土していない。

小結 今回の調査では、中臣遺跡の隣接地の状況を明らかにするために実施したが、近現代以降の遺構のみで、前代の遺構・遺物共に全く確認することができなかった。

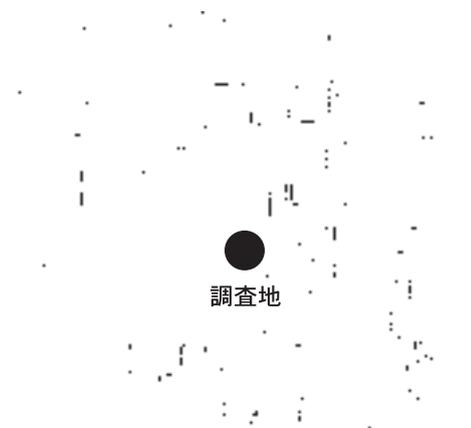


図270 調査位置図 (1:5,000)

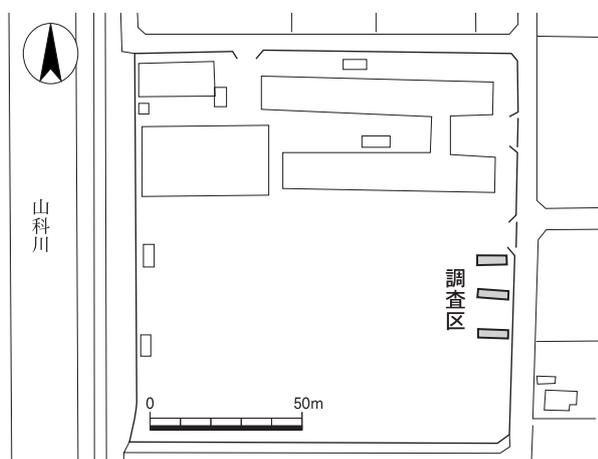


図271 調査区配置図 (1:2,500)

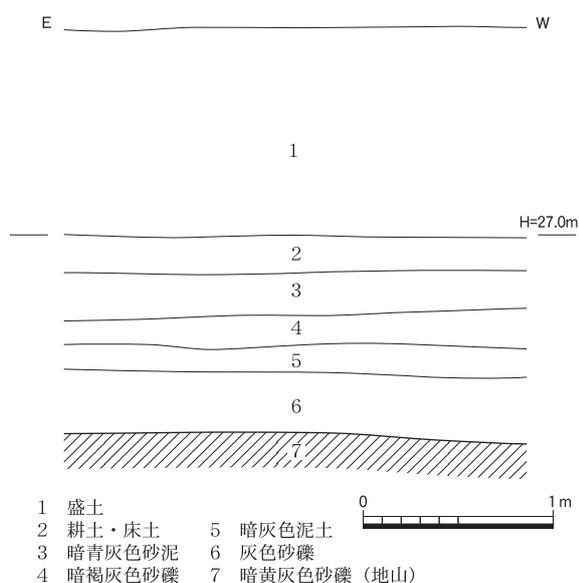


図272 南壁断面図 (1:40)

63 中臣遺跡31次調査

経過 今回の発掘調査は、宅地造成工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の南東部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵から山科川に至る段丘上に立地する。

調査は、調査地内に1トレンチ南北3.5m、東西3.5m、2トレンチ南北4m、東西2.5mの2箇所の調査区を設定し、調査を実施した。2トレンチは遺構が全く認められないため、埋め戻した。現代盛土などを重機で掘削し、その後手掘りで調査を行い、断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面を実測して調査を終了した。

遺構 1トレンチの基本層序は、第1層現代グラウンド盛土(3.2m)、第2層暗茶褐色砂泥層(約0.2m)、第3層暗黄褐色砂礫層(約0.2m)、第4層黄褐色砂礫層(地山)である。遺構は、第2層上面で検出した。調査区中央で、南北溝SD1を検出し、南北調査区外に続く。幅約0.4m、深さ0.03mである。調査区北辺で土壙SK1を検出し、北側に続く。幅1.1m以上、深さ0.05mである。遺構の時期は弥生時代である。

遺物 弥生土器が少量出土した。

小結 今回の調査では、溝・土壙を検出したが、調査区が狭いため性格は不明である。南北溝SD1は、位置関係から16次調査の南北溝に継続する可能性がある。

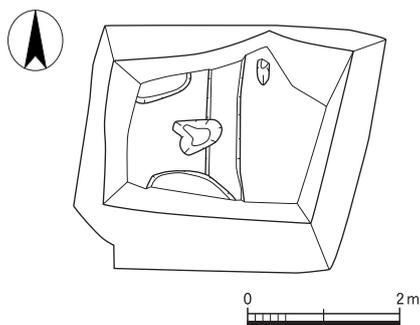


図275 1トレンチ遺構平面図(1:100)

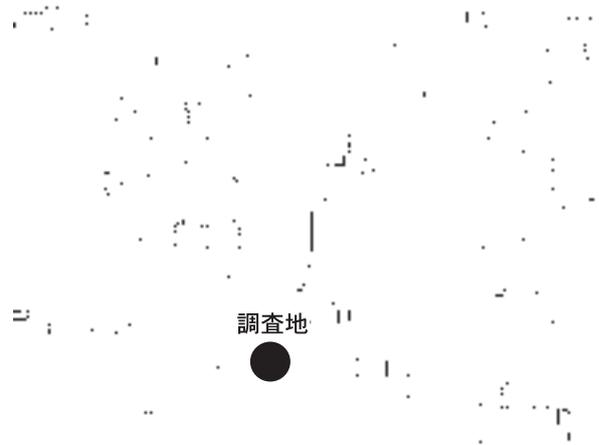


図273 調査位置図(1:5,000)

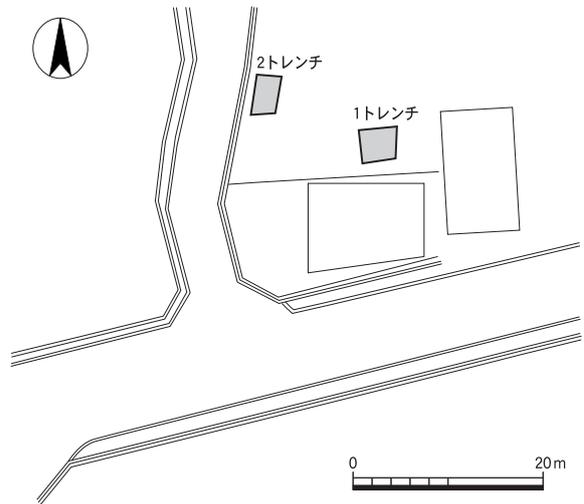


図274 調査区配置図(1:800)

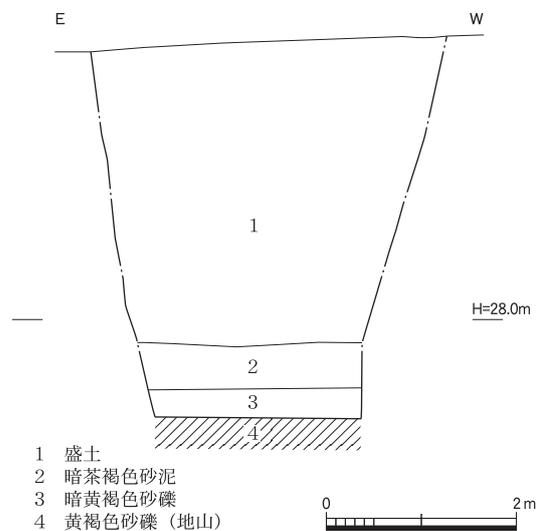


図276 1トレンチ南壁断面図(1:80)

64 中臣遺跡32次調査

経過 今回の発掘調査は、宅地造成工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の南東部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵から旧山科へ向かう低位段丘上に立地する。

調査は、南北約12m、東西約3mの長方形の調査区を設定した。耕土・床土などを重機で掘削し、その後手掘りで調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、第1層盛土層（約2.8m）、第2層耕土層（約0.3m）、第3層床土層（約0.1m）、第4層暗褐色砂泥層（包含層：約0.1m）、第5層黄褐色泥土層（地山）である。遺構は、第4・5層上面で検出した。検出した遺構には、柱穴、土壇、溝などがある。

調査区北部で柱穴を多数検出した。柱穴は第4層上面で検出したものと、第5層上面で検出したものがある。掘形が一辺0.6～0.7m、深さ約0.5m程度の大きなものから、小型のものまである。底部に石を据えたものも見られる。柱穴は建物としてまとまらなかった。埋土からは土師器、須恵器の細片が少量出土した。調査区中央部と南辺で東西溝を検出した。いずれも第5層上面で検出した。溝SD1は東西に続く。断面U字形で、東西に続く。幅0.7～0.8m、深さ0.3mである。埋土は暗茶褐色砂泥で、土師器杯、須恵器杯・甕が出土した。溝SD21は東西・南に続く。幅2m以上、深さ0.2mで底部は平坦である。埋土は溝SD1と同様で土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕が出土した。遺構の時期は、柱穴は不明、溝は奈良時代に属する。

遺物 出土遺物には、土師器、須恵器などがある。溝からまとめて出土した。

小結 今回の調査では、柱穴と溝をまとめて検出したが、調査区が狭く、性格は不明である。周辺の調査を考え合わせると、付近一帯に奈良時代から平安時代の集落が展開していると推定できる。

『中臣遺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

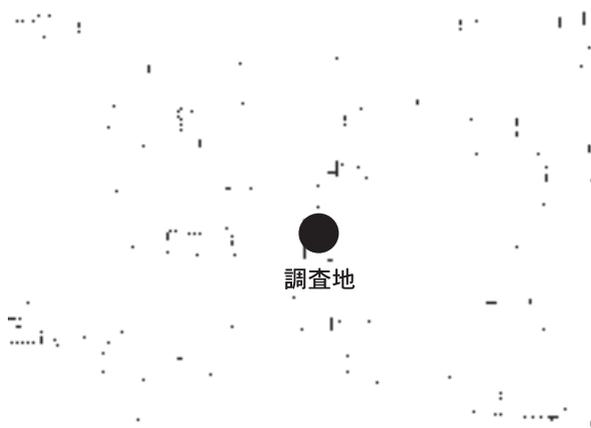


図277 調査位置図（1：5,000）

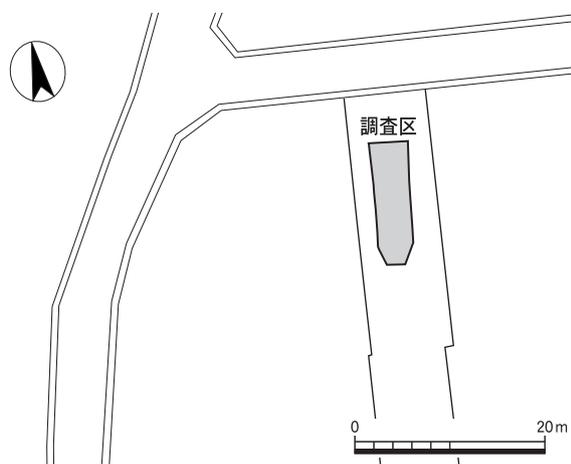


図278 調査区配置図（1：800）

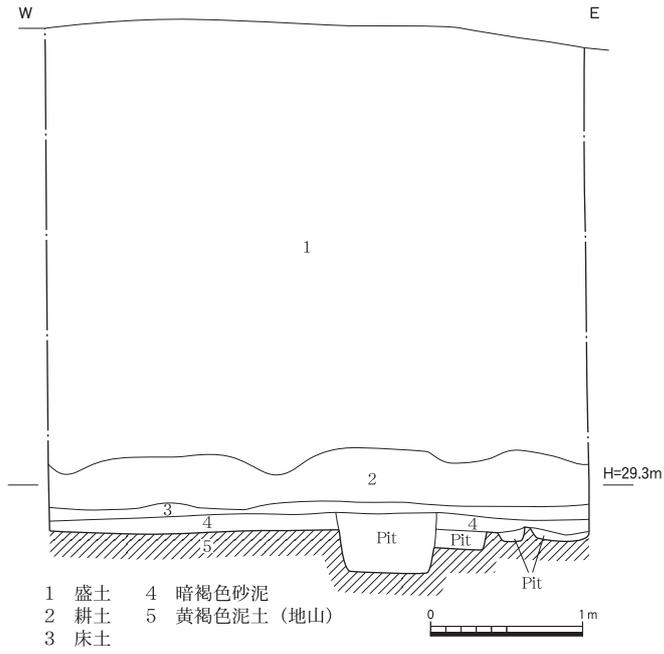


图279 断面图 (1 : 50)



图280 遺構平面図 (1 : 100)

65 中臣遺跡33次調査

経過 今回の発掘調査は、宅地造成工事に伴うものである。当地域は、中臣遺跡の中心部にあたるため発掘調査を実施した。調査地は栗栖野丘陵上に立地する。

調査は、南北約16.5m、東西約9mの調査区を設定した。耕土・床土などを重機で掘削し、その後手掘りで調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土層（約0.15m）、第2層床土層（0.2m）、第3層褐色粗砂・黄色粘土層（地山）である。遺構は、第3層上面で検出した。検出した遺構には、柱穴・土塋・溝などがある。

調査区全域で柱穴を散在して検出した。径0.1~0.15mの小型のもので、建物としてまともならなかった。全域で土塋を散在して検出した。規模・形状は多様である。斜方向の溝・段を数条検出した。時期はいずれも近代・現代以降であろう。

遺物 出土遺物には、土師器、須恵器、陶器などがある。時期は古墳時代から近代である。いずれも第2層などから出土した。

小結 今回の調査では、古代の遺構は検出することができなかった。丘陵上であり、耕作などによって削平を受けたと推定できる。

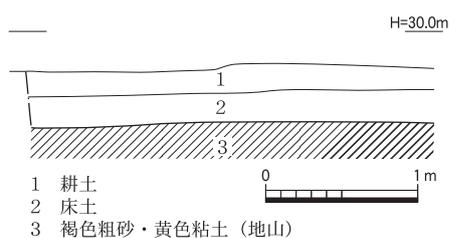


図283 北壁断面図（1：50）

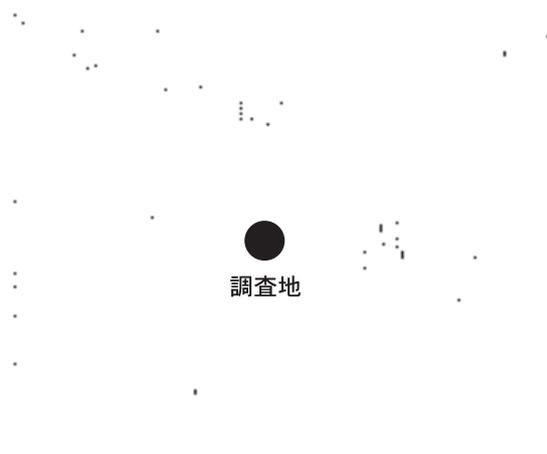


図281 調査位置図（1：5,000）

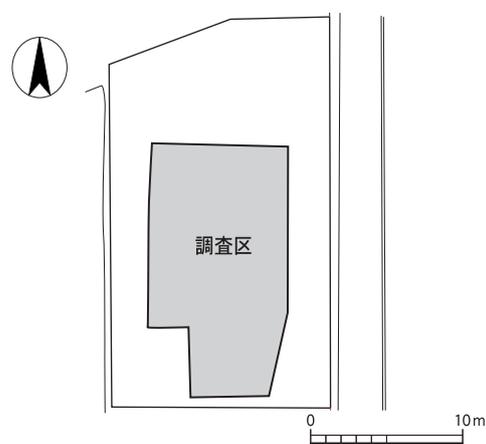


図282 調査区配置図（1：500）



図284 調査区全景（北東から）

VI 長岡京跡

66 長岡京左京六条三坊 (図版20)

経過 今回の発掘調査は、下水道関連施設建設工事に伴うものである。調査地は、長岡京跡・羽東師遺跡の南部にあたるため、発掘調査を実施した。遺跡は桂川右岸の沖積平野の微高地上に位置し、北西から南西に緩やかに傾斜する段丘上に立地する。

調査地内に南北約24m、東西約33mの台形の調査区を設定した。調査中に、調査区東側に幅3m、長さ20m、調査区南西部に幅3m、長さ25mのトレンチを設定した。耕土・床土などを機械で掘削し、手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面実測などを行い調査を終わった。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土・床土層 (0.3~0.4m)、第2層黄灰色泥砂層 (0.15m)、第3層灰褐色泥砂層 (0.25m)、第4層茶灰色泥砂層 (0.15m)、第5層灰色砂礫層 (地山) である。第2層上面で第1面の遺構、第5層上面で第2面の遺構を検出した。

第1面の遺構には、溝・流路・柱穴・井戸などがある。調査区南西部で東西方向の溝を3条検出した。幅約0.5m、深さ約0.1mで、耕作に關係する溝と考えられる。調査区西部で北西から南東方向の小溝を重複して2条検出した。幅約0.2m、深さ約0.1mである。中央部で北西から南東方向

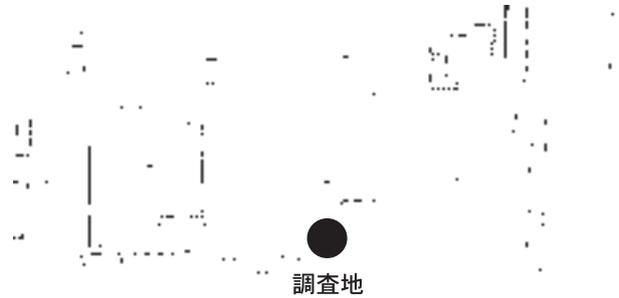


図285 調査位置図 (1:5,000)

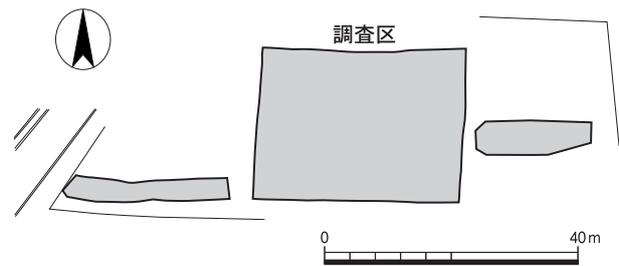


図286 調査区配置図 (1:1,200)

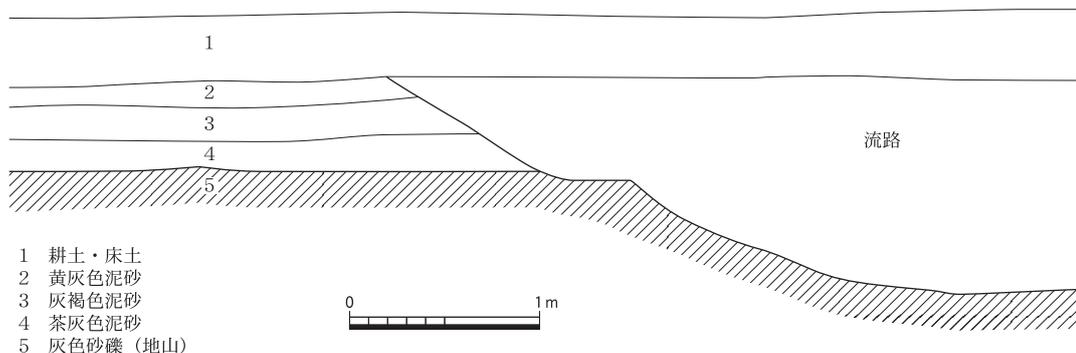
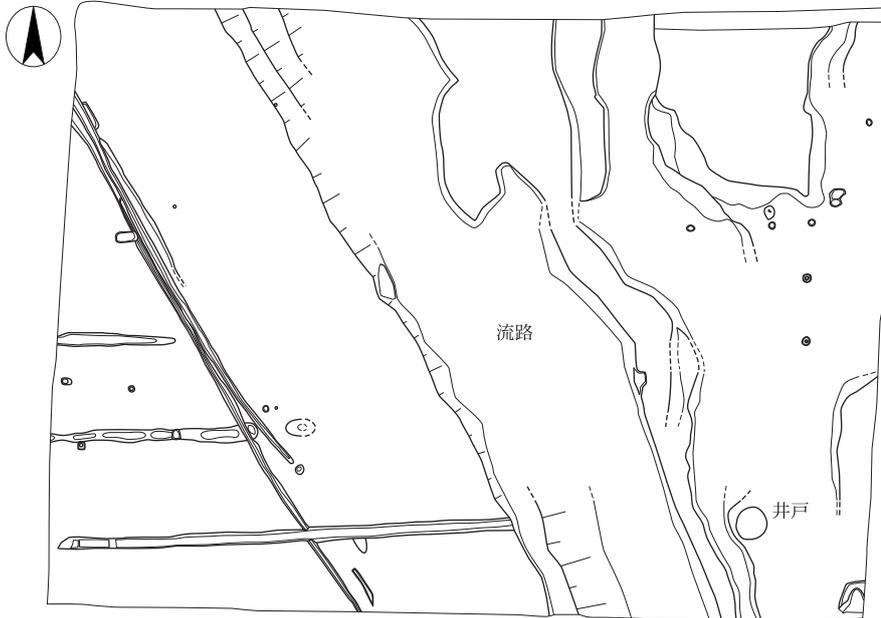


図287 北壁断面図 (1:40)

第1面



第2面

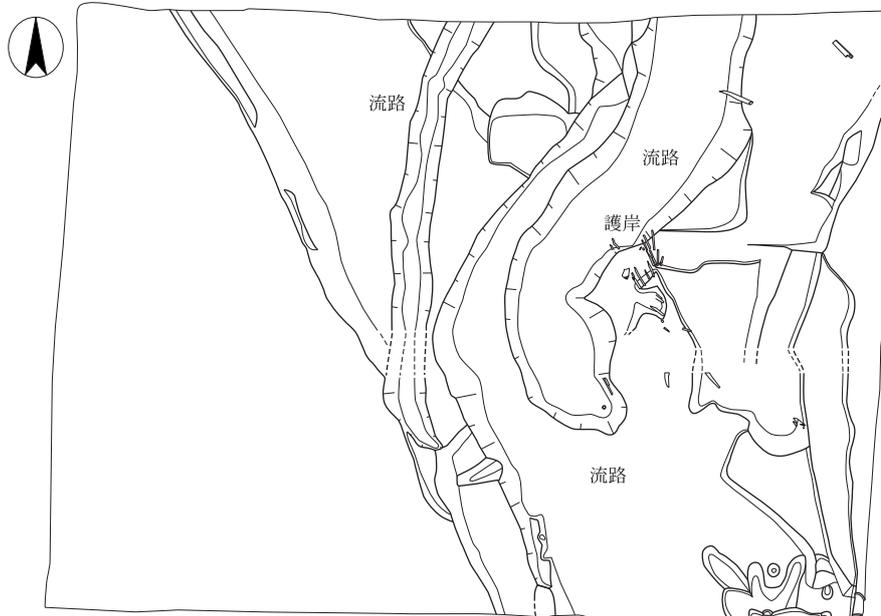


図288 遺構平面図 (1 : 300)

の流路を検出した。幅6～7m、深さ約1mである。埋土は泥土と砂礫の互層である。流路の東側はやや浅い落込みとなり、形状は不定形である。これが埋まった後に、北東部で柱穴、土壙が造られる。柱穴は、径約0.3m程度で、散在し建物としてまとまらなかった。南東部で円形井戸を検出した。径1.2m、深さ0.6m、枠は確認できなかった。土師器皿がまとまって出土した。遺構の時期は、井戸・柱穴が長岡京期、東西溝が近現代に属する。

第2面では、中央部で南北方向の流路を検出した。幅約1.5m、深さ約1.2mである。埋土は下層が灰色砂、上層が灰色砂泥を中心としている。東側では南北方向の流路を検出し、最大幅18m以上で調査区東側に続く。深さ約2mで、底部は凹凸がある。何度も流れを変化させながら、次第に堆積した状況であり、中央部流路が幅約5m程度の際には東岸に材木で護岸を施している。埋土は、泥土と砂礫の互層である。遺構の時期は弥生時代後期以降である。

遺物 遺物は整理箱にして15箱出土した。種類には、弥生土器、土師器、須恵器などがある。時期別は、弥生時代後期・古墳時代・長岡京期に分かれる。

小結 調査区は長岡京の範囲に含まれるが、ほとんど遺構は確認できなかった。下層からは弥生時代から古墳時代の流路を多数検出した。流路内からは、遺物も少量出土した。調査地は羽束師遺跡の近接地にあたり、周辺環境を復元する上で重要な発見となった。

VII その他の遺跡

67 岩倉忠在地遺跡

経過 今回の発掘調査は、洛北中学校施設建設工事に伴うものである。調査地は、岩倉忠在地遺跡の北側にあたるため、発掘調査を実施した。遺跡は岩倉盆地中央部の沖積平野に位置し、北から南の緩やかな傾斜地に立地する。

調査地内で試掘調査を行い、南北約13m、東西約23mの長方形の北トレンチと、南東部に幅2m、長さ15mの南トレンチを設定した。耕土・床土などを機械で掘削し、手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面実測などを行い調査を終了した。

遺構 調査地の基本層序は、第1層盛土層(約0.3m)、第2層耕土層(約0.1m)、第3層床土層(約0.15m)、第4層暗茶褐色砂泥層(地山)である。第4層上面で遺構を検出した。

遺構には、溝・土壙・井戸などがある。北トレンチ東部で北西から南東方向の溝を数条検出した。途中で途切れるものもある。幅約2m、深さ0.1~0.4m程度である。全域で土壙を検出した、規模・形状共に多様である。北トレンチ南西部で円形井戸SE1を検出した。径1.7m、深さ約1.4mで中央部が凹む。遺構の時期は不明である。

遺物 弥生時代後期から古墳時代の土器、中世の土器が少量出土した。

小結 岩倉忠在地遺跡はこれまで遺物散布地として知られてきたが、調査の結果、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物も出土し、中世の井戸や土壙を検出した。調査地周辺には当該期の集落跡が予想される調査成果となった。

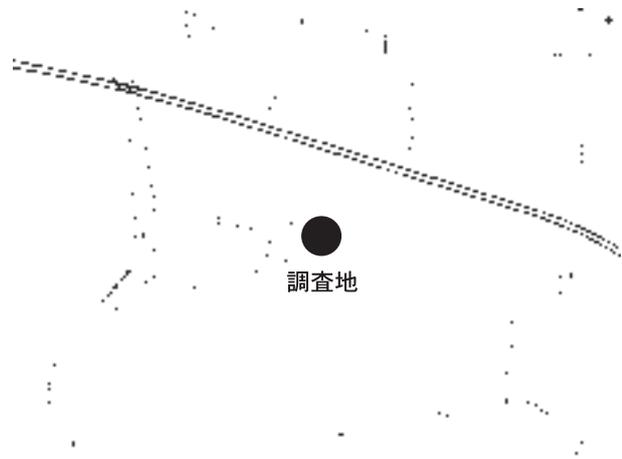


図289 調査位置図 (1:5,000)

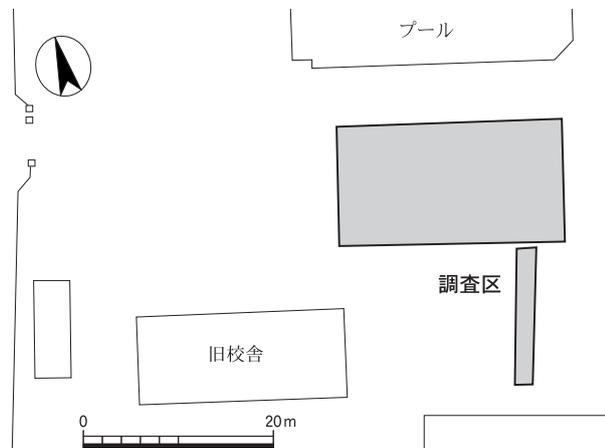


図290 調査区配置図 (1:800)

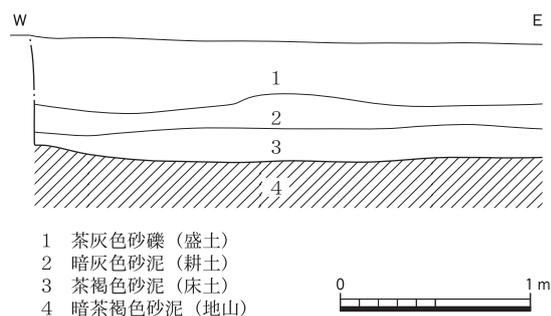


図291 北壁断面図 (1:40)

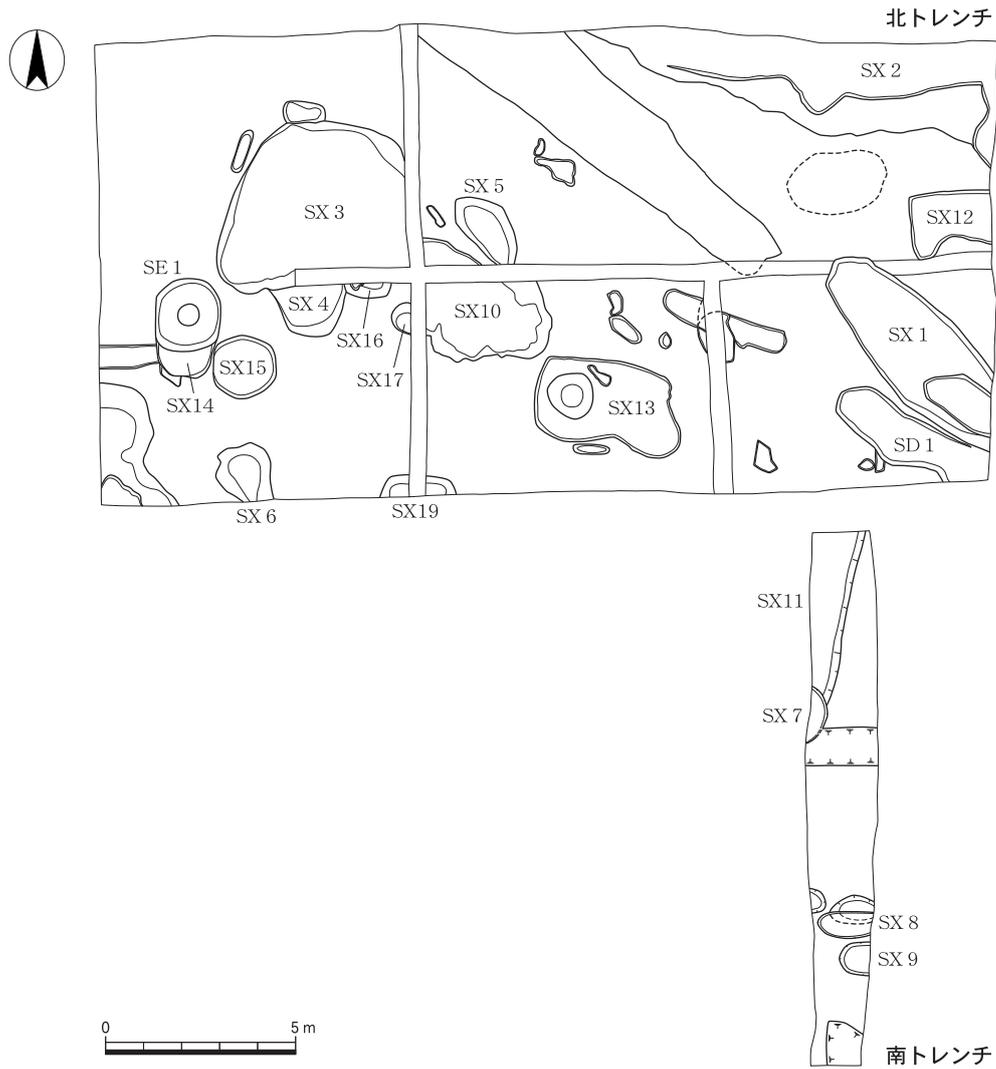


図292 遺構平面図 (1 : 200)



図293 北トレンチ全景 (東から)

68 栗栖野瓦窯跡

経過 今回の調査は、栗栖野瓦窯跡の史跡指定範囲および周辺を含めて、現状把握と保全策をたてるための資料を得るために実施した。そのため、発掘調査は行わず、地形測量・表面採集・磁気探査・ボーリング調査を実施することとした。調査地内に、10m方眼を割り付け、調査地の全ての地点を同一の座標で表せるようにした。

地形測量 史跡指定範囲および周辺の約500mの範囲の地形測量を行った。縮尺は400分の1で、等高線を0.2mとした。

表面採集 2m方眼を遺物取り上げの単位として、数量を記入した。

磁気探査 史跡指定範囲全域を対象として、探査を実施した。結果は図296に示すとおり、従来から知られていた1・2号窯の他に、6箇所の候補地が検出された。

ボーリング調査 窯跡の位置確認と灰層、瓦堆積層、焼土層の分布確認のため調査を実施した。図297は0.05m以上の厚さの焼土層を確認した地点を図示した。ただ、焼土層が窯体付近のものであるか、2次的な堆積によるものかの判別は困難である。磁気探査の結果と比較することによって窯の位置を確認することができる。

遺物 遺物は整理箱に400箱余り採集した。大半が瓦で、土器類は少ない。瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・鬼瓦・鴟尾・■がある。また、緑釉の軒丸瓦・熨斗瓦も採集した。瓦の時期は平安時代前期から後期までである。土器類は8世紀頃から10世紀頃の須恵器を採集した。窯体が付着したものや重ね焼きのままのものもある。土師器も採集したが、細片である。

小結 昭和9年に発掘された1・2号窯の他9号窯も以前から知られていたが、今回の調査では、この他に新たに6基の窯を確認した。また、範囲外で1基確認した。新発見の窯の内8号窯は磁気探査・ボーリング調査の結果から窖窯であり、表面採集の結果から平安時代前期の須恵器窯と推定できる。また、7号窯も8世紀の須恵器を比較的多く採集しており、須恵器窯の可能性が高い。

『平安京跡発掘調査概要 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

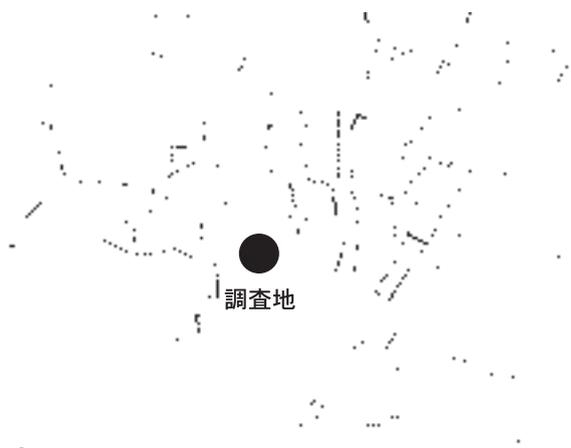


図294 調査位置図（1：5,000）

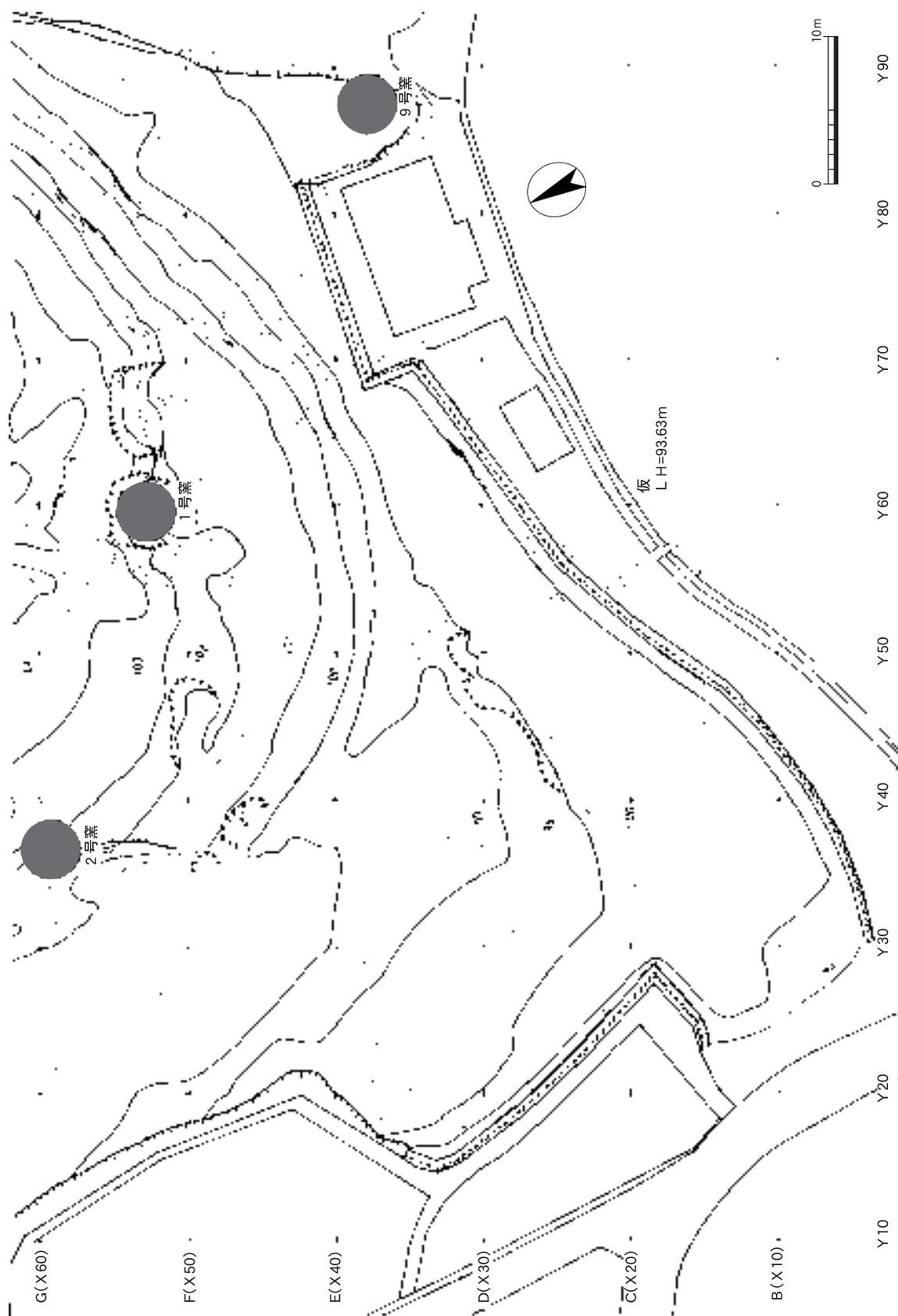


图295 地形测量图 (1 : 400)

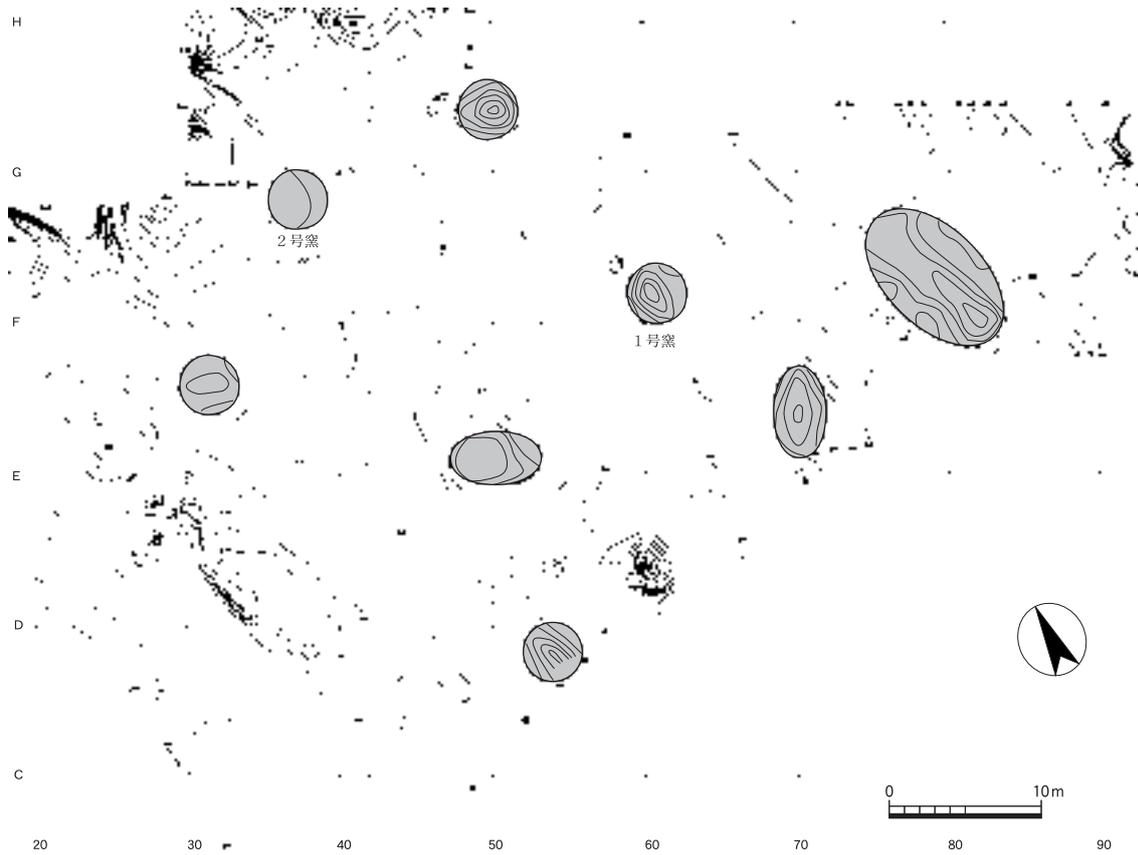


図296 磁気探査図 (1 : 500)

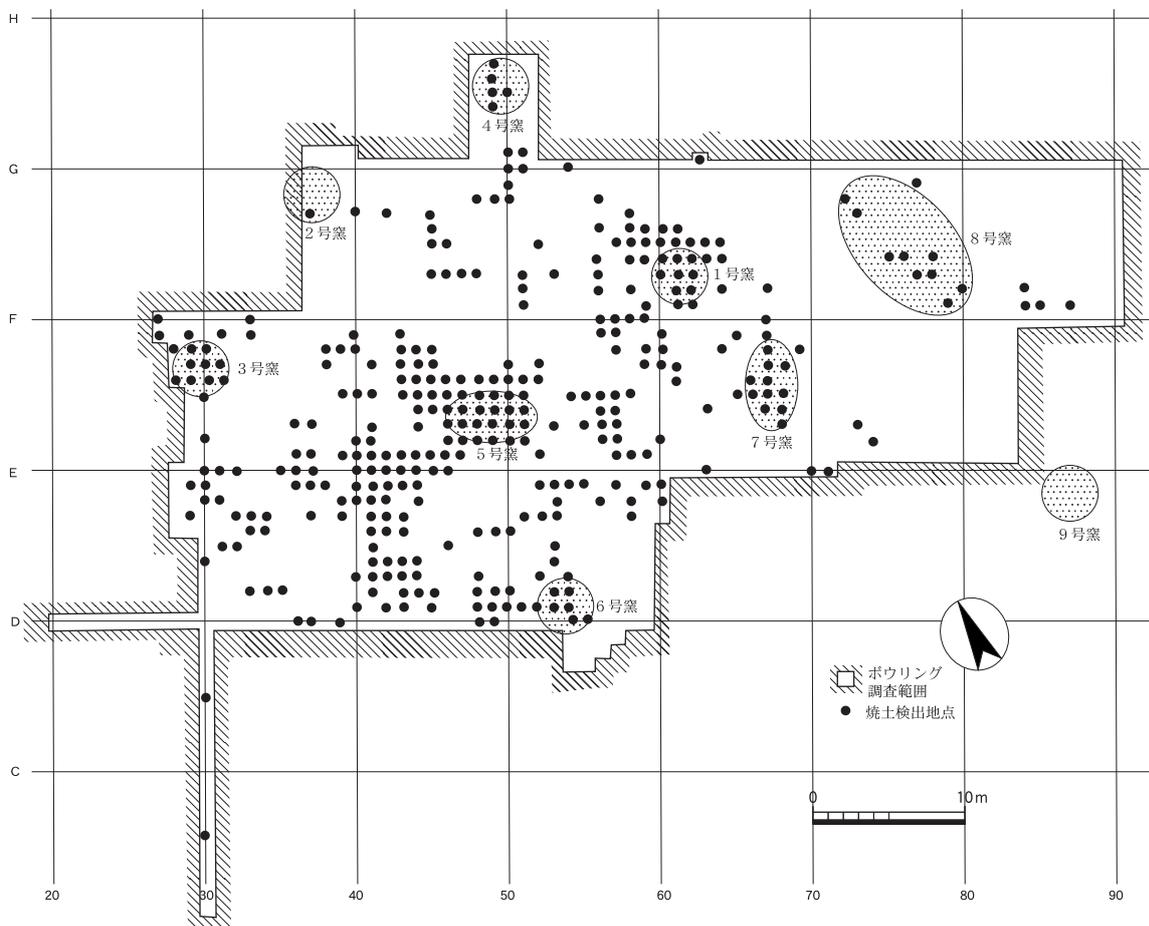


図297 焼土層分布図 (1 : 500)

69 室町殿跡 (図版21)

経過 今回の発掘調査は、上京区役所施設建築工事に伴うもので、当地域は、推定室町殿跡にあたるため、調査を実施した。

調査では、南側に南北6m、東西4mの1トレンチ、北側に南北19m、東西8mの2トレンチを設定した。機械により盛土層を掘削し、その後手掘りで調査を実施した。平面実測・写真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層盛土層(約0.4m)、第2層暗灰色土層(江戸時代包含層:0.15~0.3m)、第3層暗褐色土層(約0.6m)、第4層暗褐色砂泥層(0.4~0.6m)、第5層淡褐色砂質土層(地山)である。第3層上面で1面、第4層上面で2面の遺構を検出した。なお、部分的に第3・4層間で暗褐色砂泥層を確認した。

1面では、柱穴、土壇などを検出した。1・2トレンチ全域で柱穴を検出した。径0.3~0.5m前後で底に石を据えるものもある。散在しており、建物としてはまとまらない。調査区全域で土壇を多数検出した。形状・規模は多様である。遺構の時期は、桃山時代から江戸時代に属する。

2面では、柱穴、土壇、溝、井戸などがある。全域で柱穴を小数検出した。建物としてはまとまらない。調査区全域で土壇を多数検出した。形状・規模は多様である。特に2トレンチではかなり大規模なものが見られる。2トレンチ中央部で南北溝2を検出した。幅1.3~2m、深さ約0.8mである。埋土は淡茶褐色砂泥で土師器、陶器、磁器、瓦などが出

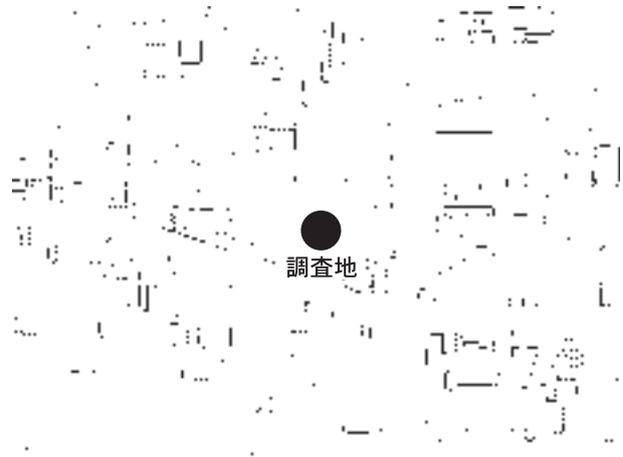


図298 調査位置図 (1:5,000)



図299 調査区配置図 (1:1,000)

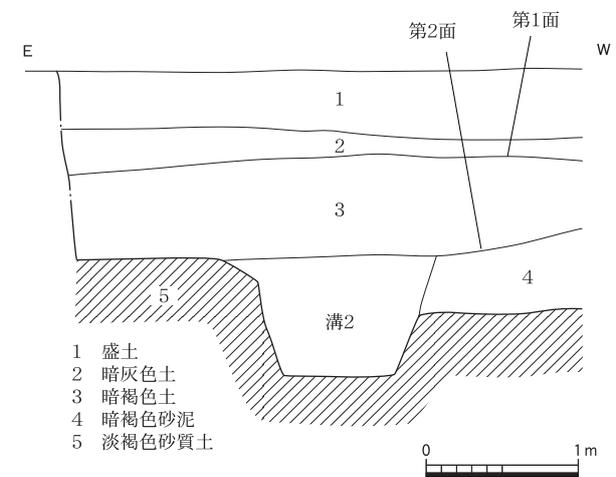


図300 北壁断面図 (1:50)

土した。2トレンチ南西部で円形井戸1を検出した。径1m以上で調査区外に続く。井戸枠は確認できなかった。時期は、井戸が鎌倉時代、他の遺構が室町時代から桃山時代に属する。

遺物 遺物整理箱で33箱出土した。遺物には土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦類、銅銭などがある。時期は、平安時代から近世にわたるが、中世から江戸時代の遺物が大半を占め、他の時代の遺物は少ない。

小結 今回の調査では、室町時代の遺構・遺物が多数出土したが、直接室町殿に関連する遺構は検出することはできなかった。しかし、室町殿での初めての本格的調査で、貴重な資料を得ることができた。中世の遺構では南北溝2が注目でき、御所内を区画する施設である可能性が高い。

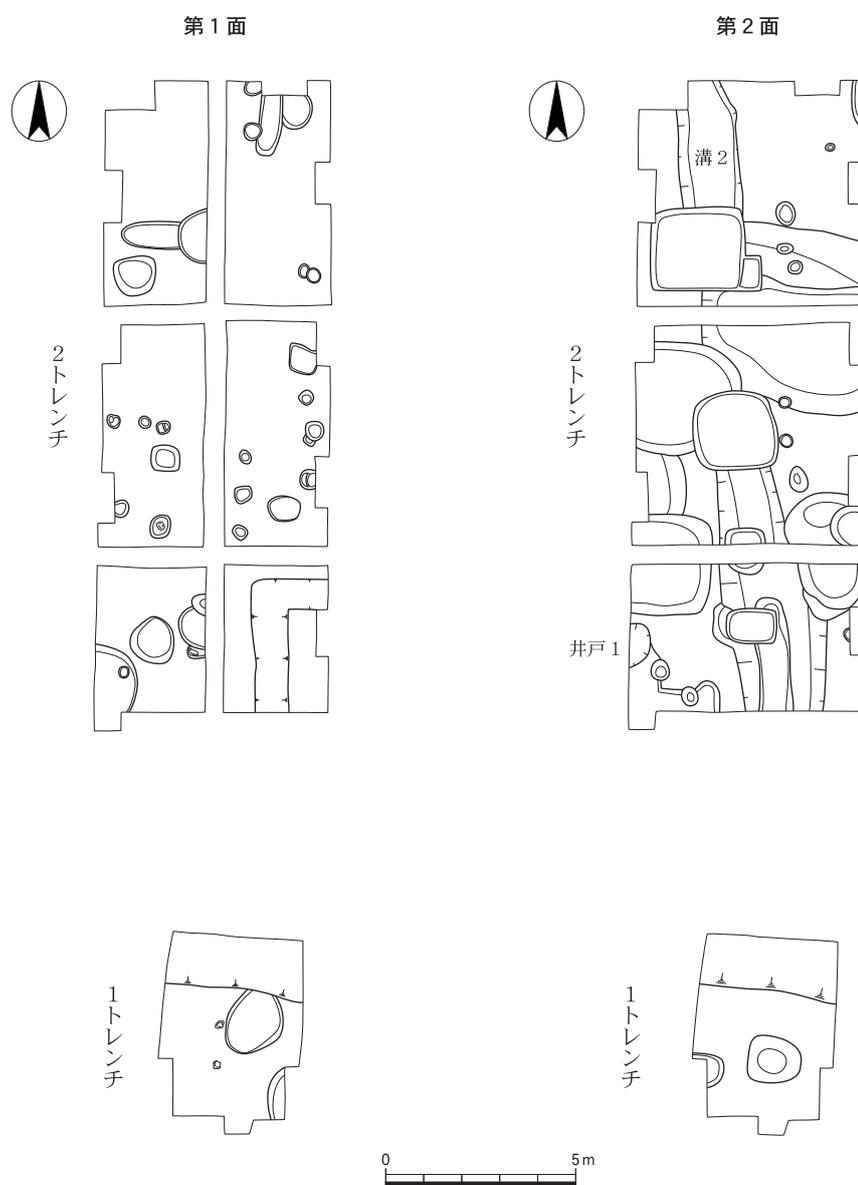


図301 遺構平面図 (1 : 200)

70 北野廃寺 1 (図版22・23)

経過 今回の発掘調査は、聖マリア養護学校校舎建築工事に伴うもので、当地域は、推定北野廃寺にあたるため、調査を実施した。当遺跡の6次調査である

調査地内では試掘調査が実施され、遺構が存在するため発掘調査に移行した。西側に南北15m、東西19mの1区、東側に南北13m、東西15mの2区、南北5m、東西3mの3区を設定し、2・3区を先ず調査し、後に1区の調査を行った。機械により盛土層を掘削し、その後手掘りで調査を実施した。平面実測・写真撮影を行い、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層盛土層(約1.2m)、第2層耕土層(約0.2m)、第3層茶灰色土層(中世包含層:約0.3m)、第4層茶褐色土層(0.2~0.35m)、第5層黄褐色粘土層(地山)である。第4層上面で第1面、第5層上面で第2面の遺構を検出した。

第1面では、建物、柱穴、溝、土壇、柵などを検出した。1区全域、2区東側・西辺、3区で多数の柱穴を検出した。径0.3~0.5m前後で、底部に石または瓦を据えたものも多く見られる。建物としてまとまったものはSB16~19の4棟である。SB16は南北2間×東西5間の東西棟で、東西3m等間、南北2m等間である。SB17は南北2間×東西4間の東西棟で、柱間は一定していない。南北方向に間仕切りがあると推定できる。建物の南北側に東西柵列を検出した。SB18は南北3.5間×東西6間の東西棟で、東西約1.9m等間で、南側には間に柱がある。南北は一定して

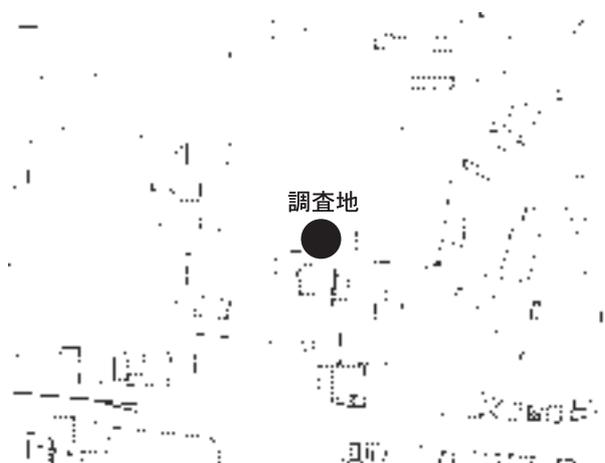


図302 調査位置図 (1:5,000)

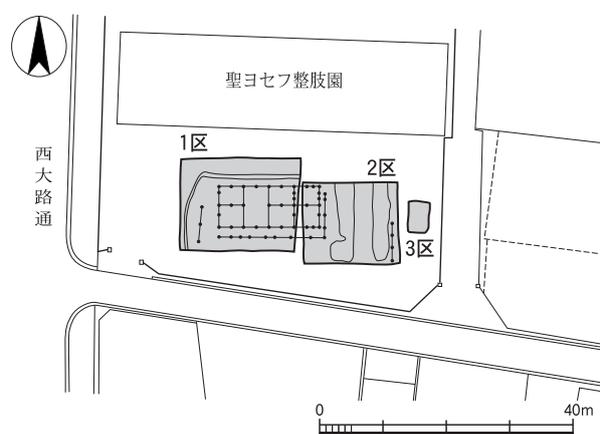


図303 調査区配置図 (1:1,200)

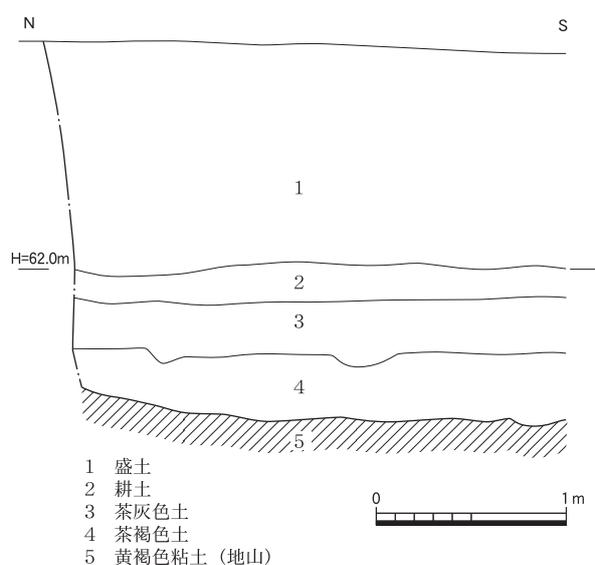


図304 東壁断面図 (1:40)

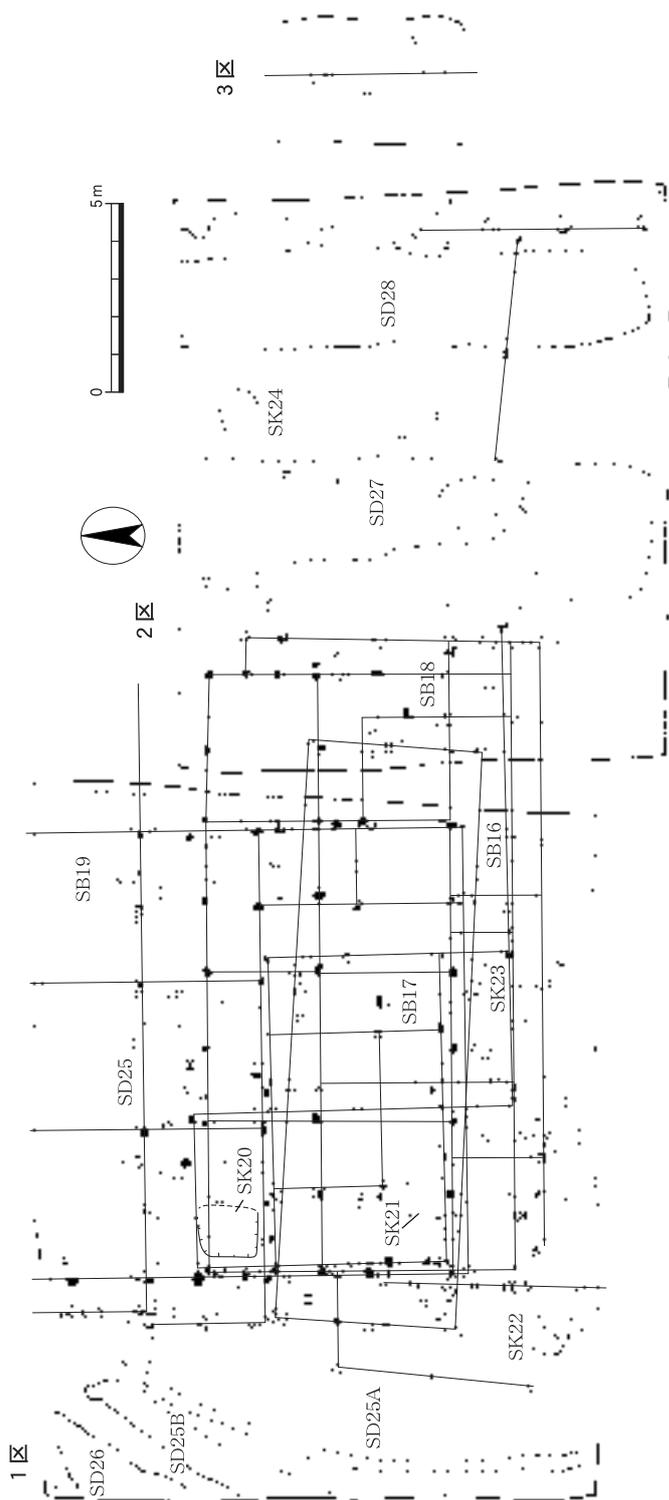


図305 第1面遺構平面図 (1:200)

土壙などを検出した。1区南部で掘立柱建物を2棟検出した。SB12は東西4間×南北2間以上、東西に庇が付く南北棟で、東西2.25m等間、南北2.15m等間である。SB13は2間×2間の総柱建物で、柱間は2.3m等間である。SB12と重複するが、前後関係は不明である。2区西辺で南北溝SD

いない。2間毎に南北間仕切りがあり、東・西の間に東西間仕切りがあると推定できる。その後、東へ2間分拡張し、また建物の南と東にL字形の柵列を付加する。さらに南の施設を南に移動する。SB18の南西には方形土壙SK21がある。一辺1m、深さ0.55mで、底は粘土を埋め上部に焼土・炭が埋められていた。SB19はSB18とほぼ同一の平面を持ち、北側へ5m移し替えた可能性がある。ただし、北側柱は未検出である。SB19の西南隅間には方形土壙SK20があり、1間四方におさまるように位置する。1区北側から西側で逆L字形の溝SD25を検出した。北辺は幅0.7m、深さ0.1m、西辺は幅0.4m、深さ0.1~0.2mで、西側は西側に移動する。柱穴との切り合いからSB18と対応すると考えられる。2区中央と東側で南北溝SD27・28を検出した。いずれも幅2.5m、深さ約0.3mで、調査区南辺で止まる。1・2区で土壙を検出した。散在的で、形状・規模は多様である。2区東辺・3区中央で南北柵を検出した。柱間は一定していない。遺構の時期は、中世に属する。

第2面では、建物、柱穴、溝、

1を検出した。若干蛇行するが、幅3.5m、深さ0.6mである。埋土は砂礫で、部分的に泥土が堆積し、その上に焼けた壁土状の土と溶けた鉄が西肩から流入する。1区北部で2条の東西溝を検出した。SD8は幅2m、深さ約0.2mで、底部に凹凸がある。SD8の南側ではSD3を検出し、2区北西部に続く。幅1.7m、深さ約0.2mで、埋土は暗茶褐色泥土である。また、1区東部には南北溝SD4・5などが見られる。2区南部では土壙を検出した。不定形で、規模も多様である。遺構の時期は、SD1が飛鳥時代、SD6・8・SK9が平安時代前期、他は平安時代中期に属する。

遺物 遺物整理箱で64箱出土した。遺物には土器類、瓦類、墨書土器、金属製品などがある。

飛鳥時代の遺物には、土師器杯・椀・高杯、須恵器杯・蓋・高杯・壺・甕などがあり、SD1からまとまって出土した。

平安時代前期の遺物には、土師器杯・皿・椀、須恵器杯・蓋・皿・壺・甕、黒色土器椀、緑釉陶器椀、灰釉陶器平瓶・壺・甕、青磁などがある。SD8・3からまとまって出土した。

鎌倉時代から室町時代の遺物には、土師器、瓦器、陶器、磁器、瓦などがあり、土壙・溝SD25～28を中心として多数出土した。

墨書土器は「野寺」、「寺」、「切経」など多数出土した。

小結 今回の調査では、第1面で中世の建物などの遺構、第2面で寺に関する遺構を検出し

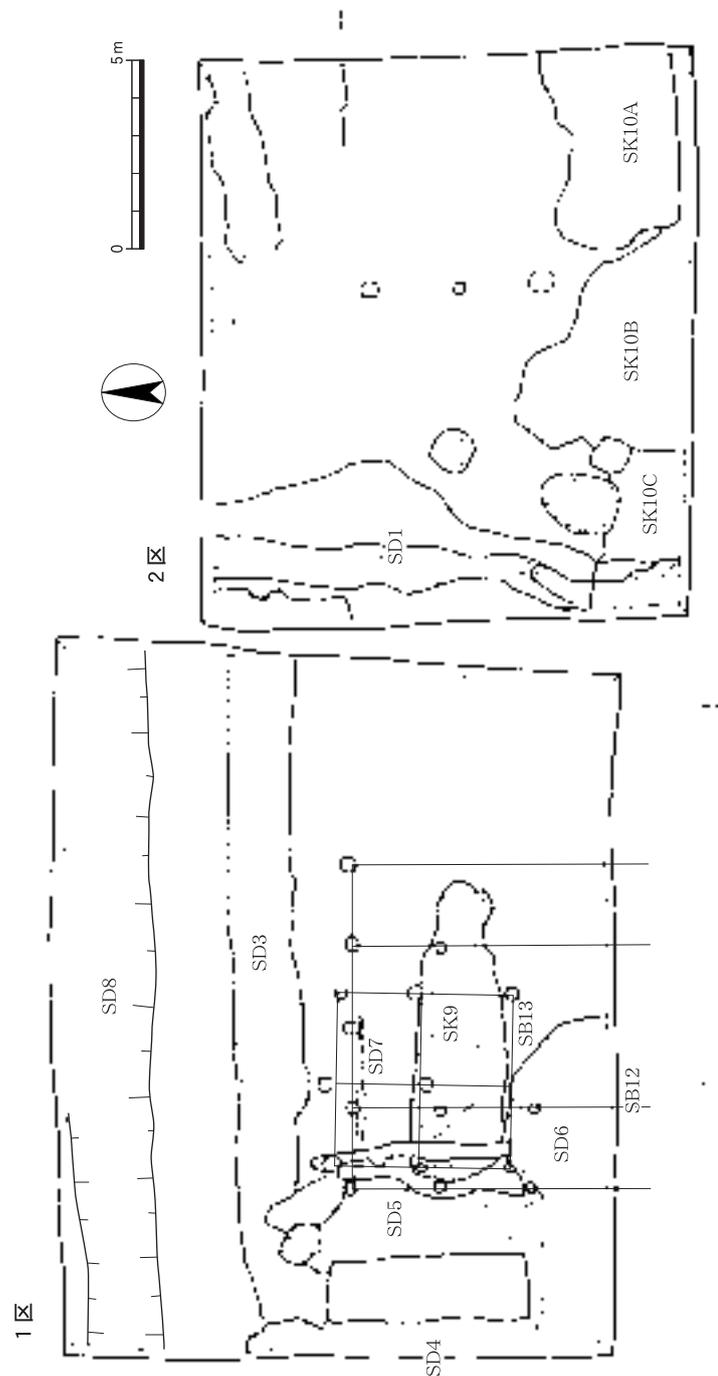


図306 第2面遺構平面図 (1:200)

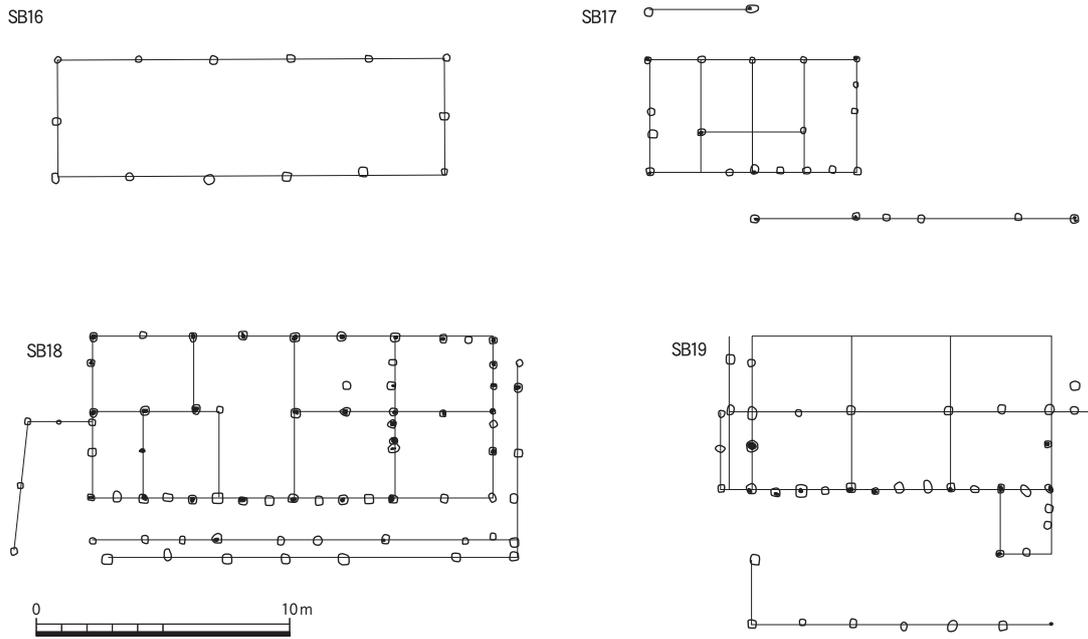


図307 建物個別図（1：300）

た。SD 1 は 1 次調査検出の南北溝の延長上で、寺域東限とも考えられる。溝の西側は鉄関係の工房の可能性がある。平安時代前期の東西溝を検出し、南北溝と合わせて境内の子院を区画する溝の可能性がある。また、「野寺」の墨書土器が出土し、当寺院跡が文献に見える常住寺（野寺）であることが明らかとなった。平安時代中期には、溝をずらして造り替えている。また、建物も見られ、1 棟は倉と推定できる。

中世には、4 期の建物とそれに関連する溝などを検出した。短期間で建物の作り替えや、拡張が行われたことが明らかとなり、当該期の建物の変遷を知る上で現存する数少ない中世民家と同等の貴重な資料となった。

『北野廃寺跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

71 北野廃寺2 (図版24~37)

経過 今回の発掘調査は、イズミヤ店舗建設工事に伴うものである。当地域は、推定北野廃寺南西部にあたるため調査を実施した。当遺跡の7次調査にあたる。遺跡は沖積平野の微高地に位置し、北から南に緩やかに傾斜する段丘上に立地する。

調査地内に南北40m、東西60mの調査区を設定し、その後遺構の検出状況に応じて東側(35m)や南側など随時拡張した。機械により盛土層を掘削し、その後手掘りで調査を実施した。平面実測・写真撮影を行い、最後に断割により下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、調査地西部と北東部では段差によって大きな違いがあり、また各場所により堆積状況が異なり、攪乱が多いこともあって、調査区全域にわたって面的に把握することは困難であった。

西部では、第1層盛土層(0.6~0.3m)、第2層茶褐色泥砂層(中世包含層:0.5~0.3m)、第3層暗茶褐色砂泥層(包含層:0.1~0.15m)、第4層暗褐色砂泥層(0.1~0.25m)、第5層黒色砂泥・暗褐色混礫砂泥層(地山)である。第2層上面で第1・2面、3層上面で第3面、第5層上面で第4面の遺構を検出した。

北東部では、第1層盛土層(約0.4m~0.2m)、第2層茶褐色泥砂層(中世包含層:約0.1m)、第3層黄色砂泥層(約0.1m)、第4層黒色砂泥層(地山)であるが、北側では2・3層が残存していない所があるなど、一定していない。第2・3・4層上面で第1・2・3面、第4層上面で第3・4面の遺構を検出した。

第1・2面では、建物、柱穴、集石、溝、土壇、柵列、井戸、落込みなどを検出した。柱穴は全域で多数検出した。径0.3~0.6m前後で、底部に石を据えたものも見られる。建物としてまと

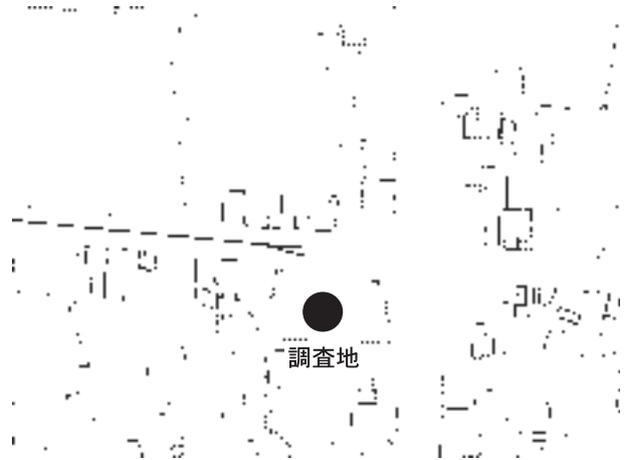


図308 調査位置図 (1:5,000)

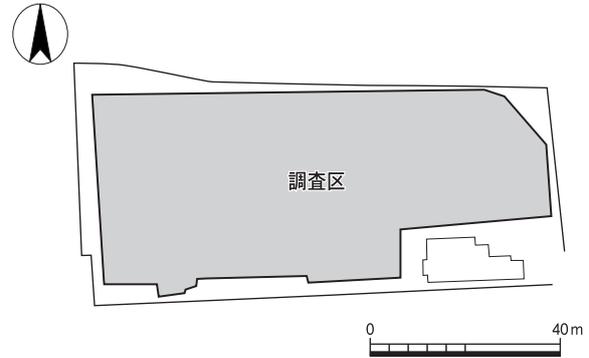


図309 調査区配置図 (1:1,600)

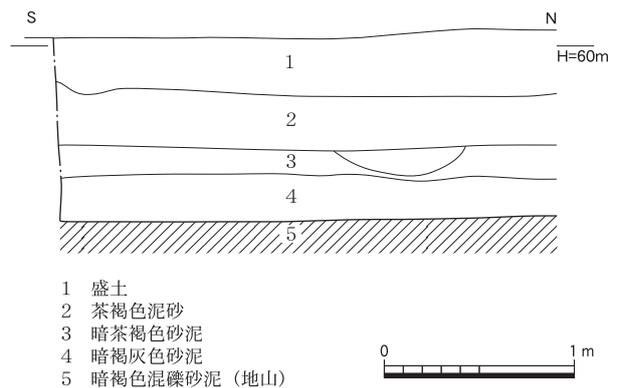
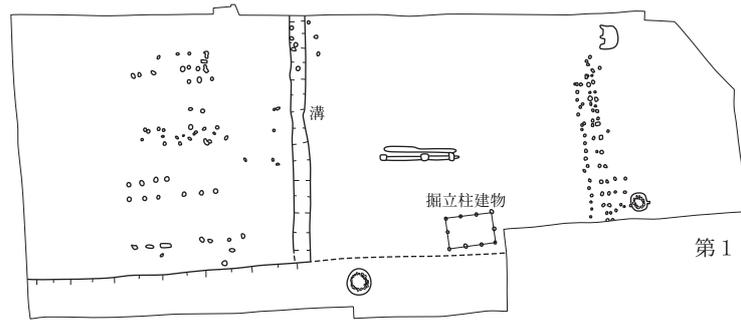
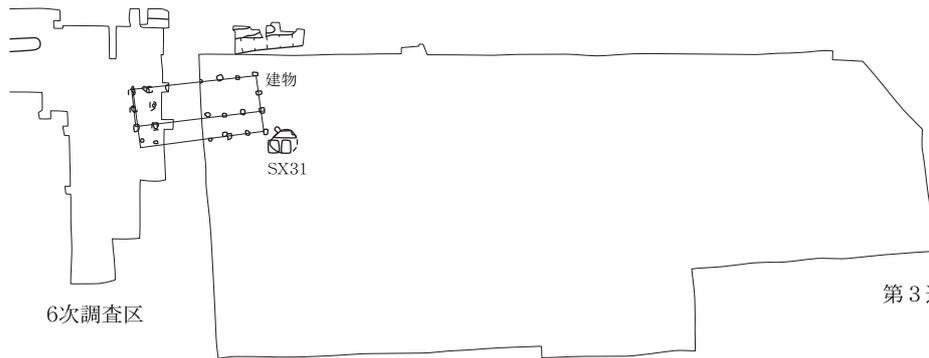


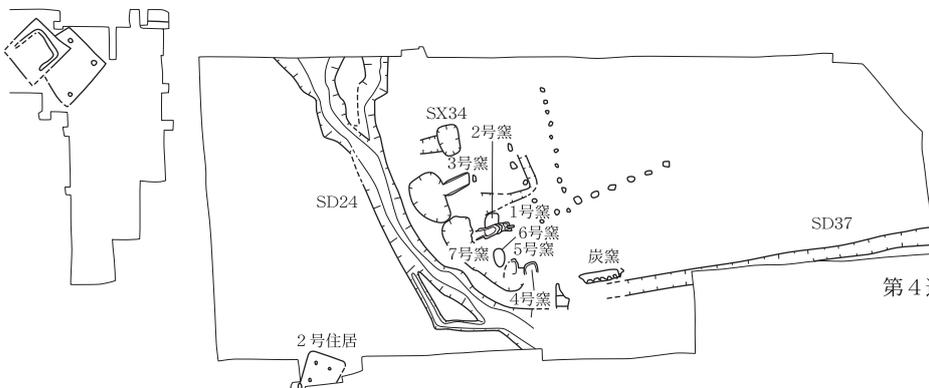
図310 断面図 (1:40)



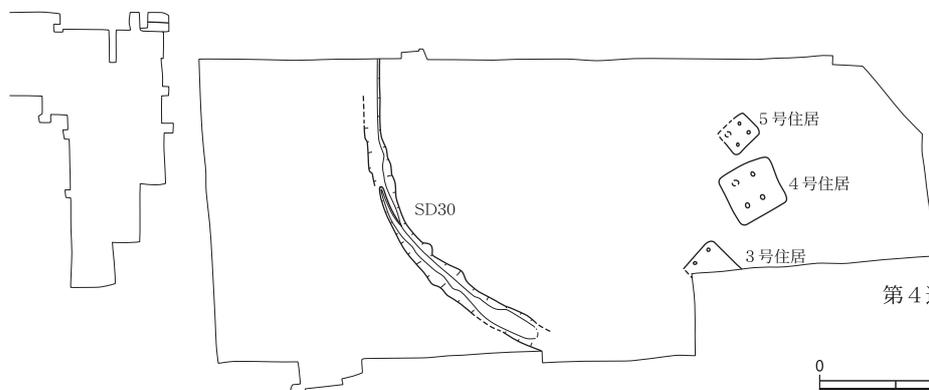
第1・2遺構面



第3遺構面



第4遺構面 I期



第4遺構面 II期



図311 遺構変遷図 (1 : 1,000)

まったのは調査区南東部の1棟だけである。東西3間×南北2間の東西棟で、柱間約1m等間である。集石は全域で散在的に検出し、拳大の石が一辺0.5~2.5mの範囲で集中する。溝は東西・南北方向のものが散在する。

最も規模が大きいものは調査区中央で検出した南北溝で、断面U字形で、幅約2m、深さ約0.2mである。土壙は各所で散在して検出した。形状・規模は多様である。南北柵列は調査区東部で検出した。柱穴径は約0.3~0.5mで、間隔は1m前後であるが一定していない。何度か造り替えられたと推定できる。井戸は調査区東部・南部で検出し、掘形径約2.5mで、井戸枠は石組みで径1m程度である。遺構の時期は、中世以降に属する。

第3面では、建物、柱穴、溝、土壙などを検出した。柱穴は全域で多数検出した。径0.3~0.5m前後である。建物としてまとまったのは調査区北西部の1棟だけである。東西3間×南北2間で南庇を検出したが、6次調査検出建物と合わせると東西7間×南北2間・南庇となる。柱間は東西2m、南北2.5m、庇の出2.8mである。建物掘形は方形で、

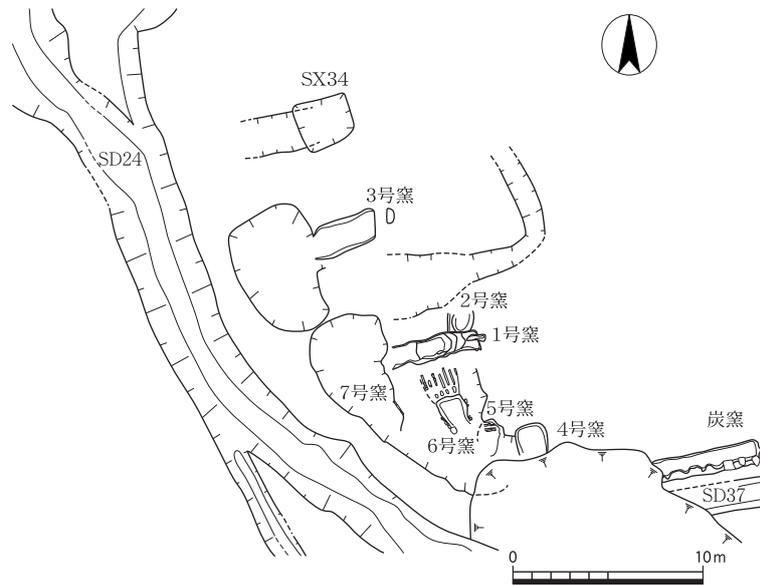


図312 窯配置図 (1 : 400)

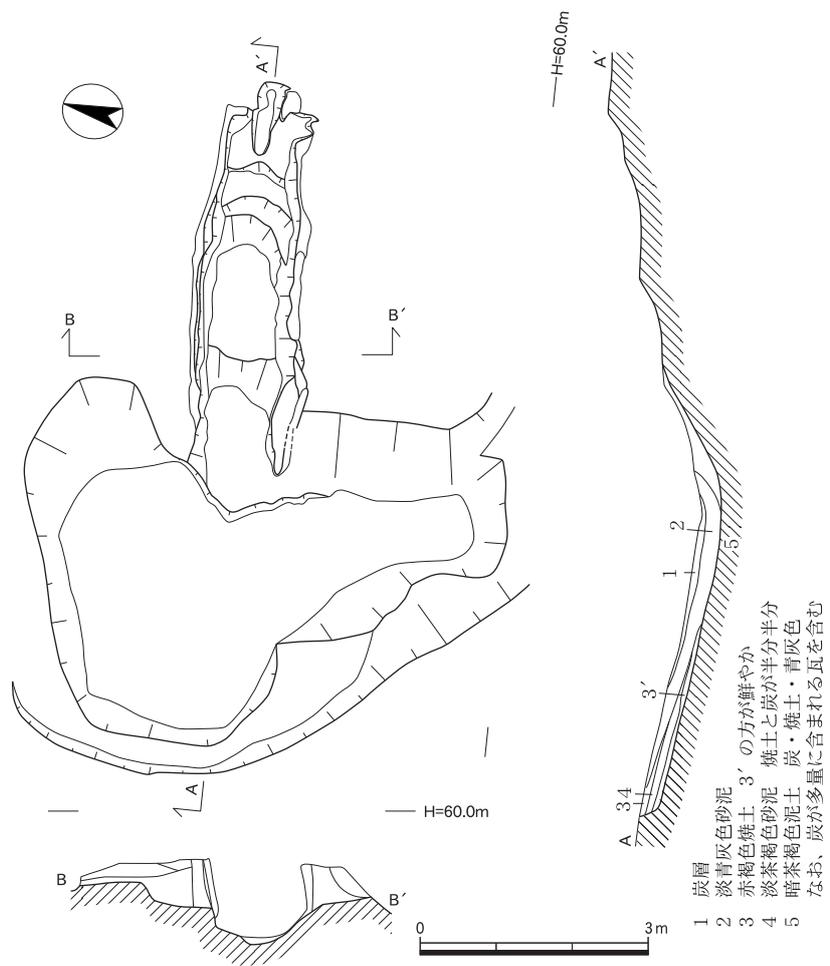


図313 1号窯実測図 (1 : 100)

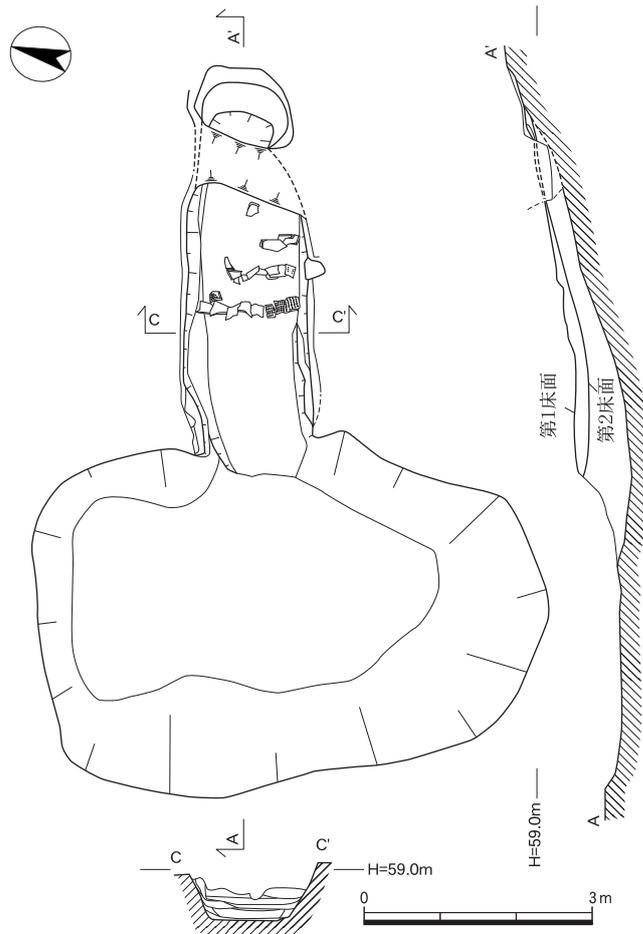


図314 3号窯実測図 (1:100)

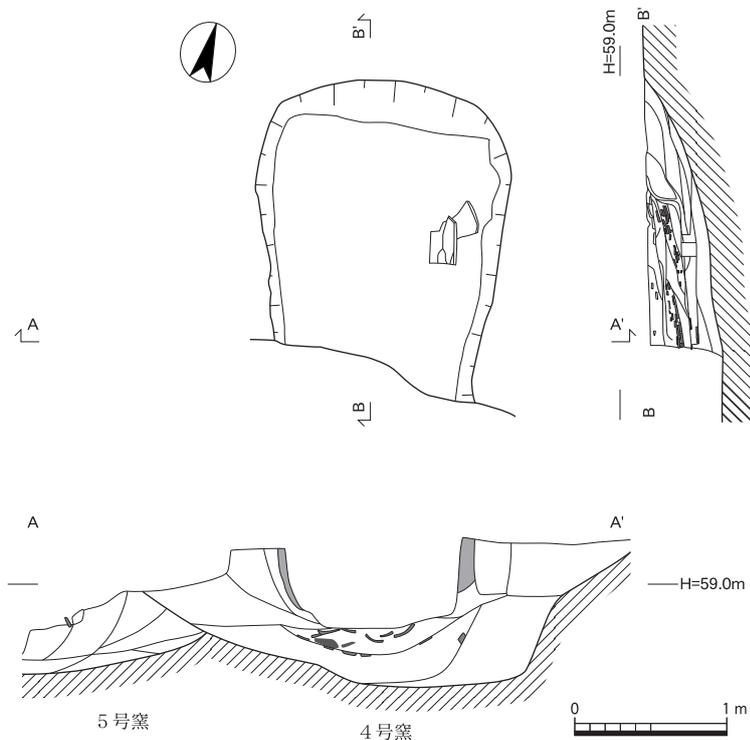


図315 4号窯実測図 (1:50)

一辺1~1.5m、深さ0.5m前後、柱は径0.2m前後である。溝は東西・南北方向のものが散在する。幅は0.2~0.5m程度で、底部に拳大の石を含むものも多い。土壙は各所で散在して検出した。形状・規模は多様である。遺構の時期は、平安時代に属する。

第4面では、瓦窯、炭窯、瓦集積土壙、瓦溜、溝、柵列、柱穴、土壙、竪穴住居などを検出した。なお、当面の遺構は、時期によって飛鳥時代から奈良時代(第4-。期面)、古墳時代(第4-「期面)に分けて図示した。

第4-。期面では、西側に北から南東に延びる段差(谷筋)があり、段差の西側には溝SD24が弧状に巡る。溝は断面U字形で、幅約4m、深さ約0.2mで、北側は二股に分かれる。溝の西斜面から南斜面にかけて、瓦窯・炭窯が造られる。

1号窯(図313)は、半地下式の無階無段式窖窯で、上半部は削平を受ける。残存長約6m、床面最大幅1.2m、焚口部幅1.1m、煙道部幅0.35mで、床面傾斜角は 18° ~ 20° である。焼成部の床面は2~3面検出され、無段である。第2床面の段階で窯の主軸は若干北へ振れる。前庭部は不定形で、東西3.7m、南北3.7m、深さ0.8m前後の凹みで、灰

原となる。窯構築の際には、窯の範囲より大きく掘り込み、土を入れ替える。窯壁はスサ入り粘土で構築する。

2号窯は、1号窯のすぐ北側で検出されたが、削平を受け大半が残存しておらず、詳細は不明である。

3号窯（図314）は、半地下式の無階有段式窖窯で、上半部および煙道部は削平を受ける。残存長約6m、最大幅1.4m、焚口幅1mで、床面傾斜角は約20°である。焼成部の床面は6面検出され、各床面には半裁した平瓦を2～3段重ねて段を作る。前庭部は方形で、東西2m、南北3m、深さ1m前後で灰原となる。窯の構築の際には、窯の範囲より大きく掘り込み土を入れ替えるが、床面は地山である。窯壁はスサ入り粘土で構築する。

4号窯（図315）は、半地下式の窖窯で、後世の削平を受け焼成室の後部床面のみが残存する。焼成室残存長約1.9m、床面幅は奥壁部分で約1.4m、狭いところで1.2mである。床面傾斜角は7～10°で、きわめて緩やかである。焼成部の床面は2面検出し、操業当初の床面には格子叩き平瓦を敷き、最終床面では生焼の瓦が多量に出土した。生焼の瓦は縦方向の細い縄目叩きがある。窯の構築には、窯の範囲より大きく掘り込み土を入れ替える。床面は地山まで達せず、焼土や炭・瓦を含む泥砂層である。窯壁は瓦片を含むスサ入り粘土で構築する。掘形は5号窯の掘形を掘り込み5号窯より新しい。

5号窯（図316）は、半地下式の窖窯で、窯の大部分は6号窯や後世の削平を受け、焼成部の東壁・床面の一部が残存する。床面傾斜角は24°前後である。焼成部の床面は2面検出され、操業当初の床面は半裁した平瓦を敷き、段を構築する。次の時期にはスサ入り粘土を塗り、無段とする。焼成部・燃焼部の床面下では生焼の瓦が帯状に堆積する。窯の構築には、窯の範囲より大きく掘り込み、土を入れ替える。窯壁は瓦片を含むスサ入り粘土で構築する。

6号窯（図317）は半地下式有牀式平窯である。焼成室上部および燃焼室の上部は削平され、焼成室の残存状況は悪いが、燃焼室および焚口部は良好に残存した。残存全長3.5m、焼成室奥行1.7m、幅1.9m、焚口部幅0.45m、燃焼室奥行1.8m、幅1.7mである。燃焼室と焼成室の段は0.3mである。焚口の両側に、花崗岩自然石を袖石として据える。焼成室の側壁は半裁した丸瓦・平瓦をスサ入り粘土で固定しながら構築する。隔壁の幅は0.3mで、分焰孔は5口である。分焰牀は5条、分焰道は6条で東側は分焰孔から続くが、西側はずれる。分焰牀幅は約1.5m、分焰道幅は1.5～2mである。分焰牀の基底部分はスサ入り粘土をかまぼこ状に盛り上げ、分焰牀は半裁した平

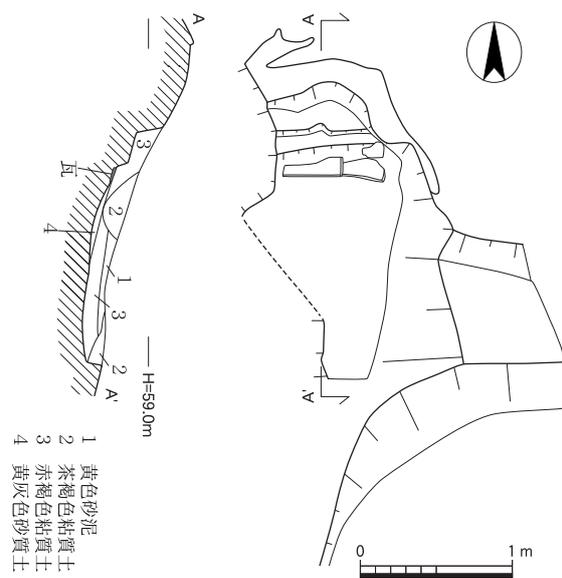


図316 5号窯実測図（1：50）

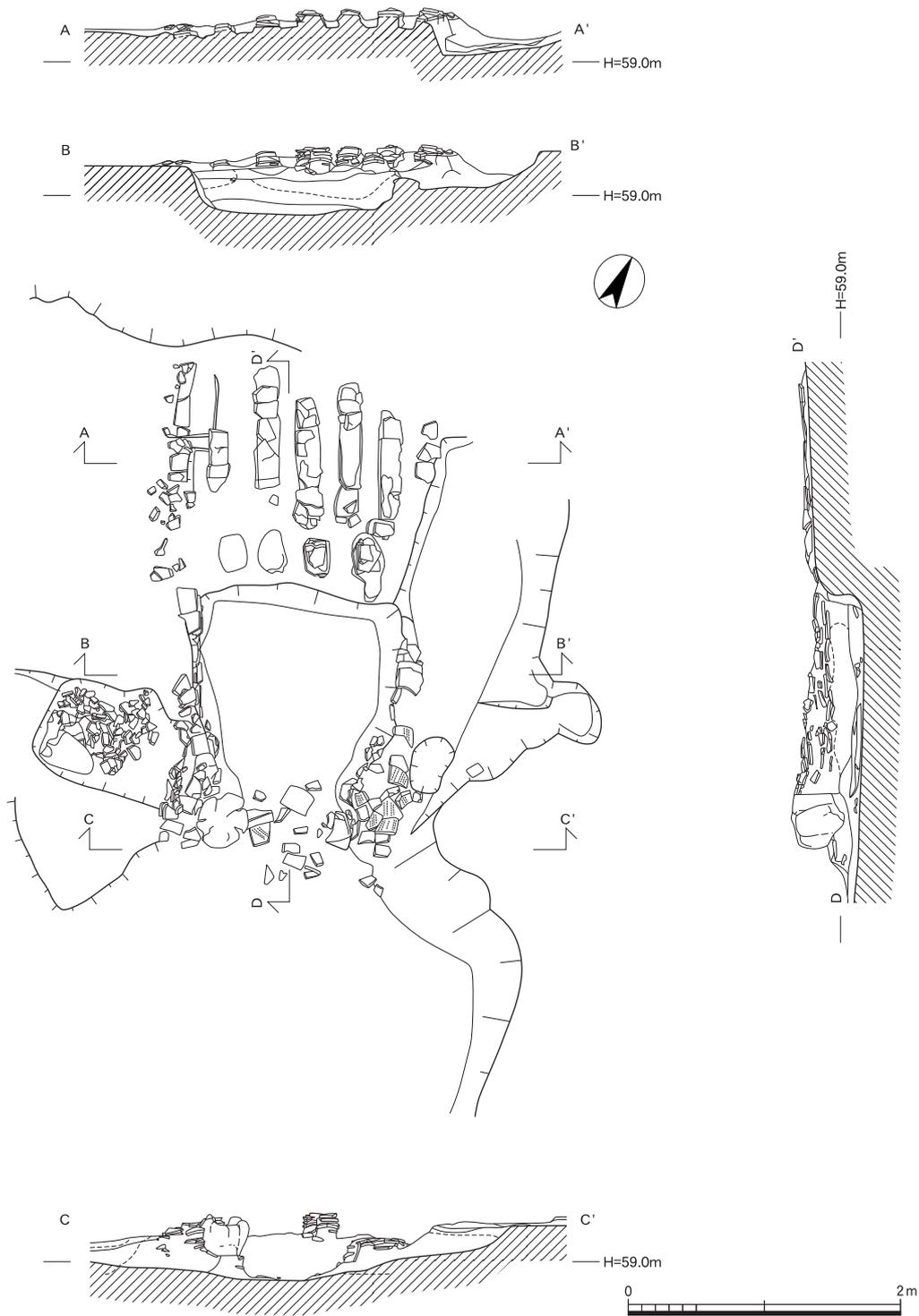


図317 6号窯実測図（1：50）

瓦をスサ入り粘土で固定しながら積み上げる。隔壁の分焰柱はやや小さく半裁した平瓦とスサ入り粘土で構築する。燃烧室の側壁も燃烧室と同様に構築し、両側の段はない。

7号窯（図318）は、半地下式平窯である。大半が後世の攪乱により削平され、燃烧室東壁の側壁と床面の一部を検出した。側壁は半裁した平瓦をスサ入り粘土で構築する。

炭窯（図319）は、半地下式で、残存長8.5m、幅0.8mである。焚口は西側で、南側で6箇所の

横口を検出した。横口は幅1.5m、高さ0.5mで、前面に溝が開口する。

瓦集積場SX34（図320）は、3号窯北側で検出した。3号窯の排水溝を埋めた段階でこの周辺を瓦集積場として使用する。東西約5.3m、南北約3m、深さ約0.2mである。瓦の端部を上に向けて横方向に重ねて立てる。数列分検出し、本来はかなりの規模があったと推定できるが、平安時代以降の削平によって低い部分にしか残存していない。

東西溝SD37は、調査区東側南辺で検出した。

断面U字形で、幅約2.8m、深さ約0.7mである。窯場の南を限る溝と考えられる。

調査区中央で柵列を検出した。逆T字形である。柱穴は円形で径0.8m前後、間隔は2m前後でやや不揃いである。窯に関係するかどうか不明である。柱穴は全域で多数検出した。径0.3~0.5m前後である。土壙は各所で散在して検出した。規模・形状は多様である。北東部の土壙の中には瓦を多く含むものも見られる。

調査区南西部で竪穴住居を検出した。2号住居は、東西4.8m、南北3.3m以上で、壁溝が巡る。柱穴は3箇所検出した。南西に貯蔵穴がある。楕円形で0.7m×0.8m以上、深さ0.1mである。

第4「期面では、段差の西側SD24の下層にSD30が弧状に巡る。SD30は断面V字形で、幅約3m、深さ約1mである。埋土は黒色泥砂で、土師器を含む。

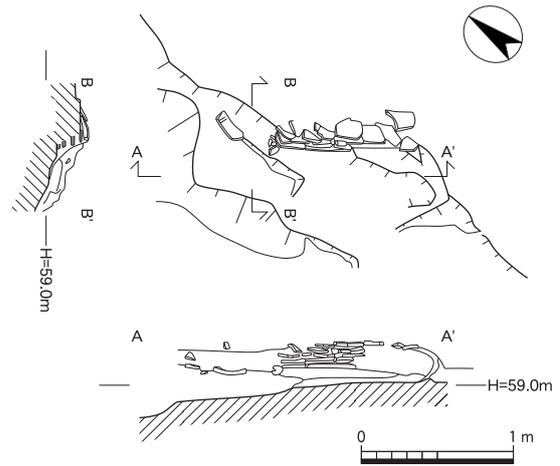


図318 7号窯実測図（1：50）

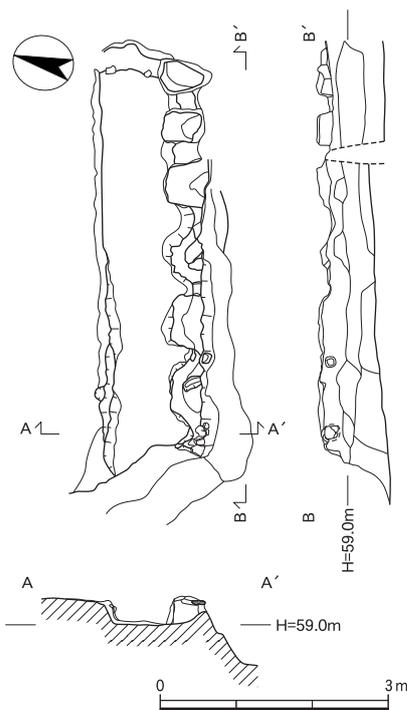


図319 炭窯実測図（1：100）

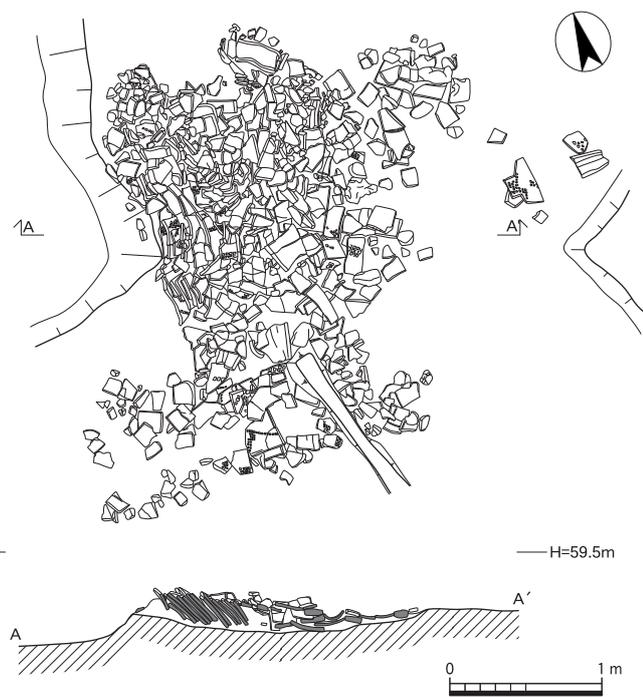


図320 SX34実測図（1：50）

調査区東側で竪穴住居群を検出した。3号住居は、東西5.2m、南北3.5m以上で、壁溝は未検出である。柱穴は2箇所検出した。4号住居は、方形で一辺約7m、壁溝が巡る。柱穴は4箇所検出した。5号住居は、東西4.4m、南北3.7mで、壁溝が巡る。柱穴は4箇所検出した。

遺物 出土遺物は遺物整理箱で2,186箱出土した。遺物には土器類、瓦類、墨書土器、土製品、金属製品、銭貨などがある。

土器類には、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、二彩陶器、陶器、磁器などがあり、包含層や各遺構から出土した。

土製品には円面硯・塑像仏などがある。塑像仏は粗いスサ入りの粘土を芯に、表面にきめ細かい土を用いて成形する。顔の特徴から奈良時代前期と考えられる。金属製品には釘などがある。

瓦類には軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・棟端飾瓦・鴟尾・刻印丸瓦・隅蓋などがあり、溝込、各窯灰原、瓦溜などから大量に出土した。軒丸瓦24種、軒平瓦14種、棟端飾瓦4種を確認した。以下、主要瓦について述べる。

軒丸瓦1類（1・2）は素弁10弁蓮華文で、弁は桜花状を呈す。1はやや小型で中房も小さく、周縁はない。瓦当裏面が盛り上がるものと、平坦なものがある。接合は、瓦当裏面上端に細い溝を穿ち、丸瓦端部凸面を削り挿入するものと、裏面上端に段を作り丸瓦端部を当てるものの2タイプがある。補足粘土は凹面側は少なく、凸面側は多い。2は1より大きく中房も大きく、周縁がある。瓦当裏面は平坦で、瓦当裏面に丸瓦端部を削り挿入する。1は幡枝元稻荷窯a類と、2はb類と同範であるが範傷が多い。

軒丸瓦2類（3）は素弁8弁蓮華文で、弁は尖り弁尖に稜線がある。周縁はない。瓦当裏面上端にやや幅広い溝を浅く穿ち、丸瓦端部を削り挿入し、補足粘土で接合する。瓦当裏面にハケ目が見られるものもある。隼上り窯D種・幡枝元稻荷窯c類と同範であるが、当瓦は幡枝元稻荷窯と同様に隼上り窯よりも範傷が多い。

軒丸瓦3類（4）は単弁8弁蓮華文で、弁は桜花状で、子葉は棒状である。周縁は直立縁で圏線を巡らせ、間に珠点と棒状を交互に配する。接合不明。北白川廃寺出土軒丸瓦に類似する。

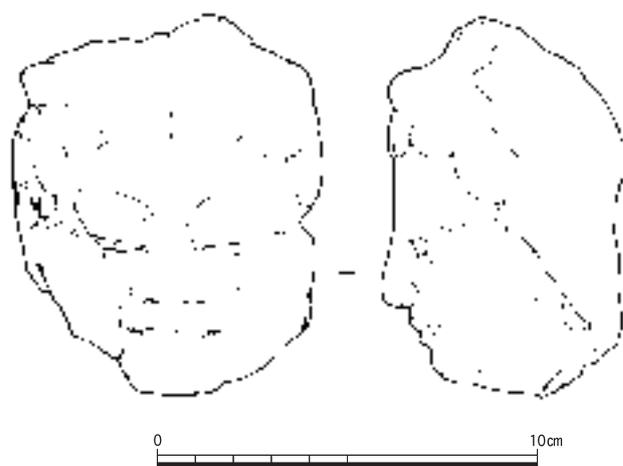


図321 塑像仏実測図（1：2）

軒丸瓦4類（5）は複弁8弁蓮華文で、弁は小型で凸線である。外区は珠文帯で、周縁は傾斜縁で線鋸歯文を配す。瓦当裏面に丸瓦を当て、補足粘土で接合する。範はA型で、分割型を使用する。平城宮6282形式と同文である。

軒丸瓦5類（6・7）は複弁8弁蓮華文で、弁は大きく反転する。6は外区は珠文帯で、周縁は傾斜縁で線鋸歯文を配す。7は外区・周縁がない。瓦当裏面を若干くぼめ、丸瓦を当て補足

粘土で接合する。6は範はA型で、分割型を使用する。6は平城宮6301型式と同文であるが、蓮子・鋸歯文が多く、蓮弁の隆起が少ない。

軒丸瓦6類（8）は複弁8弁蓮華文で、弁は中央が凹み、子葉は凸線である。外区は圏線を巡らせ、周縁は傾斜縁で凸線鋸歯文を配す。瓦当裏面に丸瓦を当て補足粘土で接合する。平城宮6225A型式と同文である。

軒丸瓦7類（9）は複弁8弁蓮華文で、弁は凸線で、子葉は紡錘形である。外区は圏線を巡らせ、周縁は傾斜縁で凸線鋸歯文を配す。平城宮6225C型式と同文である。

軒丸瓦8類（10～12）は3重圏線文である。10は3重の圏線で凸線は細い、周縁は直立縁で素文である。瓦当裏面に丸瓦を当て補足粘土で接合する。平城宮6011型式と同文である。11は圏線が太い。瓦当裏面に丸瓦を当て補足粘土で接合する。長岡京7004型式と同文である。12は凸線は細い。瓦当裏面上端に溝を浅く穿ち、丸瓦端部を削り挿入し、補足粘土で接合する。平城宮6011型式と同文である。

軒丸瓦9類（13）は2重圏線文である。圏線は2重で細く、中心に蓮子あり。周縁は直立縁で素文である。側面に凹線が2条巡る。瓦当文様裏面下端に突起がある。接合不明。ガンゼンドウ廃寺出土瓦（木村995）と同文である。

軒丸瓦10類（14）は中央方格の区画内に「旨」の異体字を配する。外区は珠文帯で、直立縁で素文である。瓦当裏面に丸瓦を当て多量の補足粘土で接合する。長岡京7193Aa型式と同範である。

軒丸瓦11類（15）は小型の素弁8弁蓮華文である。中房は平坦で圏線が巡り、蓮子は4である。弁は凸線で間に珠文を配す。直立縁で素文である。接合不明。補足粘土は多い。

軒丸瓦12類（16）は、複弁8弁蓮華文で、弁は平板である。外区は圏線を巡らせ、珠文帯である。直立縁で素文である。瓦当裏面に丸瓦を当て補足粘土で接合する。平古38と同範である。西賀茂瓦屋産。

軒丸瓦13類（17）は単弁14弁蓮華文で、弁は細く間弁なし。外区は圏線を巡らせ、珠文帯である。直立縁で素文である。接合不明。平古52と同範である。西賀茂瓦屋産。

軒丸瓦14類（18）は複弁6弁蓮華文で、弁は平板である。外区は圏線を巡らせ珠文帯である。直立縁で素文である。接合不明。平古41と同範である。西賀茂瓦屋産。

軒丸瓦15類（19）は複弁8弁蓮華文で、弁・間弁は盛り上がり、間弁が圏線文に接する。外区は圏線を巡らせ、珠文帯である。直立縁で素文である。瓦当裏面に丸瓦を当て補足粘土で接合する。平古43と同範である。西賀茂瓦屋産。

軒丸瓦16類（20）は単弁16弁蓮華文で、弁は盛り上がる。外区は圏線を巡らせ、珠文帯で、「近」銘を配す。直立縁で素文である。瓦当裏面に丸瓦を当て補足粘土で接合する。範はA型で、分割型を使用する。

軒丸瓦17類（21）は単弁16弁蓮華文で、弁は細く盛り上がり、間弁が圏線文に接する。外区は圏線を巡らせ、珠文帯である。直立縁で素文である。接合不明。

軒丸瓦18類（22）は単弁蓮華文で、凸中房で蓮子は竹管押圧で1+4とする。弁は細く盛り上が

り、間弁が圏線文に接する。外区は圏線を巡らせ珠文帯である。直立縁で素文である。接合不明。平古55に類似する。

軒丸瓦19類(23)は複弁6弁蓮華文で、弁は平板である。外区は圏線を2重に巡らせ、珠文を配す。直立縁で素文である。接合不明。

軒丸瓦20類(24)は複弁蓮華文で、弁は盛り上がり、間弁はバチ形である。接合不明。平古67に類似する。

軒丸瓦21類(25)は単弁蓮華文で、弁は細く平板である。外区は圏線を巡らせ、珠文帯である。直立縁で素文である。瓦当裏面布目が丸瓦に連続し、1本作り成形である。平古90・91に類似する。

軒丸瓦22類(26)は複弁8弁蓮華文で、弁・子葉・間弁は凸線である。外区は圏線を2重に巡らせ、珠文を配す。接合不明。平古217と同範である。

軒丸瓦23類(27)は複弁蓮華文で、弁はやや盛り上がる。外区は圏線を2重に巡らせ、珠文を配す。内側圏線は弁にあわせて弧状となる。直立縁で素文である。接合不明。

軒丸瓦24類(28)は3巴文で、巴はやや盛り上がる。頭部は接しない、尾部は接する。外区は珠文帯である。直立縁で素文である。接合不明。

軒平瓦1類(29・30)は中心飾りは下向C字文で、唐草文は両側に3回反転する。周縁は直立縁で、29は圏線を巡らせ上側面・側面は紡錘形の珠文、下面は線鋸歯文である。顎は全て段顎であるが、長さ8cm前後の短いものと13cm前後のものがある。30は周縁は直立縁で素文である。平瓦凸面に粘土を補足し瓦当部を整形する。29は平城宮6671Aa型式と同文であるが、上側蓮子・下側鋸歯文が少なく子葉が上下1本付加される。30は平城宮Ab型式と同文である。

軒平瓦2類(31)は、中心飾りは上向C字文で、逆小字を配す。唐草文は両側に5回反転する。外区は脇区を除き珠文帯である。周縁は直立縁で素文である。顎は直線顎である。平城宮6721型式と同文である。

軒平瓦3類(32)は重郭文で、中心に弧線を配する。周縁は直立縁で素文である。平城宮6574型式と同文である。

軒平瓦4類(33・34)は、中心飾りは円形圏線に「旨」の異体字を配する。唐草文は両側に3回反転。外区は珠文帯。周縁は直立縁で素文である。顎は直線顎である。33は「旨」銘を摺り消す。長岡京7722F型式と同範である。

軒平瓦5類(35)は、中心飾りは上向C字文で、唐草文は両側に反転する。外区は珠文帯で、周縁は直立縁で素文である。顎は曲線顎である。平古301と同文である。

軒平瓦6類(36)は、中心飾りは対向C字文で、唐草文は両側に反転する。外区は珠文帯で、周縁は直立縁で素文である。顎は曲線顎である。平古369と同文である。

軒平瓦7類(37)は、中心飾りは対向C字文で、唐草文は2重で両側に反転する。外区は珠文帯で、周縁は直立縁で素文である。顎は曲線顎である。木村10と同文である。栗栖野瓦屋産。

軒平瓦8類(38)は、唐草文は2重で両側に反転する。外区は珠文帯であるが、脇区を切り詰

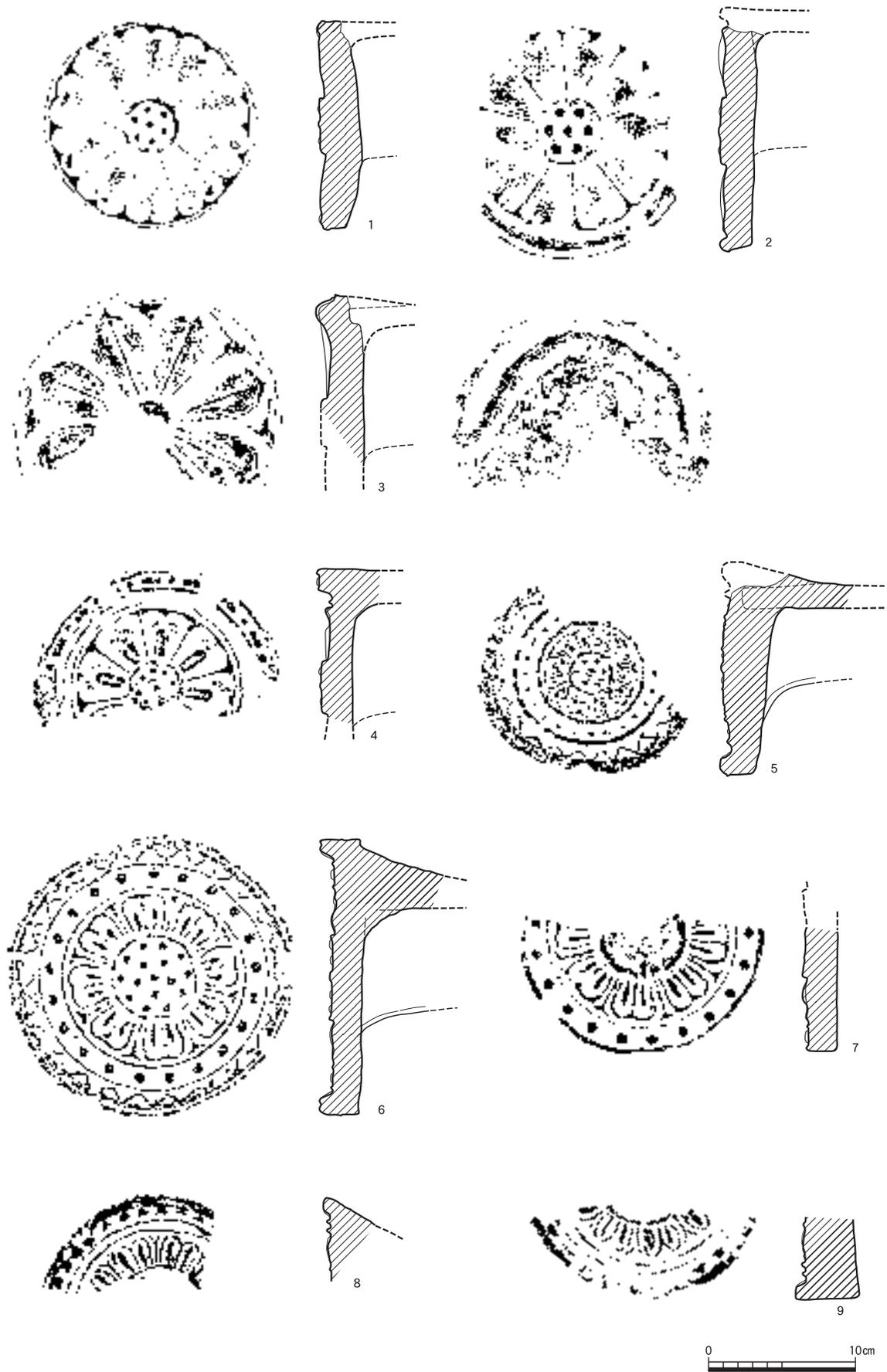


图322 瓦拓影·实测图1 (1 : 4)

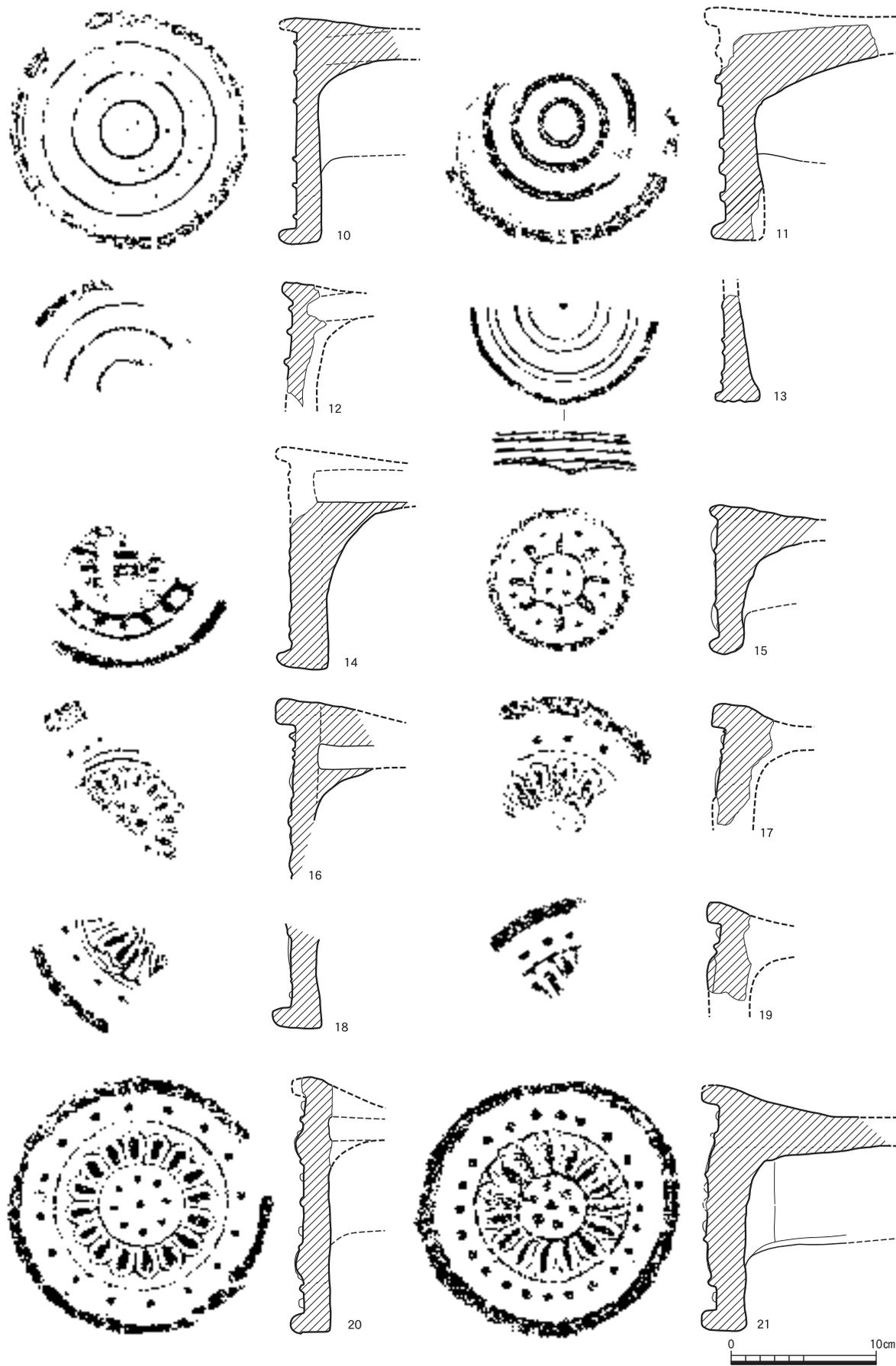


图323 瓦拓影·实测图2 (1 : 4)

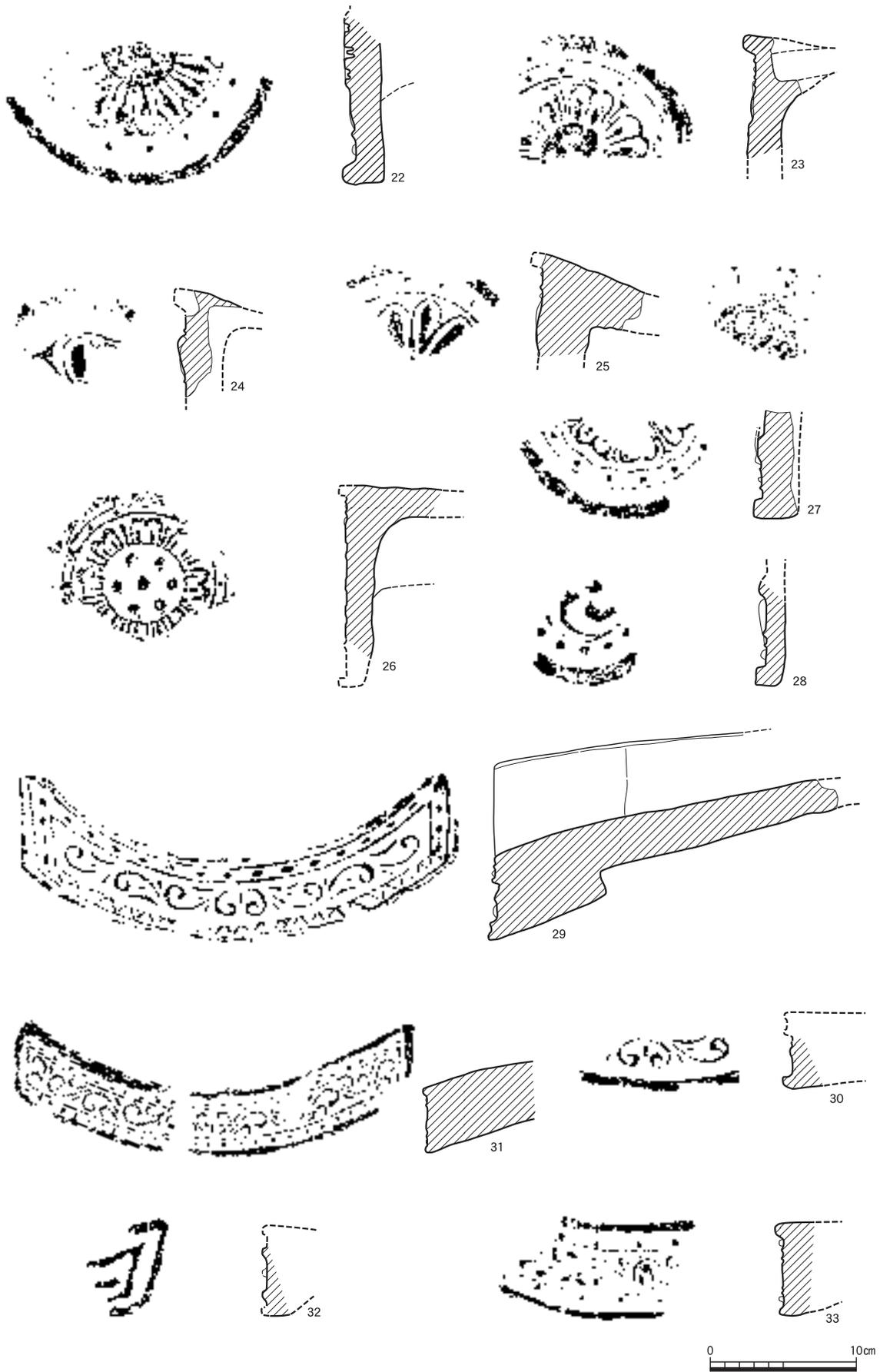


图324 瓦拓影·实测图3 (1:4)

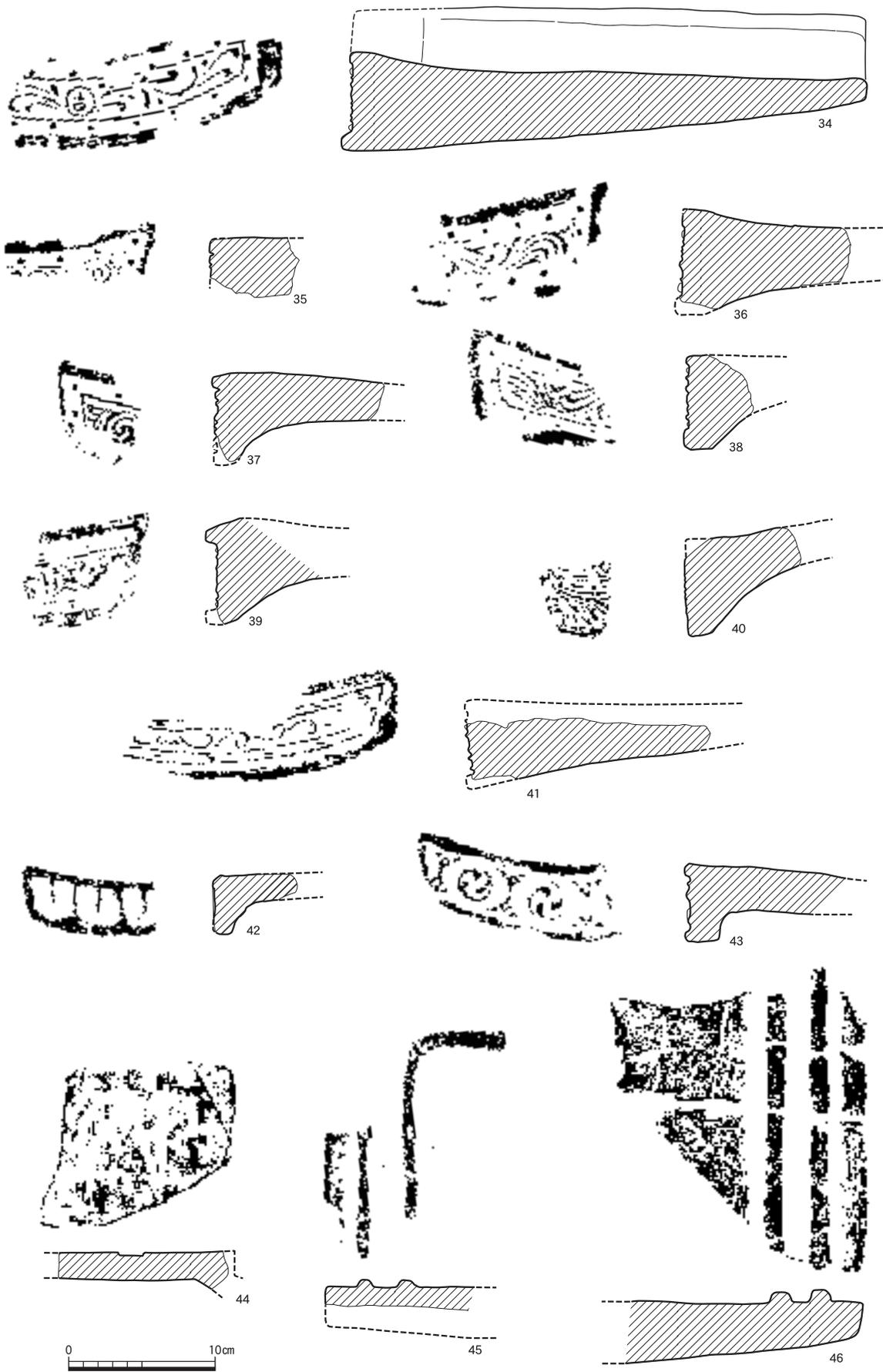


图325 瓦拓影·实测图4 (1 : 4)

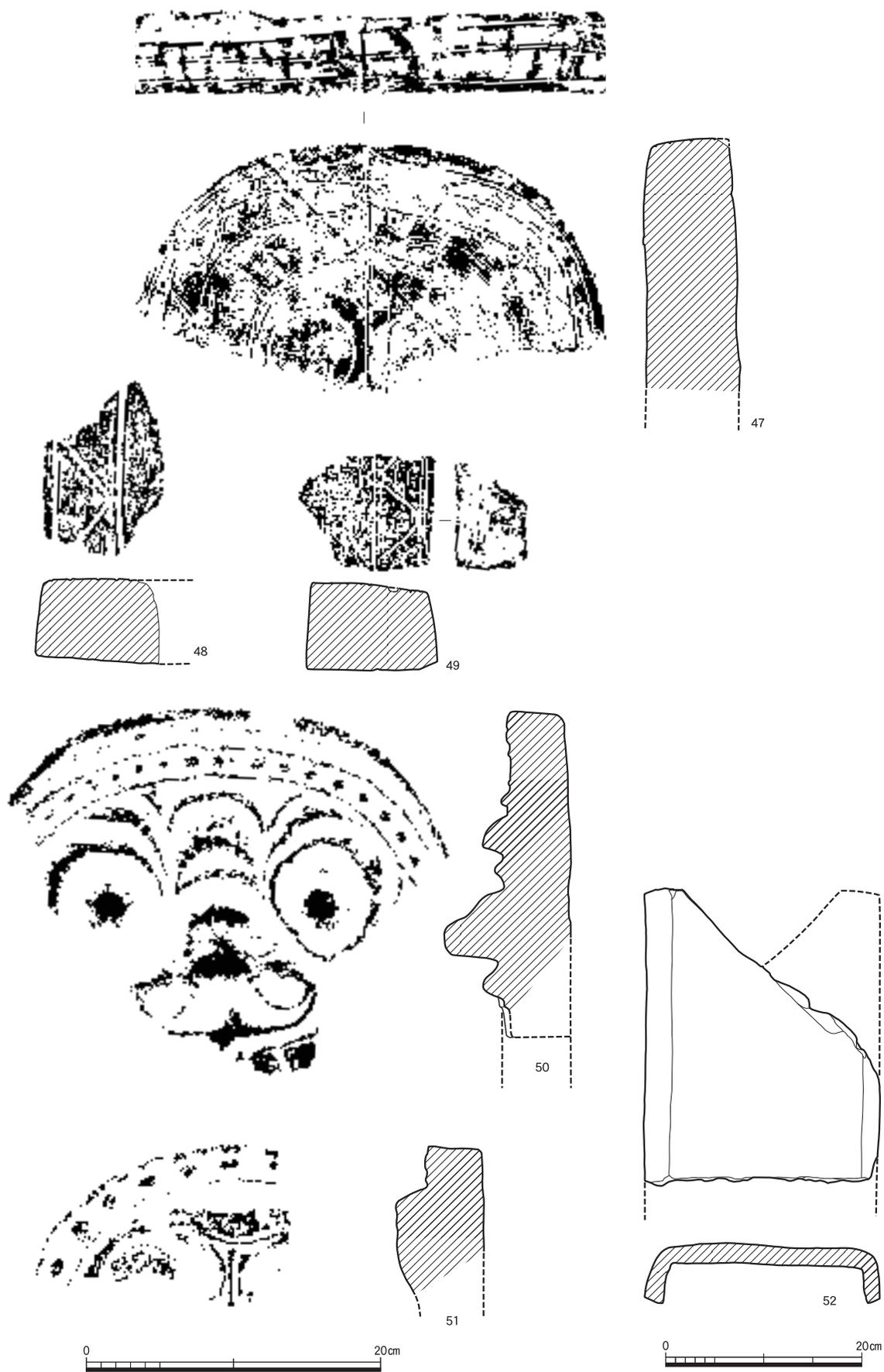


图326 瓦拓影·实测图5 (1:4、1:6)

める。周縁は直立縁で素文である。顎は曲線顎である。

軒平瓦9類(39)は、中心飾りは対向C字文で、唐草文は2重で両側に反転する。外区は珠文帯である。周縁は直立縁で素文である。顎は曲線顎である。小野報告38と同文である。小野瓦屋産。

軒平瓦10類(40)は、唐草文は2重で両側に反転する。外区はない。顎は曲線顎である。

軒平瓦11類(41)は、中心飾りは唐草文の下に弧線を配し、唐草文は両側に5回反転する。外区は2重に界線を巡らせ、楕円形の珠文を配す。周縁は直立縁で素文である。顎は直線顎である。

軒平瓦12類(42)は陰刻剣頭文である。顎は曲線顎である。

軒平瓦13類(43)は3連巴文で、巴文間に上下から菱形を配す。周縁は直立縁で素文である。顎貼り付け成形である。顎は段顎である。

丸瓦(44)は凸面縦ナデ・凹面布目で、凸面に「官」銘のスタンプを押捺する。

棟端飾瓦1類(45・46)は長方形で、下面の削りは直線的である。上面は平坦で文様はなく、周囲に凸線を2重に巡らせる。厚さは薄く、裏面中央部は盛り上がる。裏止めの装置があるかどうか不明である。

棟端飾瓦2類(47~49)は逆U字形で、下面の削りはU字形である。上面は平坦で窺描き沈線・竹管で施文する。中心に円形文を左右に並べ、外区は弧線で3重に区画し、2重目に線鋸歯文を施し各接点と弧線に竹管を配す。側面上部は3重に沈線で区画し、円形文・線鋸歯文を配す。裏面は平坦で裏止めの装置はない。48は右足部で、2重線で線鋸歯文・竹管を配し、内側に人物が描かれる。側面に弧線沈線を施すが、3重線は見られない。47は線の太さから別個体と推定できる。2重線で線鋸歯文・竹管を配し、間にも小型竹管を不規則に施す。側面に文様はない。

棟端飾瓦3類(50)は逆U字形で、下面の削りはU字形である。上面に鬼面を配する。上歯は4本、下歯はなし。外区は2重に界線を巡らせ、珠文帯である。周縁は低い直立縁で素文である。裏面は平坦で裏止めの装置はない。

棟端飾瓦4類(51)は逆U字形である。上面に鬼面を配する。眉が高く盛り上がる。外区は2重に界線を巡らせ、珠文帯である。周縁はない。裏面は平坦である。

隅蓋(52)は長方形で、上端をV字形にカットする。側面は下方に折り曲げる。凸面・側面は縦ナデ、凹面は糸切り痕が残存する。

小結 今回の調査では、第4面で古墳時代の竪穴住居・弧状溝を検出した。これまでも周囲で住居などの遺構を検出し、寺院造営前後の状況を知る上で貴重な資料となった。

同面で飛鳥時代から奈良時代に至る瓦屋を検出し、寺城南辺に立地したと想定できる。瓦屋内の窯は、前代の谷筋を埋め北東から南西への傾斜地を利用して造られる。また、窯の北側では瓦集積場を検出し、境内瓦屋の状況が具体的に明らかとなった。窯の立地は窖窯操業時と平窯操業時では異なる。窖窯は北から南東に展開する谷筋の傾斜面に直行するが、平窯は谷筋がある程度埋まった後に、斜面に対し斜め方向に立地し南向きに作られる。窖窯は全て半地下式で、構築時に地山を1~1.5m前後大きく掘り込み、土を入れ替え瓦を入れた後に、窯壁をスサ入り粘土で塗

り固め窯を構築する。これは地山が黒色砂泥・礫土のため、窯構築に適さなかったためと推定できる。1・3・5号窯のような畚窯の焼成室床面には基本的に段はないが、必要に応じて半裁した平瓦を並べて段を成形する。また、燃焼部と焼成部との境には段がない。1・3号窯には方形の前庭部が設けられるが、西側の谷筋には開口していない。5号窯や6号窯の下層には生焼け瓦が帯状に検出され、窯築造前に瓦が生産されていたことが窺える。

次に、窯の位置関係や掘形の前後関係から、窯の築造順序は3号窯が最も古く、次いで1号窯→5号窯→4号窯となる。ただし3号窯と1号窯の同時操業も想定できる。2号窯は1号窯の前に造られる。1・3号窯は床面角度が18~20°であるのに対し、4号窯は7~10°と緩くなり、構造の変化が見られる。

3号窯灰原から軒丸瓦1類が出土、5号窯から軒丸瓦5類・軒平瓦1類、4号窯から軒丸瓦4類・軒平瓦2類、7号窯で軒平瓦4類が出土し、それらが生産されたと推定できる。また、須恵器は全く生産されておらず、いずれも瓦専業窯である。

操業開始は1~3号窯と推定でき、7世紀前半から中頃と考えられる。生産の開始は、制作手法や瓦当范型の移動から幡枝元稻荷瓦屋の関与があったと推定できる。その後、8世紀前半には5・4号窯などの平窯で操業が最も盛んに行われ、平安時代前期には7号窯で生産が行われ、生産は終了する。軒丸瓦10類・軒平瓦4類は広隆寺に搬入されており、東寺にも搬入された可能性がある。

また、炭窯を検出しており、近辺に鉄関係の工房の存在した可能性がある。

平安時代には、6次調査で「野寺」の墨書土器が出土し、当寺院が文献に見える常住寺（野寺）であることが明らかである。第3面で検出した建物などは、これに関係するものと考えられる。

その後の中世の遺構は次第に少なくなり、当寺院の衰退の状況を示している。

参考文献

- 1) 鈴木久男「北野廃寺瓦窯について」『歴史考古学を考える－古代瓦の生産と流通－1』帝塚山大学考古学研究所 1987年
- 2) 岸本直文「7世紀北山背岩倉の瓦生産」『岩倉古窯跡群』京都大学考古学研究会 1992年
- 3) 原山充志「隼上り瓦窯D型式軒丸瓦瓦範の移動」『古代の土器研究会 第5回シンポジウム 古代の土器研究－律令的土器様式の西・東5 7世紀の土器－』古代の土器研究会 1997年
- 4) 網 伸也「北野廃寺・広隆寺の創建瓦」『古代瓦研究。－飛鳥寺の創建から百濟大寺の成立まで－』奈良国立文化財研究所 2000年

72 常盤東ノ町古墳群

経過 今回の発掘調査は、京都府公務員宿舍建設工事に伴う調査である。調査地は、常盤東ノ町古墳群にあたるため、発掘調査を実施した。遺跡は御室川左岸の下位段丘上に位置する。

調査地内に、南北5m、東西7mの調査区を設定した。機械で盛土層を掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区南西部で弧状溝SD5を検出した。調査区西・南に続く。幅1.5m、深さ0.7mである。時期は、古墳時代後期に属する。

平安時代後期の遺構は、調査区西部で土壙SK2～4を検出した。SK3は楕円形で幅0.8m、長さ1.8m、深さ0.5mである。SK4は楕円形で幅0.9m、長さ1.7mである。埋土はいずれも黒褐色土である。時期は平安時代後期に属する。

調査区南部で柱穴を検出し、柵列の一部と考えられる。時期は室町時代に属する。

遺物 出土遺物は古墳時代後期から室町時代の土器が出土した。

古墳時代の遺物には、土師器杯・壺・甕、須恵器杯などがある。SD5から出土した他、平安時代の遺構埋土からも出土した。平安時代後期の遺物は、12世紀前半と後半に属する土師器皿がある。前半のものはSK3から、後半のものはSK4から出土した。室町時代の遺物には、土師器皿、瓦器皿・椀・鍋、陶器甕がある。

小結 今回の調査で検出した弧状溝SD5は、形状から古墳周溝と推定できる。位置的には、常盤東ノ町古墳群の南西端部にあたる。平安時代後期のSK2～4は、形状などから、土壙墓と推定できる。当該期に墓域を形成する土壙墓群の一部を検出したと考えられる。

『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告 -』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊 1997年報告

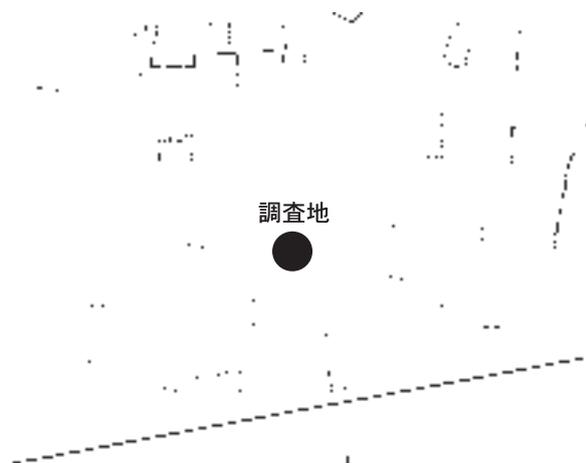


図327 調査位置図 (1 : 5,000)

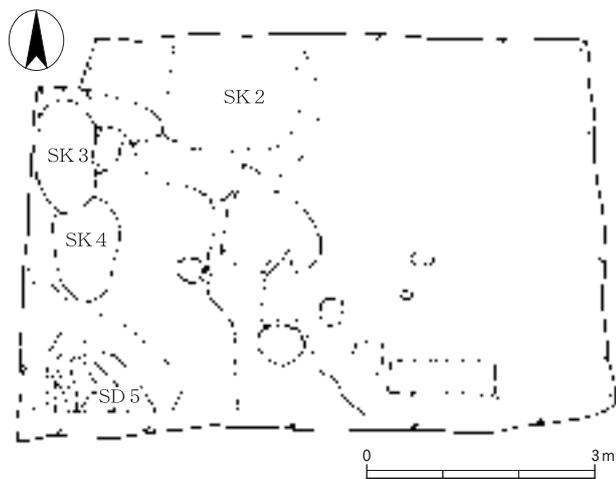


図328 遺構平面図 (1 : 100)

73 広隆寺旧境内（図版38）

経過 今回の発掘調査は、広隆寺霊宝館建設工事に伴う調査である。調査地は、広隆寺旧境内にあたるため、発掘調査を実施した。遺跡は御室川左岸の下位段丘上に位置する。

調査地内に、南北20m、東西24mの長方形の調査区を設定した。機械で盛土層を掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層盛土層（約0.25m）、第2層暗褐色土層（中世：約0.15m）、第3層黄褐色泥土・褐色礫土層（地山）である。第2層上面で第1面、第3層上面で第2面の遺構を検出した。

第1面では、調査区全域で柱穴を多数検出したが、建物としてはまとまらない。円形または楕円形で、径0.3～0.5m程度である。全域で土壌を検出した。不定形のものも多く、規模も多様である。遺構の時期は、江戸時代以降に属する。

第2面では、竪穴住居、柱穴、土壌、溝などを検出した。調査区北西部で竪穴住居を4棟（SB1～4）検出した。一辺4m前後の隅丸方形で、深さはSB2・4が約0.15m残存する。壁溝はSB2～4は全周巡ると推定できるが、SB2は南辺で途切れる。支柱穴は4本で、間隔は2m前後である。貼床は見られない。SB2・4は北辺中央に馬蹄形の竈を設置し、幅1.5m、長さ1.1mで、内部はかなり焼ける。SB2・4は南辺中央に貯蔵穴を設ける。住居の埋土は暗褐色土で、土師器椀・甕、須恵器杯・甕、平瓦などを含み、竈内・周辺では土師器甕などが多く見られる。住居の主軸は、いずれも北で西に振れる。切り合いからSB1・3からSB2・4に建て替えたと考えられる。調査区全域で鎌倉時代から室町時代の土壌と柱穴を多数検出した。柱穴は円形または楕円形で、径0.3～0.5mで、底部に石を

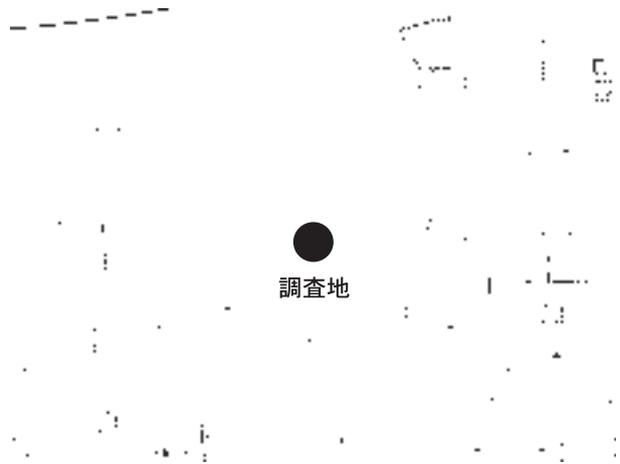


図329 調査位置図（1：5,000）

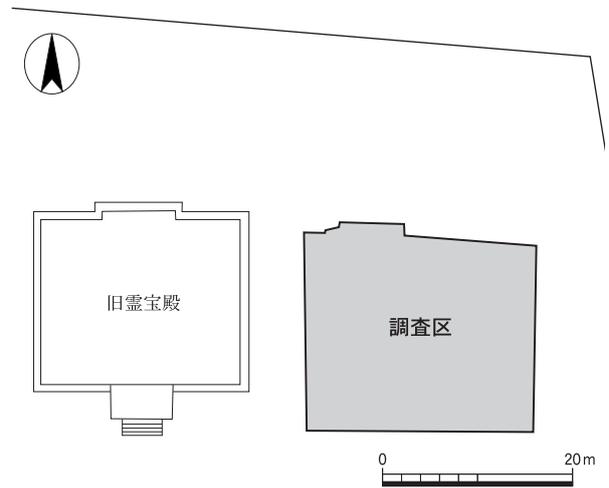


図330 調査区配置図（1：800）

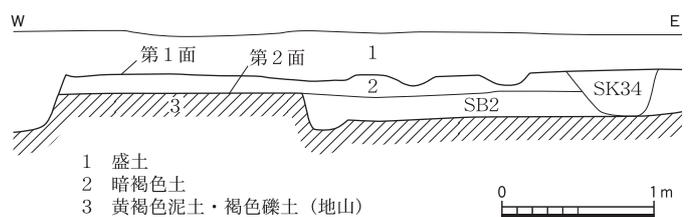


図331 西壁断面図（1：50）

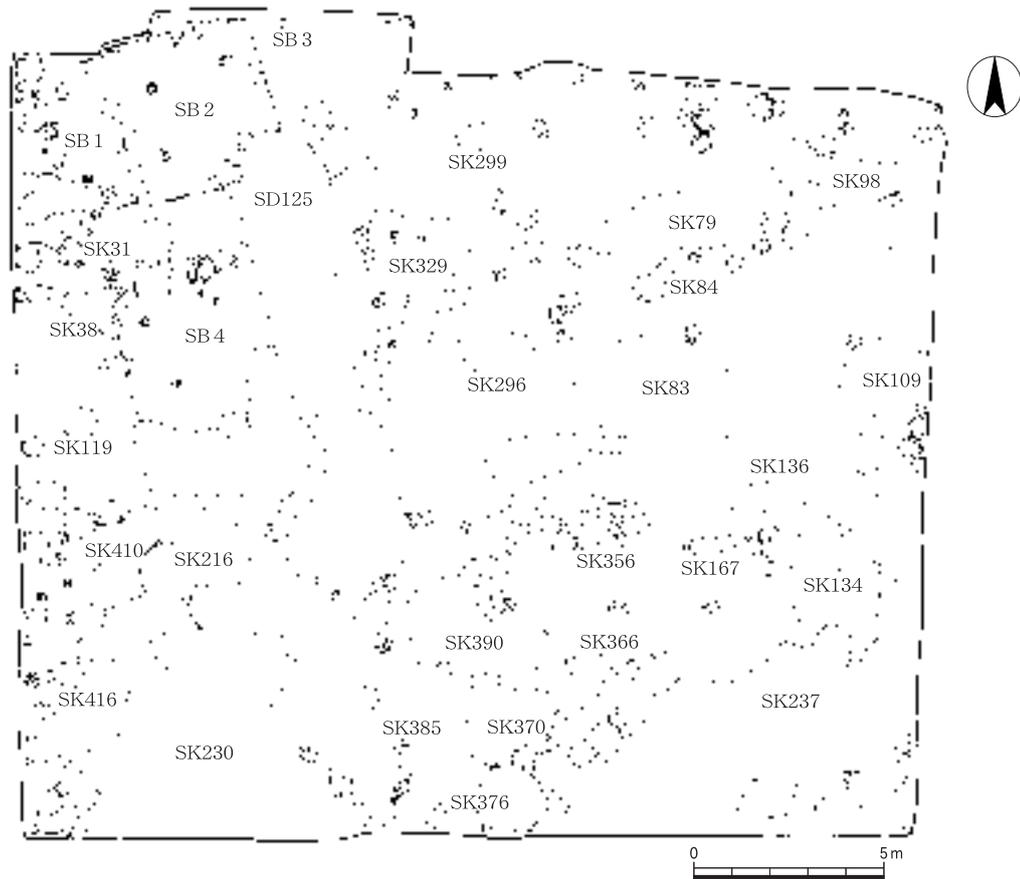


図332 第2面遺構平面図（1：200）

据えるものも見られるが、建物としてはまとまらない。土壌は、形状・規模は多様で、第1面に比べやや規模は小型である。遺構の時期は、竪穴住居が飛鳥時代、柱穴・土壌などが鎌倉時代から室町時代に属する。

遺物 出土遺物は52箱出土した。大半が土器類で、他に瓦類、円筒埴輪、鉄製品などがある。時期は飛鳥時代から江戸時代までのものがあり、中世の土器類が多い。

飛鳥時代の遺物には土師器杯・高杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦などがあり、竪穴住居などから出土した。7世紀前半である。平安時代の遺物には土師器碗・皿、須恵器杯・壺、軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。土壌などから出土した。鎌倉時代から室町時代の遺物には土師器、瓦器、陶器、磁器などがあり、土壌などから出土した。江戸時代以降の遺物には、土師器、陶器、磁器、瓦などがあり、土壌などから出土した。

小結 今回の調査は、広隆寺境内の初めての調査で、当地域の変遷を知ることができた。調査では竪穴住居を検出した。時期は7世紀前半で、常盤仲之町遺跡検出の竪穴住居とほぼ同時期である。埋土中には瓦が含まれ、広隆寺創建時には廃棄されたと推定できる。今回は、広隆寺に直接関係する遺構は検出できなかったが、広隆寺寺域についてはこれまで確定しておらず、これを検討するための資料となろう。

『京都嵯峨野の遺跡 - 広域立会調査による遺跡調査報告 -』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊
1997年報告

74 法性寺跡

経過 今回の発掘調査は、大阪国税局深草第2寮建設工事に伴う調査である。調査地は、法性寺跡にあたるため、発掘調査を実施した。前回の1次調査で建物跡などを検出したため、今回の2次調査となった。

調査地内に、南北10m、東西14mの長方形の調査区を設定した。機械で盛土層を掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構・遺物 調査区の基本層序は、第1層盛土層（約0.2m）、第2層淡茶灰色砂泥層（約0.3m）、第3層灰褐色砂泥層（約0.3m）、第4層淡黒灰色泥土を中心とした層（約0.3m）、第5層黄褐色砂礫（地山）である。

遺構・遺物は全く認められなかった。1次調査の結果から考え、削平を受け消滅したものと考えられる。

小結 今回の調査では、遺構・遺物は検出できなかったが、周辺には遺存している可能性が高く、今後の調査に期待したい。

『法性寺跡 大阪国税局深草第2寮新築予定地における発掘調査の概要報告 昭和54年度』
1980年報告

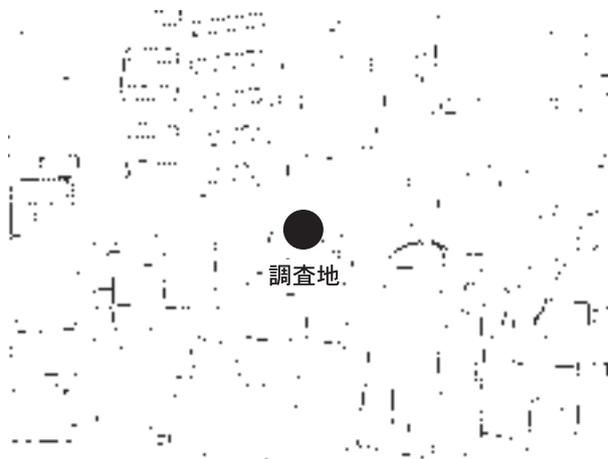


図333 調査位置図（1：5,000）



図334 調査区配置図（1：1,000）

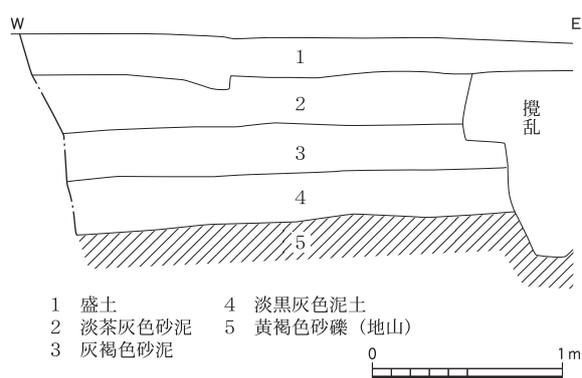


図335 北壁断面図（1：40）

75 大塚遺跡

経過 今回の発掘調査は、音羽中学校建設工事に伴う調査である。調査地は、大塚遺跡にあたるため、発掘調査を実施した。遺跡は、行者ヶ森山の西麓、山科川の左岸の下位段丘上に位置する

調査地内南側に、南北16m、東西30mのL字形のA区、その北側に南北7m、東西4mの長方形のB区を設定した。機械で盛土層を掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、A区の一部を北側に拡張した。B区は遺構・遺物が全く見られないため、断面図を作成して埋め戻した。平面実測・写真撮影を実施し、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層盛土層(約0.8m)、第2層耕土層(約0.2m)、第3層床土層(約0.3m)、第4層茶褐色土層(約0.05m)、第5層黄褐色粘質土層(地山)である。第3層は部分的にない場所も見られる。第4層上面で遺構を検出した。

A区東部で3棟、西部で1棟の竪穴住居を検出した。1号住居は台形で南北4.5m、東西3.1~4.1m、深さ約0.1mである。主柱穴は不明、中央部で高さ0.07mのドーナツ状の盛り上がりを検出し、周辺が焼けていることから炉と考えられる。南東辺で幅約0.6mの竈を検出した。壁溝は幅0.2m、

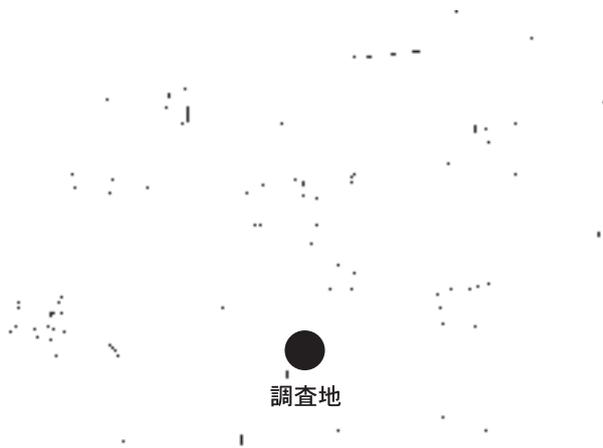


図336 調査位置図 (1 : 5,000)

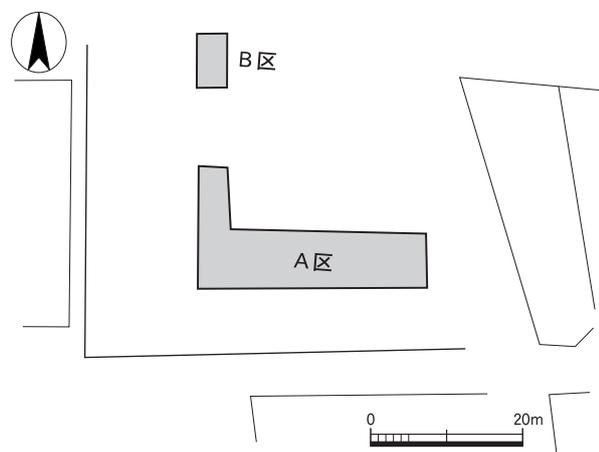


図337 調査区配置図 (1 : 1,000)

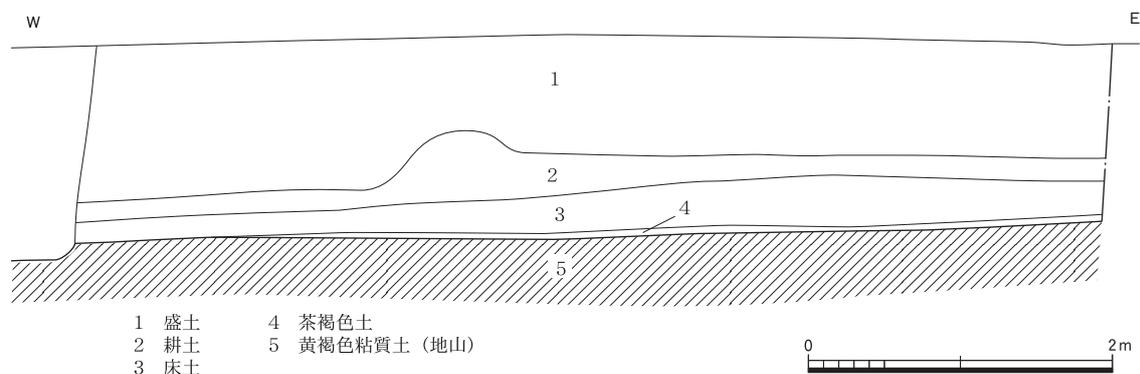


図338 北壁断面図 (1 : 50)

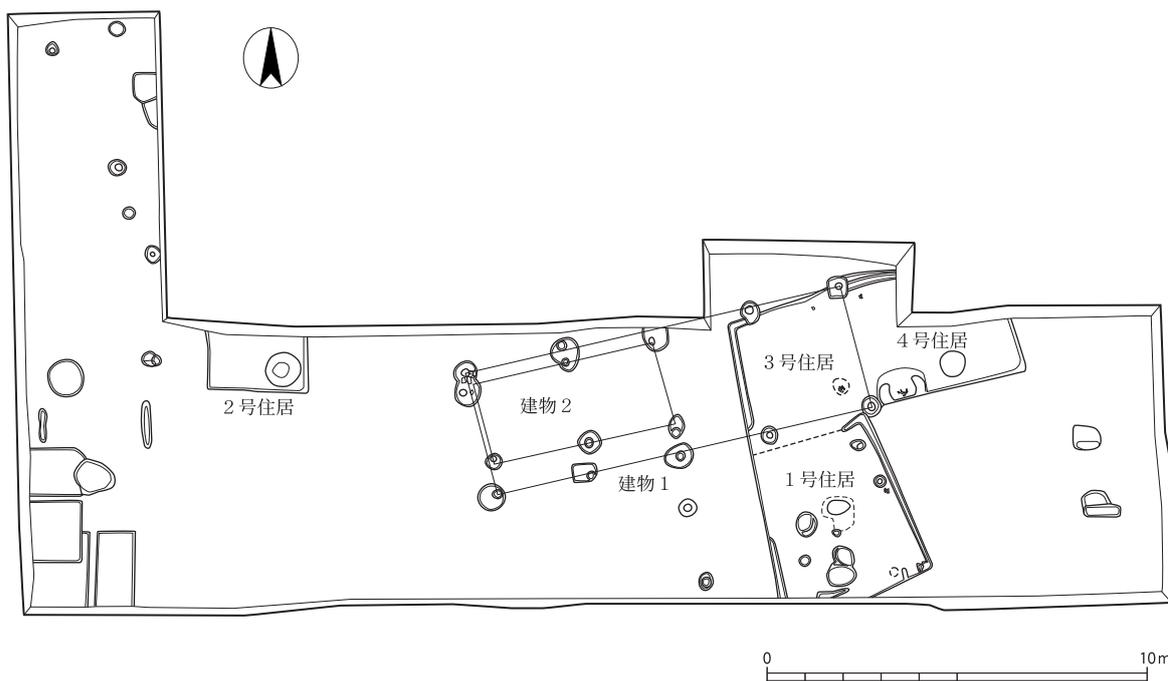


図339 遺構平面図（1：200）

深さ約0.05mで東辺・西辺の一部に見られ、北辺は不明である。貼床はない。南部で楕円形の一辺約0.7m、深さ約0.07mの土壙を検出し、埋土中に鉄滓を含む。埋土は暗茶褐色土で焼土・炭を多く含む。

2号住居は長方形で東西4.2m、南北3.4m、深さ0.1mで、北東側は調査区外に続く。支柱穴は不明、壁溝は確認できなかった。貼床はない。南西辺で竈を検出した。幅1.1m、長さ0.65mで、周辺がかなり焼ける。中央に土師器甕が据わる。東側に径0.3m、深さ約0.7mの円形の落込みがあり、鉄滓・須恵器・土師器などが多量に出土した。

3号住居は方形で一辺約3m、深さ約0.6mである。支柱穴は不明、壁溝は幅0.2m、深さ約0.08mで、西側のみ確認した。貼床はない。

4号住居は台形で南北3.4m、東西4.2m、深さ0.5mで、支柱穴は不明。北東辺で幅1.1m、長さ0.65mの竈を検出した。周辺はかなり焼け、中央に土師器甕が据わる。壁溝は幅0.15m、深さ約0.05mで北辺に見られる。貼床はない。中央南側で径0.6mの円形の土壙を検出した。1号～4号住居の切り合いは不明である。竪穴住居東群の方向は、北で西に振れる。

A区東部で2棟の掘立柱建物を検出した。建物1は南北1間×東西4間で、柱間隔は南北3.1m、東西2.5mである。建物2は建物1の西側に重複し、南北1間×東西2間で、柱間隔は南北2.1m、東西2.3mである。建物の方向は、竪穴住居東群と同様で、北で西に振れる。

また、全域で柱穴を小数検出したが、建物としてまとまらなかった。

遺構の時期は、竪穴住居は古墳時代後期（7世紀）に属する。掘立柱建物は遺物が少ないため明確な時期は不明である。

遺物 出土遺物は5箱出土し、大半が土器類で、他に土製品、金属製品、石製品、鉄滓などがある。

古墳時代後期遺物には、土師器杯・甕、須恵器、鉄滓・埴埴・鞆羽口、鉄製品、砥石などがあり、竪穴住居や包含層から出土した。

その他、古墳時代以降の土師器、須恵器、磁器などがあり、包含層などから出土した。

小結 今回の調査は、大塚遺跡の初めての調査で、当地域の変遷を知ることができた。遺構上面は削平を受け、竪穴住居・掘立柱建物共に残存状況は良くなかったが、ある程度遺物が出土し、遺構の性格を知る上で貴重な資料となった。竪穴住居からは、鞆の羽口・埴埴・鉄滓・焼土などが出土しており、鉄生産の工房の可能性も考えられる。



図340 調査区東部全景（西から）

76 中久世遺跡（図版39）

経過 今回の発掘調査は、宅地造成工事に伴うものである。調査地は、中久世遺跡の南西部にあたるため、発掘調査を実施した。遺跡は桂川右岸の沖積平野の微高地上に位置し、北西から南東にわずかに下降する段丘上に立地する。

調査地内に3箇所の試掘調査トレンチを設定し、耕土などを除いた結果、遺構の残存状況が良いため発掘調査を実施した。北側の3トレンチを中心に南北26m、東西26mの調査区、南側に幅4m、長さ16mの2トレンチ、幅4m、長さ10mの1トレンチを設定した。遺構面まで機械で掘削し、手掘りで遺構調査を行った。1トレンチは遺構未検出のため埋め戻した。その後、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面実測などを行った。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土層（約0.15m）、第2層黄灰色砂泥層（地山）である。第1・2層間に床土（約0.05m）が見られる部分もある。第2層上面で全ての遺構を検出したため、弥生時代から古墳時代までの遺構を第1期、長岡京期から鎌倉時代の遺構を第2期として分けて調査を実施した。

第1期の遺構は、弥生時代中期と古墳時代に分かれる。

調査区中央では北西から南東方向の流路SD1がある。幅約1.5m、深さ約0.5mである。流路の東側では方形周溝墓を2基検出した。北側のSX1は周溝の外側が東西15m、南北12m以上で、周溝は幅2～3m、深さ約0.9mである。中央部で検出した土壌SK1は主体部の墓壇の残存部の可能性がある。南側のSX2は規模不明で、北側周溝が2重となり、2基が重複した可能性がある。周溝は幅

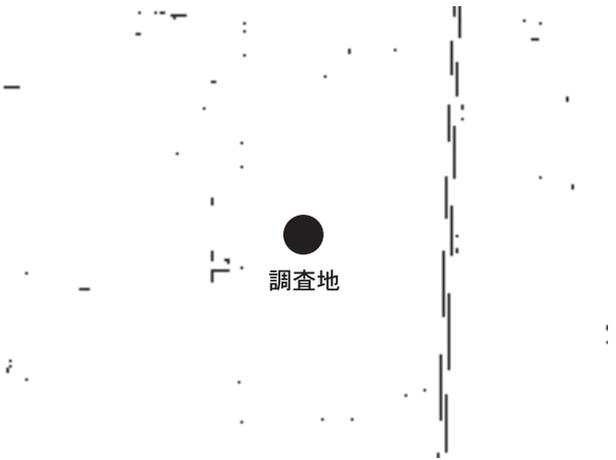


図341 調査位置図（1：5,000）

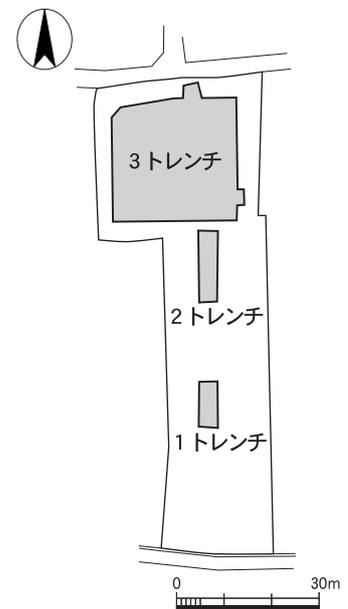


図342 調査区配置図（1：1,600）

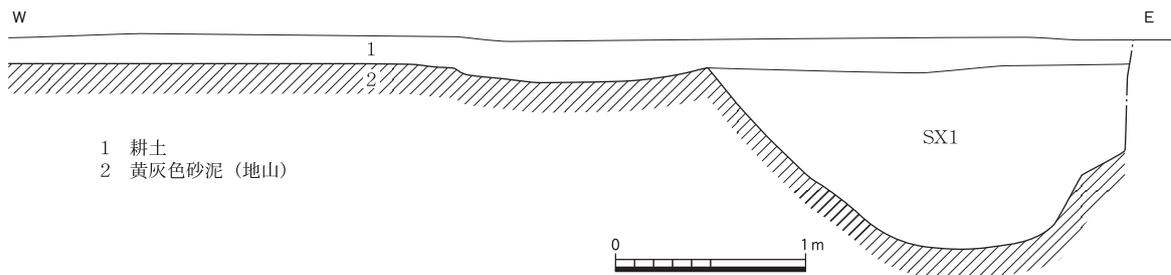


図343 北壁断面図（1：40）

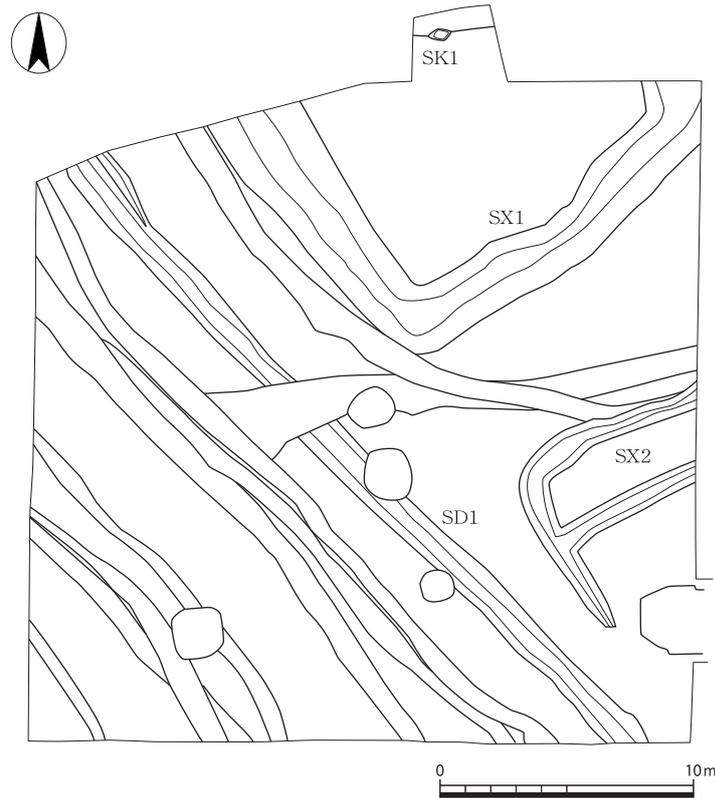


図344 3トレンチ第1期遺構平面図（1：300）

約1m、深さ約0.2mである。いずれも方向は北で西に振れる。これらの遺構の時期は弥生時代中期に属する。

調査区西半部では北西から南東方向の流路を多数検出した。規模・方向も多様で、何度も流れを変化させながら、次第に堆積した状況と考えられる。2トレンチで検出した流路もこれと同様である。これらの遺構の時期は古墳時代前期から後期に属する。

第2期の遺構は、平安時代初期（第2-1期）と鎌倉時代（第2-2期）に分かれる。

第2-1期では、調査区北側・西側・東側で掘立柱建物を検出した。SB1は2間×3間南北棟で、柱間は東西1.9m、南北2.1～2.3mである。SB2は2間×3間東西棟で柱間は東西・南北2mである。柱掘形が大きい。SB3は南北2間で西に続く、柱間は2.5mである。SB4は2間×3間東西棟で、柱間は東西1.9m、南北2.2mである。SB5は南北3間で東に続く、柱間は2mである。SB6は2間×3間東西棟で、柱間は東西1.5m、南北2mである。SB7は2間×3間東西棟で、南に庇が付く。柱間は東西・南北2.5m、庇の出2.8mである。今回検出した建物では最も規模が大きい。SB8は2間×3間東西棟で、柱間は東西1.8m、南北2.5mである。SB9は2間×3間南北棟で、柱間は東西1.8m、南北4.5mである。柱掘形はいずれも方形である。SB1・SB9は南北に柱筋を揃えるが、他の建物は方位が若干ばらつく。調査区南東部で、井戸SE3を検出した。掘形は3.2m×2.4m、深さ1.65mの不定形である。井戸枠は方形で、一辺1m、深さ1m、横板は各3枚（幅約0.35m）、底板は5枚（幅0.25～0.1m）で北両隅に方形の穴を穿つ。底板上に曲物が残る。これらの遺構の時期は平安時代初期に属する。

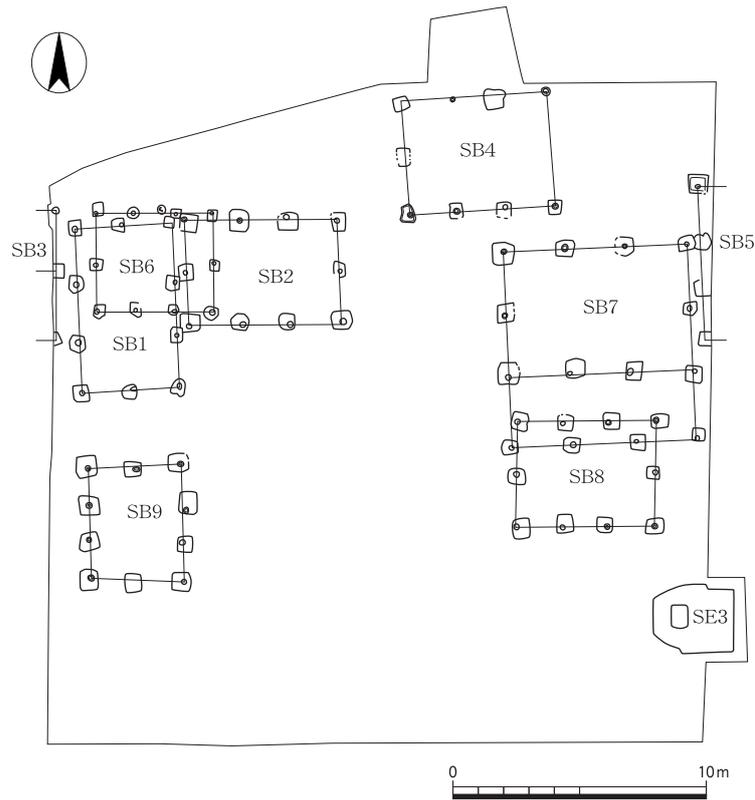


図345 3トレンチ第2-1期遺構平面図（1：300）

第2-2期では、調査区北西部・西側で掘立柱建物を検出した。SB10は2間×2間南北棟で、柱間は東西約1.3m、南北約2.7mである。SB11は4間×3間東西棟で、柱間は東西2.2m、南北約1.5mである。南北に間仕切りを持つ。SB12は3間×1間東西棟で、南に庇が付く。柱間は東西約2m、南北2.3m、庇の出1mである。SB13は南北5間で西に続く、柱間は2mである。SB14は南北2間で西に続く、柱間は1.9mである。柱掘形はいずれも円形または楕円形である。SB10・11は東西に柱筋を揃え、SB11・12は西側柱が揃う。各建物は方位が若干ばらつく。調査区中央部から南側・北中央で井戸SE1・2・4～6を検出した。掘形は円形で、径2m程度である。井戸枠は不明である。調査区中央で土壌SK1を検出した。隅丸長

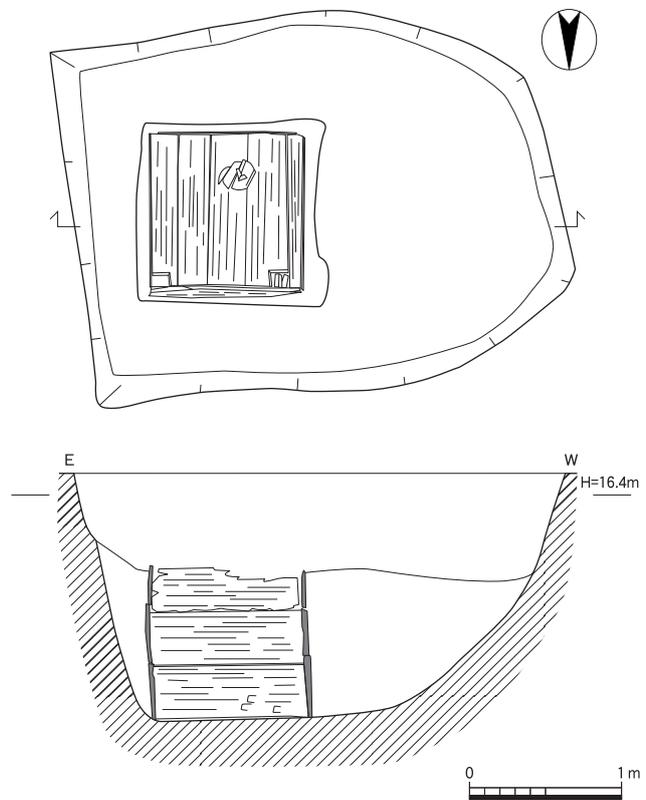


図346 3トレンチSE3実測図（1：50）

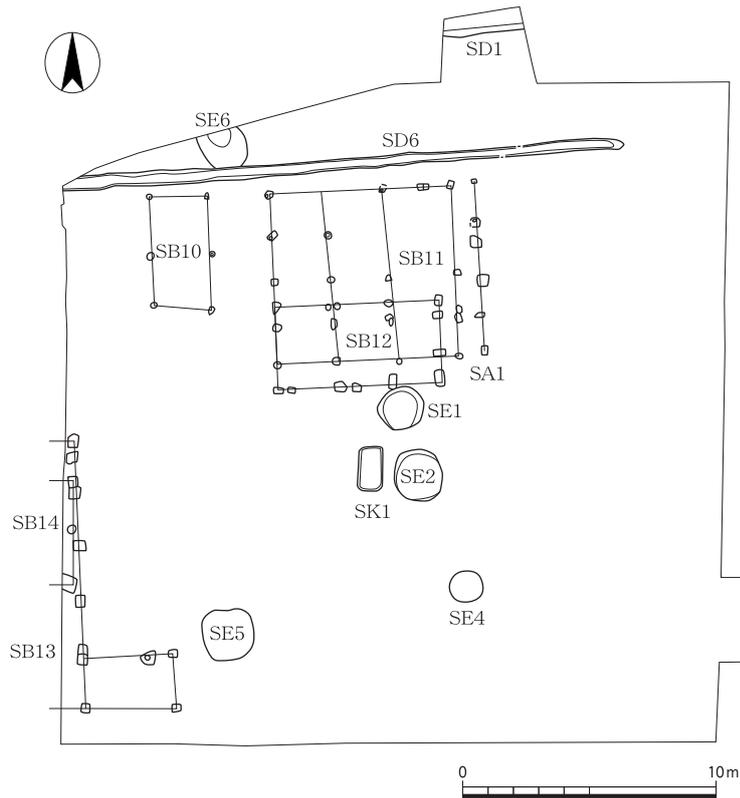


図347 3トレンチ第2-2期遺構平面図（1：300）

方形で、南北1.75m、東西1m、深さ0.05mで、墓と考えられる。調査区北側で東西溝SD1・6を検出した。いずれも東で北に振れ、溝肩間隔は4.5mである。SD6は断面U字形で、幅約0.5m、深さ約0.2mである。これらの遺構の時期は鎌倉時代に属する。

遺物 遺物は整理箱にして44箱出土した。種類には弥生土器、土師器、須恵器、土製品、瓦、木製品、金属製品などがある。時期は、弥生時代から鎌倉時代である。

弥生時代の遺物には、弥生土器鉢・甕、石器などがある。流路SD1などから多量に出土した。古墳時代時代の遺物には、土師器高杯・甕、須恵器杯などがある。流路などから出土した。時期は古墳時代前期から7世紀まで至る。

平安時代初期の遺物には、土師器杯・皿・高杯、須恵器甕・杯・蓋、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、軒瓦、土製竈、木製曲物・櫛・井戸枠などがある。井戸、柱穴から出土した。鎌倉時代の遺物には、土師器皿、瓦器椀・皿、木製曲物・櫛、刀子、瓦などがある。井戸、柱穴、土壙から出土した。

小結 調査の結果、当地域の変遷や集落の構造を知る上で重要な発見となった。

弥生時代から古墳時代は周辺の調査地と同じく、流路が中心であるが、弥生時代の方形周溝墓の検出は初見であり、今後は集落の構造を明らかにすることができよう。

平安時代初期のまとまった掘立柱建物群や井戸などを検出した。これらの建物群は長岡京域外にあたり、注目される遺構である。また、鎌倉時代までの建物、井戸、溝、土壙などを検出し、長岡京廃絶後の周辺の集落の状況を考える上で重要な遺構といえる。

77 大藪遺跡

経過 今回の発掘調査は、第3乙訓中学校（現久世中学校）建設工事に伴うものである。調査地は、大藪遺跡にあたるため、発掘調査を実施した。遺跡は桂川右岸の沖積平野の微高地上に位置し、北西から南西に緩やかに傾斜する段丘上に立地する。

調査地内に、南北11m、東西14.5mの調査区を設定し、遺構面まで機械で掘削し、手掘りで遺構調査を行い、その後、平面実測と写真撮影を実施した。最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面実測などを行い調査を終了した。

遺構 調査地の基本層序は、第1層盛土層（約0.8m）、第2層耕土層（約0.15m）、第3層床土層（約0.1m）、第4層黄褐色泥砂層（地山）である。第4層上面で弥生時代から中世に至る遺構を検出した。

調査区全域で溝を検出した。南北・東西方

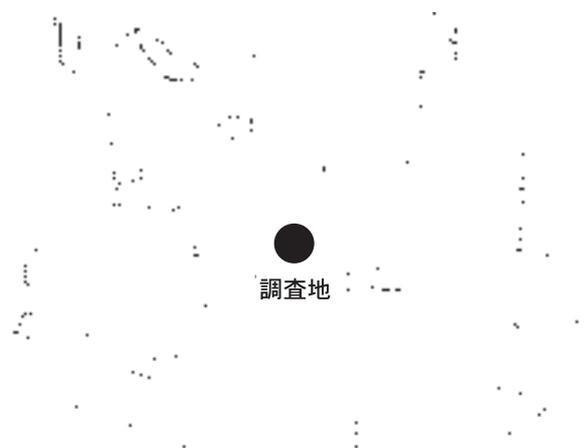


図348 調査位置図（1：5,000）

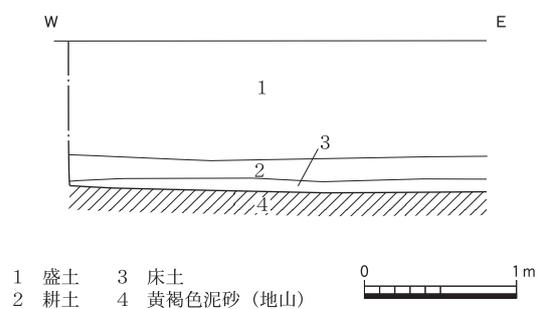


図349 北壁断面図（1：50）

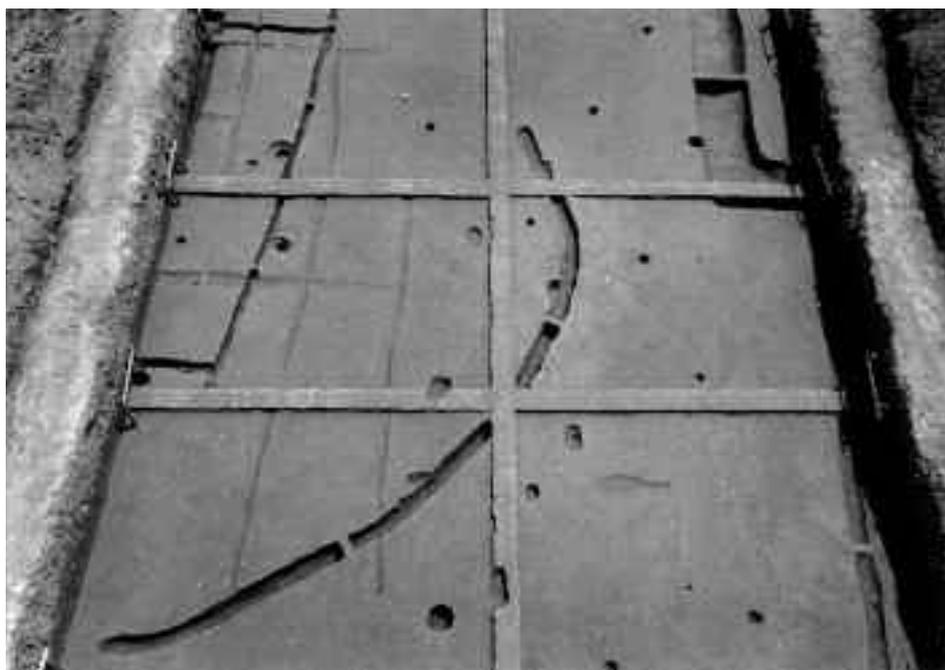


図350 調査区全景（西から）

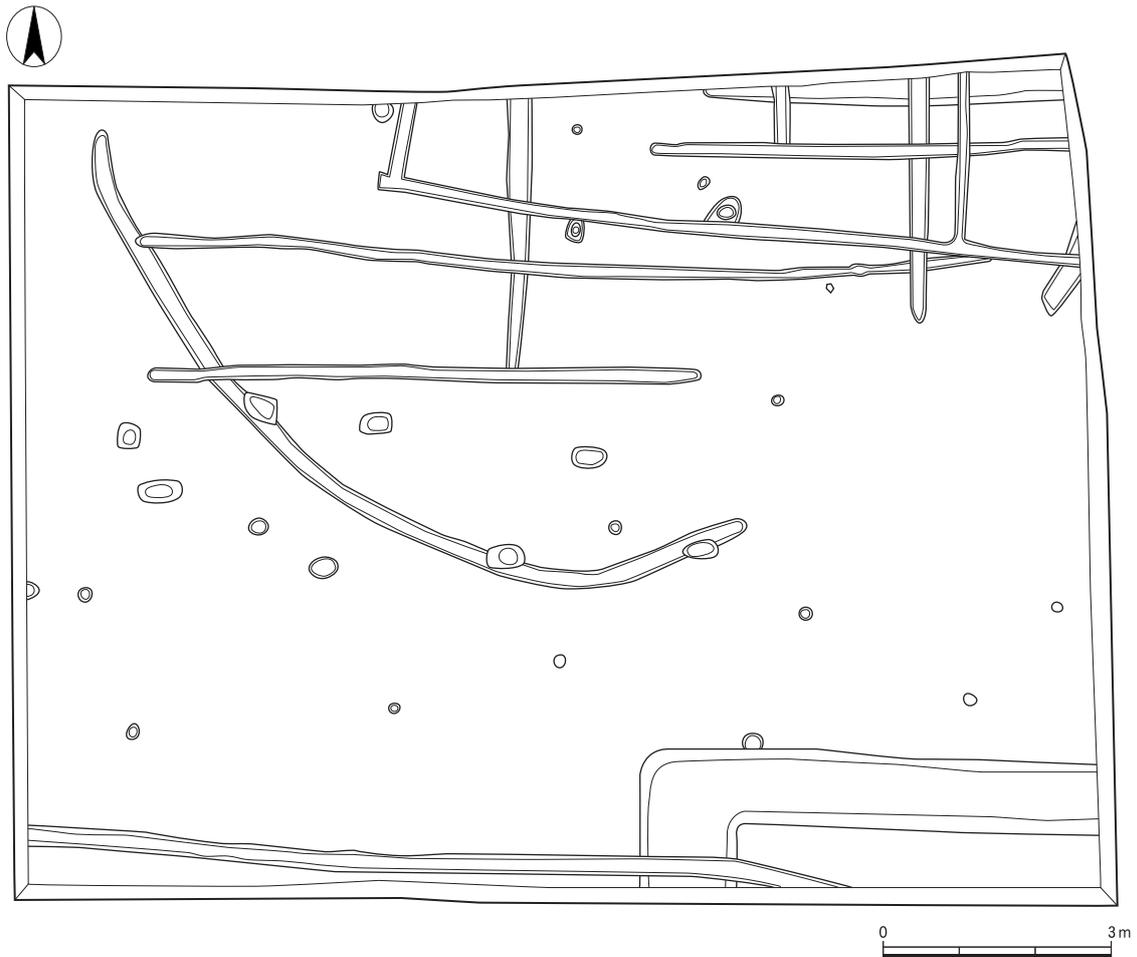


図351 遺構平面図（1：100）

向の溝は幅約0.2m、深さ約0.1mである。南東部の逆L字形の溝は幅1.1m、深さ0.5mと大きい。中央部で検出した弧状溝は、それに切られた溝で、幅約0.25m、深さ約0.2mである。

全域で柱穴を検出した。径0.1～0.3m程度である。散在しており、建物としてはまとまらなかった。遺構の時期は、弧状溝と柱穴の一部が弥生時代に属し、他は中世以降である。

遺物 遺物は整理箱にして1箱出土した。種類には弥生土器などがある。溝状遺構などから出土した。

小結 今回の調査では、弥生時代の遺構を少数しか検出できず、しかも遺存状況が悪い。周辺の調査から考え、地山面が削平を受けているものと推定できる。弥生時代の遺構が若干残存したことは、近接地では遺構が残っている可能性が高い。溝などの遺構は耕作に関係するものと考えられる。

78 大原野南春日町窯跡

経過 今回の調査は、大原野南春日町窯跡の現状把握と性格を明らかにするために実施した。調査地点は数年前に窯体が発見された窯の北側に位置する。調査地は、小塩山の東側山麓に広がる丘陵地域で、小丘陵が西から東に延び、丘陵の斜面や谷筋に窯跡が分布する。大原野窯跡群はいくつかのグループに分かれ、今回調査を実施した南春日町地区は全体の最も北側に位置する。

調査地には、東西30m、南北30mの変形の調査区を設定して、調査を実施した。

遺構 調査地の基本層序は、第1層耕土層、第2層床土層、第3層盛土層、第4層粘土層（地山）である。第4層は北東方向になだらかに傾斜する。

灰原は全く検出できず、他の遺構も全くない。第2・3層中では土器を多く含む範囲が数箇所あり、水田を造成する際に窯跡付近の土を盛ったことが明らかとなった。

遺物 遺物は整理箱に2箱出土した。大半が須恵器で、時期は奈良時代である。器種には杯・蓋・甕などがある。

小結 今回の調査では、窯跡に直接関連する遺構は検出されず、遺物を包含する土層は全て二次的なものであることが判明した。また、出土した須恵器が現在確認している南側の窯跡あるいは灰原のものであるかは明らかではない。

『南春日町窯跡発掘調査の概要 - 小塩窯跡群に関連する窯跡の調査 - 昭和54年度』 1980年報告

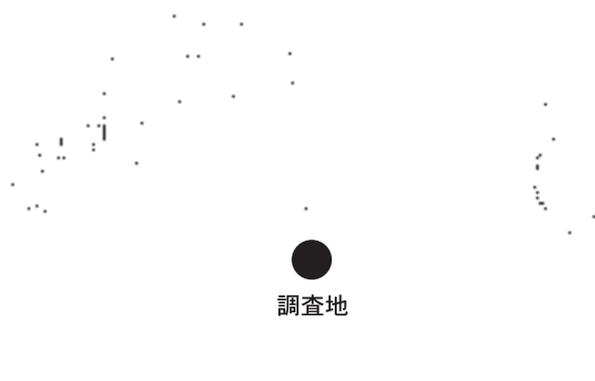


図352 調査位置図 (1:5,000)

79 醍醐古墳群（図版40）

経過 今回の発掘調査は、周辺に造成工事が実施され、古墳の一部が削平を受けたため、古墳群全体の確認調査である。醍醐古墳群は、大宅堂ノ山から南西に延びる丘陵の上部から南斜面にかけて位置する古墳群で、円墳18基・方墳1基が群集する。

調査は、古墳の基数・規模・構造年代などを明らかにするために分布調査を行い、耳塚古墳を含む13基の古墳の存在を確認し、調査地全体の測量図を作成した。その後、耳塚古

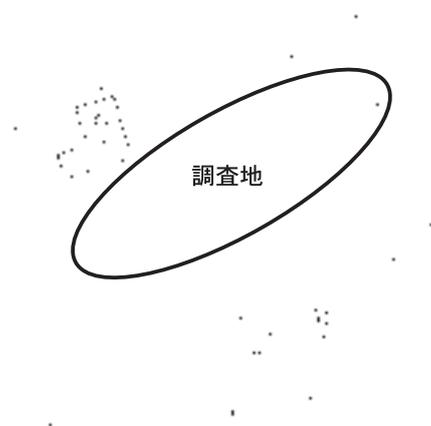


図353 調査位置図（1：5,000）

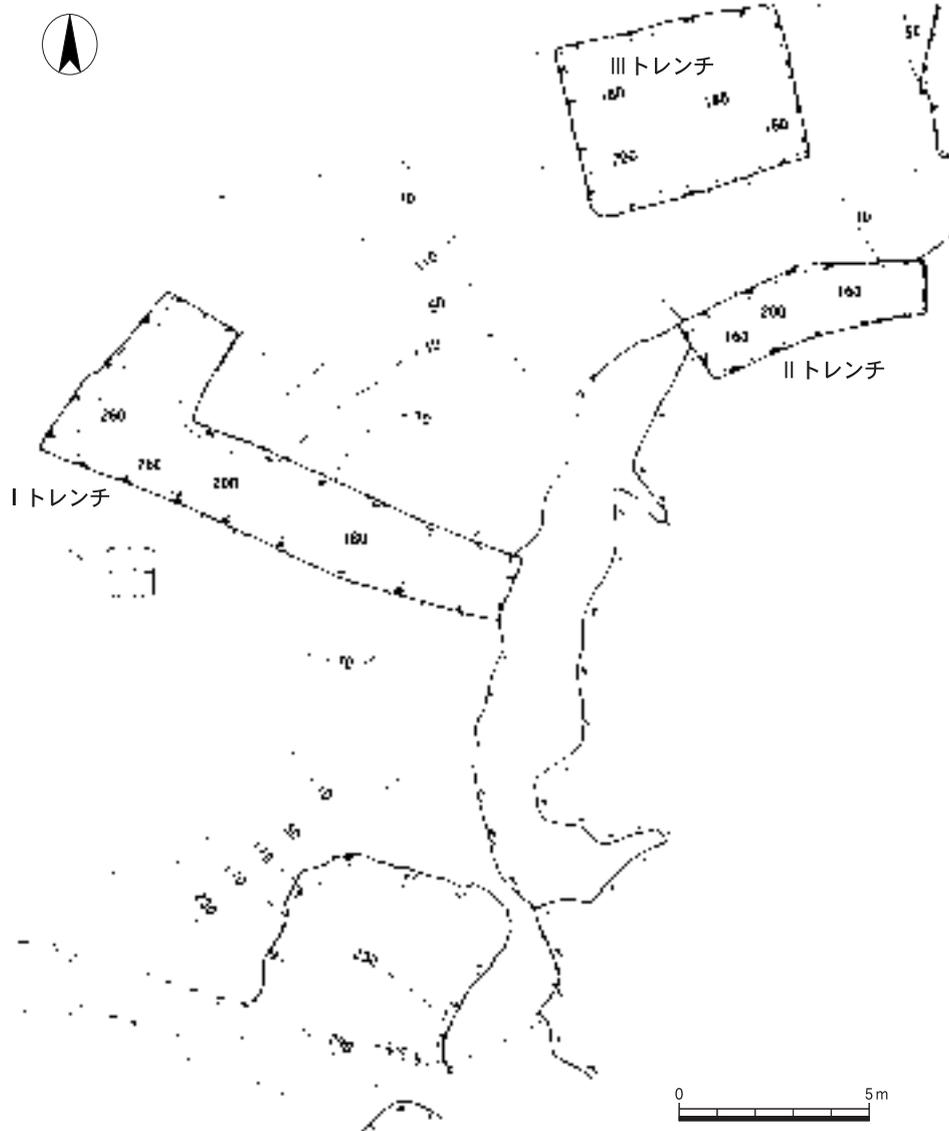


図354 耳塚古墳測量図（1：200）

墳・2・3・9号墳の発掘調査を実施した。調査は、トレンチ調査で範囲は最小限にとどめた。各古墳石室の確認実測・土層観察・写真撮影を行い、現状に埋め戻して調査を終了した。

遺構 耳塚古墳では、3箇所のトレンチを設定して調査を実施した。その結果、墳丘は地山を平坦に削平した後、地山の礫土と灰褐色土を交互に積んで構築している。また、西端では幅約3m・深さ0.5mの周溝を検出した。周溝埋土は灰褐色礫土で、7世紀前半の須恵器が出土した。主体部はすでに攪乱され石材は抜き取られているが、トレンチ東端では主体部抜き取りの落込みを検出し、この下面で排水溝と思われる石組遺構を検出した。



図355 2号墳石室実測図 (1:30)

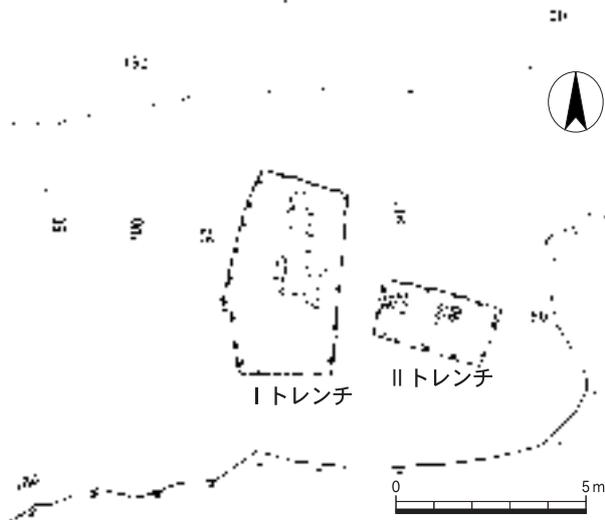


図356 2号墳測量図 (1:200)

2号墳は径約10m、高さ0.6mで、墳丘西側は耳塚古墳と接する。トレンチでは主軸をほぼ南北にした横穴系の小石室を検出した。石室内法は長さ2.2m×幅0.65m、最下段の石材は0.5m内外のやや大型のものを用い、中段は0.35m内外、上段は0.4m内外のものを用いる。石室内では床面から浮いた状態で須恵器、釘を検出し、釘の位置から木棺は長さ1.6m前後と推定できる。トレンチでは幅約1.5m、深さ0.4mの周溝を検出した。埋土は褐色砂質土である。

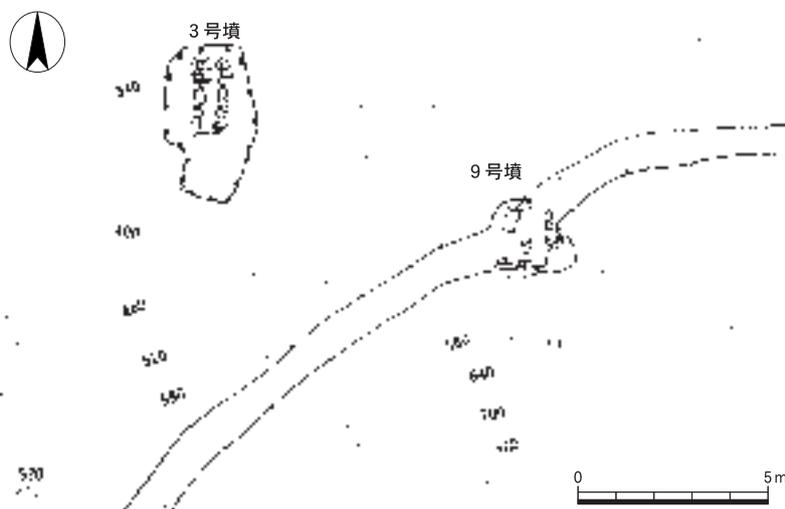


図357 3・9号墳測量図 (1:200)

3号墳は径約11mの円墳である。中央トレンチでは主軸をほぼ南北にした横穴系の小石室を検出した。石室内法は長さ1.65m×幅0.3m、人頭大の石材を用いる。石室は2号墳の石室に比べかなり小さく、墳丘北寄りに位置し、3号墳の本来の主体部かどうか疑問が残る。

9号墳は径約11mの円墳である。石室は主軸をほぼ南北にし、石室内法は幅0.85m、

長さは奥壁から1.3m以上確認した。石室の幅が2・3号墳より幅が広いことから横穴式石室の可能性はある。床面からは遺物は検出できなかった。古墳の時期は7世紀前半から中頃である。

遺物 出土遺物は、整理箱1箱出土した。須恵器と鉄釘が出土した。

須恵器には杯・蓋・壺・甕などがあり、耳塚古墳周溝・2号墳石室内などから出土した。鉄釘は長さ5～7cm、厚さ0.5cm程度のもので、鍛造した後一方を折り曲げて頭部を造っている。

小結 今回の調査では、分布調査で新たに数基の古墳を検出し、当古墳群が13基以上で構成されることが明らかとなった。次に耳塚は径23mの円墳であり、周囲に周溝を巡らせ、古墳群中で最大規模をもつ古墳の様相が明らかとなった。また、2・3号墳で小型の横穴系の小石室を検出した点は注目できる。

以上の点から、醍醐古墳群はその群中に盟主的位置を占める耳塚古墳が存在すること、造営年代が7世紀前半から中頃と畿内地方ではやや遅れることなど、終末期の特徴的な古墳といえる。

『醍醐古墳群 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 昭和54年度』 1980年報告

80 伏見城跡 1

経過 今回の発掘調査は、桃山小学校校舎建設工事に伴うものである。調査地は、伏見城跡の南西部にあたるため、発掘調査を実施した。

調査地内に、南北20m、東西18mのT字形の調査区を設定した。機械で盛土層を掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測・写真撮影を実施し、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層盛土層（約0.4m）、第2層赤褐色砂泥層（約0.05m：包含層）、第3層黄灰色粗砂層（約0.05～0.2m）、第4層黄褐色砂泥層（約0.2m：包含層）、第5層黄褐色砂礫層（地山）である。第4層上面で第1面の遺構、第5層上面で第2面の遺構を検出した。

第1面は攪乱が激しく、遺構としては、柱穴・土壇・井戸・溝などを小数検出したのみにとどまった。柱穴は全域で小数検出した。円形または楕円形で、径0.3～0.5m程度である。散在しており、建物としてはまとまらない。土壇も散在して検出した。土壇の規模・形態は多様である。SK02・04では瓦が多数出土した。また、石が多量に入れられたものもある。井戸は、調査区南西部で2基検出した。いずれも円形で、SE02は径2m、深さ約0.6mである。いずれも井戸枠は残存していない。遺構の時期は桃山時代に属する。

第2面の遺構には、土壇・柱穴・溝などがある。土壇・柱穴は東部で検出した。土壇は一辺1.5m、深さ約0.6mである。土壇の周囲で径0.3mの円形の柱穴を検出した。性格は

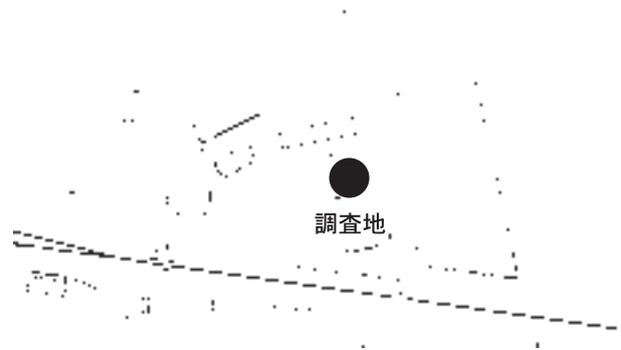


図358 調査位置図 (1 : 5,000)

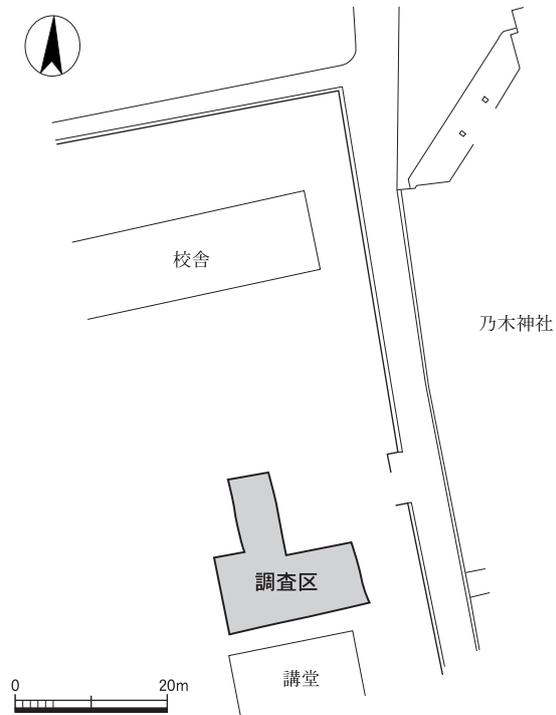


図359 調査区配置図 (1 : 1,000)

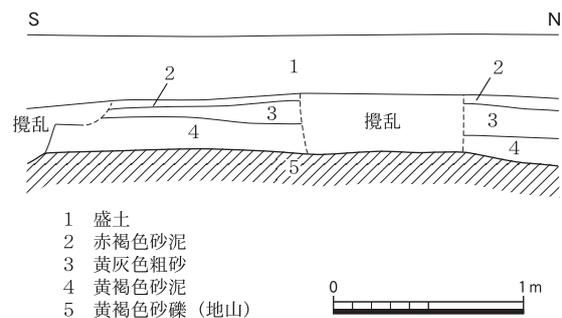


図360 西壁断面図 (1 : 40)

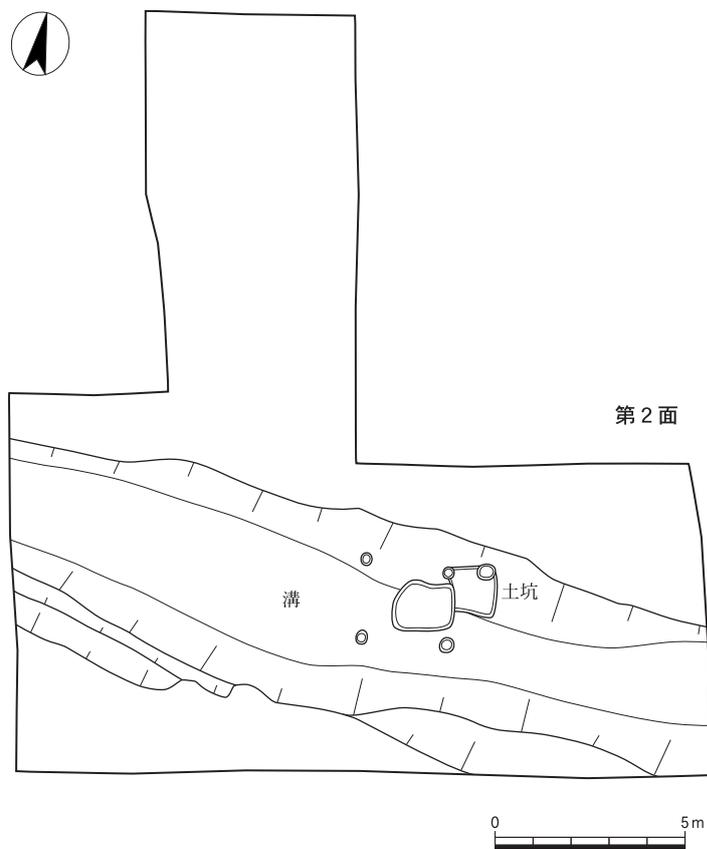
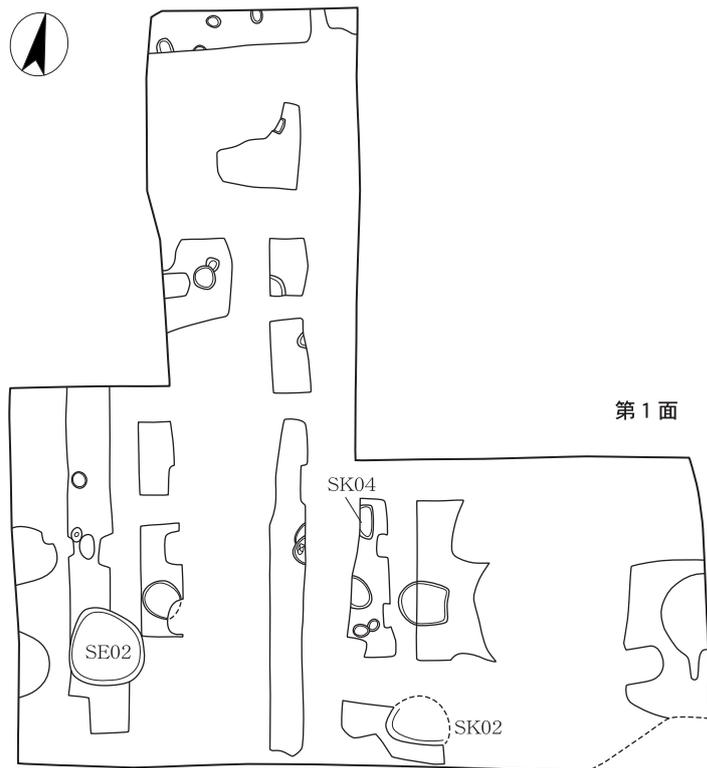


図361 遺構平面図 (1 : 200)

不明である。これらの遺構の下層で東西溝を検出した。溝は幅約5.5m、深さ2.5mで、断面はU字形を呈する。埋土は、大きく上層が茶灰色砂泥を中心とした層、下層が灰色泥土砂礫層である。遺構の時期は、室町時代末から桃山時代に属する。

遺物 出土遺物は16箱出土した。大半が瓦類で、他に弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、石器、銭貨が少量出土した。

弥生土器、古墳時代後期の土師器、須恵器は包含層、溝から出土した。他の土器類は、包含層や各遺構から出土した。瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・面戸瓦・雁振瓦・鬼瓦などがあり、軒丸瓦の中には、金箔が施されたものもある。瓦は井戸、土壙、溝などからまとめて出土した。

小結 今回の調査では、現代攪乱が多く、遺構の遺存状況はあまり良くなかった。ただ下層で検出した東西溝は、伏見城の南側の濠である可能性が高く、城の構造を考える上で重要な遺構である。

81 伏見城跡 2

経過 今回の発掘調査は、個人住宅建設工事に伴うものである。調査地は、伏見城跡の南西部にあたるため、発掘調査を実施した。

調査地内に、南北21m、東西2.5mの長方形の調査区を設定した。機械で盛土層を掘削し、その後手掘りで遺構調査を行い、平面実測・写真撮影を実施し、最後に断割りにより下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、調査を終了した。

遺構 調査区の基本層序は、第1層盛土層（約1～1.5m）、第2層暗茶灰色泥砂層（0.1～0.2m：包含層）、第3層暗灰色泥砂層（0.1～0.4m：包含層）、第4層茶褐色砂泥・黄灰色砂泥層（地山）である。調査区北側では第2・3層はない場所も見られる。第2・3層上面で遺構を検出した。検出した遺構には、溝と土塋などがある。

調査区南側で東西溝1を検出した。掘形幅約0.8m、深さ約0.7mで、底部はさらに0.3m V字状に下がる。両壁共に1段の段があり、上段には長さ0.5m程度の石を据え、裏込めに礫を入れる。南壁には石抜き取り穴があり、両岸に2段以上の護岸があったと推定できる。埋土は、大きく上層が泥砂層、下層が砂礫層である。中央部で東西溝2を検出した。幅約2.5m、深さ約0.5mで、西側は調査区西壁付近で上がる。底部に一辺約1.2mの掘り込みが2箇所検出された。埋土は茶灰色砂泥層で、大量の瓦を含む。北部で東西溝3を検出した。幅約4m、深さ約1.3mで、埋土は茶灰色砂泥層で、間に炭層があり、上下層に分かれ、両層共に多くの瓦を含む。

調査区南部で土塋4・5を検出した。土塋

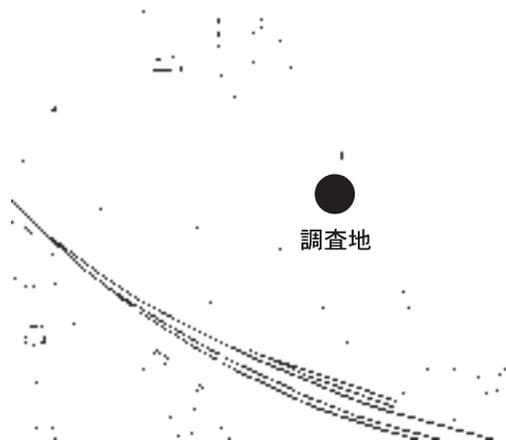


図362 調査位置図（1：5,000）

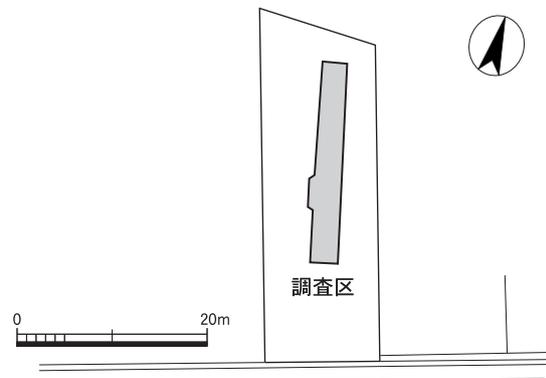


図363 調査区配置図（1：800）

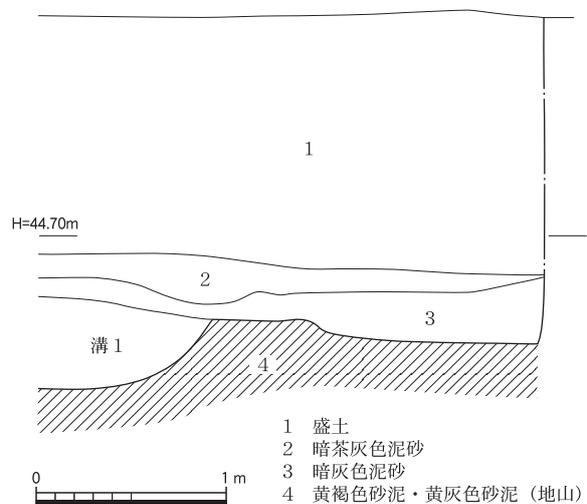


図364 断面図（1：40）

- 1 盛土
- 2 暗茶灰色泥砂
- 3 暗灰色泥砂
- 4 黄褐色砂泥・黄灰色砂泥（地山）

4は西肩を検出し、調査区外に続く。土壙5は南北幅2.1m、深さ0.17mで、西側は攪乱によって切られる。

遺構の時期は、すべて桃山時代に属する。

遺物 出土遺物は23箱出土した。大半が瓦類で、他に土師器、陶器が少量出土した。

瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・面戸瓦・雁振瓦・鬼瓦などがあり、軒丸瓦・軒平瓦・熨斗瓦の中には、金箔が施されたものもある。

小結 今回の調査では、調査区が狭長なため、各遺構共に調査区外に続き、溝などの方向や規模などの内容は不明な点が多く、遺構の性格は明らかではない。ただ、調査地周辺では、これまでも発掘調査・立会調査などを度々行っており、これらを集約すれば、十分な成果を得ることができよう。

『伏見城跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 1979年度』 1980年報告

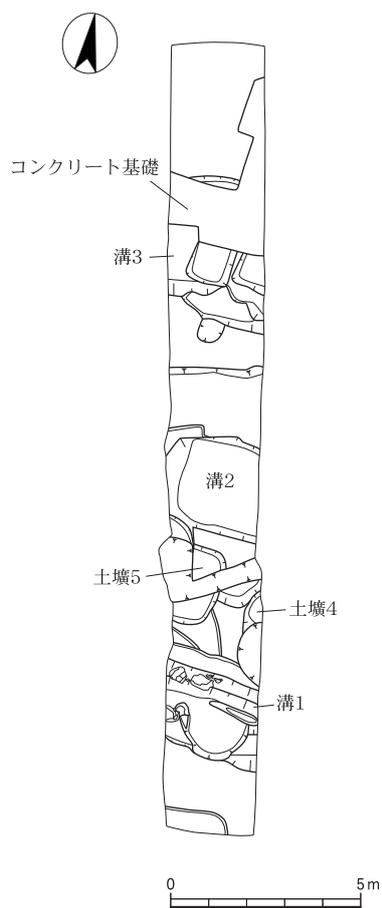


図365 遺構平面図 (1 : 200)



図366 調査区全景 (北から)

第2章 試掘・立会調査

I 昭和54年度の試掘・立会調査概要

昭和54年度の原因者負担による試掘・立会調査の委託契約件数は、試掘調査14件（内2件（11・33）は発掘調査に移行した）、立会調査が27件、分布調査1件の計42件である。これらの調査は一覧表（表2）の記載にとどめ、調査位置を図367に示した。

平安宮・京跡 平安宮内では、宴松原・造酒司・真言院跡（1・5・6）に推定される地域で、現地地表下約1mで黄色粘土層の地山を検出した。真言院推定地では地山上面で瓦溜1基を検出した。遺物は、瓦類、土師器、陶器などが出土した。瓦溜からは、丸瓦・平瓦・軒平瓦・緑釉丸瓦などが出土した。

朝堂院・太政官・中務省跡（2・3）に推定される地域では、朝堂院跡で東面回廊と宣政門跡の基壇を検出した。また、朝堂に関しては、承光堂跡基壇の北縁・東縁を示す凝灰岩の延石、明礼堂跡基壇の東縁と西縁・西面階段の一部、暉章堂跡基壇の東縁などを検出した。修式堂基壇の北縁で凝灰岩を検出した。太政官跡では、西面築地基底部分・内溝・外溝を検出した。この西面築地は丸太町下る2筋目で東折して北面築地へと連続する。この他、区画を示す溝、柱穴、土壇などを検出した。中務省跡では、南面築地外溝を検出した。基壇状遺構、瓦溜、土壇、柱穴、溝なども検出した。左京二条二坊一町跡（3）では、一町のほぼ中央で東西溝を検出した。また中御門大路の南側溝にあたと推定できる東西溝も検出した。下層で弥生時代中期の遺物包含層を確認した。遺物は、平安時代の土器類（土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器）、瓦類（鴟尾の破片・丸瓦・平瓦）、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器などが出土した。

豊楽院跡（4）では、東側回廊に関係すると思われる基壇化粧石を検出した。石材は、凝灰岩である。遺物は、2箇所瓦溜から軒平瓦・丸瓦・平瓦、土師器などが出土した。

宮内省・西院・主水司跡（7）では、現地地表下1mで地山（聚楽土と呼ばれる黄褐色砂泥層）を検出した。地山上面はほとんど削平を受けておらず平安時代の遺物包含層を検出した。しかし、主水司跡推定地域の東側道路では、江戸時代の攪乱が多く、遺構の遺存状態は良くない。遺物は、平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器、江戸時代の陶器・磁器・瓦類などが出土した。

大舎人寮・雅楽寮跡・史跡二条城（8）では、江戸時代の瓦溜を数箇所検出した。その他には、縁石列、礎石、石組みの溝なども検出した。遺物は、近世の瓦類と土器類が出土した。

左京一条四坊隣接地（9）では、中世から江戸時代に属する石組井戸2基、石室3基、土壇を検出した。また江戸時代の川跡も検出した。遺物は、中世から近世にかけての瓦類と土器類が出土した。

左京六条二坊五町・猪熊殿跡・本國寺跡（11）では、平安時代のピット2基、室町時代のピットなどを検出した。遺物は、平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土した。

左京八条三坊（13・14）では、（13）で中世の土壙5基、井戸7基、溝3条を検出した。遺物は、平安時代中期の土師器・黒色土器・緑釉陶器・備前の大甕、鎌倉時代の土師器・中国磁器・瓦器・瓦類などが出土した。（14）では、中世の井戸8基、土壙2基を検出した。遺物は、鎌倉時代の中国磁器・土師器・瓦器・常滑甕などが出土した。

左京九条四坊八町（15）では、鴨川の氾濫と推定できる中世から近世の包含層と近代の土壙、溝などを検出した。遺物は、土師器・須恵器・瓦器・陶器・瓦などが出土した。

右京北辺三坊（16）では、平安時代前期の包含層（暗褐色砂泥）を検出した。遺物は、平安時代前期の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦・木片、近世から近代の下駄などが出土した。

右京七条三坊十四町・四坊四町（18）では、平安時代の土壙状遺構2基を検出した。遺物は、平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器などが出土した。

右京九条二坊十町（19）では、鎌倉時代の土壙1基、平安時代のピット1基、古墳時代の落込み1基などを検出した。遺物は、古墳時代の土師器・須恵器、平安時代の土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器、鎌倉時代の土師器・瓦器・刀子などが出土した。

西部排水区公共下水道工事（20）では、平安京右京北辺から右京四条までの広範囲にわたり立会調査を実施した結果、恵止利小路西側溝、春日小路の路面と両側溝、菖蒲小路西側溝、大炊御門大路の路面（100mにわたり確認）、中御門大路南側溝、木辻大路西側溝、平安時代前期から中期の井戸・土壙、平安時代後期から鎌倉時代の池状堆積（法金剛院にかかわる遺構）、古墳時代の遺物包含層などを検出した。遺物は、弥生土器、古墳時代の土器、平安時代から室町時代までの土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・輸入陶磁器（青磁・白磁）・陶器・瓦などが出土した。

その他の遺跡 法勝寺跡（21）では、八角九重塔基壇外周西側の掘込地業を確認した。遺物は、灰釉陶器、瓦などが出土した。

六勝寺跡（22）では、平安時代の版築基壇を検出した。

鳥羽離宮跡（23）では、室町時代の井戸2基、溝2条、室町時代から江戸時代の土壙6基を検出した。遺物は、土師器、須恵器、陶磁器、瓦などが出土した。

長岡京跡（24・25）では、（24）で長岡京期の包含層、平安時代の氾濫堆積、鎌倉時代の土壙2基を検出した。遺物は、長岡京期に属する土師器・須恵器・緑釉陶器などが出土した。（25）では、平安時代の井戸1基、土壙3基を検出した。遺物は、須恵器の甕の破片が1点出土した。

西賀茂瓦窯跡（28）では、平窯2基を検出した。河上瓦窯跡で1基、角社西群瓦窯跡で1基である。大宮北ノ前では、平安時代後期の瓦を含む灰層を検出した。鎮守庵瓦窯跡では、鴟尾を多量に廃棄した土壙を検出した。遺物は、平安時代前期から後期の軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・鴟尾などが出土した。

植物園北遺跡（29）では、古墳時代前期の竪穴住居跡5棟、溝2条、平安時代中期の土壙1基、室町時代の土壙1基と中世の溝2条を検出した。遺物は、弥生土器、古式土器、平安時代の土師器・緑釉陶器・須恵器などが出土した。

北野廃寺（31）では、平安時代のピット2基、土壙3基、南北小溝1条、平安時代後期から鎌倉時代の堆積層を検出した。遺物は、土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、軒丸瓦などが出土した。

小塩窯跡群（34）では、分布調査を実施した。小塩町近辺では、明治池窯・小塩窯・てんぶつ湖窯・石作窯の4箇所が知られていたが、今回はてんぶつ湖窯跡を含む一地区を調査対象とした。調査は、地形・土層などの表面観察・遺物の散布状況確認・ボーリング調査の方法を採った。結果、黄褐色から黄色の粘土ないし粘質土の分布範囲と窯跡の分布範囲がほぼ重なっていることを確認した。遺物は、窯跡や周辺の散布地から出土した。大部分が須恵器で、他には緑釉陶器の素地と考えられる陶片が出土した。集落にかかる南側の水田部分では瓦を、また、小塩窯跡からは若干量の緑釉陶器を採集した。

深草遺跡（38～40）では、（38）で弥生時代、古墳時代の包含層を確認した。また、古墳時代から鎌倉時代までの溝、土壙、ピットなどを検出した。（39）では、江戸時代から明治時代の土壙2基、（40）では、室町時代の溝3条、近代の溝4条などを検出した。

伏見城跡（41）では、桃山時代の川跡1条を検出した。遺物は、瓦類（金箔瓦・軒丸瓦・軒平瓦・熨斗瓦）、古墳時代の土師器などが出土した。

日野谷寺町遺跡（42）では、平安時代の包含層を検出した。遺物は、平安時代後期の土器とその他の時代の土師器、須恵器などが出土した。

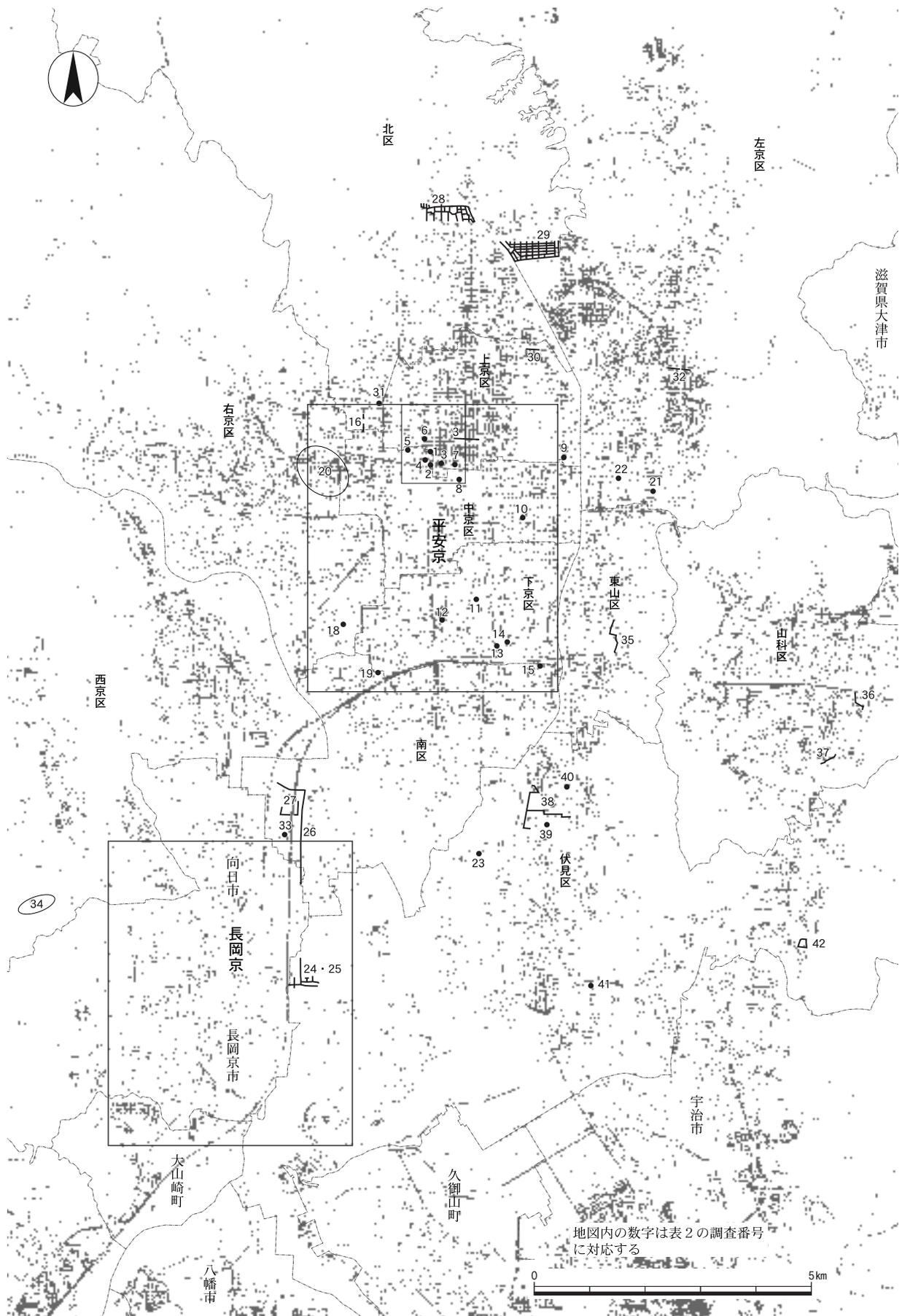


図367 昭和54年度試掘・立会調査位置図

表1 昭和54年度発掘調査一覧表

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考	
平安宮	1	54-012-13 平安宮内裏内郭回廊跡 79HK-DA002	上京区千本通下立売下 る小山町908-43	1980/01/05 ～1980/01/14	28㎡	京都市/ 林 博之	上村和	国庫補助
	2	54-054 平安宮朝堂院跡 79HK-HA004	中京区聚楽廻南町1-9	1979/12/10 ～1980/01/08	170㎡	(株)大同建設	堀内明	
	3	54-058 平安宮朝堂院跡 79HK-HA008	上京区千本通二条下る 東入主税町910-25・99	1980/01/16 ～1980/01/25	20㎡	京都市	平田	
	4	54-012-06 平安宮豊楽院跡 79HK-BR002	中京区聚楽廻西町56	1979/07/13 ～1979/07/19	48㎡	京都市/ 日高憲一郎	鈴木広	国庫補助
	5	54-012-09 平安宮大蔵省跡 79HK-GT	上京区仁和寺街道六軒 町西入四番町118-4・5、 119-2	1979/08/28 ～1979/09/07	120㎡	京都市/ (株)ユニホー	鈴木広	国庫補助
	6	54-012-15 平安宮大蔵省跡 79HK-DN	上京区千本通中立売下 る亀屋町57-1	1980/01/16 ～1980/01/17	12㎡	京都市/ 金本英雄	上村和	国庫補助
	7	54-007 平安宮茶園跡 79HK-UM	上京区中立売通松屋町 西入新白水丸町462	1979/05/12 ～1979/05/30	230㎡	乾商事(株)	梅川	
	8	54-012-02 平安宮図書寮跡 79HK-TO	上京区下長者町通七本 松西入鳳瑞町233	1979/03/22 ～1979/03/26	80㎡	京都市/ 高橋虎之助	平田、本	国庫補助
	9	54-012-12 平安宮内蔵寮跡 79HK-NI	上京区下長者町通千本 西入六番町368-5	1979/11/26 ～1979/12/05	60㎡	京都市/ (合)大市	吉村	国庫補助
	10	54-005 平安宮造酒司跡 79HK-MK006	中京区聚楽廻松下町	1979/05/24 ～1979/06/08	74㎡	京都市	本	
	11	54-012-05 平安宮中和院跡 79HK-CC002	上京区千本通下立売下 る小山町896	1979/06/25 ～1979/07/12	108㎡	京都市/ 後藤良雄	木下	国庫補助
	12	54-018 平安宮中務厨跡 79HK-ZA	中京区西ノ京車坂町 15-5(朱雀第六小学校)	1979/06/01 ～1979/07/26	400㎡	京都市	石井、磯部	
	13	54-012-03 平安宮中務省跡 79HK-CM002	上京区丸太町通千本東 入中務町491-33	1979/04/03 ～1979/05/01	50㎡	京都市/ (株)富栄化工	平田	国庫補助
	14	54-012-14 平安宮中務省跡 79HK-CM003	上京区丸太町通千本東 入中務町	1980/01/14 ～1980/01/30	35㎡	京都市/ 岡村淳夫	辻裕	国庫補助
	15	54-012-08 平安宮太政官跡 79HK-DK004	上京区竹屋町通千本東 入主税町1026	1979/08/01 ～1979/08/16	50㎡	京都市/ 渡辺恭久	上村和	国庫補助
	16	54-012-04 平安宮大炊寮跡 79HK-OL	上京区丸太町通大宮西 入薬屋町535-79	1979/05/02 ～1979/05/19	25㎡	京都市/ 堀江敏雄	木下	国庫補助
平安京	17	54-072 平安京左京北辺三坊四町 79HK-YH001	上京区一条通室町西入 東日野殿町395、396 (上京中学校)	1980/01/08 ～1980/03/17	400㎡	京都市	中村、平方	

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考
平安京	18 54-011 平安京左京三条三坊五町 79HK-RR	中京区三条通室町西入 衣棚町55	1979/05/29 ~1979/06/15	50㎡	千吉(株)	百瀬	
	19 54-076・085 平安京左京三条二~四坊 79HK-OK	中京区御池通 (堀川~木屋町)	1980/01/12 ~1980/06/13	1710㎡	上下水道	堀内明	
	20 54-052 平安京左京三条四坊十町 79HK-RC	中京区御池通富小路西 入東八幡町579 (柳池中学校)	1979/10/15 ~1979/12/02	320㎡	京都市	吉川、石井、 上村和、 堀内明	
	21 54-028 平安京左京四条三坊七町 79HK-QY	中京区室町通六角下る 鯉山町518-1・2	1979/08/31 ~1979/09/22	95㎡	(株)山中	石井	
	22 54-012-10・54-031 平安京左京四条三坊十五町 79HK-TA	中京区蛸薬師通烏丸東 入一蓮社町293	1979/08/20 ~1979/09/17	80㎡	京都市/ (株)ロイヤル オーク	上村和、平方	国庫補助
	23 54-070 平安京左京六条一坊三町 79HK-GK002	下京区下長福寺町~中 堂寺坊城町	1980/01/25 ~1980/04/30	1460㎡	近畿地方建設 局	梅川、中村	
	24 54-032 平安京左京六条一坊六町 79HK-EA	下京区中堂寺壬生川町 (五条壬生川交差点)	1979/08/04 ~1979/08/29	100㎡	上下水道	辻純、吉川	
	25 54-055 平安京左京六条二坊五町・ 猪熊殿跡・本國寺跡 79HK-EN001	下京区堀川通五条下る 柿本町580-9・18、 600-2、665、665-6	1979/12/17 ~1980/07/18	4000㎡	(株)戸田建設	平尾、吉川、 長宗、本、 百瀬、磯部、 上村和	
	26 54-012-11 平安京左京七条三坊十五町 79HK-EW	下京区不明門通正面上 る亀町9	1979/11/17 ~1979/12/02	35㎡	京都市/ (株)柴田法衣 店	辻裕、中村	国庫補助
	27 54-063 平安京左京八条三坊二町 79HK-SS002	下京区塩小路通新町西 入東塩小路町842-13・ 14(下京区役所)	1979/11/23 ~1979/12/11	120㎡	京都市	平田	
	28 54-057 平安京左京九条三坊五町 79HK-WS	南区東九条下殿田町24 (若杉学園)	1979/11/23 ~1979/12/21	80㎡	京都市	平田	
	29 54-019・020 平安京左京九条三坊十六町 79HK-ET001	南区東九条西山王町 19-13、27-1他	1979/07/02 ~1980/01/31	2810㎡	京都市	丸川、永田信、 平田	
	30 54-006 平安京右京北辺三坊二町 79HK-TS002	北区大將軍一条町37-4 (大將軍小学校)	1979/04/12 ~1979/05/14	150㎡	京都市	中村	
	31 54-012-07 平安京右京北辺四坊五町・ 史跡妙心寺境内 79HK-BO001	右京区花園妙心寺町・ 寺ノ内町・大藪町	1979/07/20 ~1979/08/03	300㎡	京都市/ 妙心寺	平方、辻純	国庫補助
32 54-035 平安京右京北辺四坊六町・ 史跡妙心寺境内 79HK-BO002	右京区花園妙心寺町64	1979/08/27 ~1979/09/12	120㎡	妙心寺	辻純、平方		
33 54-082 平安京右京北辺四坊六町・ 史跡妙心寺境内 79HK-BO003	右京区花園妙心寺町64	1980/03/15 ~1980/04/24	318㎡	妙心寺	平田		
34 54-001 平安京右京二条三坊二町 79HK-SE003	中京区西ノ京中御門西 町25(朱雀第八小学校)	1979/03/15 ~1979/04/28	300㎡	京都市	平方		

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考
平安京	35 54-017 平安京右京三条三坊十町 79HK-CF001	中京区西ノ京徳大寺町1	1979/06/13 ～1979/08/20	1200㎡	(株)島津製作所	平尾、辻裕	
	36 54-027 平安京右京四条四坊六町 79HK-YA003	右京区山ノ内山ノ下町 22 (山ノ内小学校)	1979/08/27 ～1979/10/01	540㎡	京都市	辻裕	
	37 54-010 平安京右京九条一坊十二町 ・西寺跡 79HK-SG007	南区唐橋西寺町65 (唐橋小学校)	1979/06/01 ～1979/06/21	65㎡	京都市	磯部、辻純	
白河街区	38 54-029 尊勝寺跡 79KS-SS	左京区聖護院円頓美町	1979/07/17 ～1979/08/26	100㎡	京都国立近代美術館	石井、吉川	
	39 54-015 白河南殿跡 79KS-WS001	左京区聖護院蓮華蔵町 1-25	1979/08/04 ～1979/08/25	167㎡	京都市/ 中沢忠嗣	堀内明	国庫補助
鳥羽離宮	40 54-014-01 鳥羽離宮跡 (東殿) 79TB-TB049	伏見区竹田浄菩提院町 45-2	1979/03/19 ～1979/04/12	400㎡	京都市/ 八木康則他	鈴木久	国庫補助
	41 54-014-02 鳥羽離宮跡 (東殿) 79TB-TB050	伏見区竹田内畑町 120-10	1979/04/19 ～1979/05/02	100㎡	京都市/ 城内喜三	鈴木久	国庫補助
	42 54-073 鳥羽離宮跡 (東殿) 79TB-TB051	伏見区竹田内畑町	1979/06/22 ～1979/06/28	60㎡	区画整理	長宗	
	43 54-014-03 鳥羽離宮跡 (東殿) 79TB-TB052	伏見区竹田桶ノ井町 45-B、51	1979/08/01 ～1979/08/20	1519㎡	京都市/ 小山正三	鈴木久、長宗	国庫補助
	44 54-014-04 鳥羽離宮跡 (東殿) 79TB-TB053	伏見区竹田内畑町 119-3・5	1979/09/02 ～1979/12/09	500㎡	京都市/ 高須宗一・ 沖原常之	鈴木久、前田	国庫補助
	45 54-073 鳥羽離宮跡 (東殿) 79TB-TB054-A	伏見区竹田浄菩提院町	1979/12/05 ～1980/02/12	1040㎡	区画整理	長宗、前田	50m道路
	46 54-073 鳥羽離宮跡 (東殿) 79TB-TB054-B	伏見区竹田内畑町	1980/02/13 ～1980/04/29	1160㎡	区画整理	石井	50m道路
	47 54-073 鳥羽離宮跡 (東殿) 79TB-TB055	伏見区竹田内畑町	1980/02/24 ～1980/03/19	240㎡	区画整理	長宗	6m道路
	48 54-014-05 鳥羽離宮跡 (東殿) 79TB-TB056	伏見区竹田内畑町 9-B・26	1980/02/24 ～1980/03/19	50㎡	京都市/ 山内芳高	長宗	国庫補助
	49 54-073 鳥羽離宮跡 (東殿) 79TB-TB061	伏見区竹田内畑町 79～90	1980/07/28 ～1980/08/05	40㎡	区画整理	鈴木久	
50 54-073 鳥羽離宮跡 (東殿) 79TB-TB064-1	伏見区竹田内畑町	1980/09/13 ～1980/11/14	144㎡	区画整理	前田		
中臣遺跡	51 54-013-01 中臣遺跡 79RT-NK015-2	山科区勸修寺西金ヶ崎 22-1、32-1	1979/04/10 ～1979/04/30	200㎡	京都市/ 京都開発工業 (株)	菅田、前田	国庫補助

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考	
中 臣 遺 跡	52	54-013-02 中臣遺跡 79RT-NK020	山科区勸修寺西金ヶ崎 10-1	1979/04/25 ~1979/07/16	800㎡	京都市/ 辻 庄三	前田	国庫補助
	53	54-013-03 中臣遺跡 79RT-NK021	山科区榎辻番所ヶ口町 26-1・2、27-1	1979/05/25 ~1979/07/22	580㎡	京都市/ (株) 葵産業	菅田、前田	国庫補助
	54	54-013-04 中臣遺跡 79RT-NK022	山科区勸修寺東栗栖野 町46	1979/05/16 ~1979/06/18	200㎡	京都市/ 松山清子	菅田、前田、 吉村	国庫補助
	55	54-025 中臣遺跡 79RT-NK023	山科区榎辻番所ヶ口町、 東野舞台町 (山科川河川敷)	1979/07/19 ~1979/10/23	1760㎡	京都府	菅田、吉村、 前田、家崎	
	56	54-013-05 中臣遺跡 79RT-NK024	山科区勸修寺西金ヶ崎 22-4	1979/07/25 ~1979/08/11	61㎡	京都市/ 服部良治	菅田、家崎、 吉村、前田	国庫補助
	57	54-013-06 中臣遺跡 79RT-NK025	山科区榎辻番所ヶ口町 49-1	1979/08/13 ~1979/08/21	30㎡	京都市/ 滝口 芳	菅田、吉村、 家崎、前田	国庫補助
	58	54-013-07 中臣遺跡 79RT-NK026	山科区榎辻番所ヶ口町 20	1979/08/22 ~1979/09/21	180㎡	京都市/ 石高宗武	菅田、吉村、 家崎、前田	国庫補助
	59	54-042 中臣遺跡 79RT-NK027	山科区勸修寺西栗栖野 町45-1・5、西金ヶ崎 86-1	1979/09/17 ~1979/11/09	1795㎡	新京開発(株)	平方	
	60	54-013-08 中臣遺跡 79RT-NK028	山科区勸修寺西金ヶ崎 35	1979/09/17 ~1979/11/14	150㎡	京都市/ 田中梅次郎	菅田、吉村、 家崎、前田	国庫補助
	61	54-013 中臣遺跡 79RT-NK029	山科区勸修寺東金ヶ崎 20	1979/10/31	1.8㎡	石田英毅	菅田	
	62	54-048 中臣遺跡 79RT-NK030	山科区勸修寺平田57 (勸修中学校)	1979/09/03 ~1979/09/13	100㎡	京都市	辻純	
	63	54-013 中臣遺跡 79RT-NK031	山科区勸修寺東栗栖野 町	1979/11/26 ~1979/11/27	22㎡		平方	
	64	54-013-09 中臣遺跡 79RT-NK032	山科区榎辻番所ヶ口町 27-2	1979/12/20 ~1979/12/25	48㎡	京都市/ 豊田克巳	平方	国庫補助
	65	54-013-10 中臣遺跡 79RT-NK033	山科区勸修寺西金ヶ崎 90-1・3	1980/02/02 ~1980/02/09	150㎡	京都市/ 渡辺勝治	丸川	国庫補助
長 岡 京	66	54-045 長岡京左京六条三坊 79NG-DP	伏見区羽束師古川町 390、391	1979/11/10 ~1980/01/11	1000㎡	上下水道	木下、鈴木広、 平尾	
そ の 他 の 遺 跡	67	54-049 岩倉忠在地遺跡 79RH-IT002	左京区岩倉忠在地町309 (洛北中学校)	1979/10/01 ~1979/10/25	320㎡	京都市	磯部	
	68	54-012-01 栗栖野瓦窯跡 79RH-QL001	左京区岩倉幡枝町654、 660、665-7	1979/03/26 ~1979/06/16	3000㎡	京都市/ 吉村英一	石井	国庫補助

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考	
その他の遺跡	69	54-075 室町殿跡 79HK-EZ002	上京区今出川通新町東 入堀出シ町289	1980/02/04 ～1980/02/26	200㎡	京都市	磯部	
	70	54-079 北野廃寺 79RH-KG006	北区北野東紅梅町6-2	1979/06/06 ～1979/07/31	500㎡	京都市/ (学) 聖マリア 学園	梅川	国庫補助
	71	54-047 北野廃寺 79RH-KG007	北区北野下白梅町11-2	1979/10/23 ～1980/04/16	3600㎡	(株) 高津商会	鈴木久、辻純、 久世	
	72	54-078 常盤東ノ町古墳群 79UZ-HE	右京区常盤仲之町1-6	1980/02/27 ～1980/03/15	40㎡	京都府民生労 働部保険課	平田	
	73	54-067 広隆寺旧境内 79UZ-DK005	右京区太秦蜂岡町32	1980/02/01 ～1980/03/31	500㎡	宗教法人 広隆寺	上村和	
	74	54-050 法性寺跡 79RT-OK002	伏見区深草正覚町7	1979/11/12 ～1979/11/15	45㎡	大阪国税局	磯部	
	75	54-051 大塚遺跡 79RT-OC	山科区大塚野溝町86 (音羽中学校分校)	1979/09/22 ～1979/10/10	300㎡	京都市	上村和、辻純	
	76	54-083 中久世遺跡 79MK-NK002	南区久世殿城町122、 123	1980/02/20 ～1980/03/28	550㎡	長岡利治	辻裕	54-74試掘
	77	54-037 大藪遺跡 79MK-OD001	南区久世殿城町480 (第三乙訓中学校)	1979/07/31 ～1979/08/20	130㎡	京都市	磯部	
	78	54-081 大原野南春日町窯跡 79MK-MQ	西京区大原野南春日町	1980/03/08 ～1980/03/21	150㎡	京都市/ 山口駒次郎	石井	国庫補助
	79	54-080 醍醐古墳群 79FD-DM001	伏見区醍醐内ヶ井戸	1980/03/07 ～1980/03/29	110㎡	京都市/ 石高 悟	磯部、丸川	国庫補助
	80	54-009 伏見城跡 79FD-MC	伏見区桃山町本多上野 107 (桃山小学校)	1979/04/21 ～1979/05/21	420㎡	京都市	加納、家崎	
81	54-016 伏見城跡 79FD-FC006	伏見区桃山筑前台町 34-9・15	1980/02/01 ～1980/02/16	52㎡	京都市/ 木下清吉	辻裕	国庫補助	

表2 昭和54年度試掘・立会調査一覧表

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考
平安宮	1 54-022-03 平安宮朝堂院跡 79HK-AI	中京区七本松丸太町上る 聚楽廻西町～丸太町通千 本西入北側聚楽廻中町	1979/06/04 ～1979/08/15	立会	大阪ガス	上村和	
	2 54-034 平安宮朝堂院跡 79HK-AI002	中京区聚楽廻東町6～24	1979/09/03 ～1979/10/03	試掘立会	大阪ガス	梅川	
	3 54-030 平安宮朝堂院一太政官跡、 平安京左京二条二坊 79HK-AI002	上京区丸太町通土屋町下 る主税町、黒門通榎木町 下る中御門横町～藁屋町	1979/08/30 ～1980/03/21	立会	大阪ガス	梅川	
	4 54-003-02 平安宮豊楽院跡 79HK-AI	中京区聚楽廻中町地先	1979/05/25 ～1979/07/04	立会	大阪ガス	上村和	
	5 54-003-01 平安宮造酒司跡 79HK-AI	上京区下立売通下ノ森東 入西東町～中京区聚楽廻 松下町、聚楽廻中町	1979/04/10 ～1979/07/23	立会	大阪ガス	上村和	
	6 54-022-02 平安宮真言院跡 79HK-AI	上京区下立売通千本西 入稲葉町436～出水通 六軒町西入七番町338	1979/05/23 ～1979/06/22	立会	大阪ガス	上村和	
	7 54-022-01 平安宮宮内省・西院・主水 司跡 79HK-AH	上京区丸太町通知恵光 院西入下る主税町～堀 川竹屋町西入主税町	1979/06/15 ～1979/07/20	立会	大阪ガス	平田	
	8 54-071 平安宮大舎人寮・雅楽寮跡 ・史跡二条城 79HK-JJ004	中京区二条通堀川西入 二条城町	1980/02/13 ～1980/03/17	立会 230㎡	京都市	堀内明	
平安京	9 54-023 平安京左京一条四坊隣接地 79HK-UA	上京区寺町通荒神口下 る松蔭町138-1・2・5、 新烏丸頭町89	1979/07/26 ～1979/08/25	試掘 200㎡	京都市	梅川	
	10 54-056 平安京左京三条三坊十三町 79HK-AY	中京区三条通東洞院西 入梅忠町	1980/02/01 ～1980/03/01	立会	電々公社	菅田	
	11 54-040 平安京左京六条二坊五町・ 猪熊殿跡・本國寺跡 79HK-EN-試	下京区堀川通五条下る 柿本町580-9・18、 600-2、665、665-6	1979/09/17 ～1979/09/21	試掘 70㎡	(株)戸田建設	吉川、磯部、 辻純	発掘調査に移 行
	12 54-004 平安京左京七条一坊 79HK-G-004	下京区朱雀正会町～西 新屋敷上ノ町	1979/04/27 ～1979/05/31	立会 30m	大阪ガス	鈴木広	
	13 54-086 平安京左京八条三坊 80HK-SA001	下京区北不動堂町～東 塩小路町	1980/03/31 ～1980/08/07	立会 292㎡	上下水道	吉村	
	14 54-087 平安京左京八条三坊 80HK-SA002	下京区塩小路通油小路 通～新町通	1980/03/25 ～1980/07/14	立会 200㎡	関西電力	吉村	
	15 54-065 平安京左京九条四坊八町 79HK-PB	南区東九条西岩本町 17～21	1980/03/21 ～1980/04/01	試掘 122㎡	京都市	中村	
	16 54-021 平安京右京北辺三坊 79HK-AG	北区大將軍一条町～東 鷹司町	1979/05/22 ～1979/07/20	立会 670㎡	大阪ガス	平田	
	17 54-053 平安京右京五条四坊 79HK-KG	右京区西院安塚町	1979/11/19 ～1979/12/20	立会	大阪ガス	加納	

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考	
平安京	18	54-059 平安京右京七条三坊十四町・四坊四町 79HK-HD	右京区西京極東町、三反田町	1980/01/28 ～1980/02/23	試掘 450㎡	(株)ダイニック	平田	
	19	54-061 平安京右京九条二坊十町 79HK-PA	南区吉祥院西ノ庄門口町10	1980/01/16 ～1980/02/03	試掘 75㎡	(株)日本新薬	中村	
	20	54-068 平安京右京四条三坊 79HK-KG	右京区西院上花田町・下花田町・春日町ほか	1980/02/20 ～1981/04/09	立会 4551m	上下水道	加納	西部幹線 西院8
		54-068 平安京右京三条三坊・四条三坊 79HK-KG	右京区山ノ内養老町・赤山町、西院春栄町ほか	1980/04/18 ～1981/03/30	立会 5134m	上下水道	加納	西部幹線 西院9
	54-068 平安京右京三条四坊・四条四坊 79HK-KG	右京区山ノ内中畑町・西裏町・山ノ下町ほか	1980/03/10 ～1981/04/28	立会 7686m	上下水道	加納	西部幹線 山ノ内1	
	54-068 平安京右京四条四坊 79HK-KG	右京区山ノ内荒木町・苗町、西院笠目町	1980/01/12 ～1980/09/18	立会 2303m	上下水道	加納	西部幹線 山ノ内2	
	54-068 平安京右京三条三坊・四坊 79HK-KG	右京区山ノ内五反田町・大町・宮脇町ほか	1980/03/06 ～1980/10/20	立会 2945m	上下水道	加納	西部幹線 山ノ内3	
	54-068 平安京右京三条三坊・四坊 79HK-KG	右京区太秦安井二条裏町・水戸田町、山ノ内御堂殿町ほか	1980/01/28 ～1980/11/17	立会 3910m	上下水道	加納	西部幹線 山ノ内4	
	54-068 平安京右京三条二坊・三坊 79HK-KG	中京区西ノ京西中合町・三条坊町・桑原町ほか	1980/06/03 ～1980/12/05	立会 1761m	上下水道	加納	西部幹線 朱雀8	
	54-068 平安京右京二条二・三坊、三坊 79HK-KG	中京区西ノ京西中合町・宇多小路町・徳大寺町ほか	1980/06/17 ～1981/03/27	立会 4510m	上下水道	加納	西部幹線 朱雀9	
	54-068 平安京右京二条四坊・三条四坊 79HK-KG	右京区太秦安井柳通町・辻ノ内町・馬塚町ほか	1980/04/08 ～1981/06/29	立会 4361m	上下水道	加納	西部幹線 安井1	
	54-068 平安京右京、五位山古墳 79HK-FZ	北区・中京区・右京区	1979/12/01 ～1981/03/31	立会	上下水道	菅田	花園1～4号 幹線	
白河街区	21	54-062 法勝寺跡 79KS-ZO001	左京区岡崎法勝寺町 (京都市動物園)	1979/12/19 ～1979/12/26	試掘 32㎡	京都市	吉村	
	22	54-077 六勝寺跡 79KS-OQ001	左京区岡崎西天王町 80-1	1980/02/28 ～1980/03/06	試掘 50㎡	(有)サンモク社不動産	石井	
鳥羽離宮	23	54-073 鳥羽離宮跡(東殿) 79TB-TB-立	伏見区竹田内畑町		立会	区画整理	前田	A～F区
長岡京	24	54-038 長岡京跡 79NG-GT	伏見区羽束師菱川町 176-1～5	1979/09/01 ～1979/11/01	立会 1280㎡	大阪ガス	木下、磯部	
	25	54-060 長岡京跡 79NG-GT	伏見区羽束師菱川町 439～69	1980/01/08 ～1980/01/31	立会 280㎡	大阪ガス	木下	

	契約番号・遺跡名・略記号	所在地	期間	面積	委託者	調査員	備考
長岡京	26 54-064 長岡京跡、上久世遺跡、 中久世遺跡 79NG-SS	南区久世東土川町～上 久世町	1980/01/14 ～1980/03/31	立会	京都府流域 下水道	木下、大矢	
	27 54-069 長岡京跡、上久世遺跡、 中久世遺跡 79NG-SS	南区久世中久世町、 伏見区淀樋瓜町、水垂 町、大下津町	1980/01/10 ～1980/03/31	立会	上下水道	木下、大矢、 菅田	
その他の遺跡	28 54-046 西賀茂瓦窯跡 79RH-GE	北区西賀茂角社町、大 宮北山前ノ町	1979/09/20 ～1980/04/30	試掘 立会	上下水道	家崎、百瀬	
	29 54-033 植物園北遺跡 79RH-SN	北区上賀茂桜井町、今 井河原町、藪田町、高 縄手町、菖蒲園町	1979/08/15 ～1980/03/31	立会	上下水道	家崎、久世	
	30 54-026 出雲寺跡 79RH-G-026	上京区上御霊横通相国寺 門前町670～上御霊横通 寺町西入上御霊馬場町	1979/08/09 ～1979/08/11	立会 220m	大阪ガス	堀内明	
	31 54-002 北野廃寺 79RH-KG005	北区北野下白梅町60-1、 3、4	1979/05/26 ～1979/05/31	試掘 20㎡	(株)日窓	堀内明	
	32 54-024 北白川廃寺跡 79KS-G-024	左京区北白川西瀬ノ内 町～堂ノ前町	1979/07/04 ～1979/07/20	立会 465m	大阪ガス	堀内明	
	33 54-074 中久世遺跡 79MK-NK002	南区久世殿城町122、 123	1980/02/18 ～1980/02/20	試掘 250㎡	長岡利治	辻裕	発掘調査に 移行
	34 54-000 小塩窯跡群 79MK-OQ	西京区大原野小塩町	1980/02/01 ～1980/02/23	分布	京都市	石井	国庫補助
	35 54-036 鳥戸野跡 79RT-HN002	東山区今熊野日吉町37 ～上馬町536	1979/10/31 ～1979/11/09	立会 150㎡	大阪ガス	堀内明	
	36 54-039 元屋敷廃寺 79RT-UW039	山科区大塚元屋敷町、 大塚南溝町	1979/09/01 ～1979/09/30	立会	上下水道	菅田、吉村、 前田、家崎	
	37 54-043 大宅廃寺跡 79RT-UW043	山科区大宅鳥井脇町～ 大宅中小路町	1979/09/10 ～1979/11/30	立会	上下水道	菅田、吉村、 前田、家崎	
	38 54-008 深草遺跡 79TB-FK	伏見区深草西浦町他	1979/05/07 ～1980/03/31	立会	上下水道	大矢	
	39 54-044 深草遺跡 79TB-FK	伏見区深草西浦町八丁 目（深草西児童公園）	1979/10/01 ～1979/10/13	試掘 50㎡	京都市	大矢	
	40 54-066 深草遺跡 79TB-SS	伏見区深草ケナサ町 25-5（砂川小学校）	1979/12/04 ～1979/12/13	試掘 100㎡	京都市	大矢	
	41 54-041 伏見城跡 79FD-FD041	伏見区桃山町本多上野 地内	1979/10/30 ～1979/12/03	立会 200㎡	京都市	大矢	
42 54-084 日野谷寺町遺跡 79FD-KN	伏見区日野谷寺町 (春日野小学校分校用地)	1980/03/17 ～1980/03/20	試掘 200㎡	京都市	丸川		

図 版

昭和54年度

京都市埋蔵文化財調査概要

発行日 2012年3月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 Tel 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 Tel 075-256-0961